京都府遺跡調査概報

第 58 冊

1．大　島　東　遺　跡

2．池 尻 遺 跡 第 2 次

3．植物園北遺跡第13次

4．長岡京跡右京第440次

5．山城国府跡第30次

6．北　尻　遺　跡

1 9 9 4

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来12年以上経過し、今後も職員一同心を新たにして調査・研究に邁進しようと日夜努力しております。この間、当調査研究センターの業務遂行にあたりまして、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

これまでの調査をふりかえってみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成４・５年度に実施した発掘調査のうち、建設省近畿地方建設局、京都府土木建築部、京都府出納局、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した、大島東遺跡・池尻遺跡第２次・植物園北遺跡第13次・長岡京跡右京第440次・山城国府跡第30次・北尻遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で何がしらかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・綾部市教育委員会・亀岡市教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所・長岡京市教育委員会・財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会・精華町教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1．大島東遺跡　　2．池尻遺跡第２次　　3．植物園北遺跡第13次

4．長岡京跡右京第440次　　5．山城国府跡第30次　　6．北尻遺跡

2．　各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．大島東遺跡	綾部市大島町畠田他	平5.10.18～平6.2.25	建設省近畿地方建設局・京都府中丹土地改良事務所	八木政明
2．池尻遺跡第２次	亀岡市馬路町池尻	平5.10.7～平6.1.28	京都府土木建築部	柴　暁彦
3．植物園北遺跡第13次	京都市左京区下鴨北芝町12	平5.7.1～10.5	京都府出納局	岸岡貴英
4．長岡京跡右京第440次	長岡京市天神一丁目10-10	平5.7.26～平6.2.1	京都府乙訓土木事務所	石尾政信
5．山城国府跡第30次	乙訓郡大山崎町大山崎西谷21-3	平5.10.20～12.3	京都府乙訓土木事務所	石尾政信
6．北尻遺跡	相楽郡精華町南稲八妻北尻・丸山	平5.7.7～11.12	京都府土木建築部	伊賀高弘

3．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。

目　　次

1．大島東遺跡発掘調査概要----------1
2．池尻遺跡第２次発掘調査概要----------13
3．植物園北遺跡第13次発掘調査概要----------43
4．長岡京跡右京第440次発掘調査概要----------75
5．山城国府跡第30次発掘調査概要----------93
6．北尻遺跡発掘調査概要----------101

挿　図　目　次

1．大島東遺跡

第１図　調査地周辺遺跡分布図----------1
第２図　トレンチ配置図----------2
第３図　３トレンチ遺構平面図----------3
第４図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図----------4
第５図　竪穴式住居跡ＳＨ02実測図----------5
第６図　竪穴式住居跡ＳＨ03(下)・ＳＨ04(上)実測図----------6
第７図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----------7
第８図　遺物実測図(1)----------9
第９図　遺物実測図(2)----------10
第10図　遺物実測図(3)----------11

2．池尻遺跡第２次

第11図　調査地と周辺の遺跡----------13
第12図　基本土層概念図----------14
第13図　調査区位置図----------15
第14図　調査区位置図----------16
第15図　調査区平面図----------17
第16図　土坑ＳＫ202実測図----------18
第17図　溝跡ＳＤ203実測図----------19
第18図　掘立柱建物跡ＳＢ302実測図----------20
第19図　礎石建物跡ＳＢ303実測図----------21
第20図　石列ＳＸ304実測図----------22
第21図　掘立柱建物跡ＳＢ401実測図----------23
第22図　第１調査区ＳＫ101・ＳＤ201・ＳＫ202出土土器----------24
第23図　墨書模式図----------24
第24図　第１調査区ＳＤ203出土土器----------25
第25図　第１調査区ＳＤ203・包含層出土土器----------26

第26図　第２調査区ＳＤ301出土土器----------27
第27図　第３調査区ＳＢ401・ＳＤ402出土土器----------27
第28図　第２調査区包含層出土土器・土製品----------28
第29図　線刻瓦実測図----------28
第30図　軒瓦実測図----------30
第31図　ＳＤ402出土瓦実測図----------31
第32図　丸瓦実測図----------32
第33図　瓦実測図----------33
第34図　瓦凸面の分類----------34
第35図　平成３年度及び５年度調査地関係図----------36
第36図　古代寺院位置図----------37

３．植物園北遺跡第13次

第37図　植物園北遺跡の位置と周辺の遺跡----------44
第38図　植物園北遺跡の地形図----------46
第39図　調査地位置図----------48
第40図　検出遺構図----------49
第41図　土層柱状図----------49
第42図　竪穴式住居跡１実測図----------50
第43図　竪穴式住居跡２・３実測図----------51
第44図　集石状遺構範囲図----------52
第45図　集石状遺構実測図----------53
第46図　竪穴式住居跡４実測図：上層の床面(住居跡改築後)----------54
第47図　竪穴式住居跡４実測図：下層の床面(住居跡改築前)----------54
第48図　竪穴式住居跡５実測図----------55
第49図　土坑１遺物出土状況図----------56
第50図　土坑２・３・４・５実測図----------56
第51図　竪穴式住居跡１・２出土土器実測図----------58
第52図　竪穴式住居跡３出土土器実測図(1)----------59
第53図　竪穴式住居跡３出土土器実測図(2)----------60
第54図　竪穴式住居跡４・５出土土器実測図----------61
第55図　土坑１及び竪穴式住居跡３出土土器実測図----------62
第56図　竪穴式住居跡３出土鉄器----------63

第57図　ベッド状遺構の変遷----------67
第58図　脚注部の分類----------68
第59図　脚注部Ｄ類の製作技法模式図----------69

４．長岡京跡右京第440次

第60図　調査地及び周辺遺跡位置図----------75
第61図　調査地平面図----------76
第62図　１トレンチ・２トレンチ土層断面図----------77
第63図　３トレンチ土層断面図----------78
第64図　１・２トレンチ遺構平面図----------79
第65図　３トレンチ遺構平面図----------80
第66図　井戸跡ＳＥ44002・土坑ＳＫ44003実測図----------81
第67図　土坑ＳＫ44012ａ・ｂ実測図----------82
第68図　中世墓ＳＫ44022実測図----------83
第69図　井戸跡ＳＥ44002・土坑ＳＫ44003出土遺物実測図・拓影----------84
第70図　中世墓ＳＫ44022出土遺物実測図----------85
第71図　流路跡ＳＤ44001出土遺物実測図(1)----------86
第72図　流路跡ＳＤ44001出土遺物実測図・拓影(2)----------87
第73図　流路跡ＳＤ44001出土石器実測図----------88
第74図　包含層出土遺物実測図----------89

５．山城国府跡第30次

第75図　調査地位置図----------93
第76図　調査地平面図----------94
第77図　下層遺構実測図----------95
第78図　土層断面図----------96
第79図　井戸跡ＳＥ04実測図----------96
第80図　井戸跡ＳＥ04出土遺物実測図----------97
第81図　土坑ＳＫ01出土遺物実測図(1)----------98
第82図　土坑ＳＫ01出土遺物実測図(2)----------99
第83図　包含層出土遺物実測図・拓影----------100

６．北尻遺跡

第84図　調査地位置図----------102
第85図　トレンチ配置図----------103

第86図　土層柱状模式図----------104
第87図　5・6トレンチ遺構平面図----------105
第88図　SD64礫敷実測図----------106
第89図　6トレンチA－A'(北壁)断面実測図----------107
第90図　6トレンチB－B'断面実測図----------107
第91図　7トレンチ遺構平面図----------109
第92図　出土遺物実測図(1)－古墳時代土師器----------110
第93図　出土遺物実測図(2)－古墳時代土師器----------112
第94図　出土遺物実測図(3)－古墳時代土師器----------114
第95図　出土遺物実測図(4)－古墳時代須恵器----------115
第96図　出土遺物実測図(5)－奈良時代遺物----------117
第97図　出土遺物実測図(6)－中世土器----------119

付　表　目　次

2．池尻遺跡第2次

付表1　遺物観察表----------39

3．植物園北遺跡第13次

付表2　植物園北遺跡調査成果表----------47
付表3　植物園北遺跡(東部)遺構変遷表----------48
付表4　出土土器観察表----------63

図 版 目 次

1．大島東遺跡

図版第1　(1)トレンチ全景(東から)　(2)3トレンチ拡張区全景(北から)

図版第2　(1)3トレンチ全景(北から)　(2)竪穴式住居跡ＳＨ01(西から)

図版第3　(1)竪穴式住居跡ＳＨ01竈検出状況(西から)

(2)竪穴式住居跡ＳＨ02(北から)

図版第4　(1)竪穴式住居跡ＳＨ03(南西から)

(2)竪穴式住居跡ＳＨ04(西から)

図版第5　(1)竪穴式住居跡ＳＨ04床面遺物出土状況(南西から)

(2)掘立柱建物跡ＳＢ01(西から)

図版第6　(1)掘立柱建物跡ＳＢ02(南から)　(2)溝状遺構ＳＤ04(南から)

図版第7　(1)土坑ＳＫ08上面(南から)　(2)焼土坑ＳＫ13(北から)

図版第8　出土遺物

2．池尻遺跡第2次

図版第9　(1)調査地遠景(南から)　(2)調査地遠景(南東から)

図版第10　(1)調査区垂直写真　(2)第1調査区垂直写真

(3)第2調査区垂直写真　(4)第3調査区垂直写真

図版第11　(1)第1調査区ＳＤ203遺物出土状況(南から)

(2)同ＳＤ203完掘状況(南西から)　(3)同ＳＡ204(北西から)

(4)第2調査区ＳＢ302(南から)

図版第12　(1)第2調査区ＳＢ303(南から)　(2)同近景(南から)

(3)同ＳＢ303礎石検出状況(南から)　(4)同断割状況(南東から)

図版第13　(1)第2調査区ＳＸ304(南西から)　(2)第3調査区ＳＢ401(東から)

(3)同ＳＤ402遺物出土状況(西から)　(4)同ＳＤ402完掘状況(北から)

図版第14　出土遺物(1)

図版第15　出土遺物(2)

図版第16　出土遺物(3)

図版第17　出土遺物(4)

図版第18　出土遺物(5)
図版第19　出土遺物(6)
図版第20　出土遺物(7)
図版第21　出土遺物(8)
図版第22　出土遺物(9)

3．植物園北遺跡第13次

図版第23　(1)調査地遠景(西から)　(2)調査地遠景(真上から)
図版第24　(1)Sトレンチ遠景(西から)
(2)掘立柱建物跡1(南から)
図版第25　(1)竪穴式住居跡1(北から)
(2)竪穴式住居跡1遺物出土状況(南から)
図版第26　(1)竪穴式住居跡2・3(真上から)
(2)竪穴式住居跡2・3南辺の土坑及び溝(南から)
図版第27　(1)竪穴式住居跡3(南から)
(2)竪穴式住居跡3特殊ピット遺物出土状況(南から)
図版第28　(1)集石状遺構(東から)　(2)集石状遺構堆積状況(北から)
図版第29　(1)集石状遺構土器出土状況(南から)
(2)集石状遺構土器出土状況(北から)
図版第30　(1)竪穴式住居跡4上の床面(真上から)
(2)竪穴式住居跡4特殊ピット(北から)
図版第31　(1)竪穴式住居跡4下の床面(北から)　(2)竪穴式住居跡5(東から)
図版第32　(1)竪穴式住居跡5床面遺物出土状況(北から)
(2)竪穴式住居跡5・土坑5遺物出土状況(北から)
図版第33　(1)土坑1(北から)　(2)土坑1遺物出土状況(南から)
図版第34　(1)土坑2(南西から)　(2)土坑3(南西から)
図版第35　出土土器(1)
図版第36　出土土器(2)

4．長岡京跡右京第440次

図版第37　(1)1トレンチ検出遺構(東から)　(2)1トレンチ溝SD44008(南から)
図版第38　(1)1トレンチ東壁断面　(2)1トレンチ北壁断面
図版第39　(1)2トレンチ遺構検出状況(北から)　(2)2トレンチ検出遺構(北から)
図版第40　(1)2トレンチ土坑SK44012a・b(西から)

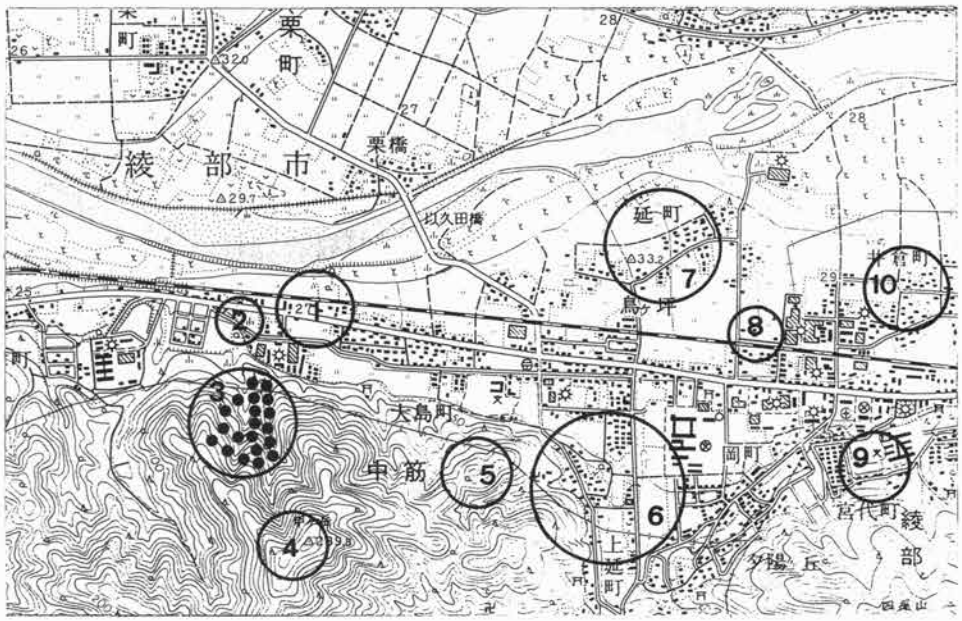
(2) 2トレンチ中世墓ＳＫ44022(西から)
図版第41　(1) 2トレンチ溝跡ＳＤ44020断面(南から)
(2) 2トレンチ溝跡ＳＤ44021断面(南から)
図版第42　(1) 3トレンチ遺構検出状況(北から)　(2) 3トレンチ検出遺構(北から)
図版第43　(1) 3トレンチ溝跡ＳＤ44001断面(北から)
(2) 3トレンチ土坑ＳＫ44003断面(北から)
図版第44　(1) 3トレンチ井戸跡ＳＥ44002(南から)
(2) 3トレンチ土坑ＳＫ44004(北から)
図版第45　(1) 2トレンチ中世墓ＳＫ44022遺物出土状況(北から)
(2) 3トレンチ井戸跡ＳＥ44002遺物出土状況(南から)
図版第46　(1)作業風景　(2)中世墓ＳＫ44022出土遺物
図版第47　出土遺物(1)
図版第48　出土遺物(2)
5．山城国府跡第30次
図版第49　(1)調査前風景(西から)　(2)調査地全景(西から)
図版第50　(1)土坑ＳＫ01・井戸跡ＳＥ04ほか(北から)
(2)溝ＳＤ05と基壇状高まり(西から)
図版第51　(1)溝ＳＤ05焼壁出土状況(南から)
(2)溝ＳＤ05完掘後(西から)
図版第52　出土遺物
6．北尻遺跡
図版第53　(1) 1トレンチ遺構検出状況(北から)　(2) 4トレンチ全景(北から)
図版第54　(1) 5トレンチ全景(北から)　(2) 6トレンチ検出状況(北から)
図版第55　(1) 6トレンチ検出状況(南から)
(2) 6トレンチＳＤ64礫敷検出状況(南から)
図版第56　(1) 7トレンチ上層遺構検出状況(北から)　(1) 8トレンチ全景(北から)
図版第57　出土遺物(1)
図版第58　出土遺物(2)

1．大島東遺跡発掘調査概要

1．はじめに

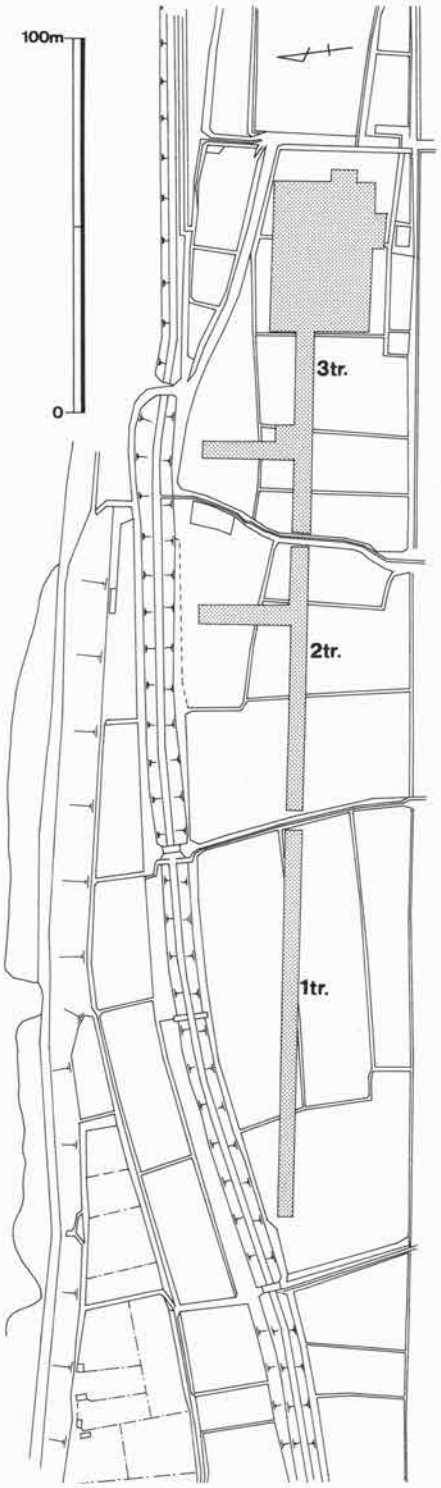
大島東遺跡は、綾部市大島町畠田他に所在する。今回の調査は、由良川河川改修事業及び中丹広域農道整備事業に伴い、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所及び京都府中丹土地改良事務所の依頼を受け、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施した。発掘調査に係る経費は、建設省近畿地方建設局及び京都府が負担した。調査は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第２課調査第２係長奥村清一郎、同調査員八木政明が担当した。現地調査は、平成５年10月18日から着手し、平成６年２月25日に終了した。調査面積は、約2,200m²である。

調査にあたっては、綾部市教育委員会をはじめ、関係諸機関の方々から多くのご協力をいただいた。また、発掘調査の作業に関しても地元の方々をはじめ、多くの方々にご協力をいただいた。記して感謝したい。(注1)



第１図　調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1.大島東遺跡　2.大島遺跡　3.大島古墳群　4.甲岳城跡　5.茶薄山城跡
6.新庄遺跡　7.延遺跡　8.岡町遺跡　9.明智遺跡　10.大将軍遺跡



第２図　トレンチ配置図

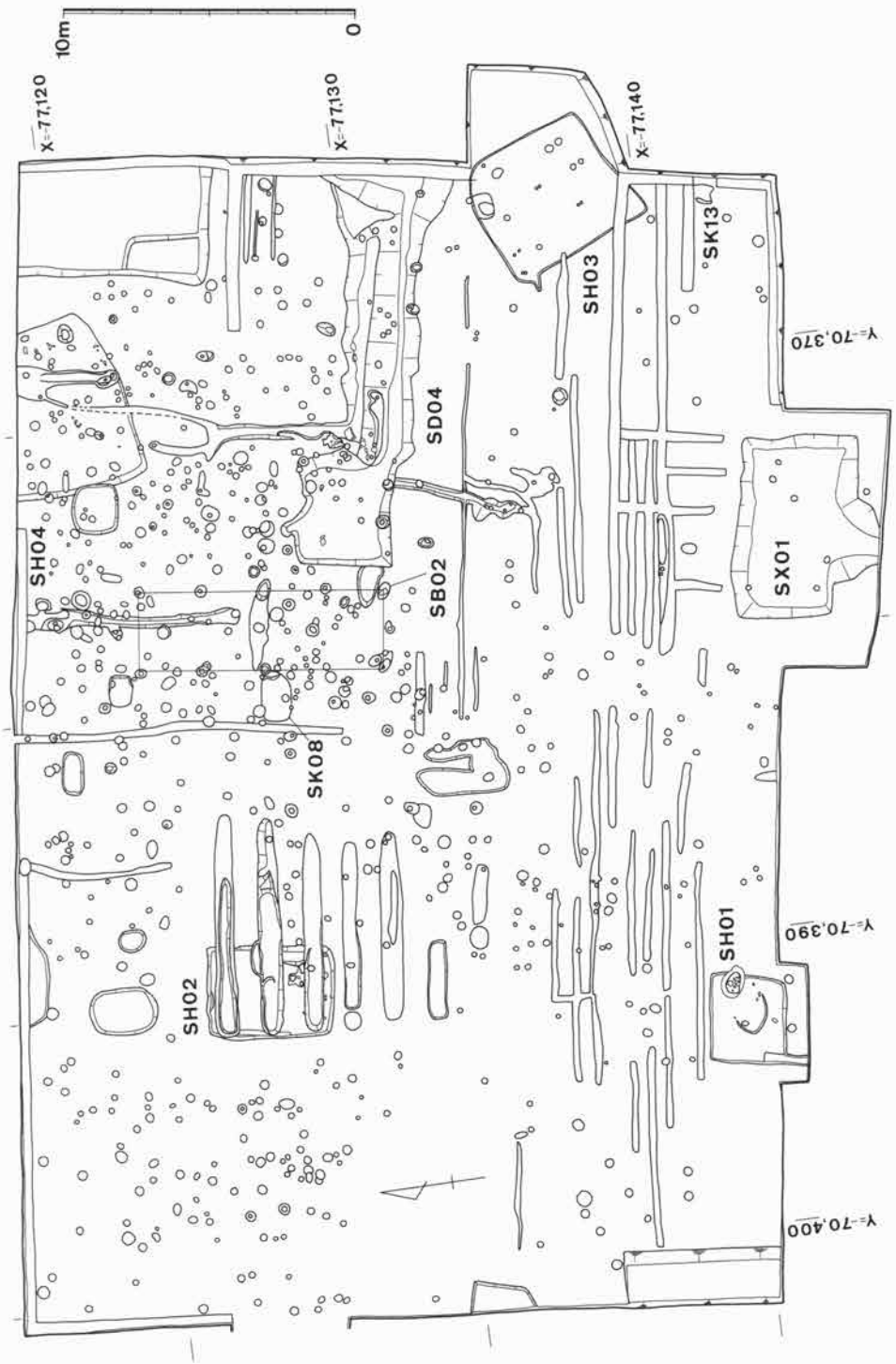
２．位置と環境(第１図)

大島東遺跡は、由良川左岸の自然堤防上に立地する。この地域では、以前から須恵器、土師器などが採集されており、遺物散布地として知られていた。

次に、周辺の遺跡を眺めてみると、大島東遺跡の西方には隣接して大島遺跡があり、その背後の山腹には、円墳20基からなる大島古墳群がある。また、東方約１kmの地点には、延遺跡、新庄遺跡がある。新庄遺跡では、綾部市教育委員会による平成５年度の発掘調査によって、古墳時代前期の方形周溝墓６基と竪穴式住居跡６基が検出されている。さらに東方には、現在の市街地と重なり、青野遺跡、青野南遺跡、青野西遺跡、綾中遺跡など、古代から中世にいたる複合遺跡である「青野・綾中遺跡群」がある。また、対岸の由良川右岸の丘陵には、前方後円墳５基を含む総数120基からなる綾部市内最大の以久田野古墳群、さらに西方約２kmの地点には、府内最大の円墳とされる私市円山古墳がある。

３．調査概要

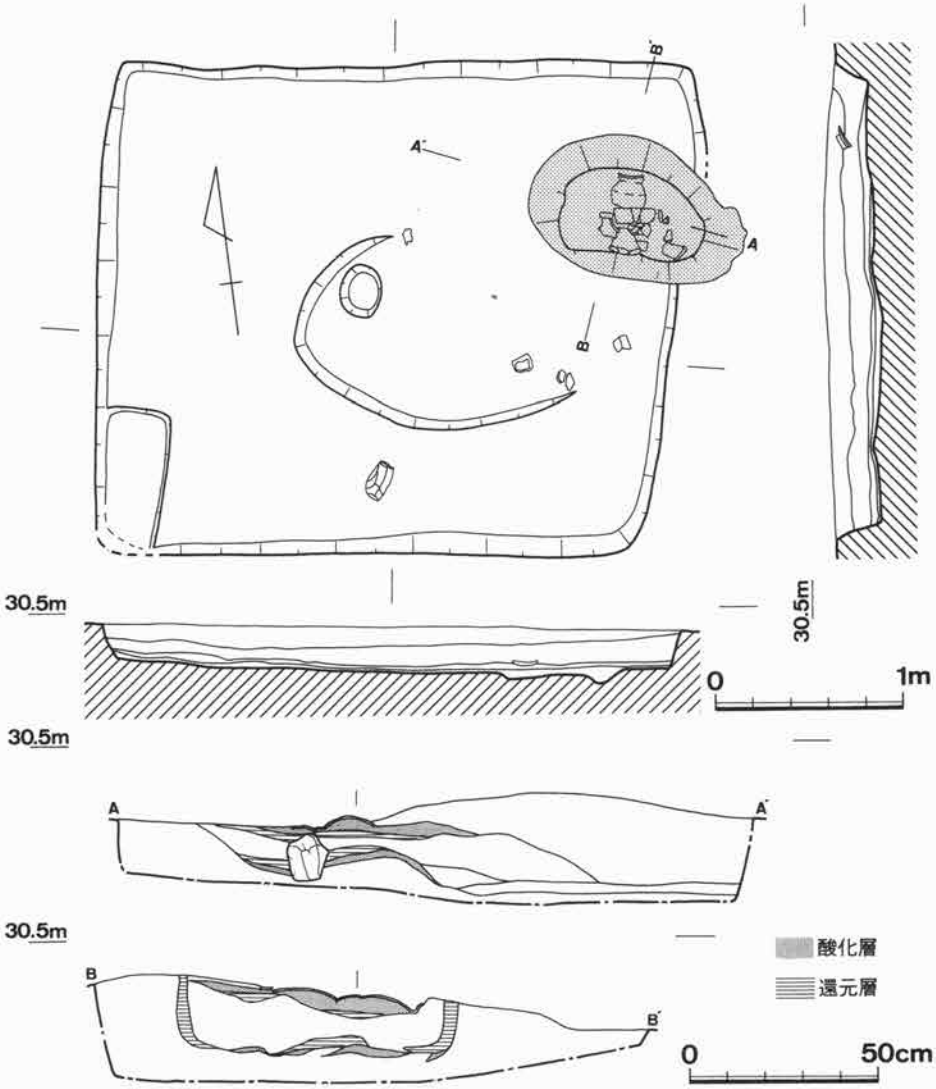
今回の調査では、まず調査地に平行する長い試掘トレンチとそれに直交する試掘トレンチを設定し、遺構の顕著な部分において調査範囲の拡張を行った(第２図)。１トレンチは、大半が由良川の旧河道内にあたり、また２トレンチでは、遺構が希薄であったため、遺構の顕著な３トレンチを拡張した。



第3図　3トレンチ遺構平面図

今回の調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡４基、掘立柱建物跡２棟、溝状遺構、土坑などである。このほか、建物跡としてはまとまらないが、柱穴とみられるピットも多数検出している。これらの遺構の時期は、古墳時代後期から奈良時代にかけての頃のものと、中世のものとに大別される。

基本層序は、最上層が灰色の耕作土で、その下に橙黄色の床土層がある。この床土層の下に遺構のベースとなる茶褐色土層がある。この茶褐色土の上部には、土中の金属成分(マンガン)が凝固しており、これを除去したのち、遺構を検出した。



第４図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図

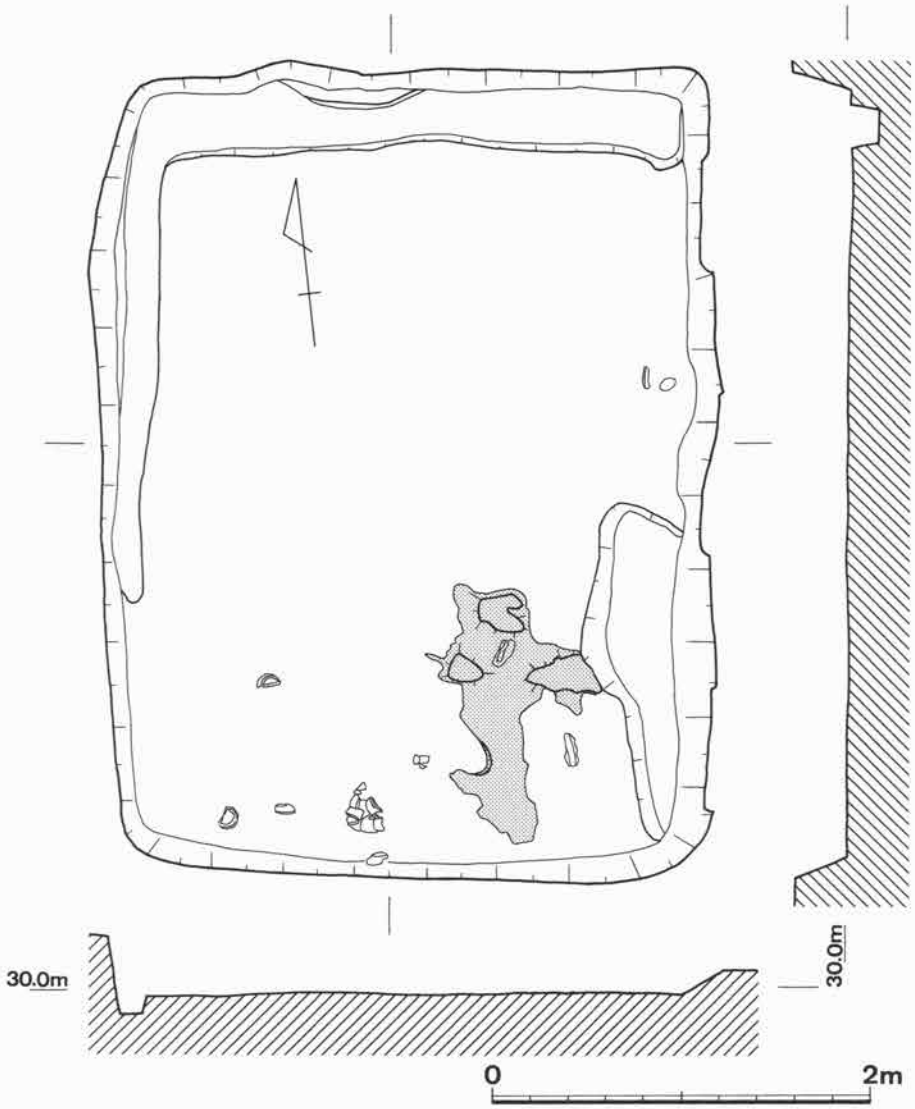
(1)検出遺構

a．古墳時代～奈良時代の遺構

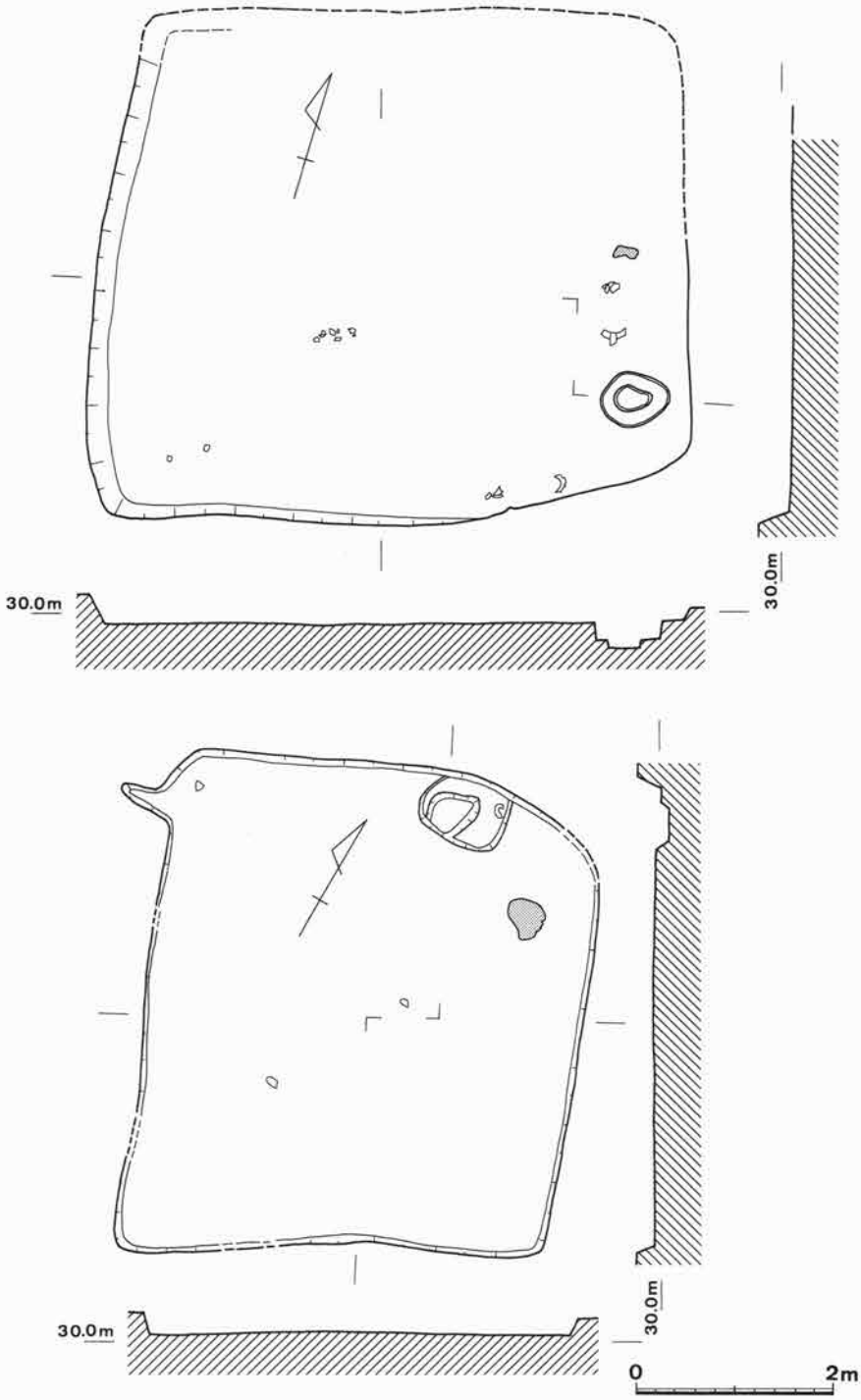
古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構として、竪穴式住居跡４基を検出している。

竪穴式住居跡ＳＨ01

長辺約3.1m・短辺約2.7mを測る方形の竪穴式住居跡である。住居跡の北東隅に竈を設けている。竈の内部、炉床部中央に棒状の自然石を立てて支脚としている。住居跡の時期は、出土遺物から判断して６世紀末から７世紀初頭にかけてと考えられる。



第５図　竪穴式住居跡ＳＨ02実測図



第６図　竪穴式住居跡ＳＨ03(下)・ＳＨ04(上)実測図

竪穴式住居跡ＳＨ02

長辺約4.3m・短辺約3.2mを測る方形の竪穴式住居跡である。住居跡の南側に竈を設けている。部分的に周壁溝が残る。住居跡の時期は、出土遺物から判断して７世紀末から８世紀にかけてと考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ03

長辺約5.1m・短辺約4.4mを測る方形の竪穴式住居跡である。住居跡の北東隅に竈を設けている。北壁に付く土坑は、貯蔵穴になる可能性がある。住居跡の時期は、出土遺物から８世紀に属すると考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ04

一辺６ｍを測る方形の竪穴式住居跡である。部分的な検出であり、全体の規模については不明である。住居跡の東側に竈を設けている。南東隅の土坑は、貯蔵穴になる可能性がある。住居跡の時期は、出土遺物から７世紀末頃と考えられる。

ｂ．中世の遺構

中世の遺構としては、掘立柱建物跡２棟、溝状遺構、土坑などを検出している。これらの遺構の時期は、16世紀に属すると考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ01

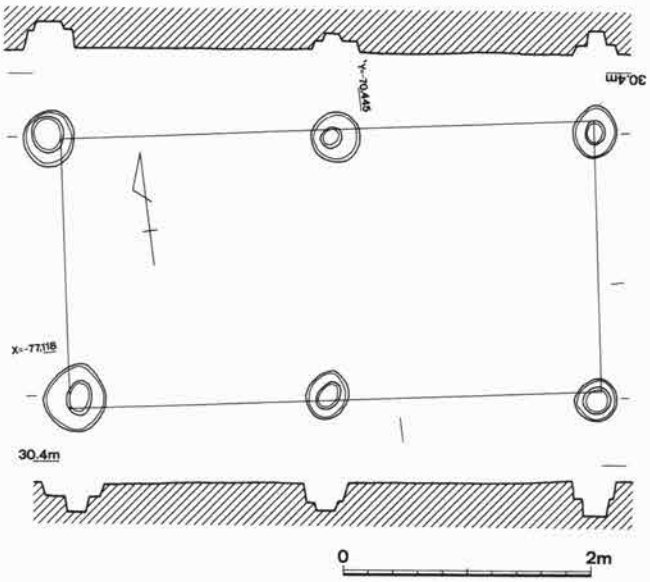
３トレンチ西端で検出した。南北方向１間・東西方向２間の東西棟の建物跡である。柱間は、南北方向約2.2m･東西方向約2.1mで、全体として約2.2m×4.2mの建物跡である。

掘立柱建物跡ＳＢ02

南北方向４間・東西方向１間の南北棟の建物跡である。柱間は、南北方向が約2.1m、東西方向が約2.7mで、全体として約8.4m×2.7mの建物跡である。

溝状遺構ＳＤ04

東西方向の溝跡で、最大幅約3.5m・深さ約37cmを測



第７図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

る。埋土には、土器片・炭・焼土などを多く含む。溝の底には、いくつかのピットを設けているところがあるが、その性格については不明である。

土坑ＳＫ08

人頭大の石数個を投入した土坑である。底面にピットを伴うが、用途などは不明である。埋土の中から、土器片や炭・焼土などが出土している。土壙墓になる可能性がある。

土坑ＳＸ01

南辺に穴出部を設けた長方形プランの土坑である。底は平坦面をなしていて、いくつかのピットを設けているが、その性格は不明である。

Ｃ．その他の遺構

焼土坑ＳＫ13

東西約68cm・南北約66cm・深さ約30cmを測る炉跡である。床面は、ほぼ平らに造られており、一面に焼土や炭が残存している。壁面も火熱によって赤褐色を呈している。時期や用途は不明である。

(2)出土遺物

竪穴式住居跡からは、須恵器の杯(第８図1～12)、蓋(第８図13～18)、土師器の杯(第９図26～32)、椀(第９図33)、甕(第８図19～25、第９図34～36)、鍋(第９図37・38)、紡錘車(第10図44・45)、砥石(第10図46)、鉄鏃(第10図47)が出土している。また、中世の遺構からは、青磁椀(第９図39)、土師器皿(第９図40～42)、擂鉢(第９図43)、土錘(第10図48～53)などが出土している。以下、検出遺構別に述べる。

ＳＨ01出土遺物(第８図1・20・25、第９図33・35)

須恵器の杯(1)、土師器の椀(33)、甕(20・25・35)が出土している。これらの遺物は、６世紀末から７世紀初頭にかけてのものと考えられる。

ＳＨ02出土遺物(第８図2・4～11・16、第９図32・36、第10図44・45)

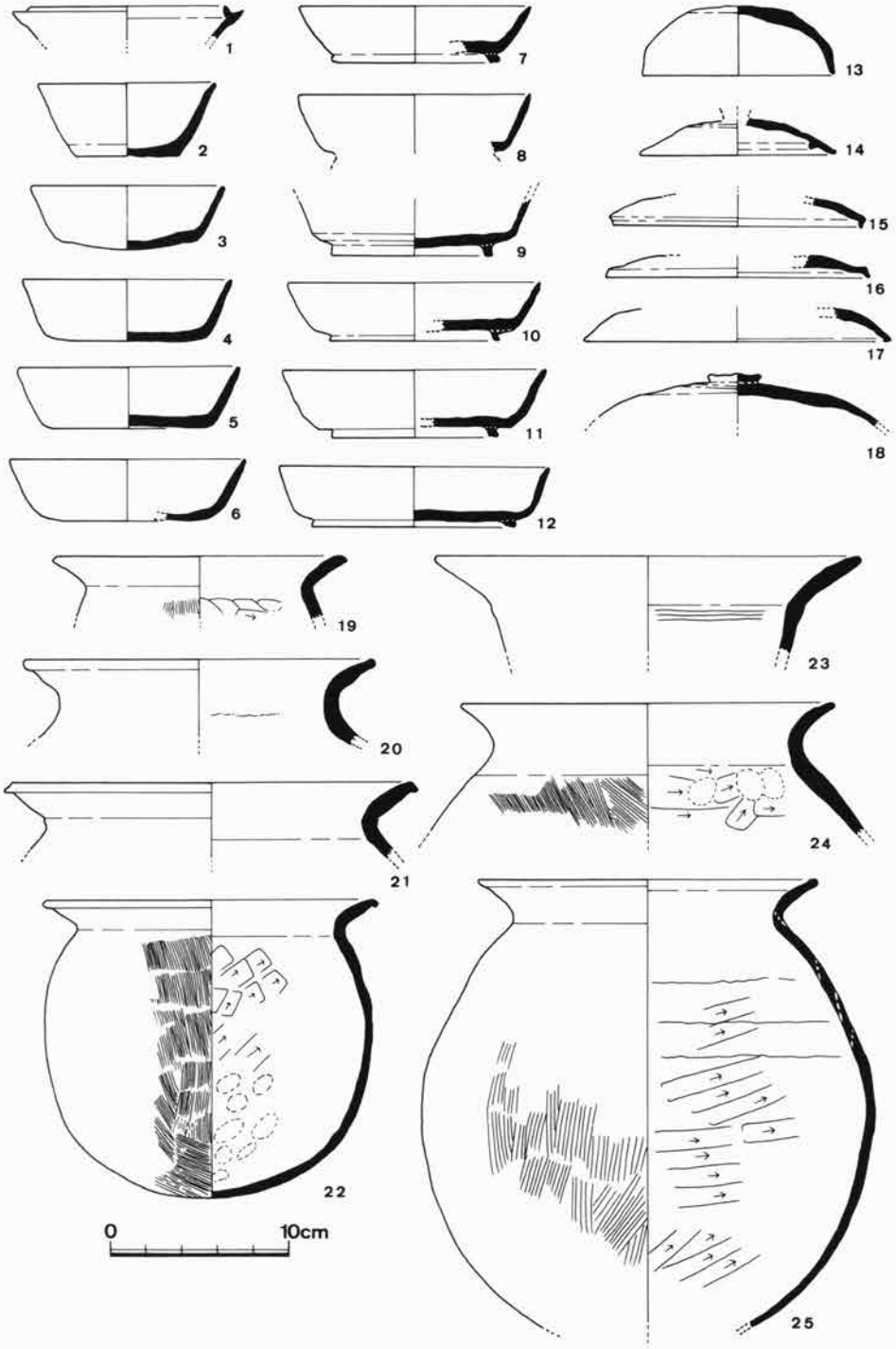
須恵器の杯(2・4～11)、蓋(16)、土師器の杯(32)、甕(21～23・36)、紡錘車(44・45)が出土している。須恵器の杯は、高台を付すもの(7～11)と付さないもの(2・4～6)がある。紡錘車には、土師質のもの(44)と須恵質のもの(45)とがある。これらの遺物は、７世紀末から８世紀にかけての頃に属するものと考えられる。

ＳＨ03出土遺物(第８図3・15・17～19、第９図26・27)

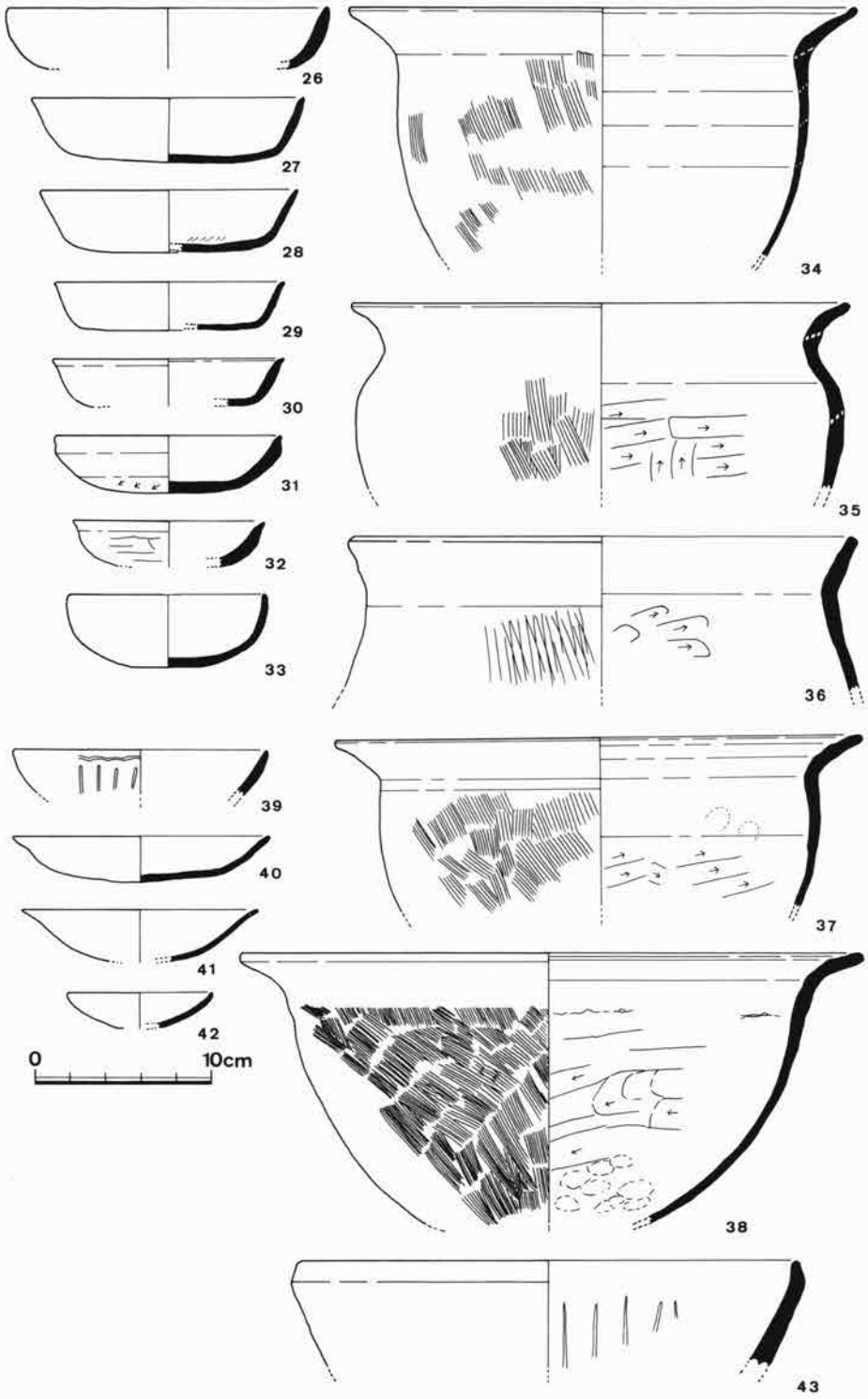
須恵器の杯(3)、蓋(15・17・18)、土師器の杯(26・27)、甕(19)が出土している。これらの遺物は、８世紀前半頃のものと考えられる。

ＳＨ04出土遺物(第８図12～14・24、第９図28～31・34・37・38、第10図46・47)

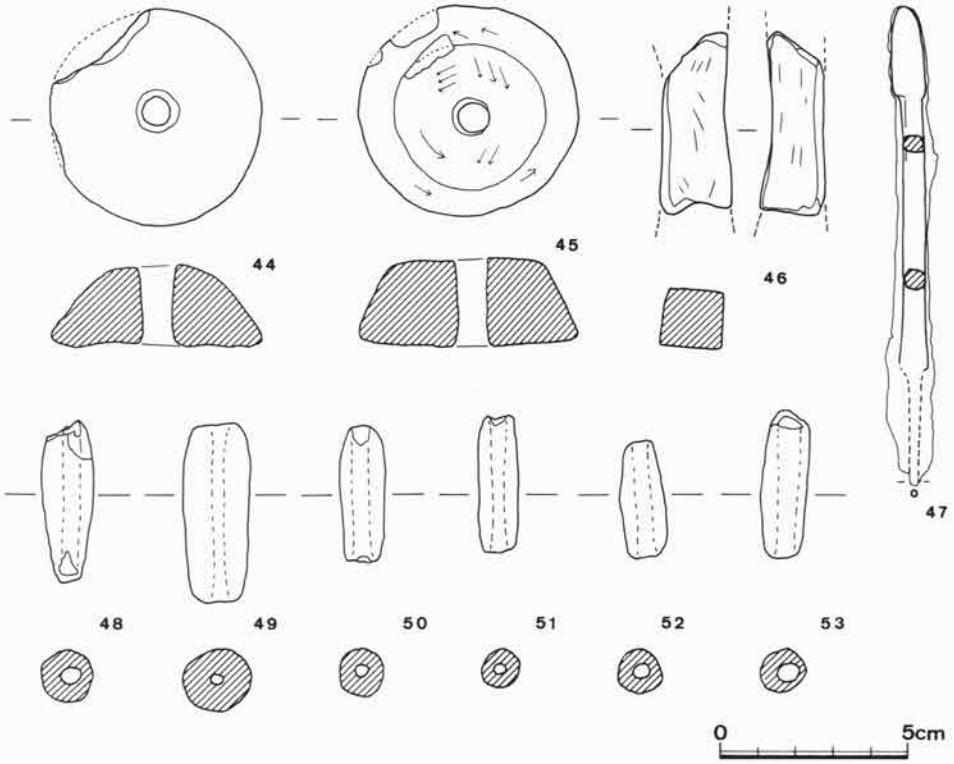
須恵器の杯(12)、蓋(13・14)、土師器の杯(28～31)、甕(24・34)、鍋(37・38)のほか、



第８図　遺物実測図(1)



第９図　遺物実測図(2)



第10図　遺物実測図(3)

砥石(46)、鉄鏃(47)などが出土している。須恵器の蓋には、縁部内面にかえりをもつもの(14)ともたないもの(13)とがある。土師器杯の内面に、放射状暗文の残る例(28)があるが、器壁が風化していて観察不可能なものが多い。

ＳＤ04出土遺物(第９図39・41、第10図48～53)

細片が多く、図示できるものは少ない。青磁椀(39)、土師器皿(41)、土錘(48～53)が出土している。39は、龍泉窯系青磁椀で、外面に蓮弁文を施す。いずれも16世紀前半頃に属する資料と考えられる。

ＳＫ08出土遺物(第９図42)

細片が多く、図示できるものは少ない。土師器皿(42)が出土している。16世紀後半のものと考えられる。

ＳＸ01出土遺物(第９図43)

丹波焼擂鉢(43)が出土している。16世紀中頃のものと考えられる。

ピット出土遺物(第９図40)

各ピットから出土している遺物は細片が多く、図示できるものは少ない。40は、ほぼ完

形の土師器皿で、16世紀初頭のものと考えられる。

4．小　結

今回の調査で、大島東遺跡は古墳時代後期から奈良時代及び中世の複合的な集落遺跡であることが判明した。竪穴式住居跡は、まばらに点在しており、今回の調査地に限っていえば、集落の縁辺部に該当している可能性が考えられる。中世遺構についても同様の評価を与えうるものと思われる。

由良川中流域の左岸では、綾部市青野遺跡から福知山市興遺跡に至るまで、弥生時代から中世に及ぶ遺跡が点々と営まれているが、この大島東遺跡もそれらの遺跡と同様の立地に営まれた集落遺跡と考えられる。

（八木政明）

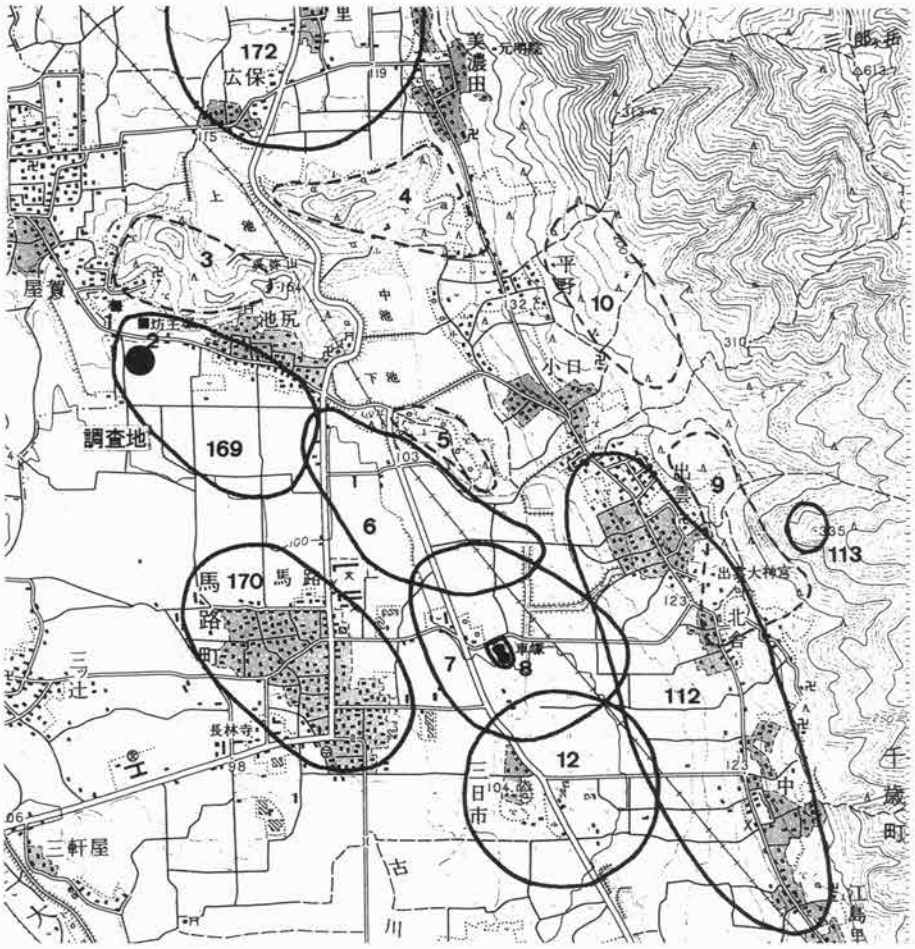
注1　調査参加者は下記の通りである（順不同、敬称略）

橋本　稔・坂口英穀・松田博見・木村隆之・友井川十三代・梶間直美・山中道代・丸谷はま子・小滝初代・寺尾貴美子・宮崎香織・大槻丈一・大槻和子・山根　操・吉田幸夫・大島作治・寺岡兼寿・岩崎秀夫・東　潤子・大島　暹・大槻かず枝・大槻春一・大島健一郎・大島光男・小林義一・大槻文子・配島文造・高田昭晴・竿山　忍・森下由紀子・東　克信・大槻勇二郎・安達幸雄・上柿陽子

2．池尻遺跡第２次発掘調査概要

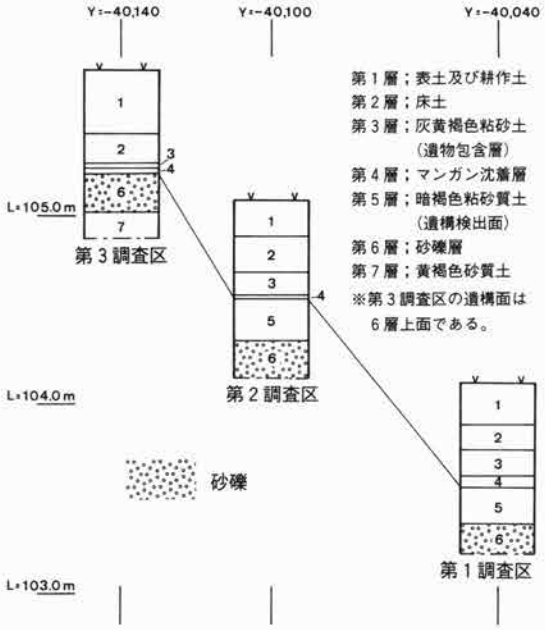
1．はじめに

池尻遺跡は、亀岡市の東部の馬路町池尻に所在し、東西総延長約750ｍを測り、遺跡の西端は八木町に接している。前回の平成３年度の調査では、主に遺跡の東側を中心に行い、弥生時代前期の土坑及び溝跡や、奈良時代の漆工の存在をうかがわせる漆付着土器を含む



第11図　調査地と周辺の遺跡(1/25,000)

1.天神塚古墳　2.坊主塚古墳　3.池尻古墳群　4.美濃田古墳群　5.稲築山古墳群
6.時塚遺跡　8.千歳車塚古墳　9.出雲古墳群　10.平野古墳群　112.出雲遺跡
169.池尻遺跡(調査地)



第12図　基本土層概念図

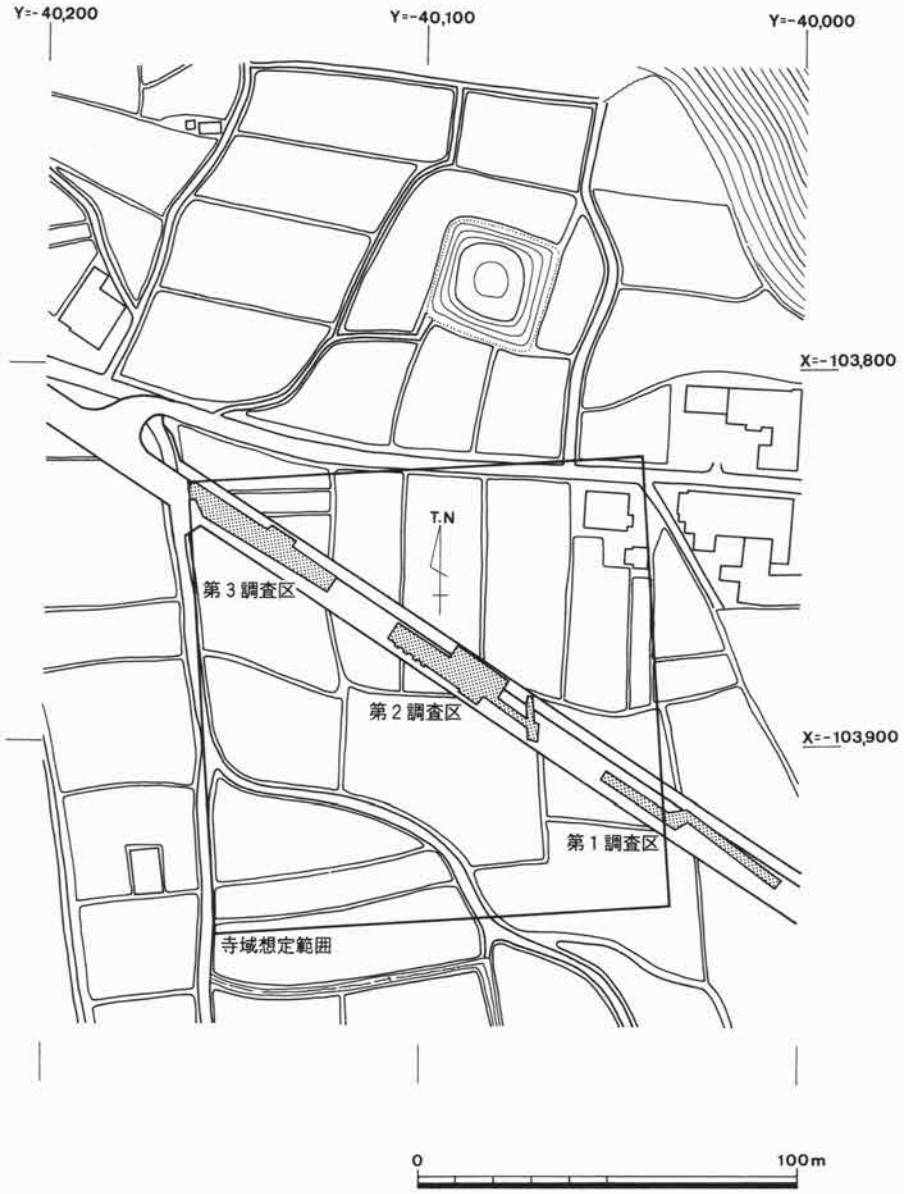
土坑などを確認している。また、今回の調査の中心である西側では、格子目タタキの入った平瓦や瓦当に四重弧文の施された軒平瓦などを埋土に含む、南北方向の溝跡などを確認した。(注1) 今回の調査は、府道亀岡園部線の改良工事に伴い、京都府土木建築部の依頼によって実施した平成3年度の追加調査である。調査は平成5年10月7日に開始し、同6年1月28日に終了した。調査中、11月24日には調査関係者を対象に関係者説明会を実施した。調査期間中は京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、地元有志の方々や学生諸氏の協力を得た。記して感謝する。(注2) なお、調査費用は、京都府土木建築部亀岡土木事務所が負担した。

2.　調　査　概　要

調査は、前回調査の22トレンチの面的調査を主目的にした。このトレンチを中心に合計3か所の調査区を設け、表土から第3層までを重機により掘削し、その後人力による遺構検出作業及び掘削を行った。調査区の番号は東側から第1調査区、第2調査区、第3調査区とした(第13図)。第1調査区では、遺構検出の段階で、第1調査区中央やや西寄りで瓦を多量に含む遺構を確認したため、規模を確認する目的で調査区を接続した。また、第2調査区では、当初、礎石抜き取り痕を確認し、建物としてまとまる可能性があったため、順次調査区を拡張し、その段階で現位置を保っていると思われる礎石を検出したため、南北路線幅ぎりぎりまで拡張し、建物跡の確認を行った。第3調査区では調査区やや東寄りで、掘立柱建物跡を検出し、第2調査区同様に、可能な限り拡張を行った。

3.　基　本　層　序(第12図)

調査地は東から西へと比高を増す微高地状を呈しており、奈良時代以前においては大堰川の支流である三俣川の氾濫源が及んでいる場所である。東の第1調査区と西の第3調査区の遺構面の比高差は約1.8mを測る。各調査区の層序は、水平堆積をした部分で、土層



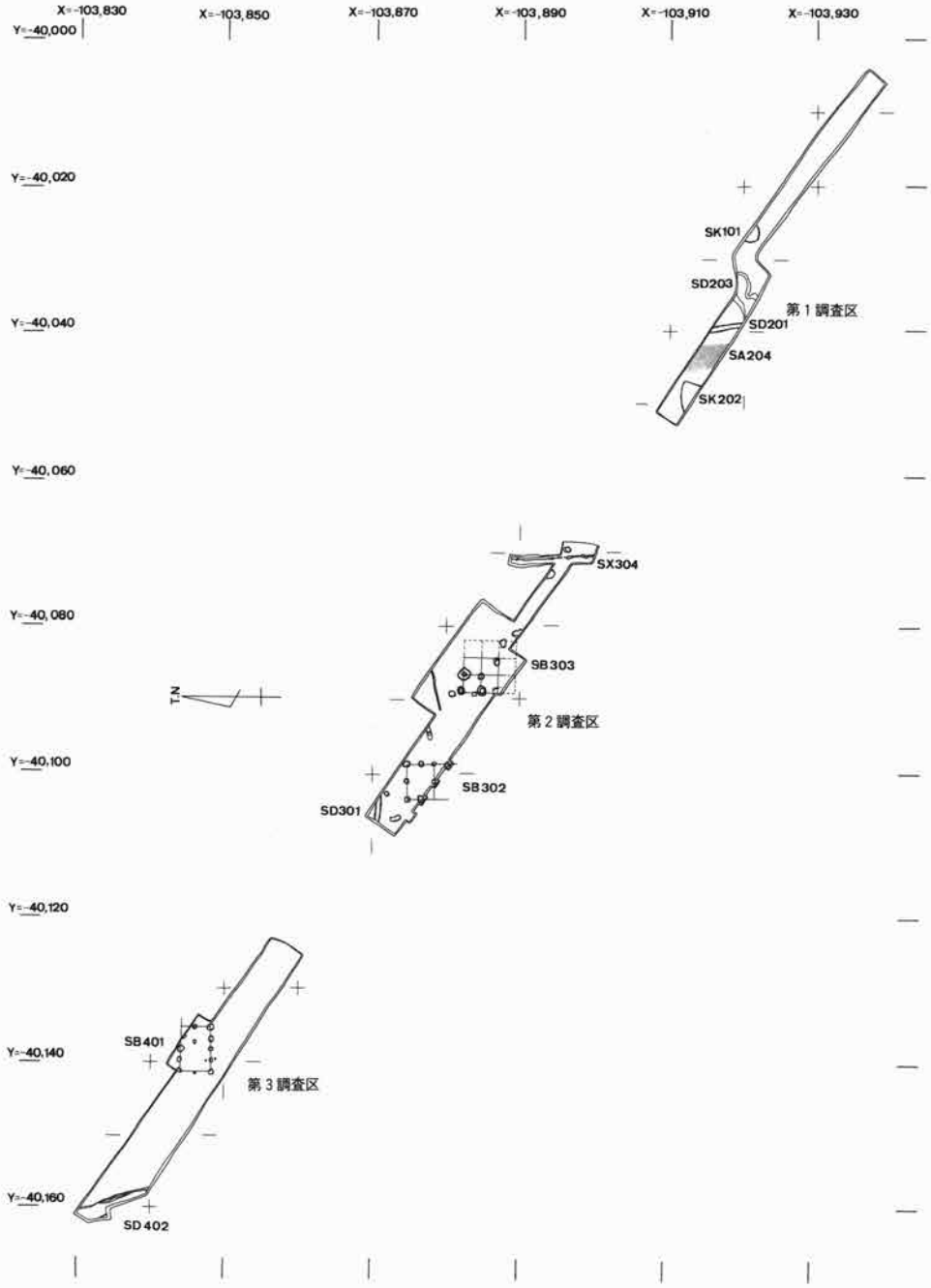
第13図　調査区位置図

堆積の比較が可能な部分を抽出した。層序は、第１層が表土及び水田耕作土、２層は床土、３層は灰黄褐色粘砂土で、布目瓦などを包含する遺物包含層、４層はマンガン分の沈着した硬い層である。基本的に４層下が遺構面である。第１・２調査区は５層の暗褐色粘砂質土層が介在しているが、第３調査区は４層下が礫層となり、遺構面となっている。

4．検出遺構

①第１調査区

土坑ＳＫ101　径約2.6m・深さ約0.25mを測る。埋土は暗褐色粘質土で、土坑中には

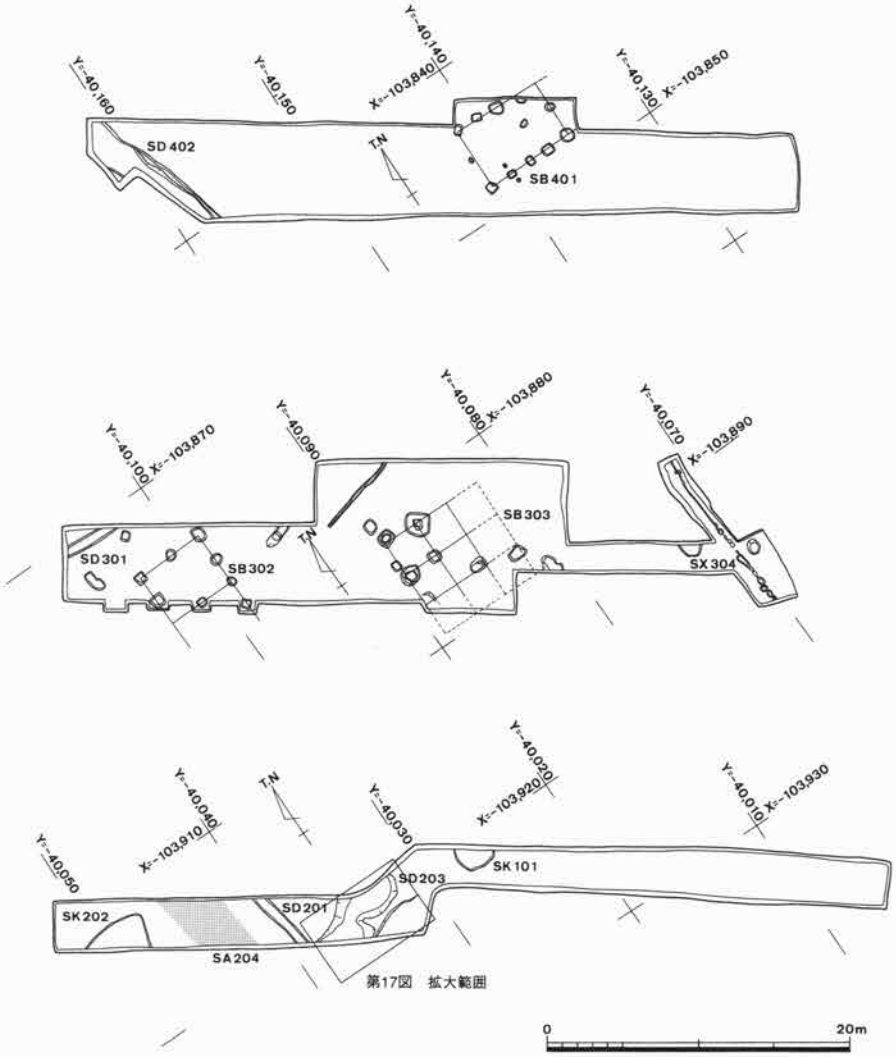


第14図　調査区位置図

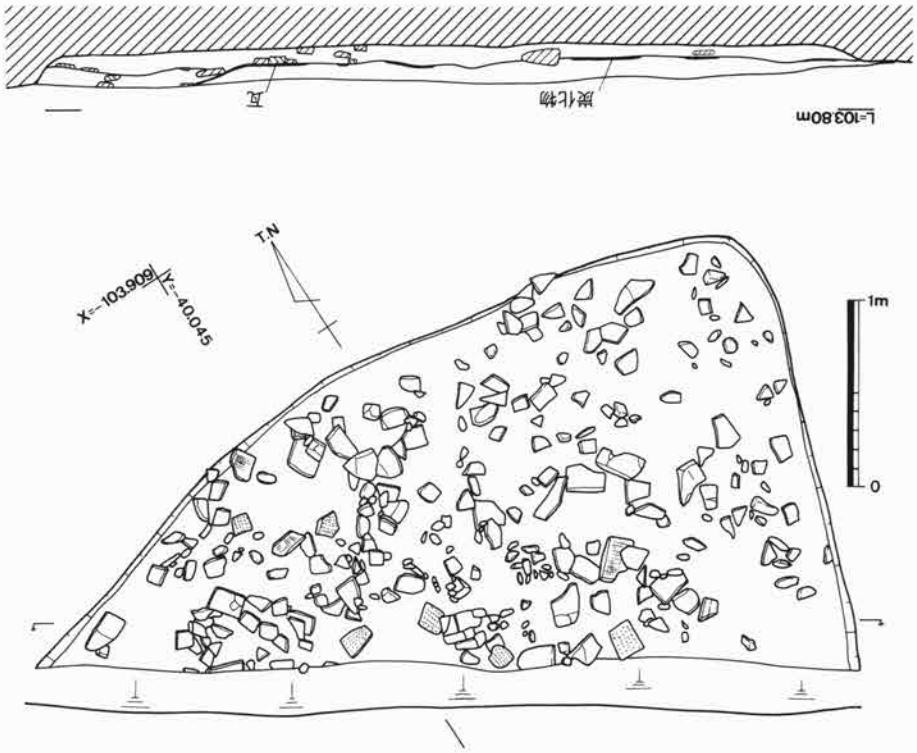
礫とともに数点の煤の付着した土師器椀、須恵器の高台付壺底部(第22図)、布目瓦などが出土した。須恵器の壺底部は、硯として転用されていた。

溝跡ＳＤ201　幅約0.7m・深さ約0.2mを測る、断面「U」字形を呈する溝跡である。溝の方向はほぼ南北方向を示す。埋土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物には須恵器杯蓋片、布目瓦がある。この溝跡はＳＤ203と新旧関係があり、ＳＤ203より古い。

土坑ＳＫ202(第16図)　トレンチ南壁にかかって検出した。長軸約4.6m・短軸約2.4m・深さ約0.2mを測る、竪穴状の瓦溜まりである。埋土は、暗茶褐色粘質土で、多量の布目瓦と若干の須恵器を含んでいた。埋土中には炭化物も見られた。瓦は大半が破砕された平瓦であるが、小量の丸瓦、軒丸瓦も出土している。



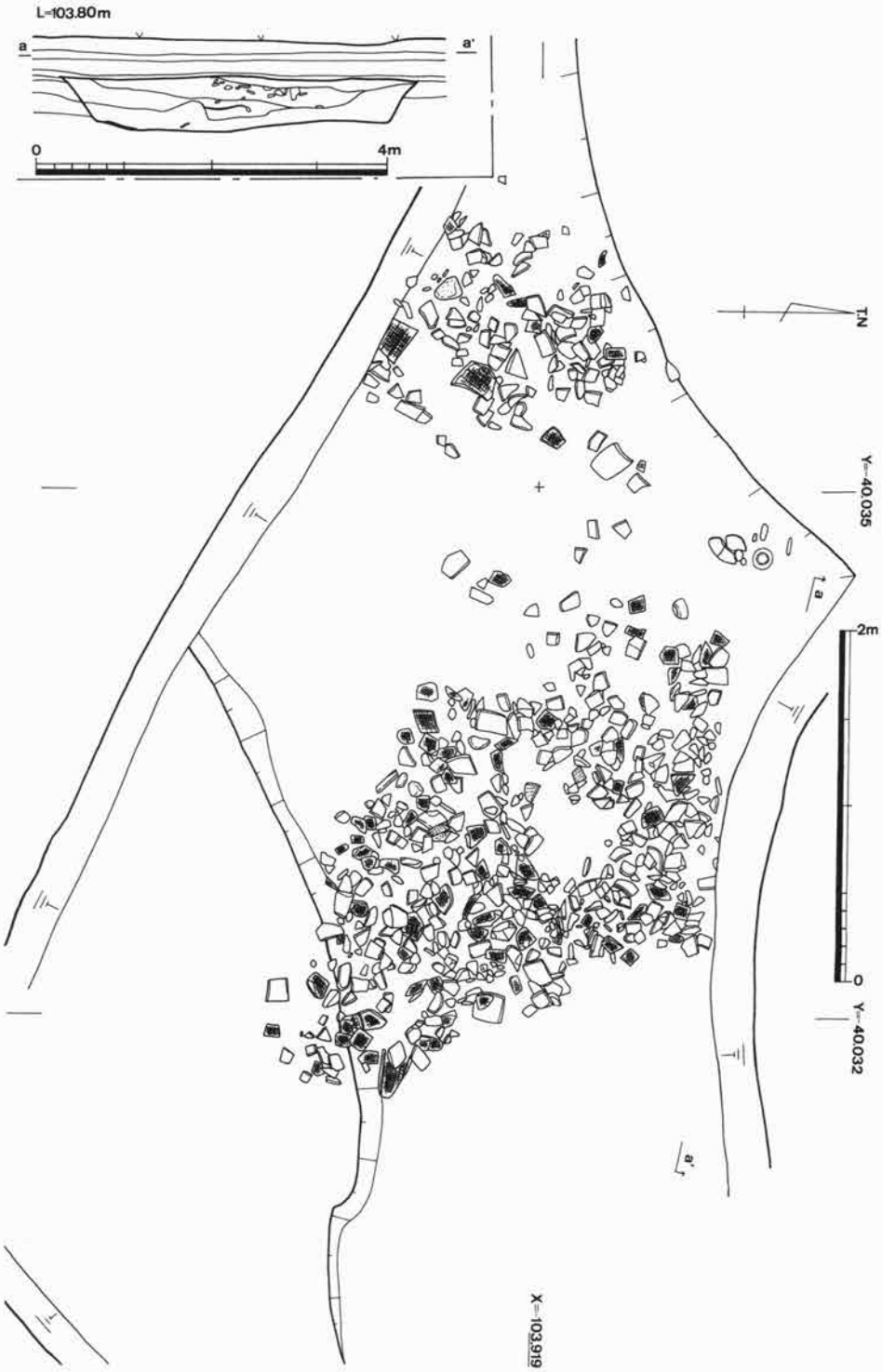
第15図　調査区平面図



第16図　土坑ＳＫ202実測図

溝跡ＳＤ203(第17図)　自然流路状の落ち込みである。この溝跡は北東－南西方向で、南西側に傾斜する。長さ約3.5m分を検出し、幅約3.3m、深さは検出面から最深部で約0.7mを測るが、深さは一定せず、浅い窪み状を呈する部分も見られる。埋土は、暗茶褐色粘砂質土で、下層には礫の堆積も見られた。埋土の中層に遺物を包含しており、集積した状態で出土した。出土遺物には多量の布目瓦と須恵器・土師器がある。出土瓦は、半分に割れたものも存在するが、多くは細片化している。主体となる瓦は、平瓦であり、それに若干の軒瓦、丸瓦が含まれていた。土器は、比較的残存度が高く、完形品、ほぼ完形品のものが多い。埋土中には炭化物の集中か所も見られ、溝が再掘削され、火災処理のゴミ穴として利用されたことが考えられる。

築地状遺構ＳＡ204　溝跡ＳＤ201の西約1.5mに、溝跡ＳＤ201と平行して礫の集中する部分が見られた(図版第11)。幅約４ｍを測る。また、ＳＡ204の断ち割りの断面観察からわずかな起伏が確認できたことから、築地と思われるが、遺構上面は後世に削平された可能性がある。この遺構面下層は基本的に礫層で、地業によるものか自然地形の隆起か判別が困難である。この礫間には遺物は含まれていなかった。



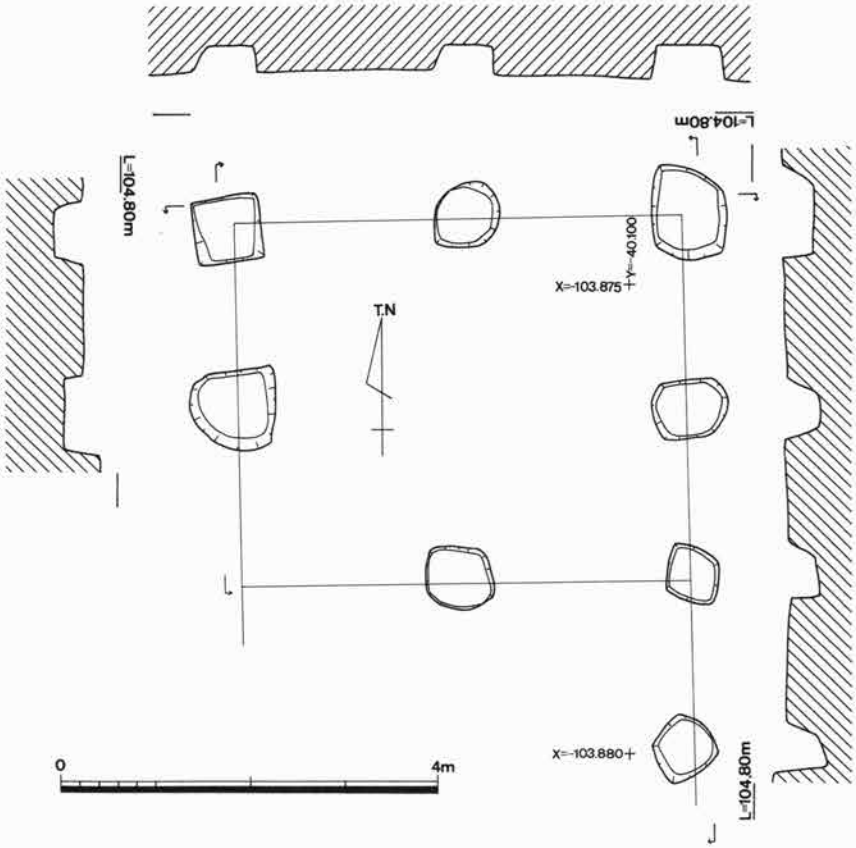
第17図　溝跡ＳＤ203実測図

②第２調査区　今回調査の主要部分である。

溝跡ＳＤ301　東西方向の溝跡である。幅約0.8m、深さは最深部で検出面から約0.6mを測る。断面は「U」字形を呈する。埋土は暗茶褐色粘砂質土である。埋土中の出土遺物には須恵器・土師器・平瓦片がある(第26図)。

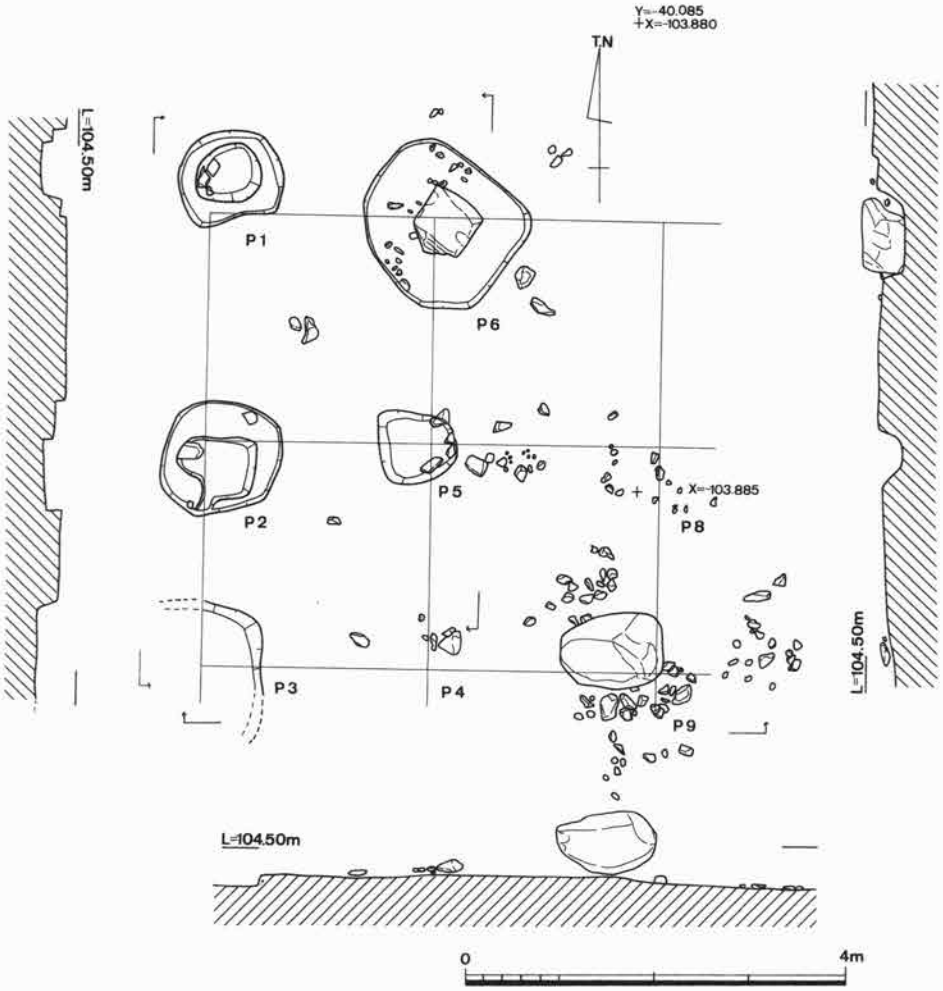
掘立柱建物跡ＳＢ302(第18図)　東西梁間２間・南北桁行３間以上の南北棟の建物跡である。柱穴は１辺約0.7mの隅丸方形で、深さは検出面から約0.4mを測る。柱心々間の長さは東西約1.8m・南北約2.4mである。建物跡は、真北に対して西に1°10′程度の傾きを持つ。埋土は、暗茶褐色粘質土である。各柱穴からの出土遺物は見られなかった。

礎石建物跡ＳＢ303(第19図)　建物跡の北西隅を中心に南北２間・東西２間分を検出した。Ｐ６は現位置を保った花崗岩の礎石が存在していたが、その他６か所は礎石抜き取り痕または根固め石のみとなっていた。礎石に使用されていたと思われる花崗岩(Ｐ９を含めて)は、この建物跡付近に散乱していた。Ｐ１及び２は、礎石抜き取り痕である。Ｐ１は、一辺約１mの隅丸方形を呈し、礎石据え付け穴が一段深くなる、２段の掘り込みとな



第18図　掘立柱建物跡ＳＢ302実測図

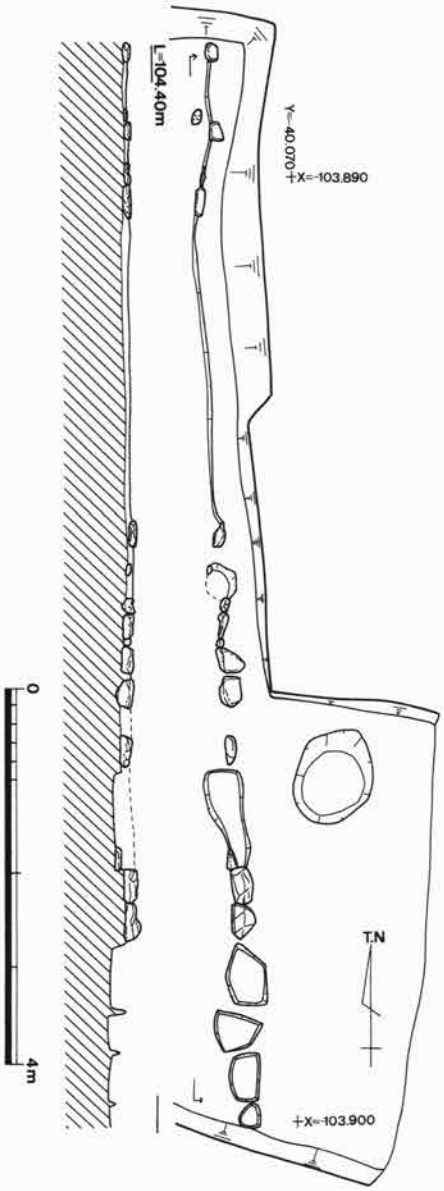
っていた。深さは検出面から約0.3cmを測る。内側の礎石据え付けの穴には人頭大の根固め石が見られた。埋土は、耕作土と色調の類似する灰褐色粘質土で布目瓦片や須恵器片を含んでいた。礎石の抜き取りは、少なくとも中世以降、時代の下がった段階で行われたものと思われる。Ｐ２は同大で、深さ約0.2cmを測り、根固め石が見られた。埋土も同様の灰褐色粘質土である。Ｐ６の礎石は、約60cm角で厚さは約40cmを測る。地表に約15cmが露出していた。この礎石は、地表露出部分が被熱のため赤変していた。Ｐ５は、径0.4m・深さ約0.25mを測る。埋土は灰褐色粘質土である。このピットの周囲にも根固め石と思われる角礫が散乱していた。上記Ｐ６の礎石、またＰ５の掘形に接しても焼土が見られたことから、この建物が失火したことがうかがわれた。Ｐ８は、掘形は認められず、まばらに角礫が散乱していた。Ｐ９は、根固め石の散乱する上に長さ約1.05m・幅約0.8m・厚さ



第19図　礎石建物跡ＳＢ303実測図

約0.68mの花崗岩がのっていた。もともとこの付近にあったものと思われるが、水路敷設のため起こされたものと思われる。この建物跡の柱間寸法は約2.4m間隔で、1尺＝0.297mとすると、規模は不明であるが、8尺等間の建物跡と思われる。方位は、真北に対して0°40′ほど東に偏っている。

石列ＳＸ304（第20図）　南北方向に並ぶ基壇状の石列で、延長約13.6m分を検出した。段差は約0.15mを測る。石列は、南北の調査区の中央やや南寄りに比較的まとまって残存していた。さらに南側は、石抜き取り痕が並ぶ。埋土は、暗灰褐色粘砂質土で、埋土中には布目瓦細片が含まれていた。石列に使用された石材は、人頭大のチャート系の角礫である。石列は、西側に面をそろえていたが、狭小な調査区のため石列の性格、規模及び範囲は不明である。隣接する東側もトレンチを開けたが、水田面が一段低くなっているため削平されたのか、確認できなかった。

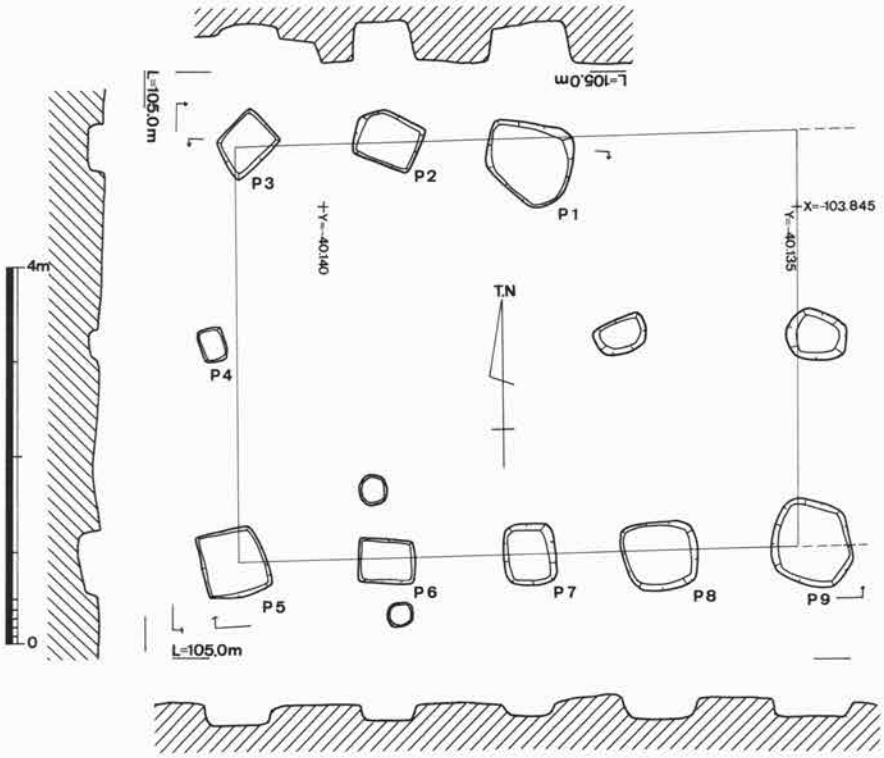


第20図　石列ＳＸ304実測図

③第３調査区

掘立柱建物跡ＳＢ401（第21図）　東西桁行４間以上・南北梁間２間の東西棟である。柱穴は一辺約0.7mの隅丸方形である。柱心々間の長さは、東西約1.8m・南北約2.4mである。建物跡の傾きは真北に対して、西に約1°である。柱穴埋土は、黄褐色砂質土のブロック混じりの暗茶褐色粘砂礫土である。出土遺物は、Ｐ８の埋土から布目瓦の小片とＰ１の埋土から完形に近い須恵器皿(70)が出土した。この資料から、建物跡の時期は、８世紀中頃に比定できる。

溝跡ＳＤ402　前回の調査で確認した溝跡である。溝跡の方向はほぼ南北を示



第21図　掘立柱建物跡ＳＢ401実測図

す。溝幅約2.5m・深さ約0.6mを測る。溝の断面形は「U」字形を呈している。埋土は砂礫を多量に含む灰色粘質土である。埋土中にほぼ完形の軒平瓦(第31図・図版第13)、布目瓦、須恵器片を包含していた。

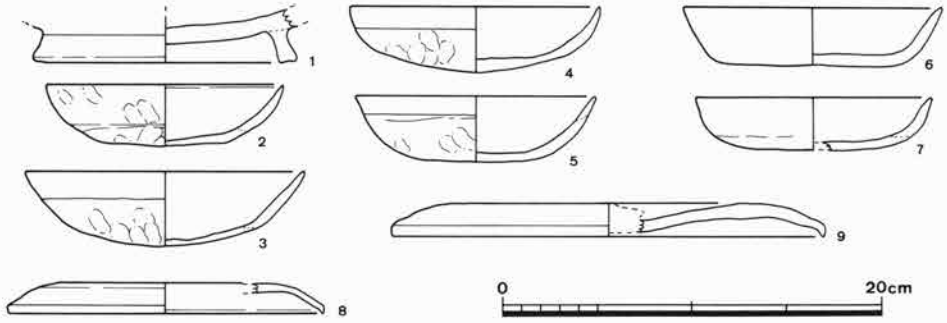
5.　出　土　遺　物(第22～33図)

(1)土器類

①第１調査区

土坑ＳＫ101(１～７)　１は、須恵器壺底部である。外側に張り出す高台が付く。高台径約6.9cmを測る。底部は転用硯として使用されている。２～５・７は、土師器椀である。口径約12.5cm前後・器高3.5cm前後である。粘土紐巻き上げ痕を残し、外面に指頭圧痕が顕著に見られる。製作技法から須恵器工人によるものと思われる。口縁部内外面に炭化物が付着している。おそらく、燈明皿として利用されたものと思われる。

溝跡ＳＤ201(８)　８は、須恵器杯蓋である。端部のみの破片で、復原口径は16.6cmを測る。焼成は良好で、色調は淡青灰色を呈する。



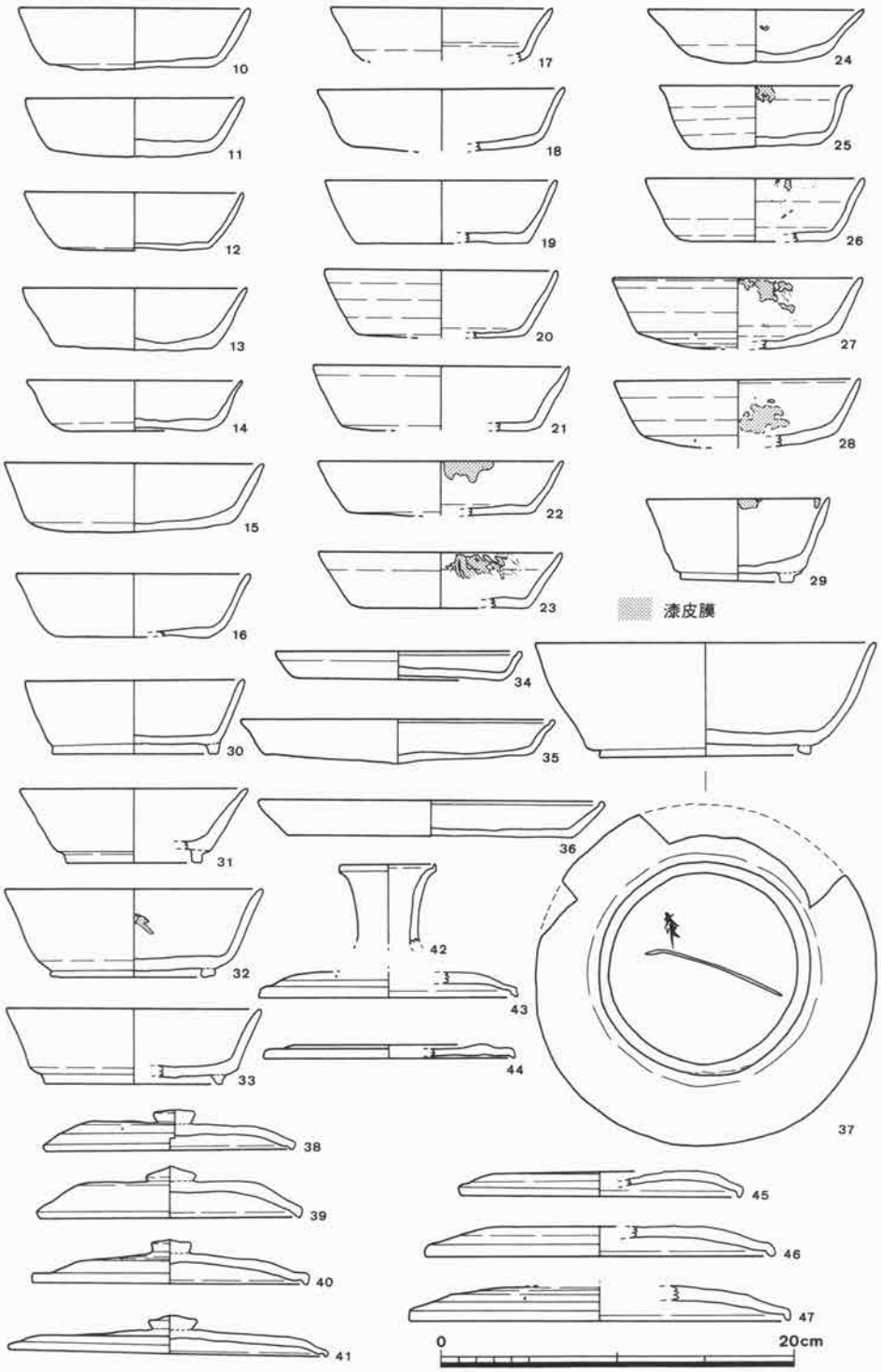
第22図　第１調査区ＳＫ101・ＳＤ201・ＳＫ202出土土器

土坑ＳＫ202（９）　９は、須恵器杯蓋である。端部を折り曲げ、尖り気味におさめる。全体に焼け歪みが見られる。蓋裏面は硯として転用されている。

溝跡ＳＤ203　出土遺物の大半は布目瓦であるが、これに共伴する遺物に須恵器・土師器がある。

須恵器　杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ｃ、壺、甕Ｅなどの器種が見られる[注3]。杯Ａを中心に漆の付着したものも見られる。漆の付着部位は、口縁部内面に見られ、漆工のパレットとして使用されたものと思われる。杯Ｂ(29～33・37)は、高台を持つタイプである。口径は12～15cmで、貼り付け高台は底部ぎりぎりに付く。高台の断面形は、方形のもの(29～31)、台形のもの(32・37)、逆台形のもの(33)がある。29は、口径10.4cm・器高4.9cm・底径6.9cmを測る。内面全体に黒色の付着物が見られる。37は、口径19.4cm・器高6.4cmを測る杯で、内面には墨痕があり、底部にヘラ記号と「大□」の墨書が見られる[注4](第23図)。杯Ｂ蓋(38～47)は、中央部がやや突出した扁平な宝珠つまみが付く。縁端部の形状は、尖り気味におさめるもの(38・39)と、屈曲するもの(40・47)がある。皿Ｃ(34～36)は、口径14～19.4cmとさまざまであるが、口縁端部に丸味を持ち、内面に明瞭な沈線をめぐらすという共通の特徴がある。これは、亀岡市篠窯跡群石原畑３号窯の資料と思われる[注5]。34は、内面に朱が付着している。壺口縁(42)は、復原口径5.4cmを測る。把手付甕Ｅ(48)は、頸部直下に２か所の把手が付く。頸部で「く」字形に屈曲し、斜め上方に立ち上がり、口縁端部はやや外側に肥厚した扁平な端部である。復原口径は27.1cmを測る。軟質で、色調は淡白黄灰色を呈している。この種の把手の形状は、京都府福知山市大内城跡、奥谷西遺跡など丹波地域に類例が見られる[注6]。壺(49)は、復原底径15cmを測る扁平な底部からやや内湾しながら斜め上方に立ち上がり、底部から約７cmのところで最大径を持た

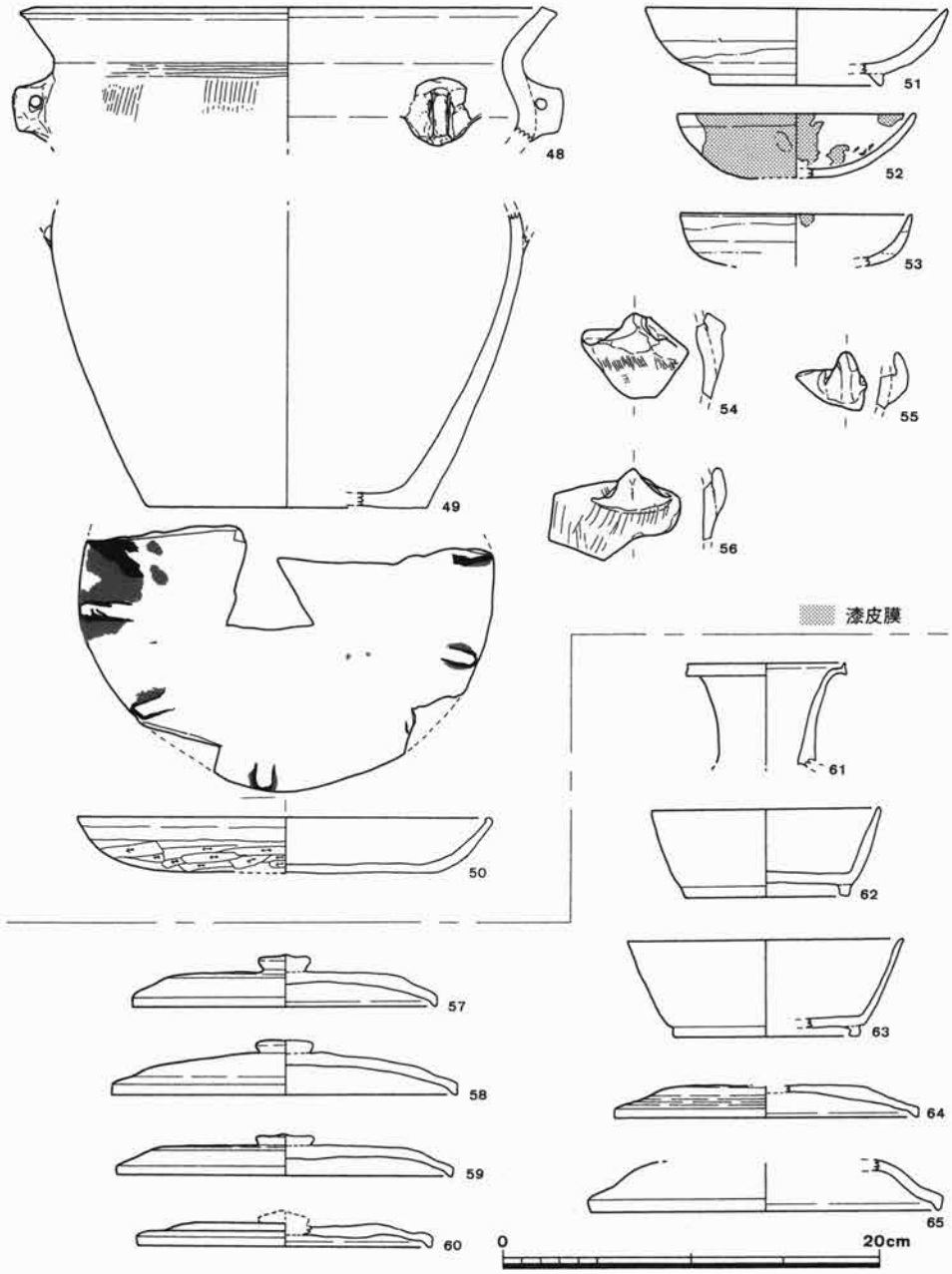
第23図　墨書模式図
（約２倍）



第24図　第１調査区ＳＤ203出土土器

せて内湾する。この体部最大径となる部分に把手が付く。焼成は良好で堅緻である。色調は青灰色を呈する。内外面ともていねいにナデ調整されている。

土師器(50～56)　皿A、椀C、甕B・Eなどの器種がある。皿(50)は、扁平な底部から斜め上方にやや内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめ、口縁部内面に明瞭な一条の沈

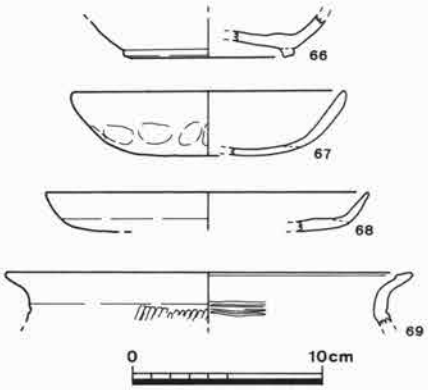


第25図　第1調査区SD203・包含層出土土器(下段は包含層)

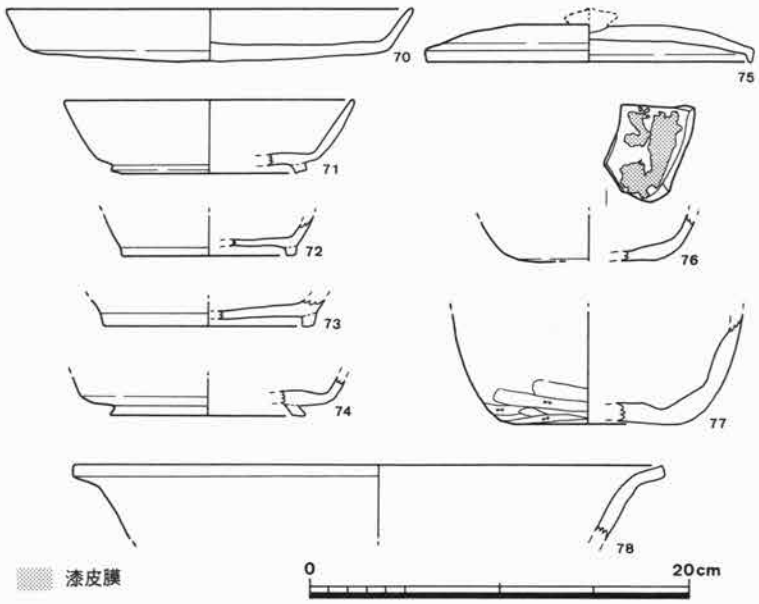
線を持つ。口径約21.9cm・器高約2.9cmを測る。外面は、底部及び下半部をヘラケズリし、上半部、内面はナデ調整である。内面に暗文は見られないが、ていねいなつくりの皿である。色調は茶褐色を呈する。燈明皿として使用されたと思われ、口縁部内面７か所に煤が付着している。51～53は、土師器椀である。高台付の椀(51)は、復原口径16cm・器高4.2cmを測る。外面には粘土紐輪積み痕が残る。調整は、内外面ともナデである。52は、口径12.6cm・器高3.4cmを測る。内外面に漆皮膜状のものが付着している。色調は黄褐色を呈する。54～56は、甕の把手部分である。把手の形状により３個体分ある。いずれも体部に把手端部が接している。54は、把手両側面から強くつまみ上げ、中央部分に顕著な凹みを持つ。55は、幅の狭いもの。56は、54と同様であるが、側面からのつまみ上げは弱くわずかに凹んでいる。

②第２調査区

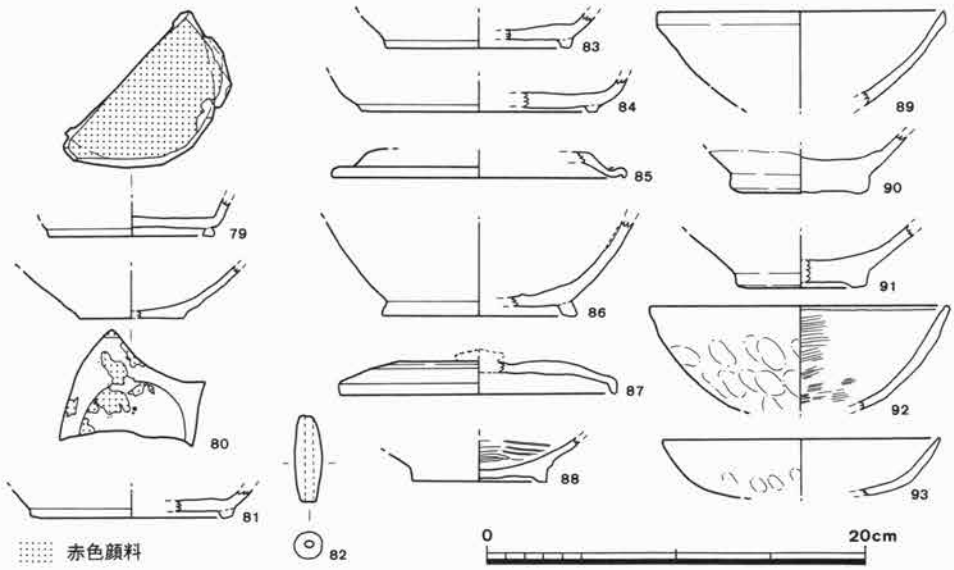
溝跡ＳＤ301(66～69)　66は、須恵器杯Ｂ底部である。復原底径８cmを測り、貼り付け高台は外側に踏張る。67は、土師器椀である。口径14.3cm・器高3.45cmを測る。粘土紐巻き上げによるつくりで、底部及び下半部には指



第26図　第２調査区ＳＤ301出土土器



第27図　第３調査区ＳＢ401・ＳＤ402出土土器



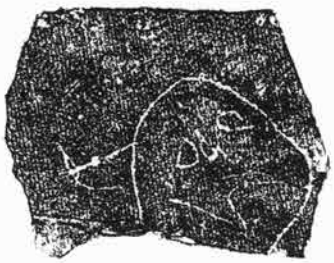
第28図　第２調査区包含層出土土器・土製品

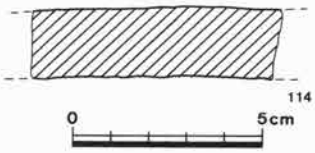
頭圧痕を残す。外面上半部及び内面は、ナデ調整を施す。色調は、淡橙灰色を呈する。

③第３調査区

掘立柱建物跡ＳＢ401(70)　須恵器皿Ｃ(70)は、口径21.4cm・器高2.8cmを測る。扁平な底部から斜め上方に立ち上がり、口縁端部やや尖り気味におさめる。

溝跡ＳＤ402(71～78)　71～73は、杯Ｂである。71は、復原口径15.2cm・器高４cm・底径9.2cmを測る。74は、高台が内側に入り込むもので、高台端部は外側に踏張る。復原底径10.2cmを測る。杯Ｂ蓋(75)は、つまみを欠損する。縁端部を屈曲させ尖り気味におさめる。復原径は17.2cmを測る。内面は硯として転用されている。76・77は壺底部、78は須恵器鍋である。76は底部破片で、内面見込み部分に漆皮膜が付着する。77は、復原底径9.8cmを測る。外面は不定方向のケズリ、内面はナデを施す。78は、復原口径30.2cmを測る。焼成は軟質であり、色調は淡黄白色を呈している。





第29図　線刻瓦実測図

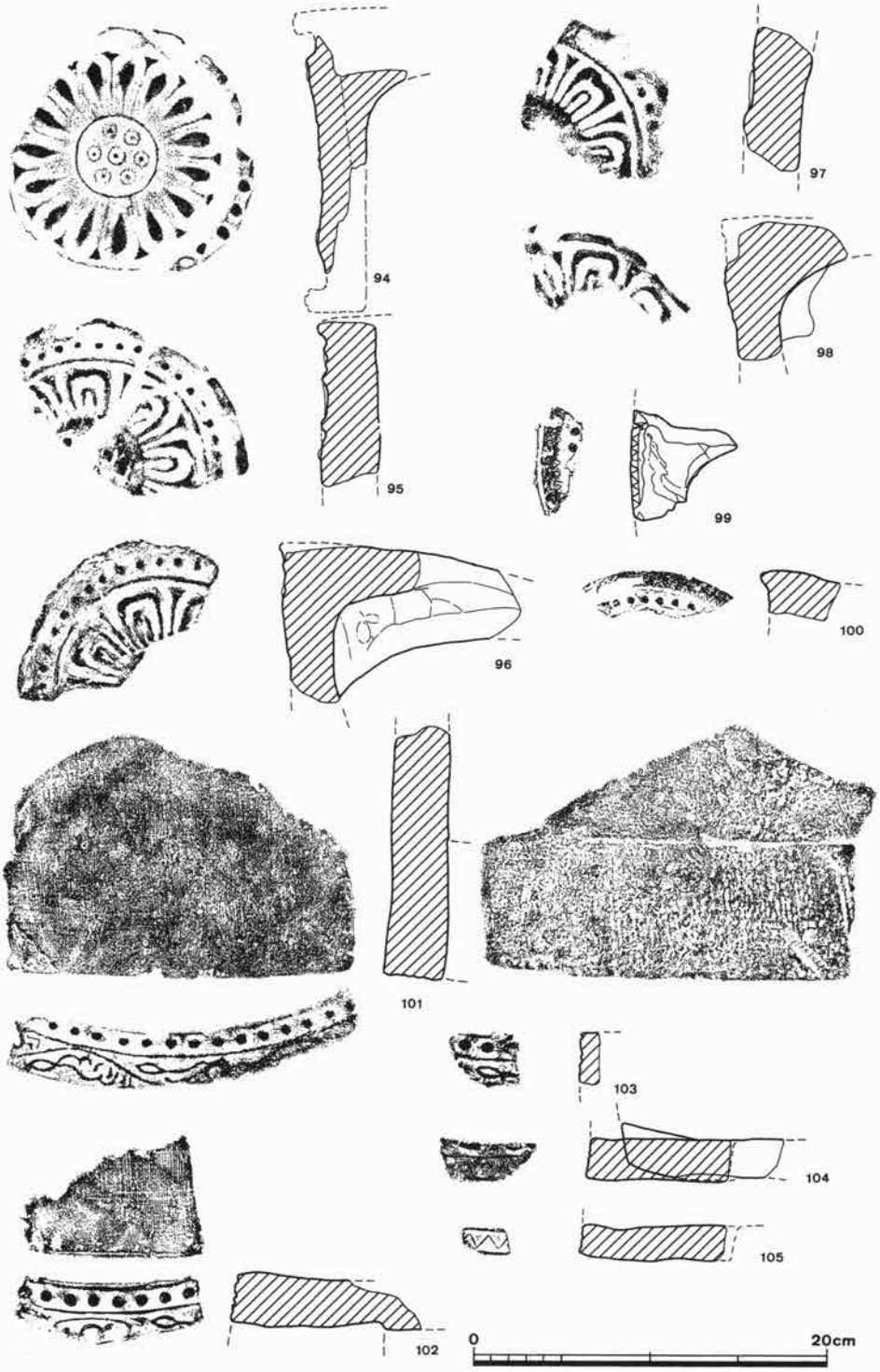
第２調査区包含層遺物(79～93)　79～81・83～88は、須恵器である。79は、杯Ｂである。見込み部分に鮮やかな朱が付着している(注7)。80は、底部に回転糸切り痕をとどめる杯である。下半部及び底部に朱以外の物質が付着する。86は、灰釉陶器壺底部である。底径

10.2cmを測る。88は、無釉陶器である。底径7.1cmを測る。内面にミガキが見られる。89～91は、白磁碗である。89は、口縁部外面の肥厚はわずかであり、玉縁は未発達である。いずれも12世紀初頭のものと思われる。92は、黒色土器である。内外面を黒色処理したＢ類である。復原口径は15.7cmを測る。口縁部内面に一条の沈線が施されている。全体に磨滅しており、内面の暗文は不明瞭である。焼成は不良で、色調は、内面が淡黒灰色、外面が淡橙黄色を呈している。

(2)瓦　軒瓦、丸瓦、平瓦がある。出土量は平瓦が多数を占める。

軒丸瓦　瓦当文様に細弁及び単弁蓮華文の瓦が見られる。少なくとも３種類が存在するものと思われる。破片が多いこと、外区外縁が磨滅していることから不明な点もあるが、文様構成は外区外縁には線鋸歯文、外区内縁は珠文が施されるものであろう。94は、細弁十五葉蓮華文である。外区に珠文32～36個、中房の蓮子は中央の１個を中心に６個がめぐるものである。土師質で淡褐色を呈している。瓦当面と丸瓦との接合のための補足粘土部分で剝離している。95～98は、単弁八葉蓮華文である。外区に珠文48前後、中房の蓮子は１＋８と思われる。色調は、95・97が淡灰褐色を呈し、96・98は淡明茶褐色を呈している。単弁の形態は、本薬師寺6121Ａ型式のものに類似する。99・100は、須恵質のものである。外区外縁に線鋸歯文・外区内縁に珠文を配する。色調は、青灰色を呈する。

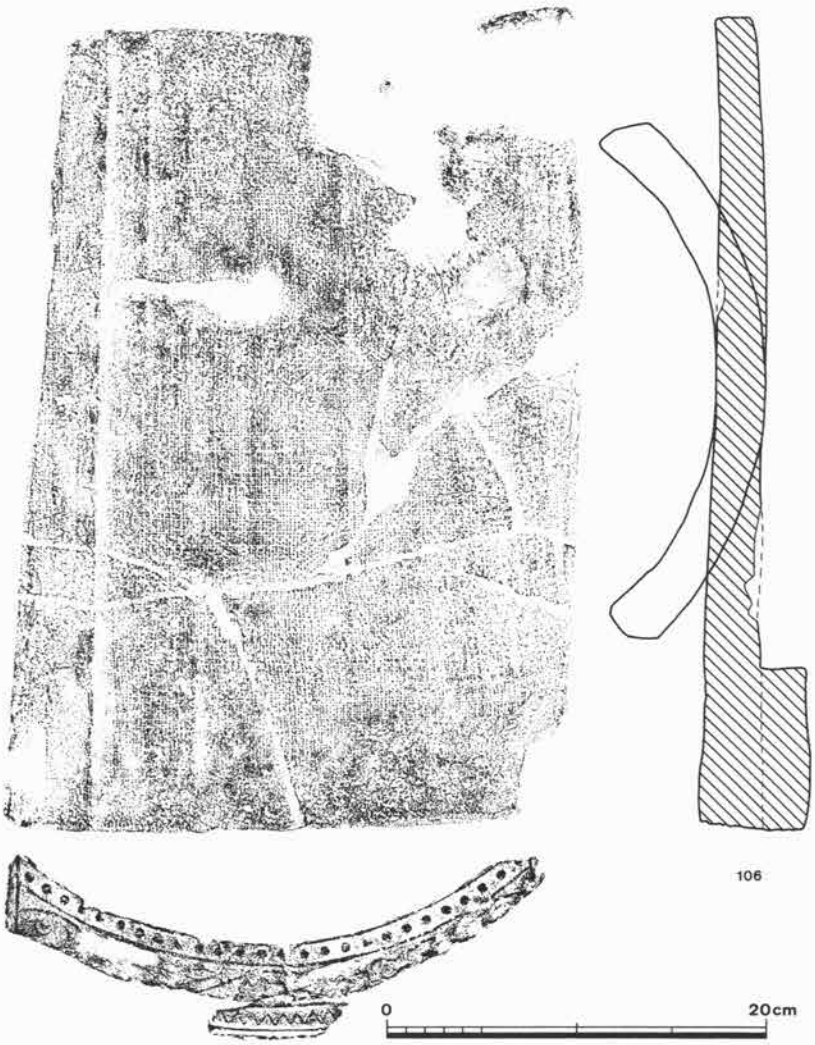
軒平瓦　段顎で製作技法は上下別作りと見られ、出土資料はほとんど顎部と分離している。文様構成は、上外区は珠文、内区は変形忍冬唐草文、下外区は線鋸歯文である。線鋸歯文は、104～106を見る限り、界線には接しない。これらの特徴から類例を見ると、文様パターンは、藤原宮式6647Ｃ型式に近似する。[注8] 101は、変形忍冬唐草文が良好に残存している個体である。唐草文が右から左へ５回反転するタイプと思われる。凹面は、布目痕が残る。凸面の顎接合部分には、側縁に平行した縦方向の比較的細かい縄叩き痕が残存する。色調は、淡灰褐色を呈している。102は、焼成が良好で瓦当文様が鮮明に残存するものである。色調は、黒灰色を呈する。104は、左側縁顎部で、接合部から剝離している。105は、瓦当面下外区の線鋸歯文がわずかに残存する。顎端部が残り、縄叩き後ケズリ調整で仕上げられている。106は、平瓦部分はほぼ完形で、瓦当面の文様構成をほぼうかがうことができる個体である。瓦当文様は、上外区、内区、下外区のみで、脇区には文様を持たない。内区の変形忍冬唐草文は上述の101～103とは瓦当笵が異なり、反転方向も逆であり、左から右へ５回反転するものと思われる。桶巻きづくりで凹面に布目痕を残す。凸面はナデ調整されているが、顎部接合部分には縄叩きが残存しており、叩き後擦り消したものと思われる。平瓦凹部の顎部接合面には工具による刺突が見られる。側縁の面取り整形は左右非対称である。



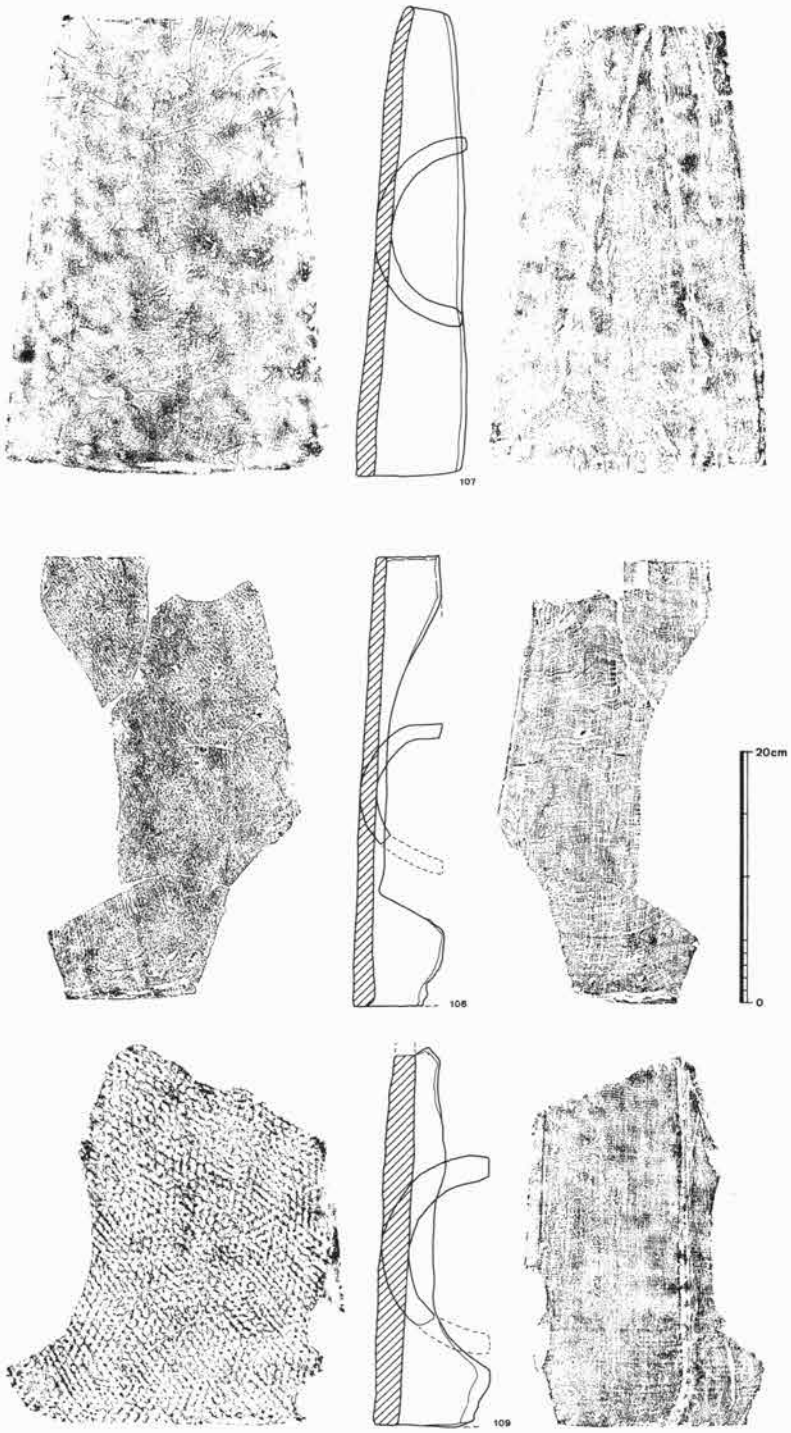
第30図　軒瓦実測図

丸瓦　丸瓦には、行基葺式(107～109)と玉縁式のもの(102・103)がある。大半は前者で、後者は図示した２点を確認したにすぎない。107は、完形品である。桶巻きづくりで凸面は縄叩き後擦り消している。凹面には布目圧痕及び布綴じ痕が残る。側縁端面は面取りがなされている。長さ37.8cm・幅15cmを測る。焼成は甘く、淡明茶褐色を呈する。108は、凸面縄叩きのものである。長さ36cmを測る。焼成は良好で須恵質である。109は、凸面格子叩きのものである。斜格子文様は、平瓦のものより密である。内面には布綴じ痕が残る。112・113は、玉縁式の丸瓦である。いずれも右側縁が残存する。113は、凸面に縄叩き痕がわずかに残る。両個体とも色調は黒灰色を呈している。

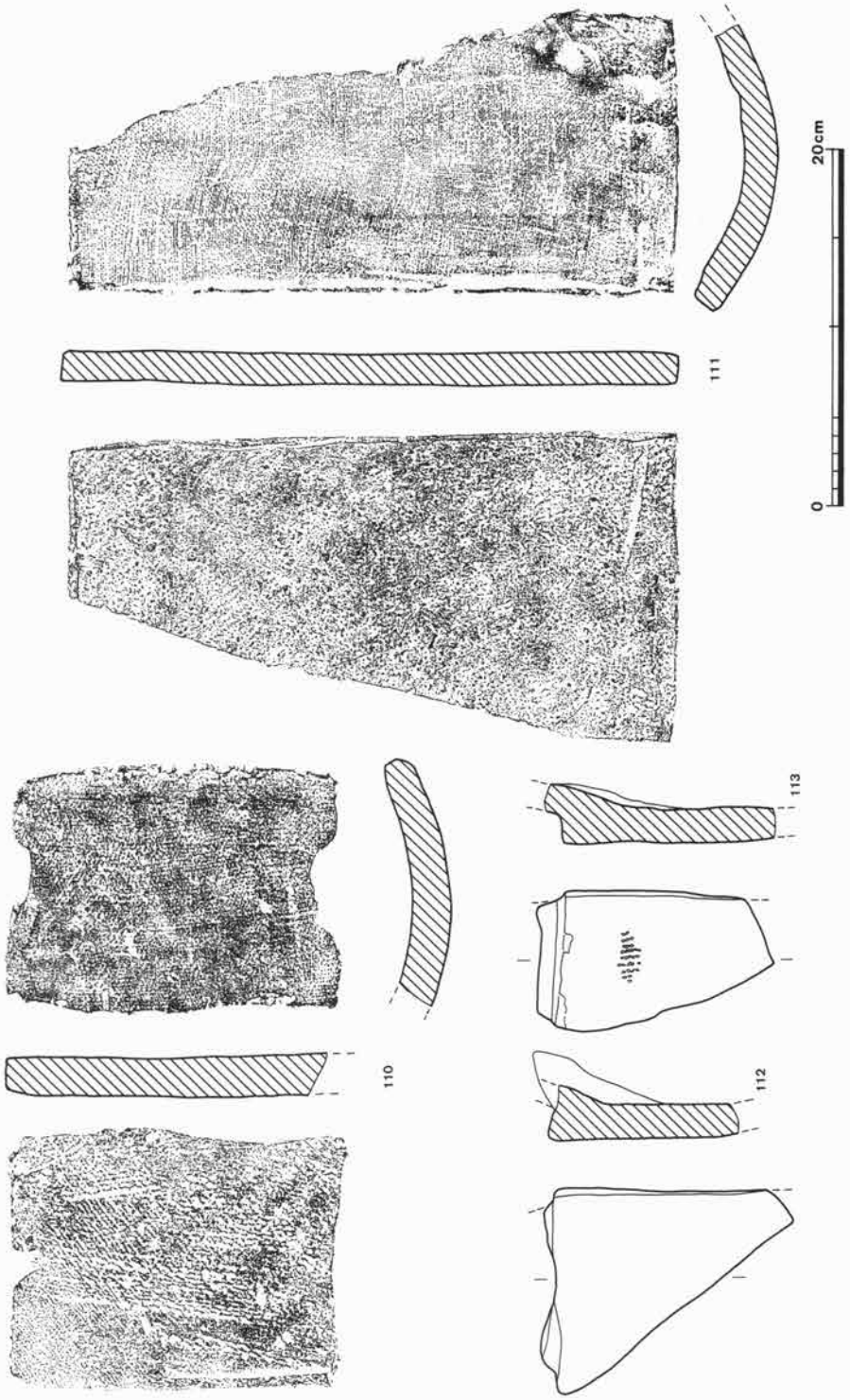
平瓦　平瓦の凹面は、布目痕があり、凸面は格子叩きのもの、縄目叩きのもの、縄叩き



第31図　ＳＤ402出土瓦実測図

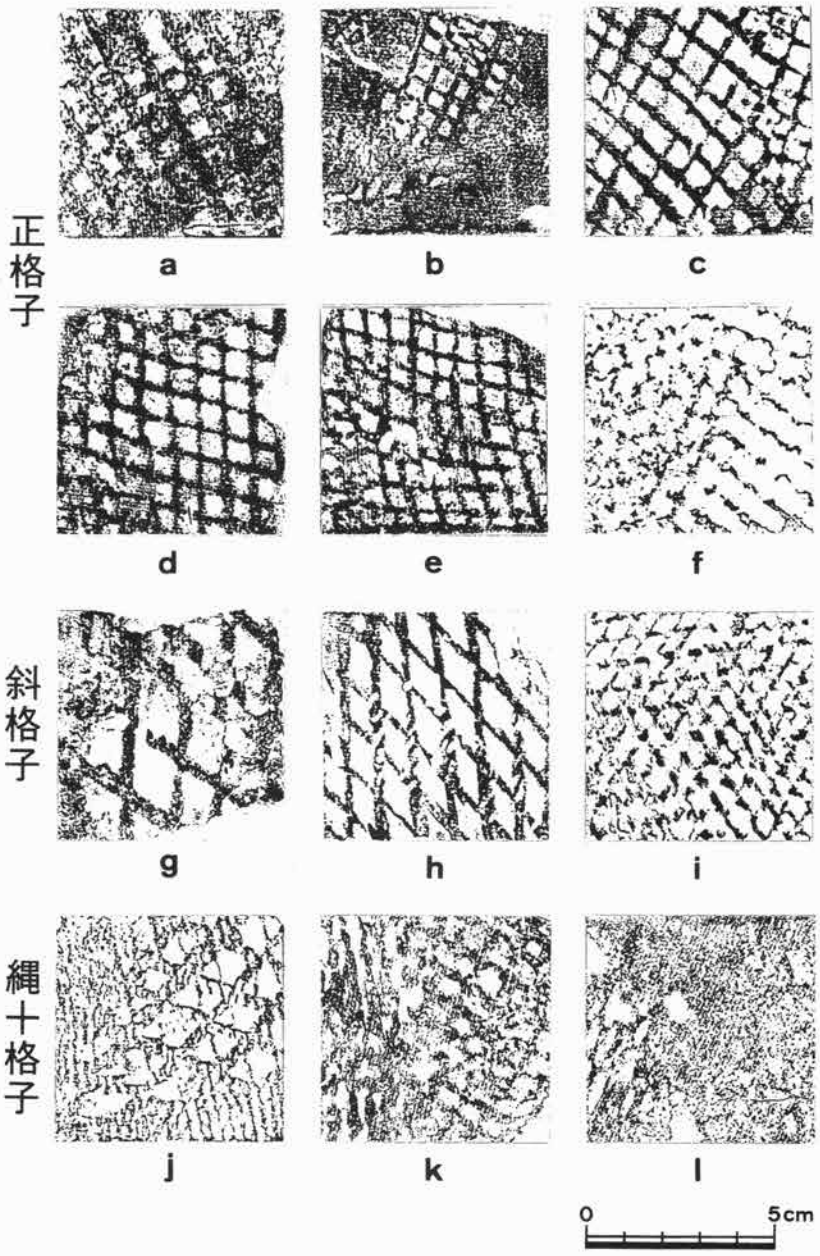


第32図　丸瓦実測図



第33図　瓦実測図

の後、縄目を擦り消すもの、数は少ないが格子・縄叩き併用のものなどが見られる(第34図)。110は、残存長11cm・幅5cm・厚さ2.2cmを測る。凹面は、布目痕を残すが、最終調整段階で擦り消されている部分も見られる。凸面は縄叩きである。叩き板への縄の巻き付け原体幅は約3.5cm、長さは約6.8cmを測る。焼成は良好である。112は、長さ34.8cm・残



第34図　瓦凸面の分類

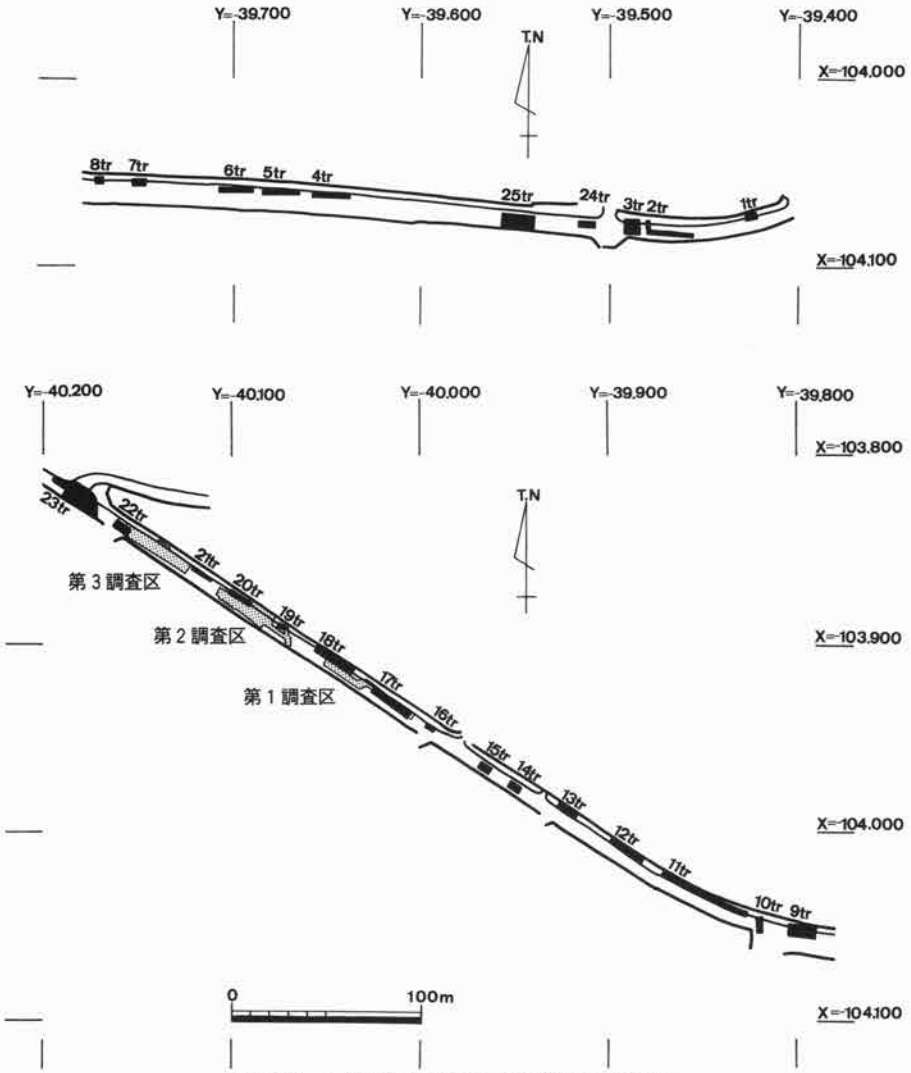
存最大幅約16cm・厚さ約1.9cmを測る。焼成は良好で、須恵質であり、色調は灰褐色を呈している。今回出土した平瓦の凸面の文様には上記のように３種類が見られる。格子叩きには正格子、斜格子が見られる。正格子は概観する限り、ａ～ｆの６種類が存在する。また、斜格子はｇ～ｉの３種類が見られる。中でもｈの斜格子は、亀岡市の観音芝廃寺で類例が出土しており、同笵ではないが、工人の交流がうかがえる資料である。また、今回資料の大半を占める縄叩きは、側縁に対して平行に施されるものと、やや斜めに施されるものが見られる。叩き板への縄原体の巻き付け方は、ＲＬの縄原体を整然と同方向に巻いたものと、ＲＬとＬＲの縄原体を２本１組として巻き付け、いわゆる綾杉状の文様効果を持たせたもの（前回調査概要第30図５）の２種類が見られる。大半は前者である。双方とも縄の繊維は太く、堅いものが使用されている。後者の綾杉状文様構成をとるものは、特異な例と思われ、今後瓦窯特定の鍵となろう。以上のように文様をみると、少なくとも格子・縄の２工人は見られ、縄・格子の併用型は縄に格子を重ねており（ｊ）、一部で工人間の交流があったことがうかがえる。

線刻瓦（第29図）　凸面に稚拙な人面様の線刻を施したものである。線刻は、須恵質の丸瓦凸面に描かれ、目、鼻、口の表現が見られる。この線刻の左側には文字のようなものも刻まれている。

６．　小　結

遺構の性格と範囲の想定　今回の調査は、道路改良工事という性格上、幅が10ｍと限定されていたこともあり、全貌を把握するには到らなかった。しかし、その中で東側及び西側の区画溝を検出したことにより、施設の及ぶ範囲をつかむことができた。これに遺構と真北との振れ、周辺地形などを加味して若干の考察を試みたい。今回検出した溝跡ＳＤ201、ＳＤ402は、施設を区画するそれぞれ東限、西限の溝である。規模的には溝跡ＳＤ201の東側のＳＤ203の方が西限に対する溝として適当かもしれない。ただし、溝跡ＳＤ201は、西側の築地状遺構ＳＡ204とセットになる可能性もあり、東限の溝と考える。第２調査区は、施設の中心部分と思われる。礎石建物跡ＳＢ302は、礎石建物跡で遺構の痕跡としては兆候は薄いが、３間×３間あるいはそれ以上で、８尺等間の建物跡と考えたい。そうすると、この建物跡は塔跡の可能性も考えられるが、心礎は検出していない。また、西側に面を持つ南北方向の石列ＳＸ304も性格は今のところ不明であるが、回廊または建物の基壇が可能性として考えられる。次に、範囲の想定であるが、遺構は建物跡が真北に対して西偏約１°、東辺の溝跡ＳＤ201が西偏約10°、西辺の溝跡ＳＤ402が西偏約15°である。大半の遺構が真北に対して、西側に最大15°の振れを持つ。また、東辺と西辺の溝跡

心々の距離は約109mで1町となる。(注9) この事実をもとに周辺地形を勘案して、寺域を想定したのが、第13図の太枠である。まず北辺は、現在の府道亀岡園部線(府道25号線)を充てる。この府道を越えてさらに北側には、古墳時代中期後半に比定される坊主塚古墳があること、古墳の墳裾に規制を受けたように、周辺の水田畦畔の方向が南東に振れ、水田の長軸方向も南北から東西へと変化していることなどから、北辺は府道を越えないと考えたい。南辺は、1町四方の区画から図の位置に来る。この南辺想定付近には幅の狭い水田が見られ、一つの根拠となろう。寺域全体を巨視的に見ても、現地形で北、東、南に残る幅の狭い水田、西側は農道が見られることから、ほぼ間違いないと思われる。しかし、今回の調査では直接寺の存在を裏付ける遺物は出土していない。



第35図　平成3年度及び5年度調査地関係図

時期について　瓦が白鳳から奈良時代初頭（７世紀後半～８世紀初頭）に時期設定できるのに対し、出土した須恵器は８世紀中頃～後半で数十年の開きがある。ただし、前回の調査で、今回調査地の東限から約200ｍの場所で検出した遺構から、須恵器の長頸瓶が出土している。これは、今回出土した瓦とほぼ時期が一致することから、今後寺域想定範囲内でも同時期の土器資料が出土する可能性はある。

瓦から見た亀岡盆地の古代寺院について　－池尻遺跡出土瓦の検討を中心にして－

亀岡盆地で現在確認されている古代寺院は、大堰川右岸に立地する、桑寺廃寺、与野廃寺、観音芝廃寺、左岸の丹波国分寺、御上人林廃寺、そして今回の調査地である池尻遺跡の計６か所が確認されている（第36図）。このなかで調査がなされ、概要の判明しているのは、与野廃寺を除く５か所である。瓦については全か所で出土し、また与野廃寺については表採資料がある[注10]。これらの資料を概観してみると、いずれも７世紀後半～８世紀初頭の時期が与えられるが、桑寺廃寺は軒丸瓦の瓦当文様に周縁の文様帯を持たないなど、飛鳥時代的要素が見られることからやや先行すると考えられている[注11]。観音芝廃寺の創建期軒丸瓦は、京都市の樫原廃寺出土のものと類似するようである[注12]。その他の遺跡については、藤原宮式の範疇で捉えられるが、各寺間で同笵瓦の出土はない。また、与野廃寺の表採資料は軒丸瓦、軒平瓦とも藤原宮式のものであるが、軒平瓦の瓦当文様は偏行唐草文であり、軒丸瓦が平城宮6276型式、軒平瓦が平城宮6641型式に類似する。軒平瓦は、特に紀伊の本薬師寺系瓦のなかでも古佐田廃寺のものに類似している[注13]。一方、池尻遺跡出土の軒瓦を見ると、単弁八葉蓮華文は本薬師寺6121Ａのものに類似する。しかし、単弁及び中房部分を残すものはいずれも焼成が甘く、外区外縁に線鋸歯文を施すかは不明であるが、99・100のように、

第36図　古代寺院位置図（1/100,000）
1.池尻遺跡（調査地）　2.桑寺廃寺　3.丹波国分寺
4.御上人林廃寺　5.観音芝廃寺　6.与能廃寺

須恵質のものには、周縁に明らかに線鋸歯文が認められる。ただし、詳細は、界線が一重であること、間弁のかたちが異なることから、同笵ではないが、本薬師寺6121系の類例の可能性もある。一方、軒平瓦は、藤原宮6647C型式と類似している。京都府内での類例は、綾部市綾中廃寺、京都市北白川廃寺、同大宅廃寺などで出土しているが、いずれも簡略化されており、池尻遺跡出土資料より新しく位置付けられる。こうしたことから、近畿周縁にあたる当遺跡は、畿内中心部との密接な関係がうかがえる。それは、瓦工を通じての、藤原宮の瓦工人の移動、または地元工人の宮造営のための派遣による技術習得などが考えられる。次に、軒丸・軒平瓦のセット関係を見る。池尻遺跡では細弁の蓮華文と単弁のものの２種類が出土している。細弁十五葉蓮華文軒丸瓦は、今回１点のみの出土であるが、これとセットとなる軒平瓦は、前回の調査で出土した四重弧文瓦を当てはめたい。この軒平瓦は、凸面に約2.0cm×1.6cmの大振な斜格子文が施されている。この叩きは、一般に正格子叩きに後続する要素ではあるが、出土数も少ないことから、池尻廃寺Ⅰ期のセット関係としたい。また、単弁八葉蓮華文のものは、本薬師寺6121A型式に類似する。これは、藤原宮式でもやや退化的な文様要素を持つ。これとセットとなる軒平瓦は、藤原宮の6647C型式に類似した忍冬唐草文のものと思われる。この軒瓦のセット関係は、個体数もある程度まとまっており、池尻廃寺Ⅱ期と設定する。ここでいう池尻廃寺Ⅰ期は、堂宇の造営開始時期とし、Ⅱ期は池尻廃寺の諸堂宇が整備された時期と捉える。亀岡盆地に所在していた寺院の瓦が異なることは、それぞれ寺の営まれた近辺に瓦窯を持ち、工人を抱えていたことによるものであろう。このなかで桑寺廃寺の平瓦についてみると、凸面の文様に格子文様が施されており、藤原宮期の軒瓦の導入以前に丹波地域に格子文が認められることから、この文様は在地色が強いものといえる。この格子叩きから縄叩きの導入における変遷過程は、瓦と須恵器の瓦陶兼業で操業を行っていた、京都府京北町の周山瓦窯の調査報告で明確にされており、この窯跡の須恵器を藤原宮や平城宮の官営の土器資料と比較することで時期も明確にされている。このなかで寺院の創建時期をみると、桑寺廃寺－観音芝廃寺・与野廃寺・池尻廃寺－丹波国分寺・御上人林廃寺の図式が考えられる。細かい時期については、今後詰めた検討が必要であるが、今回の池尻遺跡の調査で大堰川左岸においても藤原宮式、本薬師寺式の瓦が出土する寺院が存在していたことを示す資料が得られた意義は大きいといえる。

前回調査の土坑ＳＸ01との関連について　前回調査第３区、第９トレンチで検出した土坑ＳＸ01は、今回の第１調査区から南東に約200ｍの位置に存在する（第35図）。この土坑は、漆工房の存在をうかがわせる漆の搬入容器としての須恵器長頸瓶や貯蔵器である甕などが出土した。しかし、今回の調査ではパレットとして転用された杯以外は、第３調査

区溝跡ＳＤ402出土の壺底部片(76)のみで、長頸瓶は１点も出土していない。また、時期についても、ＳＸ01の出土須恵器が８世紀初頭の時期に該当するのに対し、今回の遺物は８世紀中頃～後半のものでまとまっており、８世紀初頭までさかのぼる土器は見られない。これは、今回の遺構が溝で囲まれた一連の遺構群であり、前回の遺構とは時期と性格を異にすることが考えられる。今回確認した遺構が寺院などの中心建物とすると、時期差は見られるが漆工房の存在、また、今回出土した瓦のなかに焼け歪んだもの、あるいは溶着した個体が見られた。これらは窯内での粗悪品であり、消費地では不必要なもので、これらの製品の遠方からの輸送は考えられず、遺跡近辺における窯跡の存在が考えられる[注14]。以上のことから、池尻遺跡で生産と消費の関係の一端が明らかになりつつある。中心施設と工房との関連については今後隣接地での調査を待って再検討してみたい。

末尾になったが、調査にあたっては以下の方々の協力を得ました。記して感謝の意を表する。高橋美久二・森下　衛・樋口隆久・中澤　勝・山中　章・清水みき・伊野近富・三好博喜(敬称略・順不同)

（柴　暁彦）

付表１　遺物観察表

番号	種類	器形	口径	法量（cm）		胎土	焼成	色調	備考
				器高	底径				
1	須恵器	壺			12.50	密	堅緻	淡灰青色	転用硯
2	土師器	椀C	12.5	3.20		密	良	(内)明灰黄白色	
								(外)明赤白色	
3	土師器	椀C	14.8	4.00		密	良	淡黄赤褐色	
4	土師器	椀C	13.2	3.50		密	良	(内)淡白赤褐色	
5	土師器	椀C	12.6	3.50		良	良	淡茶褐色	
6	須恵器	杯A	13.6	3.10		密	軟	淡黄白色	土師質須恵
7	土師器	椀C	12.6	2.80		密	良	明赤黄褐色	内外面煤付着
8	須恵器	蓋	16.6			密	堅緻	淡青灰色	
9	須恵器	蓋B	22.8			密	堅緻	青灰色	自然釉、転用硯 ゆがみ有り
10	須恵器	杯A	13.0	3.80		密	やや軟	灰黄色	
11	須恵器	杯A	12.2	3.30		密	堅緻	淡灰青色	
12	須恵器	杯A	12.4	3.40		密	堅緻	青灰色	
13	須恵器	杯A	12.6	3.70	8.70	密	堅緻	淡青灰色	完形
14	須恵器	杯A	12.2	2.90		密	堅緻	淡青灰色	
15	須恵器	杯A	14.6	4.00		密	軟	淡黄白色	
16	須恵器	杯A	13.2	3.70		密	やや堅緻	淡灰青白色	
17	須恵器	杯A	12.6			密	堅緻	灰青紫色	
18	須恵器	杯A	14.0	(3.5)		密	堅緻	灰青褐色	
19	須恵器	杯A	13.0	3.60		密	堅緻	淡青灰色	
20	須恵器	杯A	13.2	(4.6)		密	堅緻	淡白青灰色	
21	須恵器	杯A	14.5	(3.7)		密	やや軟	淡黄灰色	
22	須恵器	杯A	13.8	3.10		密	やや軟	淡黄灰色	内面漆付着
23	須恵器	杯A	13.8	3.25		密	堅緻	淡白青灰色	内面漆付着
24	須恵器	杯A	12.4	3.15		やや粗	軟	淡黄白色	内面漆付着

25	須恵器	杯A	10.6	3.50		密	堅緻	淡青灰色	内面漆付着
26	須恵器	杯A	12.4	3.65		密	堅緻	淡白青灰色	内面漆付着
27	須恵器	杯A	14.2			密	堅緻	淡白青灰色	内面漆付着
28	須恵器	杯A	14.0			密	堅緻	淡白青灰色	内面漆付着
29	須恵器	杯B	10.4	4.90	6.30	密	堅緻	淡青灰色	内面漆付着(完形)
30	須恵器	杯B	12.3	4.20	9.30			(内)淡青灰色 (外)黒灰色	自然釉付着
31	須恵器	杯B	12.8	4.30	7.20	密	軟	淡黄白色	
32	須恵器	杯B	14.6	5.10	7.90	密	堅緻	青灰色	内面漆付着
33	須恵器	杯B	14.6	3.30	10.00	密	堅緻	淡青灰色	
34	須恵器	皿C	14.0	1.70		密	堅緻	青灰色	朱付着
35	須恵器	皿C	17.8	2.50		密	堅緻	淡青灰褐色	
36	須恵器	皿C	19.4	2.10		やや密	やや軟	(側)淡青灰白色 (底)淡黄赤茶褐色	
37	須恵器	杯B	19.4	6.45	11.90	密	堅緻	淡青灰色	墨書・ヘラキズ有り
38	須恵器	蓋B	14.0	2.35		密	堅緻	淡青灰色	
						細砂含			
39	須恵器	蓋B	14.8	3.00		細砂含	堅緻	淡青灰色	
40	須恵器	蓋B	15.7	2.55		細砂含 1～2㎜ 砂粒含	堅緻	淡白青灰色	ゆがみ有り
41	須恵器	蓋B	18.1	2.25		砂粒含	堅緻	淡青紫灰色	
42	須恵器	壺	5.4			密	堅緻	淡青灰色	自然釉付着
43	須恵器	蓋	14.6			密	堅緻	淡灰青色	
44	須恵器	蓋	14.2			密	堅緻	青灰色	
45	須恵器	蓋	15.8			密	堅緻	淡白青灰色	自然釉付着
46	須恵器	蓋	20.0			密	堅緻	淡青灰色	
47	須恵器	蓋	21.6			密	堅緻	青灰色	
48	須恵器	甕E	27.1			密	堅緻	淡白黄灰色	
49	須恵器	壺			15.00	密	堅緻	青灰色	
50	土師器	皿A	21.9	2.90		良 小石含	軟	茶褐色	内面煤付着
51	土師器	椀	16.0	4.20	9.00	良	やや軟	灰茶色	
52	土師器	椀	12.6	3.40		良	良	茶褐色	内外面漆付着
53	土師器	椀	12.4			密	良	淡黄赤白色	内面煤付着
54	土師器	甕B 把手				良	良	黄灰色	
55	土師器	把手				良	良	淡橙灰色	
56	土師器	把手				良	良	淡橙灰色	
57	須恵器	蓋B	16.3	2.80		密	堅緻	淡白青灰色	
58	須恵器	蓋B	18.5	3.00		粗	軟	灰白色	
59	須恵器	蓋B	17.8	2.20		密	堅緻	淡青灰色	つまみ部漆付着
60	須恵器	蓋B	15.6			密	堅緻	青灰色	自然釉付着・転用硯
61	須恵器	壺	8.4			密	堅緻	暗青灰色	
62	須恵器	杯B	12.2	4.10	8.60	密	堅緻	青灰色	自然釉付着
63	須恵器	杯B	16.7	5.30	12.30	密	堅緻	(内)淡青灰色 (外)灰青色	内面漆付着
64	須恵器	蓋	16.2			密	堅緻	淡白青灰色	
65	須恵器	蓋	18.6			密	堅緻	青灰色	
66	須恵器	杯B			8.00	密	堅緻	淡青灰色	
67	土師器	椀C	14.3	3.45		良	やや軟	淡橙灰色	

68	土師器	皿	17.0	2.10		良	良	(内)淡橙灰色 (外)淡黒灰色	
69	土師器	甕	21.2			良	良	淡茶褐色	
70	須恵器	皿A	21.4	2.80		密	やや軟	灰白色	
71	須恵器	杯B	15.2	4.00	9.20	密	堅緻	青灰色	
72	須恵器	杯B			9.20	密	やや軟	淡青灰色	
73	須恵器	杯B			11.00	密	堅緻	青灰色	
74	須恵器	杯B			10.20	密	堅緻	青灰色	
75	須恵器	蓋B	17.2			密	やや軟	淡青灰色	
76	須恵器	壺				密	堅緻	淡青灰色	内面漆付着
77	須恵器	壺				密	堅緻	青灰色	外面ヘラケズリ
78	須恵器	鍋A	30.2			密	軟	淡黄灰色	
79	須恵器	杯			9.40	密	堅緻	暗青灰色	内面一面朱付着
80	須恵器	椀			5.60	密	堅緻	淡灰黄色	外面に赤色顔料？付着
81	須恵器	杯	(長)	(幅)	9.60	密	堅緻	青灰色	
82	土錘		4.5	1.50		やや粗	やや軟	明橙黄色	
83	須恵器				9.60	密	密	淡青灰色	
84	須恵器				11.50	密	密	淡青灰色	
85	須恵器	蓋	15.4			密	密	淡灰白色	
86	陶器	壺			10.20	密	密	白灰色 (釉)淡緑色	灰釉陶器
87	須恵器	蓋	14.4			密	密	青灰色	
88	須恵器	椀			7.10	密	密	淡青灰色	無釉陶器
89	白磁	椀	15.2			密	密	白灰色 (釉)淡白緑色	
90	白磁	椀			6.20	密	密	(釉)淡白緑色	
91	白磁	椀			5.60			(釉)淡白緑色	
92	黒色土器	椀	15.7			密	良	(内)淡黒灰色 (外)淡橙黄色	
93	土師器	椀	14.6			良	良	淡茶褐色	
94	軒丸瓦					粗	やや軟	淡白茶褐色	土師質
95	軒丸瓦					粗	やや軟	淡灰褐色	
96	軒丸瓦					粗	やや軟	淡明茶褐色	土師質
97	軒丸瓦					粗	やや軟	淡灰褐色	
98	軒丸瓦					粗	やや軟	淡明茶褐色	土師質
99	軒丸瓦					粗	堅緻	青灰色	須恵質
100	軒丸瓦					密	堅緻	淡青灰色	
101	軒平瓦					粗	やや軟	淡灰褐色	土師質
102	軒平瓦					粗	やや軟	淡青灰色	
103	軒平瓦					粗	やや軟	淡灰色	
104	軒平瓦					粗	やや軟	青灰色	
105	軒平瓦					粗	やや軟	青灰色	
106	軒平瓦		43.4	27.20	2.60	粗	やや軟	淡黄茶褐色	土師質
107	丸瓦		38.0	15.10	1.30	粗	やや軟	淡明茶褐色	土師質、行基葺式
108	丸瓦		36.6		1.40	密	堅緻	淡青灰色	須恵質、行基葺式
109	丸瓦				3.25	密	堅緻	淡青灰色	須恵質、行基葺式
110	平瓦				2.20	やや粗	堅緻	淡灰色	須恵質
111	平瓦		34.8		1.90				
112	丸瓦					粗	やや軟	淡灰褐色	玉縁式
113	丸瓦					粗	やや軟	淡青灰色	玉縁式
114	丸瓦					密	堅緻	淡青灰色	須恵質、線刻有り

注１　田代　弘「池尻遺跡」（『京都府遺跡調査概報』　第47冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

注２　調査参加者(敬称略)　明田安男・上西ミサヲ・大槻益子・岡本美和子・可児直典・黒田美代子・齋藤澄代・佐々木　直・関口睦美・高田真由美・竹上てる・竹上美代子・土井正文・牧野當子・松下道子・松本末野・松本芳雄・村上典子・横山成巳・湯浅髟朗

注３　須恵器・土師器の分類は次の文献による。町田　章「平城京発掘調査報告ＸＩ」（『奈良国立文化財研究所30周年記念学報(学報第40冊)』　奈良国立文化財研究所）　1982、平尾政幸ほか「古代の土器１　都城の土器集成」　古代の土器研究会　1992

注４　「大火」の可能性もある。火とは10人一組の軍団、あるいは負役の集団の最小単位を示す。向日市教育委員会清水みき氏のご教示による。

注５　当センター引原茂治氏の教示による。

注６　当センター伊野近富氏の教示による。伊野近富「大内城跡」（『京都府遺跡調査報告書』第３冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1984、藤原敏晃「奥谷西遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第10冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1988

注７　宮内庁正倉院事務所　保存課調査室 主任研究官 成瀬正和氏の分析による。

注８　京都府教育委員会技師　森下　衛氏のご教示による。

注９　歴史地理学の方面から亀岡盆地の条里型地割に関する論文で特に当遺跡の所在する大堰川左岸地区の条里は方形ではなく、菱形であると指摘されている。これによって考慮すると、北辺及び南辺は今回の調査では、調査範囲外であり、不明な点もあるが、寺域想定範囲内で確認した東西方向の溝跡ＳＤ301はほぼ座標軸に平行となる。これをもとに寺域北辺及び南辺に反映させると菱形となるが、いずれも寺域全体からすると、どの溝跡もごく一部を確認したにすぎない。以上の問題は亀岡盆地の大堰川左岸における、条里型地割の設定時期にも関わることであり、この点については慎重に対応したい。

注10　森下　衛「資料紹介・亀岡市与野廃寺の古瓦」（『京都府埋蔵文化財情報』第13号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1984

注11　水谷壽克ほか「１．千代川遺跡第６・７次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第14冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985

注12　a.樋口隆久ほか「観音芝廃寺発掘調査報告」（『亀岡市文化財調査報告書』第20集　亀岡市教育委員会）　1988

b.林屋辰三郎「史料　京都の歴史　2　考古」(京都市　平凡社) 1983

注13　坪之内　徹「畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦　―讃岐・近江を中心にして―」（『考古学雑誌』68-1）　1982

注14　以前、池尻地区の丘陵稜部から須恵質格子叩きの施された平瓦片が採取されている。現在、その資料の所在は不明である。亀岡市教育委員会樋口隆久氏のご教示による。

参考文献

木下正史「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ｉ　小墾田宮推定地・藤原宮の調査」（『奈良国立文化財研究所学報』第27冊　奈良国立文化財研究所）　1976

坪之内　徹「畿内周辺地域の藤原宮式軒瓦―讃岐・近江を中心にして―」『考古学雑誌』68-1　1982

宇野隆夫ほか「周山瓦窯発掘調査報告書」　京北町教育委員会　1982

森下　衛「資料紹介・亀岡市与野廃寺の古瓦」（『京都府埋蔵文化財情報』第13号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1984

樋口隆久他「史跡丹波国分寺跡発掘調査報告」（『亀岡市文化財調査報告書』第16集　亀岡市教育委員会）　1987

樋口隆久他「観音芝廃寺発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第20集 亀岡市教育委員会) 1988

中島 正「史跡高麗寺跡」（『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第７集 山城町教育委員会）1989

林屋辰三郎「史料　京都の歴史　2　考古」　京都市　平凡社　1983

中村孝行他「綾中廃寺」（『京都府綾部市文化財発掘調査報告』第８集　綾部市教育委員会）　1981

3．植物園北遺跡第13次発掘調査概要

SHOKU BUTSU EN KITA

1．はじめに

植物園北遺跡は、賀茂川左岸の扇状地上に広がる弥生時代から古墳時代にかけての北山城地域の一大集落遺跡である。遺跡の範囲は、京都府立植物園の北側を中心に東西約2,000m・南北約1,000mに及ぶと考えられている。この遺跡は、昭和54年度から3年間にわたる公共下水道工事に伴う立会調査で、その存在が知られるようになった。その後の調査は、現在まで12回行われ、縄文時代晩期から室町時代に至る遺構・遺物が検出された。今回の第13次調査地は、京都市左京区下鴨北芝町12に所在する。また、そこは、遺跡の東部に位置し、第7次調査地や第8次調査地の中間にあたる。この調査は、京都府の公舎整備工事に先立ち、京都府出納局の依頼により実施した。

発掘調査は、平成5年7月1日から同年10月5日の間に実施し、同年9月22日に現地説明会を行い、50余名の参加者を得た。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員岸岡貴英が担当した。本概要の執筆は、歴史的環境を長友朋子が、考察の②を杉本厚典が担当し、その他を岸岡貴英が行った。

また、図面上の北は、すべて座標北である。

発掘調査を進めるにあたり、京都府出納局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所をはじめ、関係諸機関の方々から多くのご協力を得た。調査期間中には、永田信一氏・久世康博氏・高橋　潔氏(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)、國下多美樹氏・中塚　良氏(財団法人向日市埋蔵文化財センター)、菱田哲郎氏(京都府立大学)から多くのご教示をいただいた。また、京都大学大学院生の杉本厚典氏をはじめとする多数の方々に精力的に調査に参加していただいた。記して感謝する(注1)。また、空中写真撮影は(株)スカイサーベイに、基準点測量は財団法人京都市埋蔵文化財研究所にそれぞれ依託した。

なお、本調査にかかわる経費は、全額、京都府が負担した。

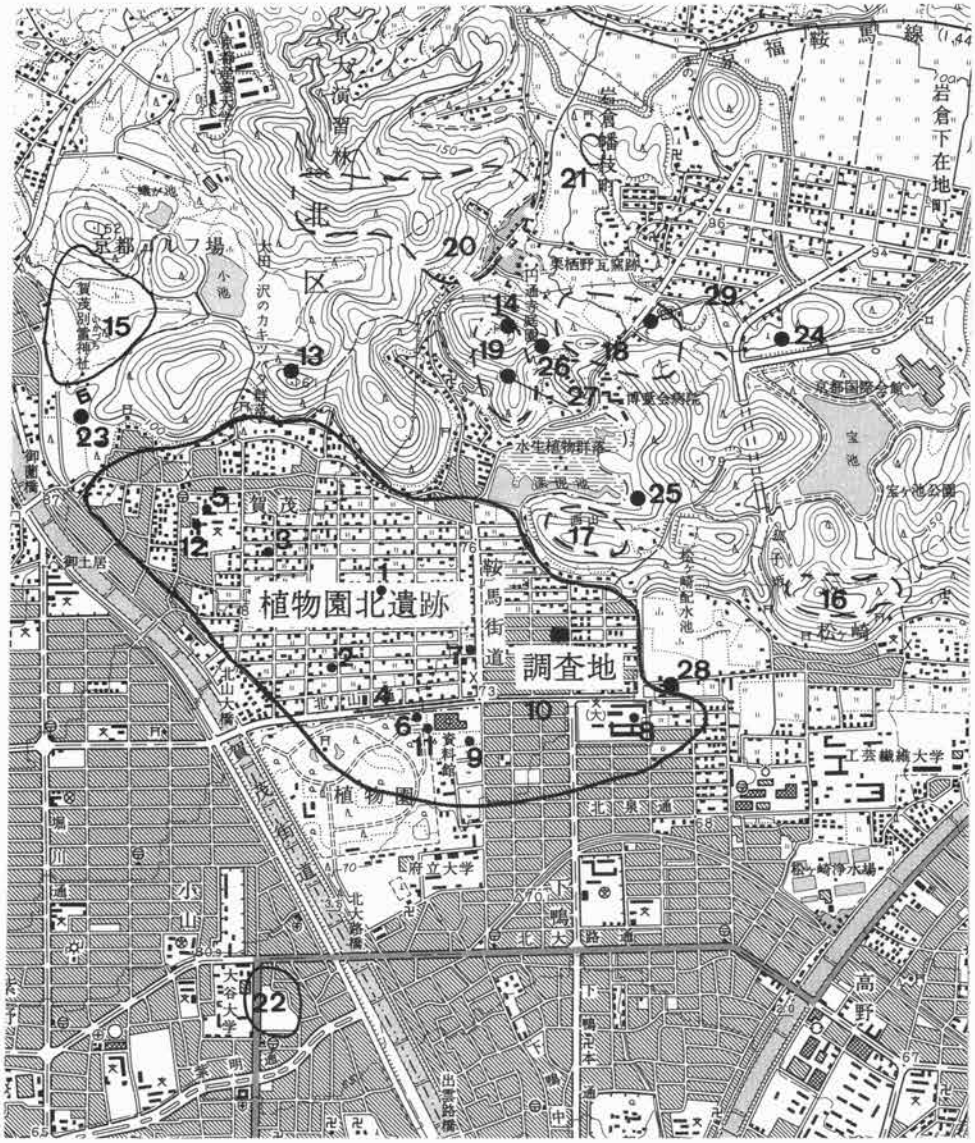
(岸岡貴英)

2．植物園北遺跡周辺の歴史的環境

植物園北遺跡の周辺には、旧石器時代以降、平安時代に至るまで多くの遺跡がみられる。以下、時代順に遺跡を紹介していく(注2)(第37図)。

旧石器時代の遺跡には、上賀茂本山遺跡とケシ山遺跡がある。両者とも植物園北遺跡の北の丘陵上に位置し、前者から木葉形尖頭器が、後者からナイフ形石器が確認された。

縄文時代の遺跡には、植物園北遺跡の西側に位置する一乗寺向畑遺跡や修学院遺跡があ



第37図　植物園北遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 第1次調査地　2. 第2次調査地　3. 第3次調査地　4. 第4次調査地　5. 第5次調査地
6. 第6次調査地　7. 第7次調査地　8. 第8次調査地　9. 第9次調査地　10. 第10次調査地
11. 第11次調査地　12. 第12次調査地　13. 上賀茂本山遺跡　14. ケシ山遺跡　15. 上賀茂遺跡
16. 林山古墳群　17. 西山古墳群　18. 幡枝古墳群　19. ケシ山古墳群　20. 本山古墳群
21. 八幡古墳群　22. 上総町遺跡　23. 上賀茂神社　24. 木野墓窯　25. 深泥池東岸窯
26. ケシ山窯　27. 深泥池窯　28. 芝本窯　29. 南ノ庄田窯

る。これらの遺跡は、比叡山の西南麓にあたり、近畿地方で縄文時代の遺跡がもっとも密集して見つかっている地域の一つである。また、植物園北遺跡の北西部には上賀茂遺跡があり、縄文時代早期・中期～後期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、植物園北遺跡を除いて希薄である。

古墳時代になると、植物園北遺跡と岩倉盆地に挟まれた東西に広がる丘陵に多くの古墳が築かれる。東から林山古墳群、西山古墳群、幡枝古墳群、ケシ山古墳群、本山古墳群、八幡古墳群があげられる。林山古墳群は、東西の尾根上に4基の古墳が確認されている。西山古墳群は、古墳時代後期の古墳7基からなる。墳形が長方形や張り出し部をもつものが確認されている。幡枝古墳群が同じく後期の古墳で17基あり、6基の古墳の測量図が公表されている。1988年から2号墳の調査が行われ、市内では類例の少ない木棺直葬墳であることが確認された(注3)。出土した須恵器の年代から5世紀後半と考えられており、1号墳とともに、他の古墳群よりも古い様相を示すことがわかった。

ケシ山古墳群は、5基の古墳からなり、その内の1基はケシ山頂部にあり、単独墳であることが確認されている。直径22m・高さ2.5mの円墳である。本山古墳群は、42基からなる大規模な古墳群である。その内、内容が明らかなのは本山1号墳である。平面形態が「T」字形を呈する両袖式の横穴式石室である。八幡古墳群は、3基からなる古墳時代後期の古墳群である。その内2基は、横穴式石室を内部主体とする。

飛鳥～奈良時代の古代集落としては、上総町遺跡がある。また、植物園北遺跡の西北部には、7世紀後半までさかのぼると伝えられる上賀茂神社がある。しかし、飛鳥時代以降、植物園北遺跡周辺は、瓦窯などの生産遺跡が多く見られるようになる。

飛鳥時代には、多くの瓦窯や須恵器窯、炭窯などが造られるようになる。賀茂川左岸の丘陵には木野窯(瓦窯)、深泥池東岸窯(須恵器窯)、ケシ山窯(炭窯)、深泥池窯(瓦窯)などが営まれた。一方、右岸の丘陵腹や丘陵端にも舟山窯(須恵器窯)や蟹ヶ坂窯(瓦窯)、大深町窯(須恵器窯)が存在した。そのうち、木野窯1号窯と深泥池窯で生産された瓦は、北白川廃寺に、蟹ヶ坂窯の瓦は出雲寺に供給されたといわれている。

奈良時代になると、この地域での窯跡はいったん見られなくなる。しかし、都が京都に移されると再び窯業生産が盛んになる。

平安時代には、賀茂川上流域に瓦窯が多数造られ、平安京に対する瓦の供給地として重要な役割を果たすようになる。平安時代前期には、角社窯、鎮守庵窯、醍醐ノ森窯、上ノ庄田窯、柴本窯などが営まれる。中期には川上窯、後期には南ノ庄田窯、大宮北山ノ前窯が造られる。なお、芝本1・2号窯では、西寺と広隆寺の同笵の軒瓦が見つかっている。

(長友朋子)

第38図　植物園北遺跡の地形図
※●は、試掘調査で確認された遺構(弥生時代後期～古墳時代後期)

3.　植物園北遺跡のこれまでの調査

植物園北遺跡は、昭和54年から昭和57年にかけて、公共工事に伴う立会調査で多くの遺構(竪穴式住居跡・土坑・溝)が見つかり、その結果、賀茂川左岸の全面に広がる弥生時代後期～古墳時代後期の大集落であることが判明した(注4)(第38図)。その後、現在まで計12回の本調査が行われ、徐々にこの遺跡の内容が明らかになりつつある(注5)(付表２)。特に、近年調査が行われた第９次調査では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡を17棟検出し、遺跡の性格をさらに豊富なものにすることとなった(注6)。

植物園北遺跡は、賀茂川左岸沿いに西北から東南にかけて広がる遺跡であるが、その内の東南半分の範囲は、上記の第９次調査をはじめ、近年多くの調査が行われている。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代、平安時代の、大きく３時期の遺構密度が高く、この辺りの集落の隆盛を見ることができる(第39図・付表３)。

今回の調査地は、古墳時代(前期)の竪穴式住居跡が９棟検出された第７次調査地や、古墳時代(前期)の竪穴式住居跡が８棟検出された第８次調査地、及び弥生時代(後期)の竪穴式住居跡が４棟検出された第10次調査地の中間にあたる。そのため、ほぼ同様の成果が期待された。

4. 調 査 概 要

①調査の経過

調査は、まず東西方向に長いトレンチを南北に２本設けることからはじめた。その後、約30cmの盛り土を重機で除去し、人力掘削及び精査を繰り返し、遺構検出につとめた。その結果、南側のトレンチで竪穴式住居跡・土坑・ピットを多数検出したが、北側のトレンチでは遺構を検出できなかった。

遺構検出の途中、竪穴式住居跡１は南側に、竪穴式住居跡３・４は北側にのびることが明らかになったので、トレンチをその方向に拡張した。竪穴式住居跡１は、約2.5m拡張したが、南辺は検出できなかった。しかし、遺物が多数出土したことによって、ほぼ全容を把握できるようになった。竪穴式住居跡３は、北辺を検出し全体像を把握したが、さらに竪穴式住居跡５の南辺を検出することになった。そのため、再度北側に拡張した。その結果、北側のトレンチとつながることになった。竪穴式住居跡４は、北側が大きく攪乱されていたために、一部分のみ拡張した。

掘立柱建物跡１・２は、竪穴式住居跡の埋土を切る形で検出された。これらの遺構は、いずれも攪乱が多く入り込んでおり、遺構自体は完全でない。

基準杭の設定は、約４m間隔で行い、その後平板測量を実施した。また、基準点の移動は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

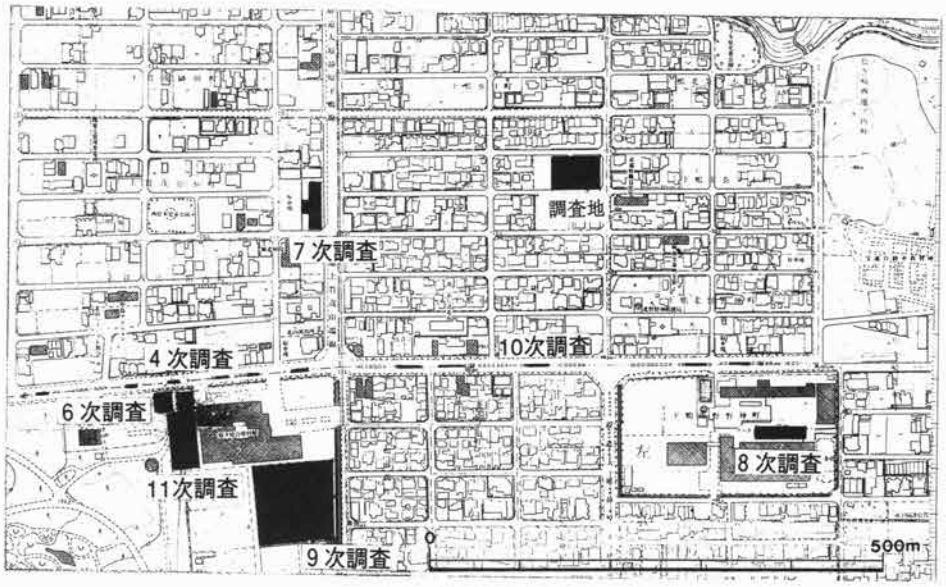
調査は、その後住居跡及び土坑などを完掘した後、空中写真撮影及び測量を行い調査を終了した。

付表２　植物園北遺跡調査成果表

調査次数	調査年度	面積(㎡)	主な成果
１次調査	昭和57年度	100	良好な成果なし
２次調査	昭和57年度	50	良好な成果なし
３次調査	昭和59年度	388.5	弥生(後期)竪穴２棟、古墳(後期)竪穴２棟、古墳(後期)の河川跡
４次調査	昭和61年度	700	縄文(晩期)甕棺１基、弥生(前期)土坑１基、古墳(後期)落ち込み３基、飛鳥～平安の土坑・柱穴
５次調査	平成元年度	316	弥生(後期)～古墳(前期)竪穴２棟、古墳(後期)竪穴９棟
６次調査	平成元年度	132	弥生・平安(後期)の包含層
７次調査	平成２年度	919	古墳(前期)竪穴９棟・土坑２基、平安(後期)掘立柱建物跡４棟
８次調査	平成２年度	500	古墳(前期)竪穴８棟、古墳(後期)竪穴３棟、土坑
９次調査	平成３年度	5,640	古墳(後期)～奈良の竪穴６棟、奈良末～平安の掘立柱建物跡17棟
10次調査	平成４年度	560	弥生(後期)竪穴４棟、弥生(後期)～古墳(後期)の沼地状堆積
11次調査	平成４年度	920	古墳時代(前期)の溝、土坑
12次調査	平成５年度	798	古墳時代(後期)竪穴・流路、平安時代の建物跡、中世の土坑・井戸

②基本層序

第41図にA～Cの3地点の土層柱状図を示した。これら3地点は、現代盛り土層の削平具合により、状況が違うため土層模式図を作成した。



第39図　調査地位置図

付表3　植物園北遺跡(東部)遺構変遷表
太線：竪穴式住居跡群　　細線：掘立柱建物跡群　　破線：溝・土坑群

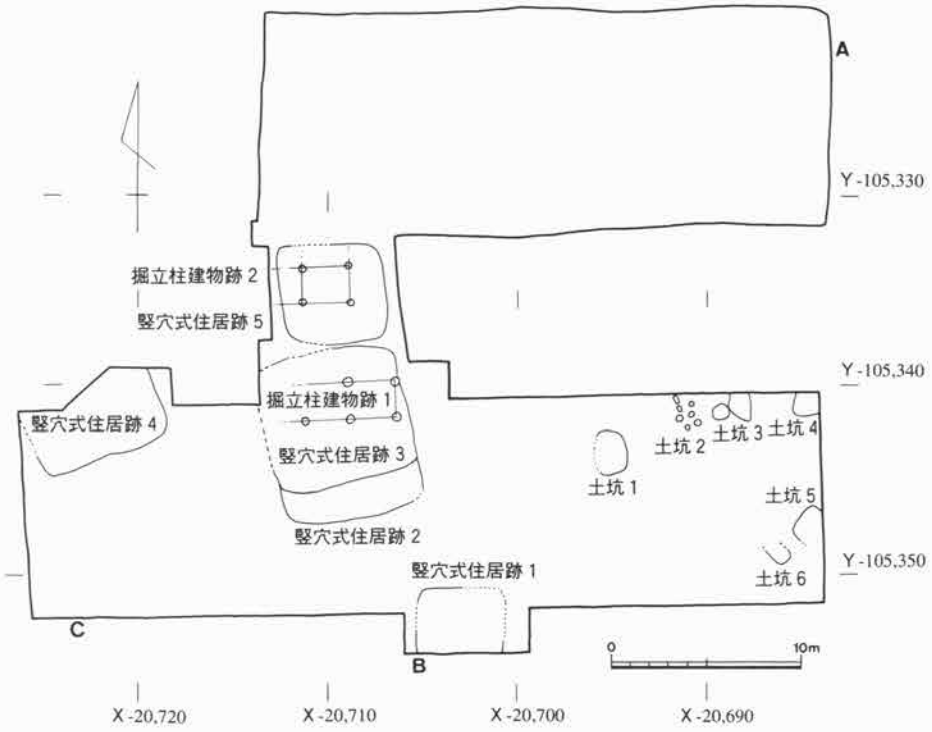
時期	縄文	弥生			古墳			飛鳥	奈良	平安
調査次数	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期			
4次調査	----	---					---		------	
6次調査		----------								
7次調査					■					▬
8次調査					■		■			
9次調査							■	▬		▬
10次調査				----------						
11次調査				■						

第１層は、現代の盛り土層である。地点により約80cmまで入り込むところもある。

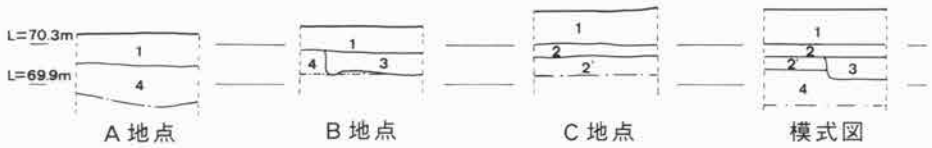
第２層は、茶褐色砂質土層である。この層は南側トレンチの両端に厚く残存していたが、その他の地点では第１層に削られており、残存していなかった。竪穴式住居跡４は、この層中から切り込んでいた。上層から、わずかに土器の細片が出土した。

第３層は、黒灰色砂質土層である。竪穴式住居跡や土坑の埋土となっている。

第４層は、今回の調査地のベース層となっている粗粒の礫層である。大規模な土砂の押し出しによる扇状地性の堆積物と考えられる。



第40図　検出遺構図(1/400)



第41図　土層柱状図

1.盛り土層　2.茶褐色砂質土層(拳大の礫を多く含む)　2'.茶褐色砂質土層(中砂～細砂)
3.黒褐色砂質土層　4.灰色並淡黄灰色礫層

5．　検　出　遺　構

①掘立柱建物跡

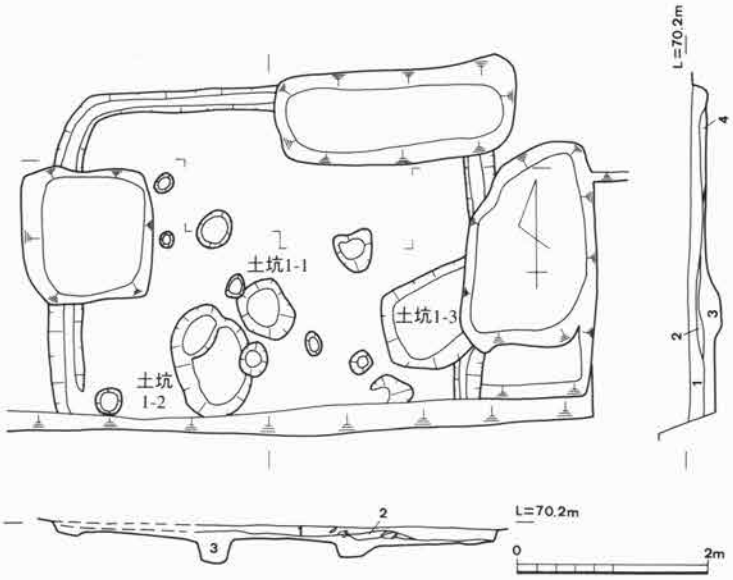
掘立柱建物跡１　１間×２間以上の東西棟の建物跡である。主軸は、ほぼN2°W傾く。柱間寸法は、東西2.5m×南北2.0mを測る。柱掘形は直径30～40cmを測り、深さは20cm前後である。柱掘形の埋土中からは、土器が出土していない。

掘立柱建物跡２　１間×１間以上の建物跡である。主軸は、ほぼN2°30′W傾く。柱間寸法は、東西2.5m×南北1.9mを測る。柱掘形は直径30cm前後を測り、深さは15cm前後である。柱掘形の埋土中からは、土器が出土していない。

これら建物跡の時期については、竪穴式住居跡３の埋土中から11世紀前半の土器が出土しており、その時期と考えることもできる。

②竪穴式住居跡

竪穴式住居跡１　東西(4.7m)×南北(3.6m以上)を測る方形の住居跡である。床面で周壁溝、土坑、ピットを検出した。主軸は、ほぼ座標北に向く。壁の残存高は、わずかに20～30cmほどである。周壁溝は、幅20～30cm・深さ５～10cmほどで、断面は浅い皿状を呈する。土坑１－１は、住居跡のほぼ中央に位置し、平面はほぼ円形を呈する。深さは約５cmほどである。土坑１－２は、平面が長楕円形を呈し、断面が皿状を呈する。深さは５～10cmほどである。土坑１－３は、平面が不整方形を呈し、断面が逆台形状をなす。深さは



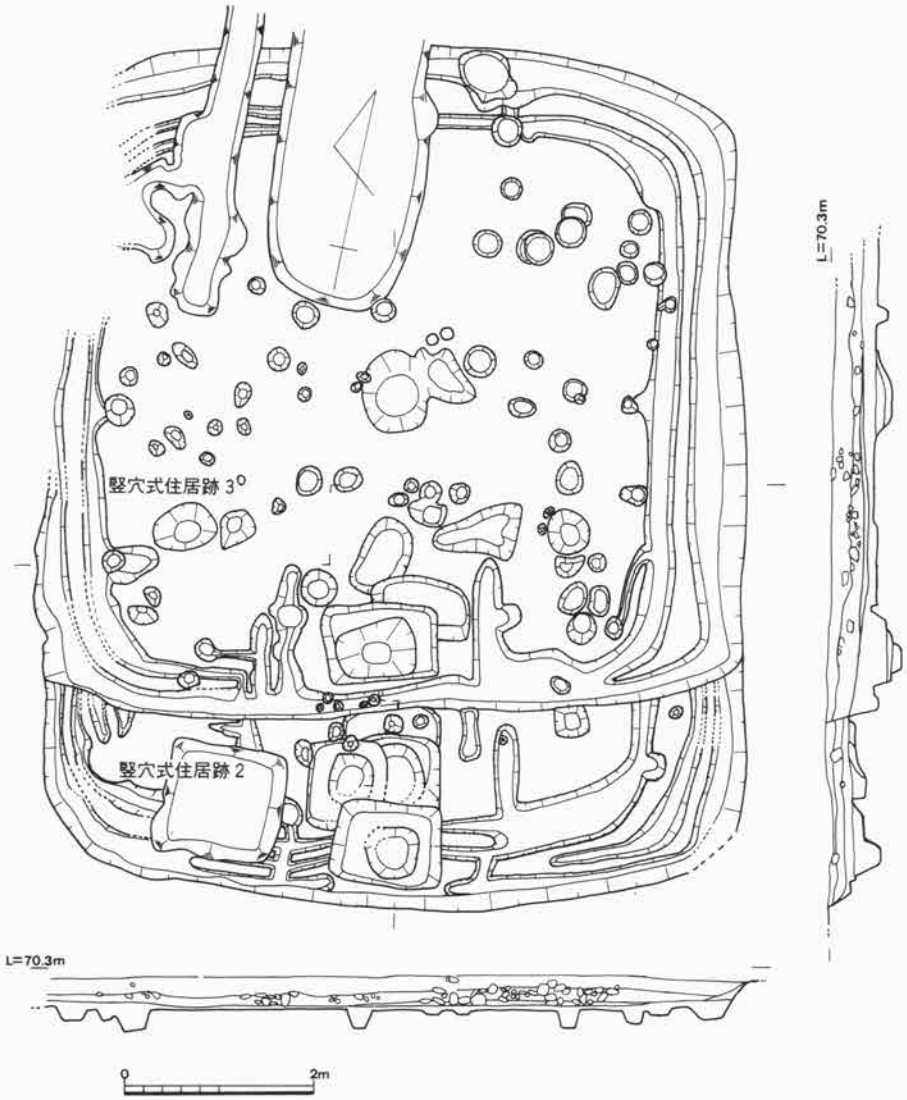
第42図　竪穴式住居跡１実測図(1/80)

1.黒灰色砂質土　2.黒灰色砂質土＋暗赤褐色砂質土　3.暗赤褐色砂質土(細砂及び礫を多く含む)
4.赤褐色土

5～10cmほどである。主柱穴と思われるものを2か所で検出した。深さは20～30cmほどである。焼土、炭などは認められなかった。

埋土は3層にわかれる。埋土中から、古墳時代前期の甕や小型丸底壺が出土した。

竪穴式住居跡2　東西(7.2m)×南北(2.0m以上)を測る隅丸方形の住居跡である。この住居跡は、北側の2／3以上が竪穴式住居跡3によって削平されており、床面に20cm以上の違いがある。そのため、大半の遺構は残存していないものと思われる。主軸は、ほぼN8°W傾く。床面で周壁溝、南壁に直交する溝、特殊ピット(南壁に接する隅丸方形の土坑)を検出した。(注7) 周壁溝は4条検出された。幅は20～30cmを測り、深さは10～20cmほどである。



第43図　竪穴式住居跡2・3実測図

断面は逆台形状を呈する。特殊ピットも４基検出され、すべてに切り合いをもつ。この住居跡南壁に設置される特殊ピットは、上面は方形もしくは隅丸方形を呈し、一辺60～100mを測る。さらに、その中央部に直径40～60cmを測る円形のピットを設け、その断面形状は２段に落ちる。埋土中からは特に遺物は出土していない。また、この特殊ピットの両側には、南壁に直交する形で幅20～30cmの溝を２～３条断続的に検出した。

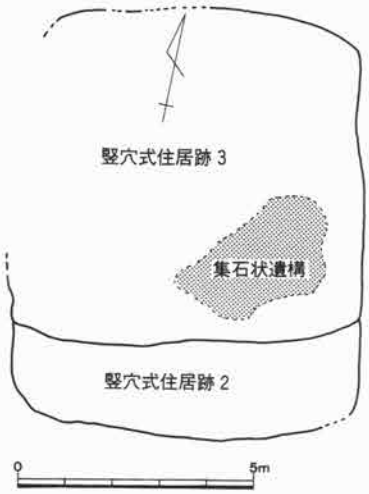
以上のように、周壁溝が４重にめぐり、特殊ピットが４重に切り合うことから、この住居跡は、少なくとも３回は拡張していると考えられる。

埋土は６層にわかれる。埋土中から多数の土器細片が出土した。

竪穴式住居跡３　東西(7.2m)×南北(7.4m)を測る隅丸方形の住居跡である。主軸は、ほぼN22°W傾く。床面で周壁溝、南辺に直交する溝、特殊ピット(南辺に接する隅丸方形の土坑)、土坑、多数の円形ピットなどを検出した。周壁溝は２条検出された。幅は30～40cmを測り、深さは20cm前後である。断面は逆台形状を呈する。特殊ピットは、切り合いをもつものが２基検出された。その内、１基の埋土中から器台が完形で出土した。この特殊ピットの両側には、南壁に直交する形で幅20～30cmの溝が断続的に検出されている。中央部から円形の土坑を検出した。この土坑は、浅い船底状を呈する。ピットは床面で多数検出された。10cm前後の比較的浅いものから、約30cmまで達するものがある。主柱穴は特定できないが、その分布からおそらく４本柱と思われる。

以上のように、周壁溝が２重にめぐり、特殊ピットが２重に切りあうことから、この住居跡は一度拡張しているものと思われる。

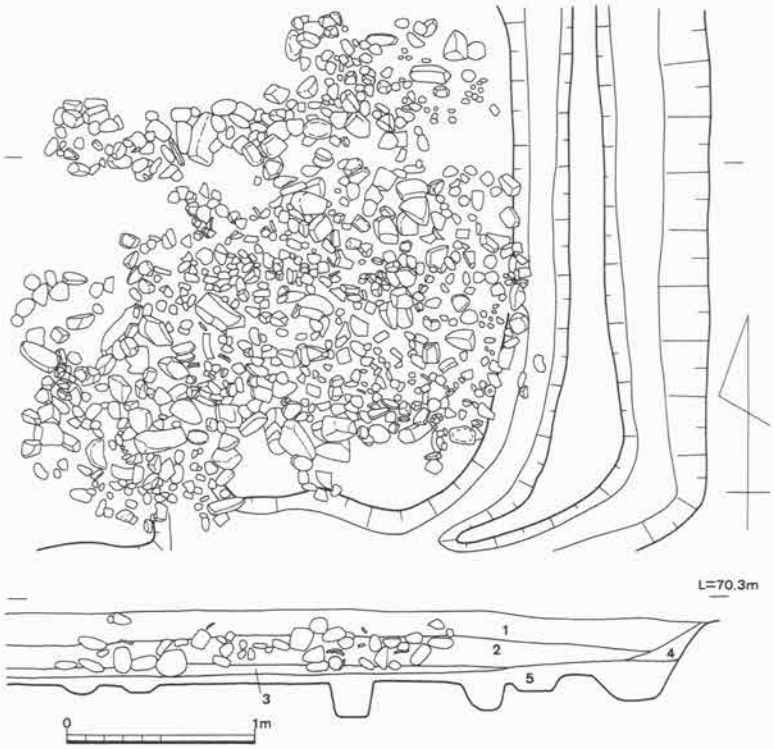
埋土は６層にわかれる。埋土中から、土器細片や拳大から人頭大の多数の礫が出土した。



第44図　集石状遺構範囲図(1/160)

集石状遺構　この竪穴式住居跡３の南東部から、拳大から人頭大の多数の礫が密集した状態で出土した。これらは、埋土第２層～第３層にかけて検出され、密集した礫の中から多くの土器が出土した。このように、これらの集石の密集度、及び堆積状況から考えて、竪穴式住居跡３の廃絶後、人為的に礫及び土器を投棄したと考えられる。

竪穴式住居跡４　東西(7.6m)×(3.4m以上)を測る隅丸方形の住居跡である。主軸は、ほぼN24°W傾く。この住居跡の床面は２面検出され、上層床面(住居跡改築後)と下層床面(住居跡改築前)にわかれる。



第45図　集石状遺構実測図(1/40)

1.黒灰色砂質土　　2.黒灰色砂質土＋茶褐色砂質土(拳大から人頭大の礫及び炭を多く含む)
3.茶褐色砂質土(粗砂)　　4.淡茶褐色砂質土　　5.茶褐色砂質土

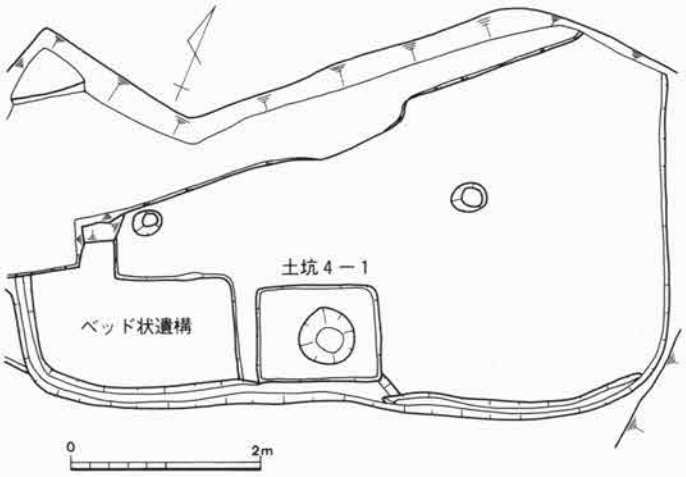
上層の床面(住居跡改築後)で、周壁溝、特殊ピット(土坑４－１)、柱穴、屋内高床部(いわゆるベッド状遺構)を検出した。周壁溝は幅20～30cmを測り、深さは約10cmほどである。東辺では検出されず、南辺から西辺にかけてめぐるようである。柱穴は、２か所で検出され、深さ約50cmを測る。その配置から考えると、４本柱であった可能性が高い。床面には炭、焼土などは認められなかった。

特殊ピットは、東西1.4m×南北１mの方形を呈し、中央に直径60cmを測る円形のピットを配置する。埋土中から土器細片が出土した。屋内高床部は、高さ10cm前後を測り、盛り土によって構築されている。その盛り土は２層にわかれる。北側は削平されているため不明であるが、「L」字状に曲がるものと思われる。

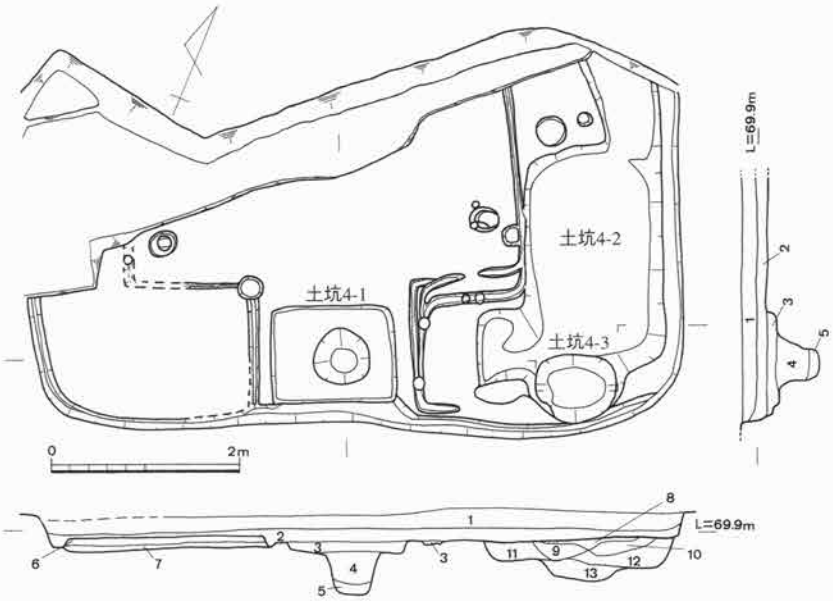
下層の床面(住居跡改築前)で、溝・土坑・柱穴が検出された。特殊ピット(土坑４－１)及び柱穴には切り合いなどが見られず、住居跡の改築に際しても、配置は変わらなかったと考えられる。屋内の溝は、土坑４－１を中心に、西側に１条、東側に２～３条折れ曲がる溝を検出した。幅10cm前後・深さ５cm前後で、断面皿状を呈する。周壁溝は、土坑４－

1を挟んで西側が上層の床面と同一ものと思われる。東側は、一部分のみ残る。

土坑4－2は、住居跡の東側、東壁に沿って不整形に広がる。深さは約20cmほどで、断面形状は船底状に近い。埋土は5～6層にわかれる。この埋土には、ブロック状の堆積土層を多く含むことから、人為的に埋めたと考えられる。土坑4－3は、径60～80cm前後の



第46図　竪穴式住居跡4実測図：上層の床面(住居跡改築後)



第47図　竪穴式住居跡4実測図：下層の床面(住居跡改築前)

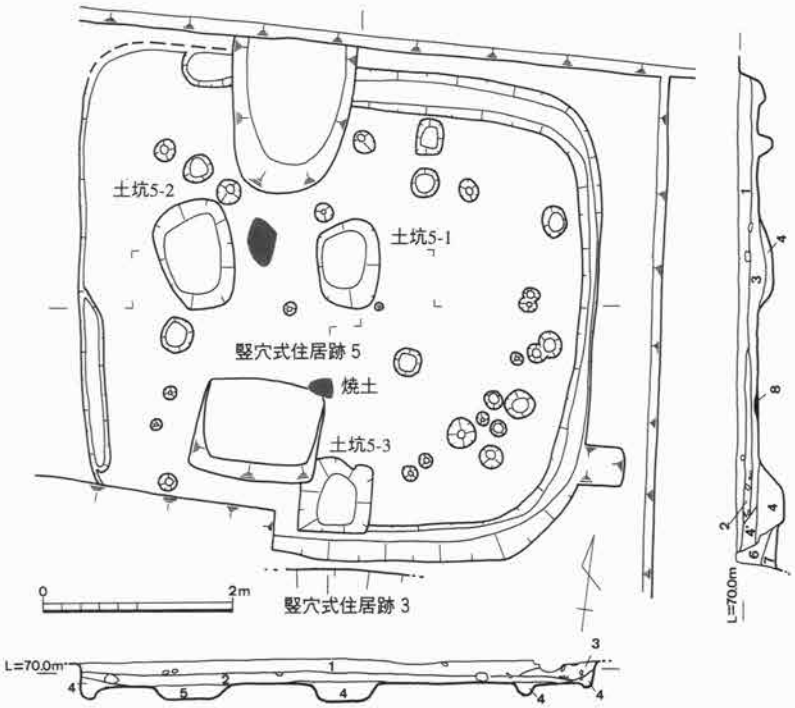
1.黒灰色粘質土　2.黒色粘質土　3.黒色砂質土　4.黒灰色粘質土　5.淡橙褐色砂質土
6.暗黒灰色砂質土　7.黄褐色粘質土(シルトを多く含む)　8.暗黒灰色砂質土(拳大の礫が目立つ)
9.暗青灰色砂質土(細砂)　10.暗茶褐色粘質土　11.暗茶褐色砂質土
12.暗青灰色砂質土(粗砂)　13.暗褐色砂質土(粗砂)＋暗青灰色砂質土

楕円形の土坑である。

住居跡全体の埋土は2層にわかれる。埋土中から土器細片が数点出土している。

以上のような床面の状況から考えて、この竪穴式住居跡4は、当初は特殊ピット(土坑4－1)を中心に、左右対称に「L」字状の高床部を配置する4本柱の住居跡であったと考えられる。その後、何らかの理由で、土坑4－2及び4－3が掘削された。さらに、住居跡南辺の東側をやや広げたのち、西側のみに再度高床部を構築したと思われる。つまり、最低2回は、屋内の改築を行ったと想定できる。

竪穴式住居跡5　東西(5.6m)×南北(5.2m)を測る隅丸方形の住居跡である。主軸は、ほぼN5°30′W傾く。床面で、周壁溝・特殊ピット・土坑・ピットなどを検出した。周壁溝は幅30～60cmを測る。断面「U」字状を呈し、四周を断続的にめぐる。特殊ピット(土坑5－3)は、一辺80cmを測る方形の土坑である。埋土中から手捏ね形土器が出土している。土坑5－1は、中央部に位置する楕円形の土坑である。土坑5－2は、やや東側に位



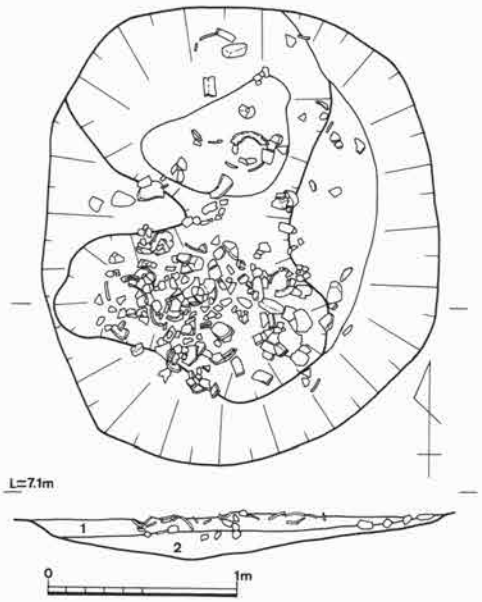
第48図　竪穴式住居跡5実測図(1/80)

1.黒灰色砂質土(礫を含む)　2.暗灰色砂質土(中砂～粗砂、炭を含む)　3.赤褐色砂質土(礫を含む)
4.暗褐色砂質土(粗砂、拳大の礫を含む)　4'.赤褐色砂質土＋暗褐色砂質土
5.茶褐色砂質土(焼土坑及び炭を含む)　6.暗褐色砂質土(中砂並細砂)　7.暗褐色砂質土(中砂)
8.焼土

置する不整方形の土坑である。深さは約10cmほどで、断面皿状を呈する。埋土中には、焼土塊や炭がみられた。ピットの多くは、深さ約10cmと浅いものが大半であるが、20～30cmの深さをもつものもある。主柱穴は特定できない。また、床面上で焼土２か所を検出した。

住居全体の埋土は２層にわかれる。床面上の中央部には、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が数点残されていた。

土坑１　南北(2.4m)×東西(2.1m)を測る楕円形の土坑である。底面は凹凸に富み、深さ50cmを測る。埋土は２層にわかれる。土坑中央部を中心に埋土の上層から、多数の土器片が折り重なった状態で約200点以上も出土した。これらの土器は、体部片が多く、口縁部・底部片はそれほど多くない。土器片の密集度から考えると、比較的短い時間幅の間に、廃棄された可能性が高い。

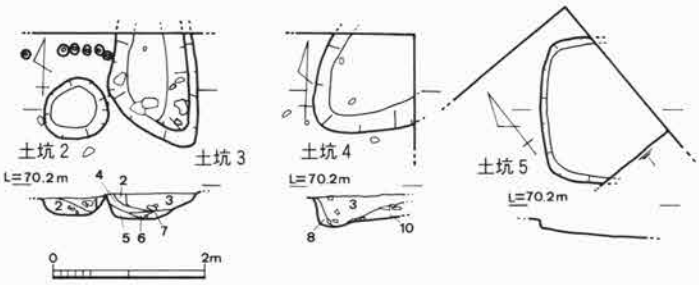


第49図　土坑１遺物出土状況図
1. 黒灰色砂質土(拳大の礫を多く含む)
2. 茶褐色砂質土(0.5～１cm大の礫を含む)

土坑２　東西(0.9m)×南北(0.8m)を測る円形の土坑である。埋土は２層にわかれ、断面は船底状を呈する。遺物などは出土していない。

土坑３　東西(1.2m)×南北(1.4m以上)を測る不整形土坑である。埋土は５層にわかれる。断面は逆台形状を呈する。遺物などは出土していない。

土坑４　東西(1.3m以上)×南北



第50図　土坑２・３・４・５実測図
1. 黒灰色砂質土(礫含む)　2. 暗黄灰色(細砂)　3. 黒灰色(細砂)　4. 黄灰色(細砂)
5. 淡黒灰色砂質土　6. 黄灰色砂質土(礫を多く含む)　7. 暗黒灰色砂質土(細砂)
8. 淡黒灰色(細砂)　10. 暗黄灰色砂質土(礫を多く含む)

(1.3m以上)を測る不整形の土坑である。埋土は3層にわかれる。遺物などは出土していない。

土坑5　0.5m×0.3m以上を測る隅丸方形の土坑である。埋土は単層である。遺物などは出土していない。

土坑6　0.2m×0.3m以上を測る隅丸方形の土坑である。埋土は単層である。遺物などは出土していない。

土坑1～土坑4までは、竪穴式住居跡1～5とほぼ同一の埋土を呈しており、弥生時代後期～古墳時代前期のものと思われる。

6.　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナにして計25箱になる。その内の大半は、弥生土器及び古式土師器であるが、わずかに平安時代の土師器や弥生時代の鉄製刀子などがみられる。ただ、土器の残存状態は悪く、ほとんどが細片化していた。その中で、図化掲載できたものは、約70点である。以下、弥生土器及び土師器の分類を行い、それを中心に説明した。また、個々の土器の胎土･焼成･色調など、詳細は観察表を参照されたい(付表4)。

①弥生土器及び古式土師器の分類

植物園北遺跡から出土した弥生土器及び古式土師器には、壺・甕・高杯・鉢・器台・手捏ね土器などの器種が見られる。これらの内、壺及び甕については、口縁部の形態を中心に分類した。[注8]

壺A　口縁部が受け口状を呈する壺(近江系)

B　頸部から大きく開く口縁部を持つ壺(広口壺)

C　二重口縁壺

D　短く直口する口縁部をもつ壺

E　小型丸底壺

甕A　受け口状を呈する口縁部をもつ甕(近江系)

B　「く」の字状を呈する口縁部を持つ甕

C　外反する口縁部を持つ甕、外面ハケ調整を施す。

D　外反する口縁部を持つ甕、外面タタキ調整を施す(V様式系の甕)。

E　鋭い屈曲部から口縁部は直線的にのび、端部をつまみあげる甕(河内形庄内甕)。

F　口縁部はゆるやかに内湾し、端部をわずかに内側に肥厚させる甕。

G　口縁部は外上方に直線的にのび、端部を内側に肥厚させる甕(布留式甕)。

H　複合口縁を呈する甕(丹後・丹波系)

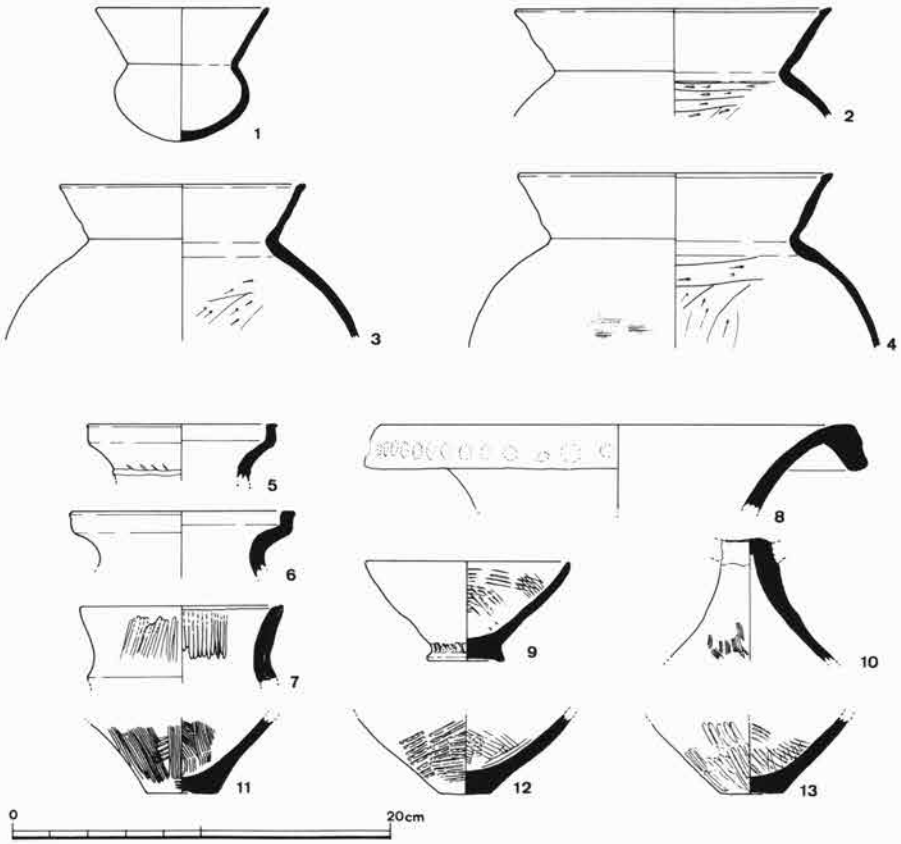
Ⅰ　短く外反する口縁部をもつ甕

なお、鉢・高杯・器台・ミニチュア土器は、出土点数が少ないため、分類は行わなかった。また、壺・甕・鉢の底部は、判別が不明瞭なものを含むため、底部で一括した。高杯及び器台の脚部も同様である。

②各遺構出土遺物

竪穴式住居跡１出土遺物　１は、壺Ｅ、いわゆる小型丸底壺である。体部・口縁部ともシャープに仕上げる。ただし、内外面ともナデ調整で仕上げる。２～４は甕Ｇ、いわゆる布留式甕である。口縁部は上外方にほぼ直線的にのび、口縁端部は内側に肥厚する。調整は、内面上半を斜め方向に、屈曲部付近を横方向に削って仕上げている。ただし、屈曲部の稜はあまく、ケズリの限界を示している。４は、体部外面に横方向のハケを施す。

竪穴式住居跡２出土遺物　５・６は、受け口状を呈する口縁部をもつ壺Ａである。７は、上外方に外反気味にのびる口縁部をもつ壺である。内外面とも縦方向のミガキを密に施す。口縁端部は擬口縁状をなす。８は、壺Ｂ、いわゆる広口壺である。口縁部は大きく開き、

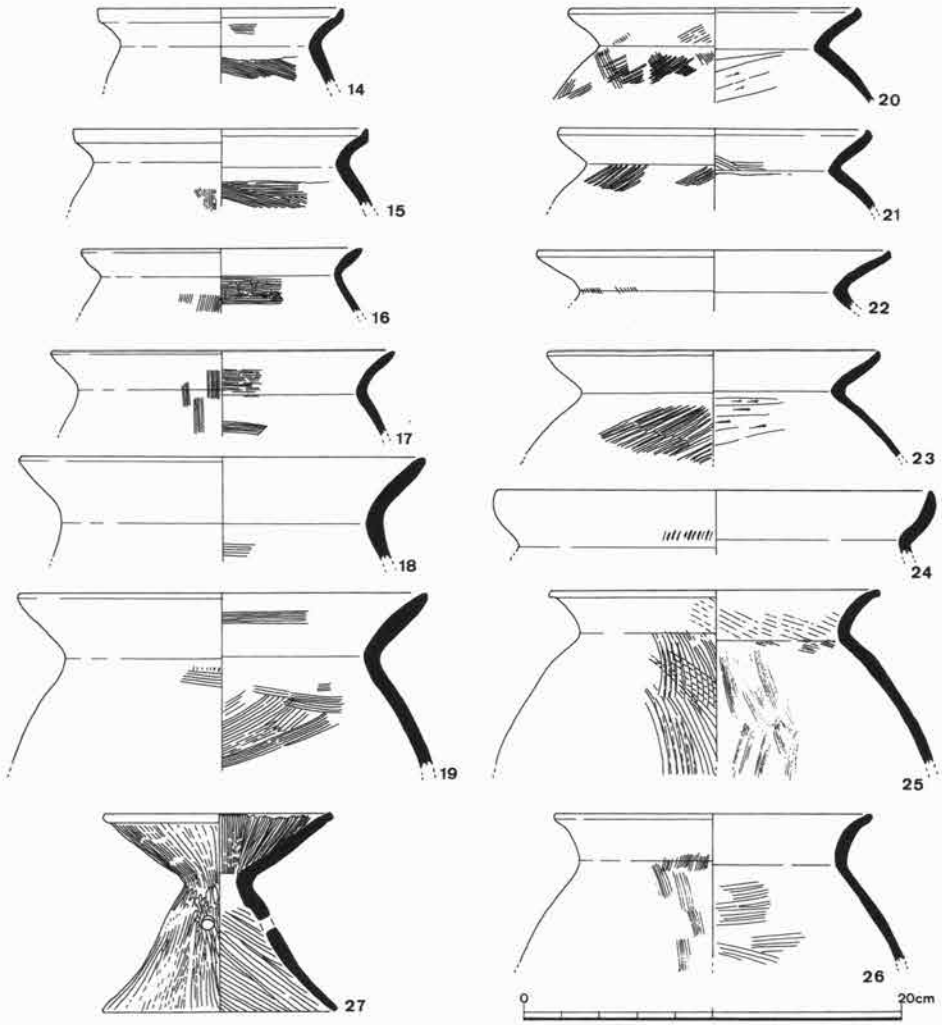


第51図　竪穴式住居跡１・２出土土器実測図
1～4.竪穴式住居跡１　　5～13.竪穴式住居跡２

端部は垂下する。口縁部外端面には、浮文を施していたと思われる。9は、「ハ」の字状に開く鉢である。外側にふんばる底部をもつ。内面には、斜めから横方向のハケを施す。10は、高杯の脚柱部である。外面には縦ハケを施す。11～13は、底部である。11は、外面にタタキの後ハケ調整を行う。底面はいわゆるドーナツ状をなす。12・13は、外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。

竪穴式住居跡3出土遺物

a．集石状遺構出土　14・15は、甕Aである。口縁部は明瞭な受け口状をなし、端部は直立する。体部内面には接合痕を残し、斜め方向のハケを施す。16～19は、甕Bである。口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反した後、端部は細くおさめる。外面は、縦及び横



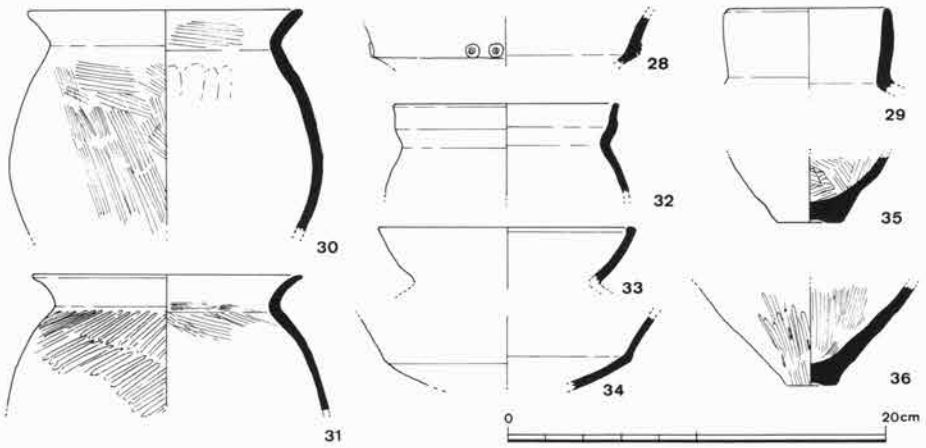
第52図　竪穴式住居跡3出土土器実測図(1)
14～26.住居跡内及び土器溜まり出土　　27.特殊ピット出土

方向のハケを施した後、内面には横及び斜め方向のハケを施す。18・19は、口径が20cm以上を越え、やや大型である。20～23は、甕Eである。体部外面には右上りの細筋のタタキを施し、内面には横方向のケズリを施す。20は、タタキの後、斜め方向のハケを施している。口縁端部のつまみ上げ方にわずかに差異があり、20・21のように明瞭なものと、22・23のようにそれほど明瞭でないものにわかれる。24は、短く内湾する口縁部を持つ甕である。25・26は、甕Cである。口縁部は明瞭な屈曲部から外反した後、端部は面をもつ。内外面ともハケ調整を施す。

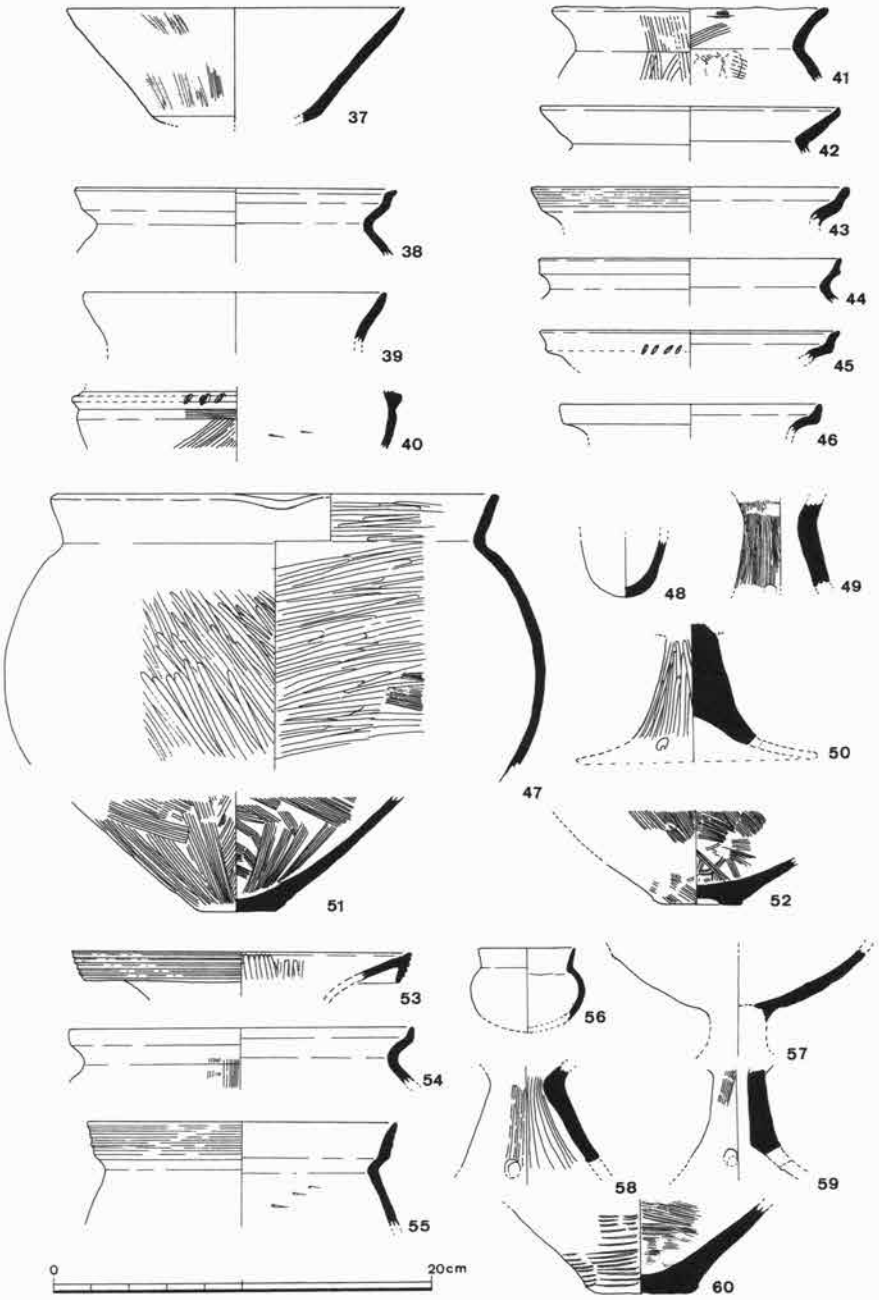
b．特殊ピット出土　27は、中空の器台である。口縁部は外上方に直線的にのび、端部は面を持つ。脚部には、円形の透かしを4方向に穿つ。外面にはハケ→ミガキ調整を行う。受け部内面には縦方向のミガキを施し、脚部内面には斜め方向のハケを施す。

c．埋土中出土　28は、壺C、いわゆる二重口縁壺の口縁部にあたる。端部は欠損している。屈曲部には、竹管文を施した円形浮文を2対貼り付けている。29は、壺Dである。口縁端部は丸くおさめる。30は、甕Cである。ゆるやかに屈曲した後、端部は丸く仕上げる。体部外面には縦方向のハケを施し、内面には指ナデ調整を施す。31は、口縁端部を比較的シャープに仕上げる。外面には、右上りの粗いタタキを施し、内面はハケを施す。32は、甕Hである。口縁端部はわずかに面をもつ。外面には横ナデ調整を施す。33は、甕Fである。内湾する口縁に、端部をシャープに仕上げる。34は、浅い杯部をもつ高杯である。比較的明確な稜から外反気味にのびる口縁部をもつ。35・36は、底部である。36は、外面をケズリ→ミガキ調整で仕上げている。

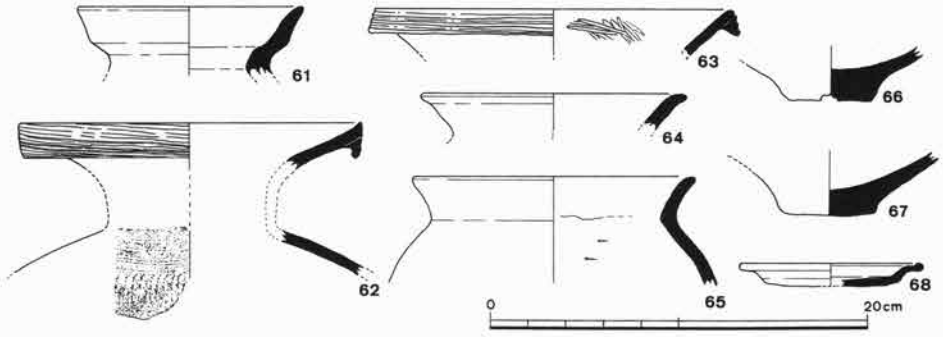
竪穴式住居跡4出土遺物　37は、「ハ」の字状に開く深い杯部をもつ高杯である。口縁



第53図　竪穴式住居跡3出土土器実測図(2)
30～36.埋土中出土



第54図　竪穴式住居跡４・５出土土器実測図
37. 竪穴式住居跡４
38～47・49～52. 竪穴式住居跡５床面
48. 竪穴式住居跡５特殊ピット
53～60. 竪穴式住居跡５埋土中



第55図　土坑１及び竪穴式住居跡３出土土器実測図
61～67.土坑１　　68.竪穴式住居跡３(平安時代の土師皿)

端部はシャープに仕上げている。杯部外面には縦ハケ調整を施す。

竪穴式住居跡５出土遺物

ａ．床面出土土器　38・43～46は、甕Ａである。口縁端部に横ナデを施し、比較的シャープに仕上げるもの(38・44～46)と、口縁部外面に擬凹線を施すもの(43)にわかれる。41は、甕Ｃである。口縁端部は丸く仕上げる。内外面ともハケ調整を施す。42は、甕Ｅである。端部を明瞭に仕上げる。39は、上外方に立ち上がる口縁部をもつ甕である。40は、手焙り形土器の体部である。突帯の上面にはキザミを施す。体部内面にはケズリを施す。47は、大型の鉢である。口縁部は上外方に短くのびる。体部外面に斜め方向のミガキ、内面に横方向のミガキを密に施す。49は、中空の高杯の脚柱部である。外面には縦ハケ調整を施す。50は、中実の高杯脚柱部である。51・52は、内外面ハケ調整を施す底部である。

ｂ．特殊ピット出土土器　48は、手捏ね土器である。口縁部は欠損している。

ｃ．埋土中出土土器　53は、壺Ｂである。口縁部を垂下させ、外面に擬凹線を施す。54は、甕Ａである。口縁端部は短く直立する。55は、口縁部外面に擬凹線を３条施す甕Ｈである。体部内面にはケズリを施す。56は、短く直口する口縁部をもつ壺である。57は、高杯の杯部で、口縁部脚部ともに欠損する。58・59は、高杯の脚柱部である。58は、内面に絞り目を残し、外面に縦方向のミガキを施す。60は、外面にタタキをもつ底部である。

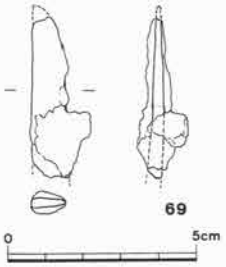
土坑１出土遺物　61は、壺Ａで、口縁部が外上方にのびる。62・63は、壺Ｂである。62は、口縁端部を垂下させた後、外面に擬凹線を施す。体部上半に櫛描き文２条と刺突文を施す。63は、口縁端部を垂下させた後、外面に擬凹線をめぐらせる。内面に斜め方向のミガキを行う。64・65は、甕Ｉである。65は、内面にケズリを施す。66・67は、底部である。

③その他の遺物

平安時代の土器　68は、土師器小皿である。竪穴式住居跡３の埋土中から出土した。口

径9.2cm・器高1.2cmを測る。口縁部は「て」の字状に屈曲する。口縁端部は折り返し、シャープに仕上げている。底部外面には指押さえ痕が残る。

鉄器　69は、鉄製刀子である。竪穴式住居跡３の埋土中から出土した。残存長は約3.6cmで、刃部先端と基部を欠損している。



第56図　竪穴式住居跡３
出土鉄器

付表４　出土土器観察表

番号	器種	口径	胎土	焼成	色調	出土遺構	出土位置	備考
1	壺E	9.2	良、3mm大の赤	やや軟	明茶褐色	住居跡1	埋土中	小型丸底壺
2	甕G	17.0	良、2mm大の長・石・雲	良好	暗茶褐色	住居跡1	埋土中	布留甕
3	甕G	13.0	良、2～3mm大の石・長・雲	良好	暗茶褐色	住居跡1	埋土中	布留甕
4	壺G	14.8	良、2～3mm大の長・雲・赤・石	良好	暗茶褐色	住居跡1	埋土中	布留甕
5	壺A	10.0	良、0.5mm大の雲・石	良好	乳白色	住居跡2	埋土中	近江系
6	壺A	11.9	良、1～2mm大の長・雲・灰	良好	淡黄褐色	住居跡2	埋土中	近江系
7	壺	10.6	良、1～2mm大の長・雲・黒～灰	良好	乳白色	住居跡2	埋土中	
8	壺B	12.7	良、1mm大の石・雲・チャ・黒～灰	良好	乳白色	住居跡2	埋土中	
9	鉢		やや粗、1mm大の石・雲	良好	淡褐色	住居跡2	埋土中	
10	高杯	10.8	粗、2～3mm大の赤・石・長・雲	良好	淡橙灰色	住居跡2	埋土中	
11	底部	3.8	粗、2～3mm大、長・石・雲	良好	紅白色	住居跡2	埋土中	
12	底部	2.6	やや粗、1～2mm大、石・長・雲・黒	良好	淡褐色	住居跡2	埋土中	
13	底部		やや密、1mm大、石・長・雲	良好	暗茶褐色	住居跡2	埋土中	
14	甕A	13.0	やや粗、1～2mm大、長・石・チャ・灰	良好	暗黄茶褐色	住居跡3	集石状遺構	近江系
15	甕A	15.5	粗、2～3mm大、長・石・チャ・灰	良好	暗茶黒褐色	住居跡3	集石状遺構	近江系
16	甕B	14.8	やや密、1mm大、長	良好	暗茶褐色	住居跡3	集石状遺構	
17	甕B	18.2	良、１～２mm大の長・雲	軟	暗黄茶褐色	住居跡3	集石状遺構	
18	甕B	21.5	やや粗、2mm大の長	良好	淡褐色	住居跡3	集石状遺構	
19	甕B	21.6	良～やや粗、1mm大、長・石・雲・赤・チャ・角	良好	暗茶褐色	住居跡3	集石状遺構	
20	甕E	15.1	粗、2～3mm大、石・長・雲・角	良好	淡褐色	住居跡3	集石状遺構	生駒西麓産
21	甕E	16.2	良～やや粗、2～3mm大、石・長・チャ・角	軟	暗茶褐色	住居跡3	集石状遺構	生駒西麓産

22	甕E	18.6	粗、2～3mm大、長・石・雲・角	良好	淡褐色	住居跡3	集石状遺構	生駒西麓産
23	甕E	17.0	良、2～3mm大、角・長・雲	良好	暗茶褐色	住居跡3	集石状遺構	生駒西麓産
24	甕	23.1	粗、2～3mm大、石・チャ・雲	軟	暗茶黒褐色	住居跡3	集石状遺構	
25	甕C	17.4	良、2～3mm大、長・石・チャ・雲	良好	淡褐色	住居跡3	集石状遺構	
26	甕C	16.7	やや粗、2～3mm大、長・チャ・灰	やや軟	暗赤茶褐色	住居跡３	集石状遺構	
27	器台	12.0	やや粗、2～3mm大、石・長・チャ	良好	乳白色	住居跡3	特殊ピット	
28	壺C		良～やや粗、0.5mm大、長	良好	暗黒灰色	住居跡3	埋土中	
29	壺D	8.6	やや粗、1～2mm大、赤・チャ	軟	淡橙褐色	住居跡3	埋土中	
30	甕C	14.2	やや粗、2～3mm大、長・石	良好	茶褐色	住居跡3	埋土中	
31	甕D	14.4	良、3～4mm大、石・長・黒	良好	淡橙褐色	住居跡3	埋土中	V様式系
32	甕H	11.4	良、1～2mm大、長・チャ・石	良好	茶褐色	住居跡3	埋土中	
33	甕F	13.1	良、1mm大、長・雲・石	良好	橙色	住居跡3	埋土中	布留系
34	高杯		良、2～3mm大、石・赤・チャ・長	やや軟	乳白色	住居跡3	埋土中	
35	底部	3.2	良、2～3mm大、石・雲・チャ	良好	乳白色	住居跡3	埋土中	
36	底部	2.6	やや粗、3～5m大、チャ・赤・長・石・雲	良好	黄褐色	住居跡3	埋土中	
37	高杯	15.8	良～やや粗、0.5mm大、チャ・長・雲・赤	良好	茶褐色	住居跡4	埋土中	布留系
38	甕A	17.0	密、1～2mm大、チャ・石・長	良好	乳白色	住居跡5	床面	近江系
39	甕	16.0	密、0.5mm大、長・雲	良好	暗黒灰色	住居跡5	床面	
40	手焙り	17.0	良、1～2mm大のチャ・赤	良好	乳白色	住居跡5	床面	
41	甕C	14.8	良、1～2mm大、チャ・長・赤	良好	赤褐色	住居跡5	床面	
42	甕E	16.0	やや粗、0.5mm大、角・長・雲	良好	暗茶褐色	住居跡5	床面	生駒西麓産
43	甕A	17.0	やや粗、1～2mm大、長・チャ・石	良好	淡橙褐色	住居跡5	床面	近江系
44	甕A	16.0	粗、1～2mm大、チャ・石・赤	軟	淡乳白色	住居跡5	床面	近江系
45	甕A	10.0	やや粗、1～2mm大、石・長・チャ	軟	乳白色	住居跡5	床面	近江系
46	甕A	14.0	密、1～2mm大、石・チャ	良好	淡橙色	住居跡5	床面	近江系
47	鉢	12.0	良、2～3mm大、石・長・雲・チャ	良好	茶褐色	住居跡5	床面	
48	手焙り		やや密、0.5mm大、長	良好	灰色	住居跡5	土坑5－3	
49	高杯		やや密、1～2mm大、チャ・雲	堅致	乳白色	住居跡5	床面	
50	高杯		良、1mm大、長	堅致	淡橙色	住居跡5	床面	
51	底部	4.0	やや粗、0.5～2mm大、チャ・石・長・雲	良好	茶褐色	住居跡5	埋土中	

52	底部	4.7	やや密、0.5mm大、長・雲	堅致	暗褐色	住居跡5	埋土中	
53	壺B	18.0	密、0.5mm大、チャ・雲・長	堅致	乳白色	住居跡5	埋土中	
54	甕A	18.2	やや粗、2～3mm大、チャ・石・長	良好	乳白色	住居跡5	埋土中	近江系
55	甕H	16.4	やや粗、1mm大、雲・長・石・チャ	良好	乳白色	住居跡5	埋土中	丹後・北陸系
56	壺F	5.0	良、1～2mm大、石・長・チャ・赤	やや軟	淡橙色	住居跡5	埋土中	
57	高杯		やや粗、0.5～1mm大、赤・チャ・石・長	軟	乳白色	住居跡5	埋土中	
58	高杯		やや粗、1～2mm大、チャ・雲・石・長・赤	良好	黄灰色	住居跡5	埋土中	
59	高杯		良、1～2mm大、赤・石・長・チャ	良好	乳白色	住居跡5	埋土中	
60	底部	5.6	やや粗、3～4mm大、チャ・灰	良好	乳白色	住居跡5	埋土中	
61	壺A	12.0	やや粗、0.5～1mm大、石・長	良好	灰白色	土坑1	埋土中	近江系
62	壺B		やや粗、1～2mm大、石・長・チャ	軟	乳白色	土坑1	埋土中	
63	壺B	19.0	良、0.5～1mm、長・石・チャ	軟	乳白色	土坑1	埋土中	
64	甕I	14.2	粗、2～3mm大、チャ・長・石	軟	灰色	土坑1	埋土中	
65	甕I	15.0	良、1～2mm大、石・チャ	良好	灰～乳白色	土坑1	埋土中	
66	底部	4.8	やや粗、0.5～2mm大、石・長・チャ	軟	灰色	土坑1	埋土中	
67	底部	5.0	やや粗、0.5～2mm大、長・赤・チャ・石	軟	灰～乳白色	土坑1	埋土中	

器種の項目には型式名も含む。口径はcm単位である。胎土は、密・良・粗、焼成は、堅致・良好・軟、3段階を基準に分けた。以下略称
赤;赤色粒、長;長石、石;石英、雲;雲母、灰;灰色粒、チャ;チャート、角;角閃石、黒;黒色粒

7. 考 察

①ベッド状遺構について

ベッド状遺構(屋内高床部)は、近年、石野博信[(注9)]氏や笹森健一[(注10)]氏による論考がみられ、ベッド状遺構の時期及びその機能、分布論などが展開されている。石野博信氏は、全国的規模でベッド状遺構の変遷をとらえている[(注11)]。近畿地方に限ると、弥生時代中期では兵庫県名古山遺跡・東溝遺跡、弥生時代後期では兵庫県大中遺跡・立岡遺跡・東溝遺跡、大阪府東山遺跡、古墳時代前期では和歌山県吉田遺跡・北田井遺跡での検出例が報告されている。また、西岡誠司氏は西日本規模で集成を行っており、九州地方が71遺跡212例、中国地方が38遺跡105例、四国地方が12遺跡35例、近畿地方が41遺跡94例と報告されている[(注12)]。この数値は、弥生時代中期～古墳時代後期までを含んでおり、時期による地域の量的な増減を考慮にいれても、各地域のベッド状遺構の出土数を比較する上で評価したい(第57図)。

さらに、各地域ごとにおいても、ベッド状遺構の集成及び考察がなされている。特に、兵庫県の大中遺跡[注13]、川除・藤の木遺跡[注14]、芝崎遺跡[注15]の報告や、大阪府の西大路遺跡[注16]の報告は、今後の竪穴式住居跡の屋内の構造を考える上で重要である。今回は、これらの報告を踏まえた上で、近畿地方におけるその変遷を提示することにした[注17]。

中期後半にさかのぼる資料としては、円形プランで周囲に高床部を設けるもの(1・2)がある。1は、一方向がとぎれている。後期前半の資料としては、方形プラン(3)と円形プラン(4・5)がある。方形プランのものは、一方にのみ高床部を設ける。4は、円形状に断続的に高床部を設けている。後期後半になると、播磨～摂津以外の地域でも、ベッド状遺構が見られるようになり、そのプランは多様化する。6は、円形プランに隅丸方形状の高床部を持つものである。一方向がとぎれる。7は、方形に近いプランに隅丸方形の高床部を持つ。8は、隅丸方形のプランに六角形の高床部を付設する。9は、いわゆる多角形住居といわれ、六角形プランに二方向の張り出し部をもつ。高床部も六角形を呈する。

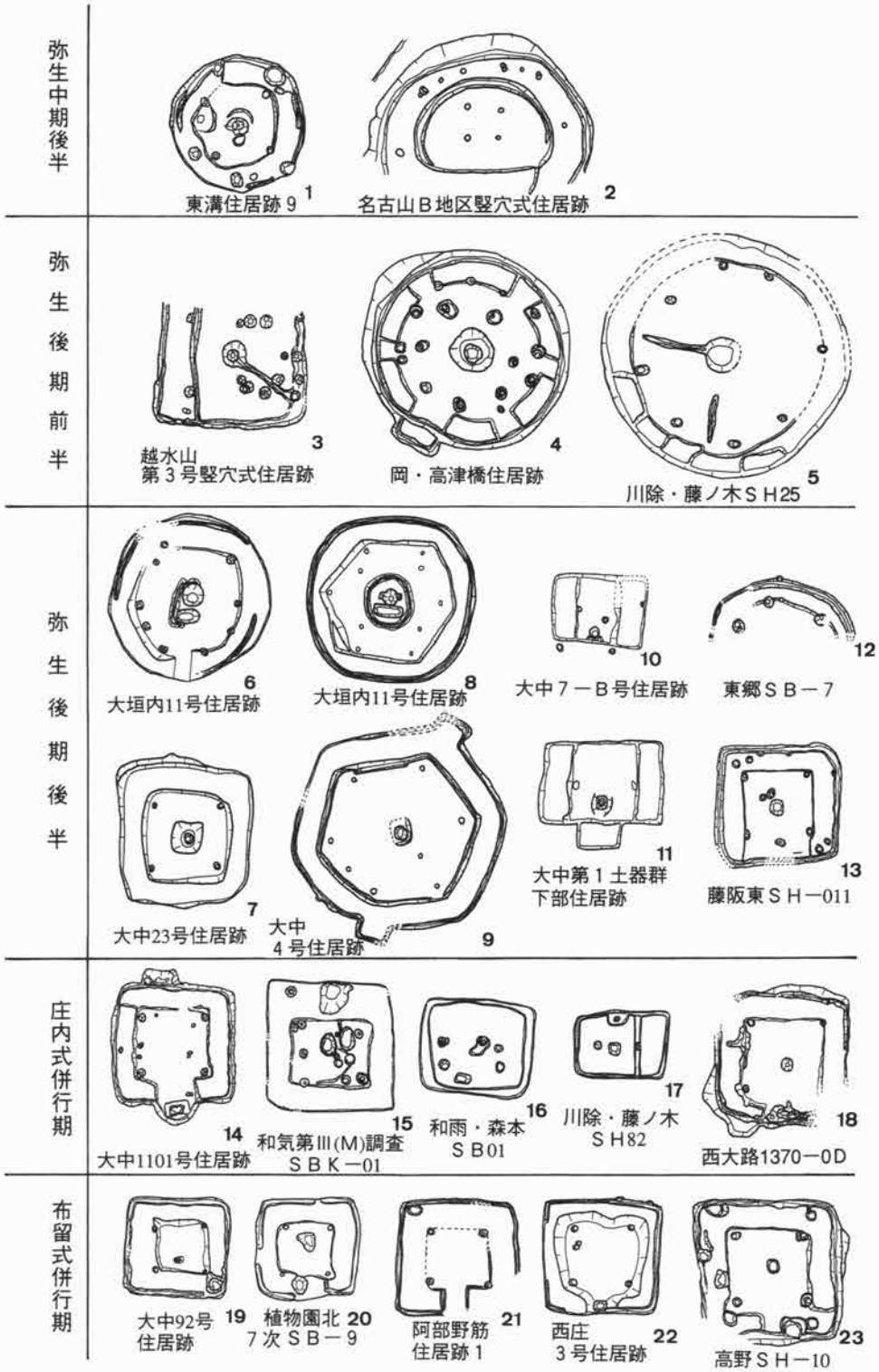
10・11は、長方形プランを呈する住居跡である。両者とも、短辺に直線的に高床部をもつ。11は、一方向に張り出し部をもつ。12は、円形プランを呈し、周囲に高床部を持つ。13は、方形プランを呈し、「コ」の字状に高床部を付設する。その後、庄内式併行期には、弥生時代後期の段階でみられた多様なベッド状遺構をもつ竪穴式住居跡が、より変容された形で各地域に広がる。住居プランは、方形のもの(14・15・18)と長方形のもの(16・17)の両者がある。14・18は、高床部の一方向がとぎれる。16は、周囲に幅の狭い高床部を付設する。17は、短辺の一方向にのみ高床部を付設する。布留式期に入ると、丹後や近江などでも、高床部をもつ竪穴式住居跡が検出されている。提示したのは、方形プランのもの(19～23)のみであるが、長方形プランのものも存在すると思われる。高床部が四周をめぐるもの(19・20)と一方向がとぎれるもの(21～23)がある。弥生時代後期後半以降、高床部のとぎれ形には多様性が見られる。

以上のように、近畿地方におけるベッド状遺構は、弥生時代後期後半に西丹波及び播磨から摂津・紀伊の地域で、多様なプランが生み出され、庄内式併行期以降、これらが他地域に広がっていったものと思われる。

(岸岡貴英)

②高杯脚部の成形技法について

近年、弥生時代後期から古墳時代前期の土器研究では高杯脚部の形態的・手法的な点が注目されつつある[注18]。特に、布留式土器研究では、円盤充填から分割成形へ杯部取り付き手法が変化することが議論されている。今回は、それより一段階古い庄内式併行期の一括資料である集石状遺構出土の土器群のうち、高杯脚柱部を対象として、その分類及び断面観



第57図　ベッド状遺構の変遷

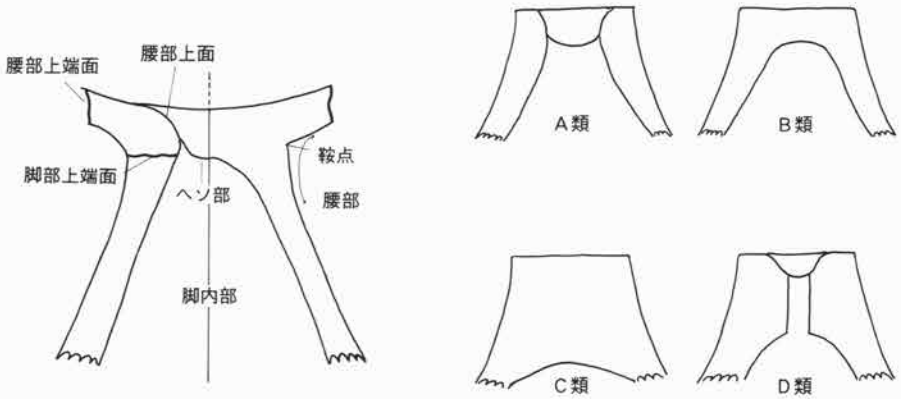
察を行い、高杯脚部の製作技法の復原を試みた。

分類　高杯脚部の分類は、寺沢　薫氏によって中空・中実の点からA・B両類が設定されている[注19]。また、山本三郎氏は、脚端、脚柱部の形態から5類に分類されている[注20]。今回は、杯部との接合形態に視点をおき、高杯脚柱部をA～Dの4類に分類した(なお、分類や断面観察などに使用した若干の用語及び脚部の部位の名称は、第58図を参照[注21])。

A類は、筒形で円盤充填の痕跡を持つもので、脚内面はシボリ痕の上から工具などで調整を入れるものが多い。B類は、円盤充填の痕跡を持たず閉塞した台状の脚部である。脚部内面にシボリ痕がつくが、ナデ消すものが多い。C類は、中実のタイプである。今回の調査ではこのタイプはきわめて少なく、集石状遺構からは皆無であった。C類は、A・B類と異なって、脚部内面にシボリ痕は見られない。D類は、脚の内芯に孔をもつタイプである。脚部内面にシボリ痕はなく、ナデやハケの調整がみられる。

断面観察　破面にもとづいた土器の断面観察は、外傾・内傾といった輪積みの手法や、粘土紐継ぎ足しを明らかにするために用いられている[注22]。しかし、諸条件によって破面の状態は左右されるため、製作技法の比較検討という点で必ずしも適している方法とはいえない。そこで、一定の条件下で人工的に断面を作り出し、製作技法の比較を行う上での試料とすることにした。

具体的には、岩石カッターで高杯脚部を切断し、硬化処理を施した後で切断面を研磨した。硬化処理にはシアノボンドを利用し、研磨には研磨材として800番から2,000番を用いた[注23]。加工した試料は4個である。C類は、良好なものが1点しか出土していないため、対象から除外した。試料の内訳は、A、B類各1個、D類は芯孔が貫通し腰部上面に充填円盤の剝離面をもつもの(以下D1類と呼ぶ)1個と、芯孔が貫通していないもの(以下D2類と呼ぶ)1個である。



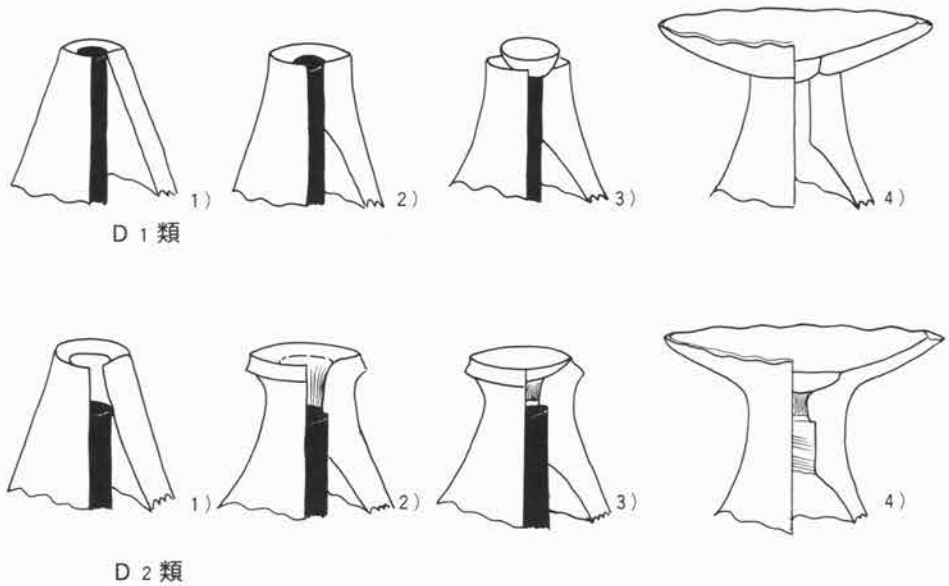
第58図　脚注部の分類

A類(図版第36)：断面の明瞭な接合痕から、円盤充填のようすがよくわかる。脚部上方に屈曲の鋭い腰部を持ち、腰部上端面は破面となっている。また、鞍点付近の断面に線が見られる。この線は、鞍点近傍に始まり、斜めに立ち上がっている。これから判断すると、鞍点に粘土紐をめぐらせている可能性が高い。腰部外表面の観察からもハケ目が補充粘土紐の下にもぐっていくことが見て取れる。粘土紐補充は、杯部の接合を完全にする目的で施したのであろう。

B類(図版第36)：ヘソ部が脚壁に比べかなり薄いことがわかる。脚柱内の頂部はアーチ形をしており、この付近で縦シワの上からナデや指頭圧痕が顕著に見られる。このアーチ部分は、指頭をそのまま入れて調整した感じである。

D１類(図版第36)：腰部上面に剝離面を持つことから、このか所に円盤が着き閉塞してあったことがわかる。芯孔は横断面円形で、孔の上位、下位に関わることなく径は一定(８㎜)で、孔の内壁には細線や縦シワなどは見られない。何か棒状のものがこの孔の形成時に使われていたようなようすである。芯孔内壁にシワが見られないことから、「棒」が抜き取られた後、上方や側方から力が加えられていないといえる。円筒を側方から力を与え絞りつつ、適度な太さまで細めていくといった脚部成形の技法とは異なることが明白である。また、脚内部の下位は内湾しており、ハケ調整が見られる。

D２類(図版第36)：外見上、芯孔が貫通していないとしたこのタイプは、芯孔とは別の孔を持っていることがわかった。別の孔とは、芯孔の上の４㎜程度の隔壁を一枚挟んだと



第59図　脚注部D類の製作技法模式図

ころに位置し、上方は円盤充填で閉塞する。この縦断面が鼓形を呈する「別の孔」(以下鼓形孔と呼ぶ)の壁面には、細かい縦シワが幾条も見られるのが特徴である。また、芯孔に見られる細線も興味深い。この細線は一見、水平についているが、細かく見ると右斜め下に傾いており、細線と細線とが切り合わないことから、ラセン状にめぐっていたと思われる。また、隔壁下面には回転を示す擦痕が明瞭に見られる。

ここで隔壁自体について、さらに詳細に触れておきたい。隔壁の縦断面には鼓形孔の輪郭に沿うようにして線が現れている。隔壁の上面には細かいシワが見られ、下面には回転痕がついている。同様の細かいシワは鼓形孔の側壁にみられるものと一致し、側壁の縦シワから隔壁上面へ途切れることなくつながっているシワも存在する。これらのことから、隔壁上面のシワは本来なら鼓形孔の側壁についていたはずのものと判断できる。また、隔壁上面の縦断面は波状であるが、対照的に隔壁下面の縦断面は直線的である。仮に、鼓形孔を保ちながら下から棒で圧力をかけると考えよう。すると、上にあがってくる隔壁は鼓形孔壁からの圧力を受けることになる。すなわち、隔壁が押し上げられる過程で両側から圧力を受けることになり、隔壁上面には横方向から力が加わったのと同じような波状のシワが形成されたと理解できるのではなかろうか。このような隔壁部分の観察から、鼓形孔ができた後に隔壁ができたことがわかる。

この圧力は、いつの時点で加わったのだろうか。鼓形孔内部の細かい縦シワは腰部の形成時にできたものと考えられることから、隔壁は腰部形成以降のものである。しかし、この隔壁を芯孔形成と直接結び付ける必然性は全くない。すなわち、芯孔は脚内下方のアーチ形部分から約1.5cmくい込んでおり、仮にこのくい込んだ部分の粘土容積が鼓形孔に入っていくとすると、鼓形孔は完全に詰まってしまい隔壁は存在しないことになろう。そこで、今回は、隔壁は脚内部にある程度まで棒が入り込んできており、それが微少に上下動することで形成されたと考えておきたい。

脚部D類の製作技法の復原　今回の復原では、どちらも棒に粘土板を巻き付け脚体を形成するものと考えた。別に、輪積みの筒でもかまわない。観察からは、どちらとも判別がつかないのである。

D１類は、1)棒の頂部に頭がくるように粘土板をめぐらせ、2)棒に粘土板を固定する。そして、3)円盤を充填し、4)円盤の側縁と脚部上端面を基座にし杯部を成形する。[注24] 復原の中で棒を抜き取るのは、芯孔内にシワが見られないことを評価し、脚部が完成する3)の段階以降と考えた。問題は、1)で示したように棒の頂部まで粘土板を巻き付けていたかどうかである。これは、充填円盤が埋まったままで剝離したような杯部の資料を観察し、そのヘソ部に棒の刺突圧痕がついていれば立証できる事柄であり、今後の検討課題としたい。

Ｄ２類は、1)粘土板の中程に棒をあてがい、そこを支点に粘土板をめぐらし、2)棒に粘土板を固定し脚上方を絞り込む。同時に腰部を屈曲させ腰部上端面を外に向ける。そして、3)円盤充填し、4)腰部上端面に杯部を成形する。問題は、上述した隔壁の形成であるが、大まかに2)の絞り込みが行われた後、棒が抜き取られるまでの間でできるとしておきたい。

おわりに　高杯脚部のＡ～Ｄ類を断面観察した結果、特にＤ類の製作技法に対して見通しを与えた。従来、杯部取り付け時の棒について、野島　永・河野一隆氏によって脚部を絞る時点での使用が想定されている[注25]。しかし、これとは別の手法、つまり脚柱部の円筒を成形する際に棒が使用されていたことを今回の作業で明らかにすることができた。

布留式土器やそれに並行する土器様式では、円盤充填技法から分割成形技法へ移行することがいわれている。しかし、それに先行する庄内並行期ではさまざまなヴァリエーションが混在した様相である。集石状遺構の土器相は、そのような状況を示しているといってよい。弥生時代終末から古墳時代初頭の土器型式の錯綜した状況から、土器が単なる使用財でなく交換財として流通している印象を持つ。土器型式の系譜を整理し、流通状況を復原するために、今回の４種類の脚部成形技法は大きな手がかりになるのではなかろうか。

（杉本厚典）

８．　ま　と　め

今回の調査区で検出された遺構は、竪穴式住居跡（５棟）・土坑（６基）・ピットなどである。これらは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて断続的に造られている。そこで、これら個々の竪穴式住居跡の時期を明らかにして、その変遷を捉えてみようと思う。

竪穴式住居跡１では、埋土中から小型丸底壺（１）と布留式甕（２～４）が出土した。小型丸底壺は、調整は不明瞭であるが、精製品としての形をとどめている。布留式甕は、口縁部が上外方に直線的にのびる点、ケズリが屈曲部にまで及ばず、ナデ仕上げでおえている点、また体部を比較的薄く仕上げている点などから考えて、布留式甕が粗製化する前段階に相当すると思われる。これらから、竪穴式住居跡１は布留式の中頃に比定できる。

竪穴式住居跡２の埋土中から、壺（５～８）や鉢（９）などが出土している。壺類は、広口壺（８）に代表されるように、第Ｖ様式中でも比較的古く位置づけられるものもあるが、鉢（９）は、わずかにふんばる脚部をもち、第Ｖ様式の後半に位置付けられると思われる。これらから、竪穴式住居跡２は第Ｖ様式の後半に位置付けられる。

竪穴式住居跡３は、住居跡廃絶後すぐに土器や石などの一括廃棄が行われた。これらは集石状遺構(14～26)として捉えている。この遺構からは、多くの甕が出土している。この中には、生駒西麓産の庄内甕(20～23)が出土している。これらは、屈曲部も明瞭であり、

端部もシャープにつまみあげている。したがって、この遺構は庄内式期に併行すると思われる。また、住居跡３の埋土中(30～36)と特殊ピット内(27)から土器が出土した。27は、脚部に「ハ」の字状に開く口縁部をもつ完形の器台である。これは、東海地方の編年の廻間Ⅰ式前半期に併行する器台に類似したものがあり、弥生時代後期末～庄内式初めに併行すると思われる。[注26]

竪穴式住居跡４の埋土中から、庄内式の末から布留式の初めに併行すると思われる高杯(37)が出土している。竪穴式住居跡５の床面(38～47・49・50)上で多数の土器が出土している。近江系の甕(38・43～46)や手焙り形土器(40)などがみられるが、生駒西麓産の庄内甕(42)も出土していることから、庄内式期に併行すると思われる。

土坑１から、広口壺(62・63)が出土し、第Ⅴ様式中頃～後半に相当する時期と思われる。

以上の結果、遺構の変遷は、竪穴式住居跡２・土坑１(弥生時代後期中頃～後半)→竪穴式住居跡３・５(弥生時代後期末～庄内式初め)→集石状遺構(庄内式中頃)→竪穴式住居跡４(庄内式末～布留式初め)→竪穴式住居跡１(布留式中頃)になると考える。

(岸岡貴英)

注１　調査参加者(敬称略・順不同)
矢野祐介、永井正勝、上原直子、坂口曜子、水戸英樹、長友朋子、岡　冬樹、藤澤地恵、赤坂希、藤居祐子、坂本真弓、国重佐夜子、杉本厚典、広瀬仁美、上田　勉、木村俊勝、松本健一郎、白河豊基、岩崎香織、尾田洋子、大島紀子、小田栄子、寺尾貴美子、丸谷はま子、西川悦子

注２　『京都府遺跡地図(第２版)』第４分冊　京都府教育委員会　1989

注３　「岩倉幡枝２号墳」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第12冊　(財)京都市埋蔵文化財研究所)　1993

注４　永田信一「京都における遺跡調査からみた諸問題」(『シンポジウム最終氷期から現在までの京都盆地』　地学団体研究会京都支部)　1982

注５　以下の文献を参考に付表1を作成した。なお、詳細については高橋　潔氏に御教示いただいた。
『昭和57年度京都市文化財調査概要』　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1985、92～93頁
『昭和59年度植物園北遺跡発掘調査概報』　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1987、114～5頁
『平成元年度植物園北遺跡発掘調査概報』　京都市文化観光局　1990
『植物園北遺跡現地説明会資料』　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1990
『ノートルダム女子大学構内発掘調査報告－植物園北遺跡－』　ノートルダム女子大学　1991
『植物園北遺跡現地説明会資料』　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1991
「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

注６　第49回京都市考古資料館文化財講座資料「植物園北遺跡の調査(第９次)」　1991

注７　竪穴式住居跡の床面に見られる土坑の内、東壁及び南壁でみられるものは、壁際の特殊ピットと規定されている。また、その検出位置・形状に規格性を見ることができる点から、さまざまな機能に関する推定がなされている(「青野西遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第４冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985、79～83頁)。この報告では、この壁際の特殊ピットを「特殊ピット」の名称で統一した。

注８　今回の分類については、以下の文献を参考にした。また、分類は國下多美樹氏に御教授いただいた(『京都府弥生土器集成』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989、84～128頁)。

注９　石野博信「考古学から見た古代日本の住居」(『日本古代文化の探求・家』　社会思想社) 1975

注10　笹森健一「竪穴住居の使い方」(『古墳時代の研究２　集落と豪族居館』　雄山閣)　1990

注11　注９に同じ

注12　西岡誠司「屋内高床部に関する一試論」『網干先生華甲記念－考古學論集－』　1987

注13　『播磨大中遺跡の研究』　播磨町教育委員会　1990、403～418頁

注14　『川除・藤の木遺跡』(兵庫県文化財調査報告第104冊　兵庫県教育委員会) 1992

注15　『芝崎遺跡』(兵庫県文化財調査報告第53冊　兵庫県教育委員会)　1988

注16　「西大路遺跡」(『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第23輯　(財)大阪府埋蔵文化財協会)　1988

注17　今回、近畿地方における変遷を提示するに際し、以下の方々にご教示賜った(順不同、敬称略)。
杉本源造、西田敏秀、森田克行、鐵　英記、清家　章、田中晋作、山下史朗、中川　渉、山田清朝、土井孝之、大野　薫、積山　洋、高橋　潔
また、第57図に提示した資料は以下の文献による。

1:『播磨東溝弥生遺跡』Ⅱ　兵庫県教育委員会　1968、15頁、図８住居址９実測図を一部改変

2:「名古山遺跡」『兵庫県史考古資料編』　兵庫県　1992、284・5頁、名古山遺跡Ｄ地区の竪穴住居跡

3:「越水山遺跡発掘調査報告書」(『文化財資料』第33号　西宮市教育委員会)　1990、29頁、第11図

4:「高津橋・岡遺跡」(『平成元年度埋蔵文化財専門職員研修会資料－竪穴住居址について－』兵庫県教育委員会)　1990、136頁、神戸市教育委員会西岡巧次氏作成

5:注14文献、125頁、第102図

6:「大垣内遺跡」(『兵庫県文化財調査報告書』第98冊　兵庫県教育委員会)　1991、27頁、第21図

7:注13文献、138頁、第63図

8:注17-6文献、12頁、第７図

9:注13文献、97頁、第47図

10:注13文献、106頁、第53図

11:注13文献、120頁、第57図

12:「東郷遺跡」(『埋蔵文化財調査報告』第３集　御坊市遺跡調査会)　1987、図面九

13:「大阪府枚方市藤阪東遺跡発掘調査概要報告」(『枚方市文化財調査報告』第23集　枚方市

教育委員会）　1990、41頁、図37

14:注13文献、117頁、第77図

15:『和気遺跡発掘調査概要報告書』　大阪府教育委員会　1985、第19図

16:「和爾・森本遺跡Ⅱ」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第五十八冊　奈良県立橿原考古学研究所）　1988、25頁、図９

17:注14文献、503頁、第484図

18:注16文献、23・24頁、第15図

19:注13文献、173頁、第76図

20:「北区上賀茂松本町の調査」(『第47回京都市考古資料館文化財講座資料』　(財)京都市埋蔵文化財研究所）　1991、７次調査遺構全体図その２(古墳時代前期)

21:「ベット？をもつ竪穴住居－阿倍野筋遺跡」(『葦火』第24号　(財)大阪市文化財協会）　1990、７頁、遺構配置図

22:『西庄地区遺跡発掘調査概報』Ⅱ　和歌山県教育委員会　1979、７頁、第６図

23:「高野遺跡」(『栗東町埋蔵文化財発掘調査1991年度』　(財)栗東町文化体育振興事業団）　1992、14頁、調査地遺構図

注18　松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」(『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会）　1991、次山　淳「布留式土器における精製器種の製作技術」(『考古学研究』40-2　考古学研究会）　1993、正確には次山氏は「分割成形技法」でなく、「付加法」の語を使用する。「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1993、53・54頁

注19　「六条山遺跡」(『奈良県文化財調査報告書』第34集　奈良県立橿原考古学研究所）1980、37頁　「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊　奈良県立橿原考古学研究所）　1986

注20　注13文献、485頁

注21　各端面を定義すれば以下のようになる。

脚部上端面：腰部以上が欠け落ちている脚部の上端に見られる破面・剝離面。

腰部上端面：腰部と杯部の境に見られる破面・剝離面。

注22　深澤芳樹「土器のかたち－畿内第Ⅰ様式古・中段階について」(『東大阪市文化財協会紀要』(財)東大阪市文化財協会）　1985、50・51頁

注23　先行研究に高橋　護「弥生土器の製作に関する基礎的考察」(『鎌木義昌先生古稀記念論集』）1988がある。800番などは研磨材の種類のことで、数字が大きいほど粒子は細かい。

注24　分割成形というより、杯部を脚部上端に付け加えて構築するような復原案にしたが、どちらでも解釈できると考えている。

注25　「鹿谷遺跡発掘調査概要」(前掲注18)

注26　「山中遺跡」(『愛知県埋蔵文化財発掘調査報告書』第40集　愛知県埋蔵文化財センター）　1992、121頁、第55図山中式土器編年表115番

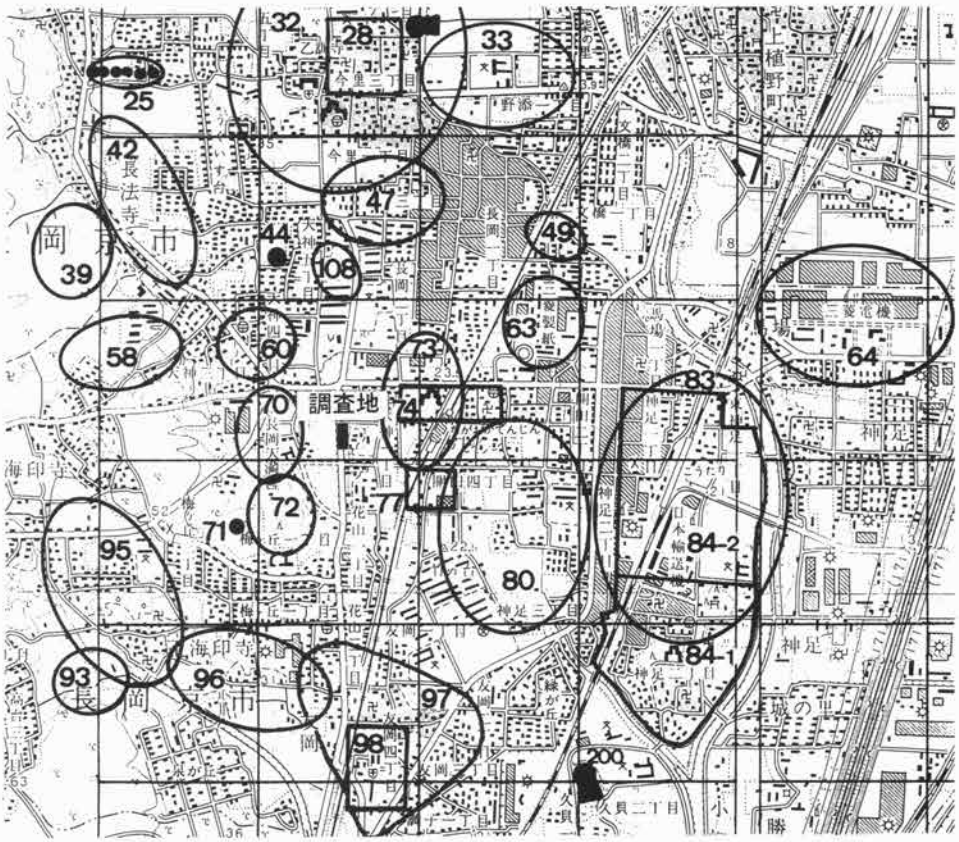
4．長岡京跡右京第440次発掘調査概要

NAGA OKA KYO ATO U KYO

（7ANKNZ-4地区）

1．はじめに

この調査は、都市計画道路石見下海印寺線（府道大山崎大枝線）の街路整備事業に伴うもので、長岡京市天神一丁目10-10ほかにおいて、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。石見下海印寺線は、これまで石見淀線と呼称されていたが、計画変更となり、名称も石見下海印寺線となった。（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターは、設立した昭和



第60図　調査地及び周辺遺跡位置図（1/25,000）
（『長岡京市遺跡地図』・『長岡京市史　資料編』から作成）

28. 乙訓寺	32. 今里遺跡	44. 今里大塚古墳	108. 宇津久志古墳群	60. 東代遺跡
70. 西陣町遺跡	71. 天神山古墳	72. 天神山遺跡	73. 開田城ノ内遺跡	74. 開田城跡
77. 和泉殿跡	80. 開田遺跡	96. 伊賀寺遺跡	97. 友岡遺跡	98. 鞆岡廃寺

56年と翌57年に石見淀線の埋蔵文化財調査[注1]を実施している。平成４年度には今回の調査地より北方約50mの地点で長岡京跡右京第411次調査[注2]を実施した。

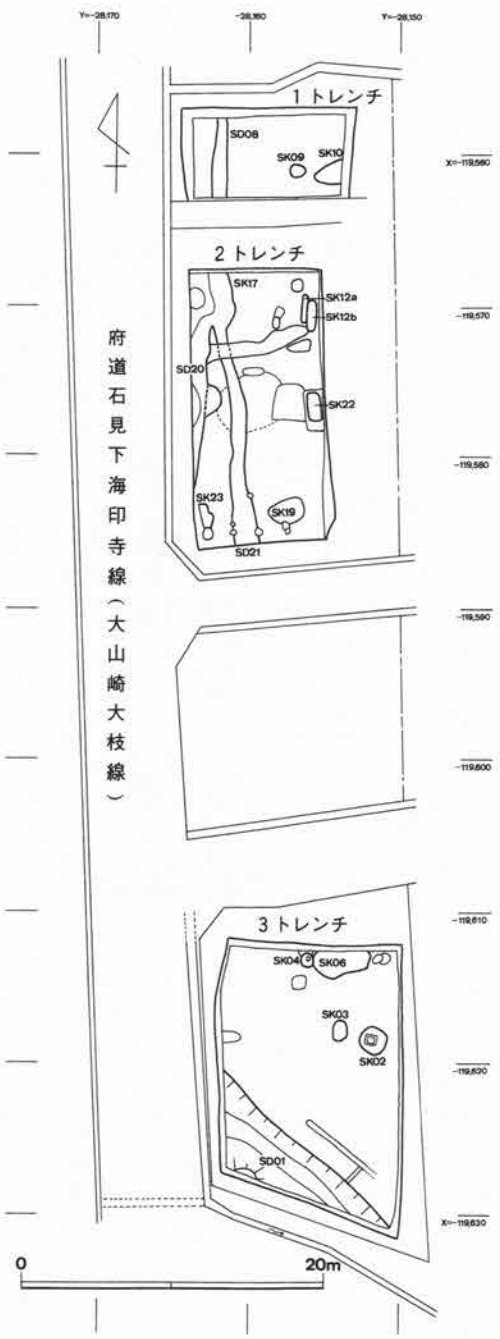
調査対象地は、従来の長岡京条坊復原案(平城京型)によれば右京五条三坊五町、新条坊復原案[注3](以下、新条坊案と略す)によれば六条三坊七町に当たり、調査地の北方を五条第二小路、新条坊案の呼称では六条条間小路が通り、西側を西三坊坊間小路が通る場所に当たる。また、調査地の東には弥生時代から中世の集落跡である開田城ノ内遺跡、中世の城館跡である開田城があり、長岡天満宮の東にある八条ヶ池の西方には平安時代の墳墓が発見された西陣町遺跡がある。このため、長岡京の条坊関連遺構・遺物や弥生時代から中世の集落跡などの所在が予想された。

現地調査は、調査第２課課長補佐兼調査第４係長平良泰久、主任調査員戸原和人、調査員石尾政信が担当し、平成５年７月26日に開始し、翌６年２月１日に終了した。調査面積は約430m²である。

調査に当たり、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係諸機関、学生諸氏[注4]などの協力を得た。なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が負担した。

2.　調　査　の　概　要

調査対象地は、八条ヶ池の東側で府道大山崎大枝線に沿った幅約15m・南北約80mの用地で、これまで民家などが建っていた。それ以前は水田・畑地であったが、造成が行われているため現在の標高



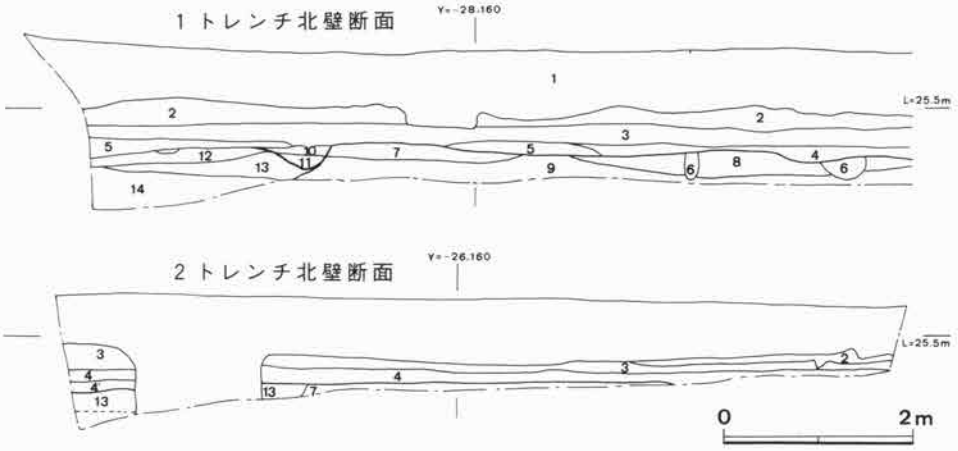
第61図　調査地平面図

は26m前後を測る。調査予定地の間に水路や住宅進入道路が通るため、北と南に合計３か所の調査トレンチを設定した。北から１・２・３と呼称する。重機によって盛り土層・旧耕作土などを取り除いた後、人力で掘り進んだ。

１トレンチでは、旧耕作土の下に茶褐色土、暗茶褐色土、暗茶褐色砂混入土が堆積し、少量の土器片が出土した。その下が「地山」と考えられる橙褐色土、橙褐色砂礫混入土、黄灰色土となる。これらに掘り込まれた土坑・溝跡がわずかに検出された。西側では礫層が堆積し、一時期は流路となっていたことが判明した。

２トレンチは、造成の時削られて一部で旧耕作土が残り、北部ではその下に茶褐色土、暗茶褐色土が堆積し、中央～南部では暗茶褐色土の下に褐色土の遺物包含層がある。包含層からは土師器・瓦器などの中世土器が出土した。その下は北部が橙褐色土、礫混入橙褐色土、中央～南部が黄褐色土、黄灰褐色土の「地山」層となる。「地山」を掘り込んだ土坑、溝跡、柱穴群、中世墓が検出された。「地山」面は中央から南西が若干高くなる。

３トレンチでは、旧耕作土の下に茶褐色土・褐色土などが堆積し、その下が「地山」と考えられる黄灰褐色土、黄灰色土となる。褐色土からは、古墳時代～中世の土器片が出土した。「地山」に掘り込まれた溝跡、井戸跡、土坑などを検出した。溝跡は、粘質土や砂礫層が堆積して流路跡と推定されるもので、多量の中世土器を包含していた。「地山」面は、ゆるやかに北方から南方に傾斜し、１・２トレンチと比較して30cm以上低い。このため柱穴などは、後世に削平された可能性が高く、ほとんど検出できなかった。以下に、主要な遺構・遺物について記述する。



第62図　１トレンチ・２トレンチ土層断面図

1.盛り土・攪乱　2.旧耕土　3.茶褐色土　4.暗茶褐色土　5.暗茶褐色砂礫混入土
6.暗褐色土　7.橙褐色土　8.橙褐色砂礫混入土　9.黄灰色土　10.暗褐色粘質土
11.暗褐色粘質土(砂礫混入)　12.暗褐色礫混入粘土　13.暗灰褐色砂礫　14.暗灰色砂礫

(1)**検出遺構**(第61・64～68図　図版第37～45)

a．奈良時代前期の遺構

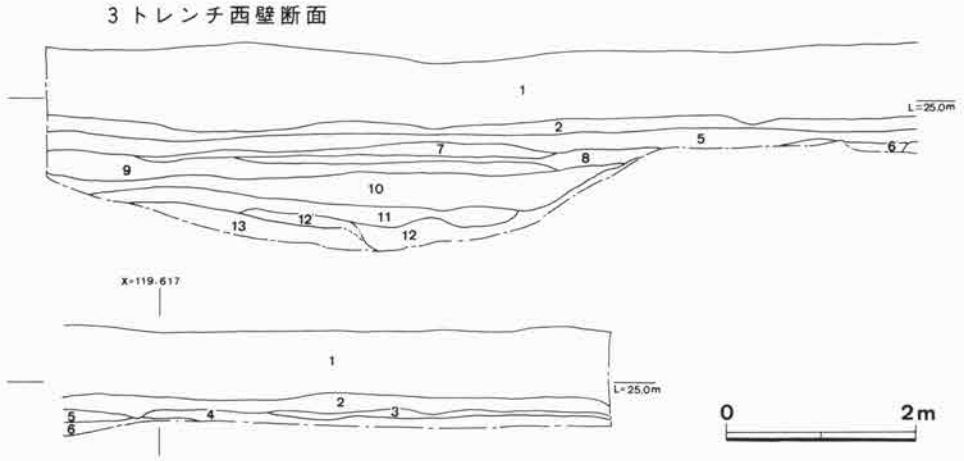
井戸跡ＳＥ44002　３トレンチで検出した平面形が一辺1.5～1.2mのいびつな隅丸方形を呈し、検出面からの深さ約45cmを測る。底面に幅約15cm・一辺70～80cmの方形にめぐる土色変化が確認されたので、井戸枠を伴う井戸跡と判断した。埋土から軒丸瓦、土師器甕、木材片などが出土した。出土遺物から７世紀末頃に埋められたものと考えられる。

土坑ＳＫ44003　井戸跡の西側で検出した長辺1.2m・短辺0.8～1.0mの隅丸長方形を呈する土坑である。検出面からの深さ約30cmを測る。埋土から土師器甕片などが出土した。出土遺物から、ＳＥ44002と同時期と考えられる。

土坑ＳＫ44004　３トレンチの北端で検出した一辺70～80cmを測る隅丸方形の土坑で、中央付近に直径約30cmの柱痕状の穴がある。柱穴状の底までは、検出面から60cmの深さがある。他に同様な土坑や柱掘形がないため確定はできないが、建物跡の柱掘形と考えられるものである。埋土から土師器細片が出土している。埋土や周辺の状況からＳＥ44002と同時期の可能性が高い。

b．平安時代の遺構

溝跡ＳＤ44021　２トレンチで検出した南北方向の素掘り溝である。幅0.8～1.2m・検出面からの深さ25cm前後を測る。南部は広がり、中央に凸みがあり、最大幅1.8mとなる。埋土から土師器、須恵器の細片や黒色土器が出土した。出土遺物からみて、平安時代中期



第63図　３トレンチ土層断面図

1.盛り土・攪乱　2.旧耕土　3.茶褐色土　4.褐色土(砂礫混入)　5.暗茶褐色土(砂礫混入)
6.黄褐色土(砂礫混入)　7.暗茶褐色砂混入土　8.暗茶褐色砂礫層　9.暗茶褐色砂層
10.暗茶褐色砂混入粘質土　11.暗茶褐色粘質土　12.暗茶褐色粘土(砂礫混入)
13.暗茶褐色砂礫層(径５cm以下)

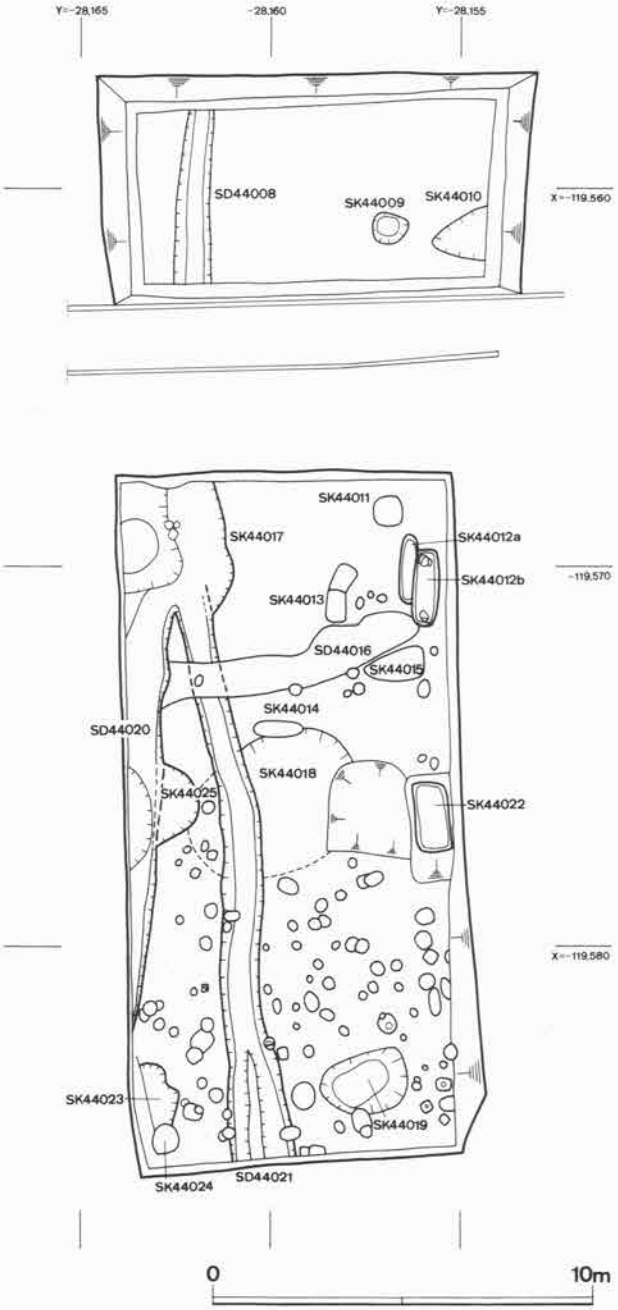
以降に埋まったものであろう。その後に、上層から柱穴などが掘り込まれている。

c．中世の遺構

中世墓ＳＫ44022　２トレンチで検出した長方形の墓壙で、長さ約1.8m・幅約0.9m、検出面からの深さ約45cmを測る。墓壙の北端では土師器皿が重なって出土した。その南では土師器皿足盤や棺材と推定される板片も出土した。埋土からは土師器皿類や砥石、転用硯も出土している。土師器皿類は、13世紀前半に比定できる。遺物の出土状況などから木棺に納められ、頭を北に向けて埋葬されたものと推定される。

溝跡ＳＤ44001　３トレンチ南端で検出した北西－南東方向の溝跡である。幅４m以上、検出面からの深さ約90cmを測る。溝内に堆積した粘質土、砂礫層の状況から数回の流れ込みがあったことがわかる。上層からは大量の中世土器類(土師器皿、瓦器椀など)や瓦類、石製品などが出土した。遺物は、13世紀後半～14世紀前半のものが多く見られる。また、弥生時代の石鏃も砂礫層に混入していた。

溝跡ＳＤ44007　ＳＤ44001に平行する浅い溝で、幅約30cm・深さ約５cmを測



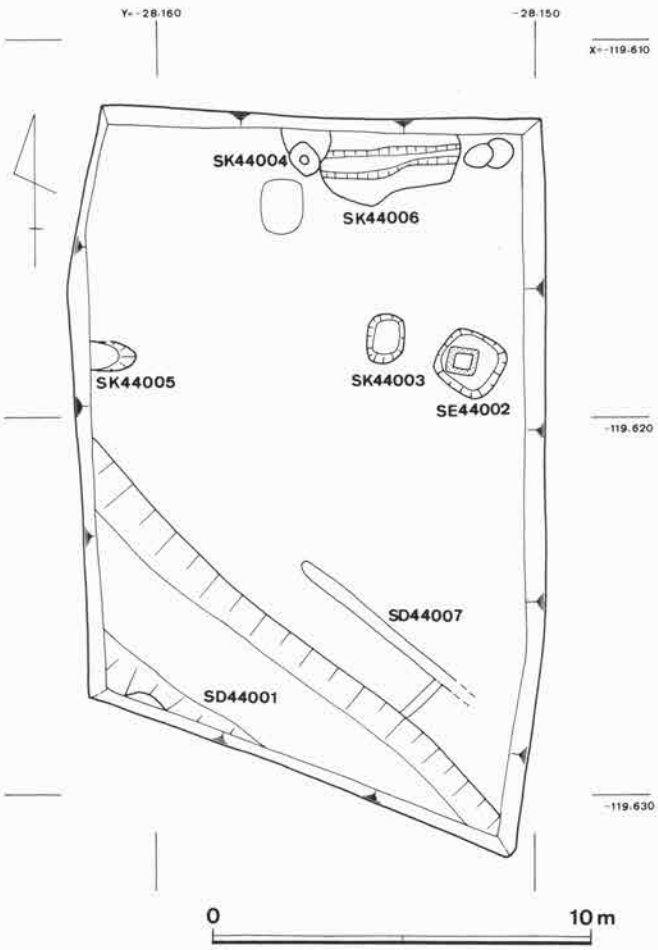
第64図　１・２トレンチ遺構平面図

る。溝の途中にＳＤ44001と連絡する同様な溝が取り付く。水田下層で一般によく見られる素掘りの溝と酷似したものであるが、水田耕作に係わる溝が検出されていないので、ＳＤ44001に排水するための施設と考えられる。

土坑ＳＫ44017　２トレンチ北西隅で検出した不定形土坑で、溝跡ＳＤ44021より新しい。西及び北西を肥留めなどで攪乱されて不明な点が多いが、南北3.5m以上・東西1.5m以上、検出面からの深さ約25cmを測る。埋土に人頭大の石や平瓦片、土師器片などが含まれていた。

土坑ＳＫ44018　２トレンチの中央で検出した暗褐色土が堆積する皿状の土坑である。暗褐色土の範囲から径3.5～4.5mを測る長円形土坑と推定できる。最大の深さ約25cmを測る。埋土から土師器、瓦器が出土した。出土遺物には14世紀代のものが多い。

土坑ＳＫ44019　２トレンチ南部で検出した長円形の土坑で、東西約2.4m・南北約1.6m、検出面からの深さ約35cmを測る。埋土から少量の土師器、瓦器片などが出土した。



第65図　３トレンチ遺構平面図

溝跡ＳＤ44020　２トレンチ西側で検出した南北方向の溝である。北は攪乱され不明な点があるが、１トレンチのＳＤ44008に続く可能性が高い。幅１m以上、検出面からの深さ20～30cmを測る。約12mにわたって検出し、ほぼ中央に土坑状の凹みがある。その部分は、検出面から約70cmの深さがあり、溝とは堆積層が異なるので、溝より古い時期の遺構があったと考えら

れる。そこからは遺物が出土しなかった。溝からは少量の瓦器･土師器･瓦片が出土した。

土坑ＳＫ44023　２トレンチの西南隅で検出した不定形土坑である。南北約1.7m・東西１m以上で、検出面からの深さ約15cmを測る。埋土から土師器や瓦器の細片、瓦類とともに溶融塊や溶壁片がまとまって出土した。溶融塊は、ＳＫ44024やその周辺、及びＳＤ44021の上面からも出土しているので、中世のある時期に混入したのであろう。

土坑ＳＫ44024　ＳＫ44023に接する径約70cmの円形土坑である。検出面からの深さ約30cmを測る。溶融塊・溶壁片などが出土した。

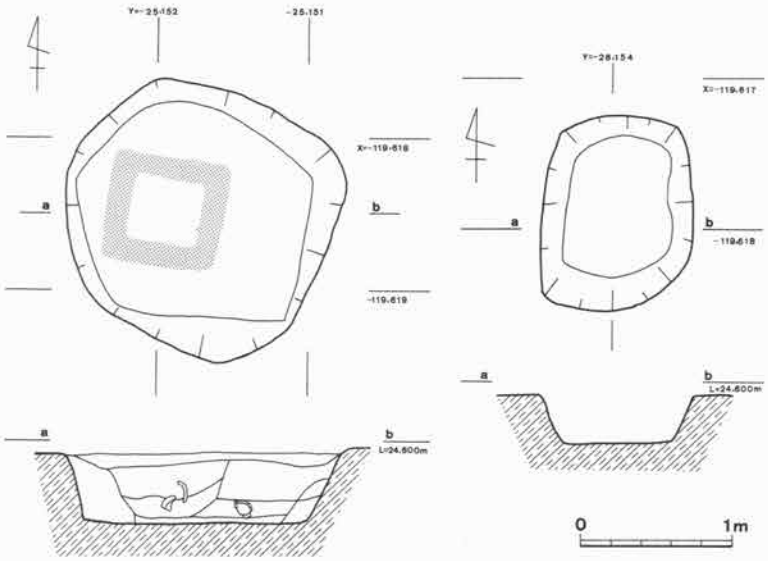
土坑ＳＫ44025　ＳＤ44020に接する半円形の土坑である。南北約2.3m・東西1.1m、検出面からの深さ約20cmを測る。ＳＤ44020と同様の埋土が堆積していた。

溝跡ＳＤ44016　２トレンチで検出した東西方向の溝である。幅１m前後、検出面からの深さ５～10cmを測る。埋土には瓦器片や土師器が混入していた。

土坑ＳＫ44015　ＳＤ44016の東に接する長円形の土坑である。東西約1.6m・南北約0.8m、検出面からの深さ５～10cmを測る。少量の瓦器片などが出土した。

土坑ＳＫ44014　ＳＫ44018を掘り込んだ、東西約1.4m・南北約0.5mの長円形の土坑である。検出面からの深さは約20cmを測る。少量の瓦器片、土師器片が出土した。

土坑ＳＫ44013　ＳＤ44016の北に接する長方形が連結したような土坑である。南が長さ約90cm・幅約50cm、検出面からの深さ約15cmを測り、北が長さ約80cm・幅約50cm、検出面からの深さ約20cmを測る。南の埋土から瓦器片がわずかに出土した。



第66図　井戸跡ＳＥ44002・土坑ＳＫ44003実測図

土坑ＳＫ44012　ＳＤ44016の北東に近接した南北方向の長方形の土坑である２つが接しており、西をａ、東をｂとした。ａは、南北約1.8m・東西約40cm、検出面からの深さ約20cmを測る。土師器片がわずかに出土した。ｂは、南北約２ｍ・東西約60cm、検出面からの深さ35cmを測る。底面の北と南に表面が平らな一辺20～30cmの河原石を置く。石の中心間距離は約1.5mを測る。両石の上面はほぼ同じ高さであり、遺物もほとんど出土しないので、埋葬施設ではなく、建物跡の基礎と推定されるものである。

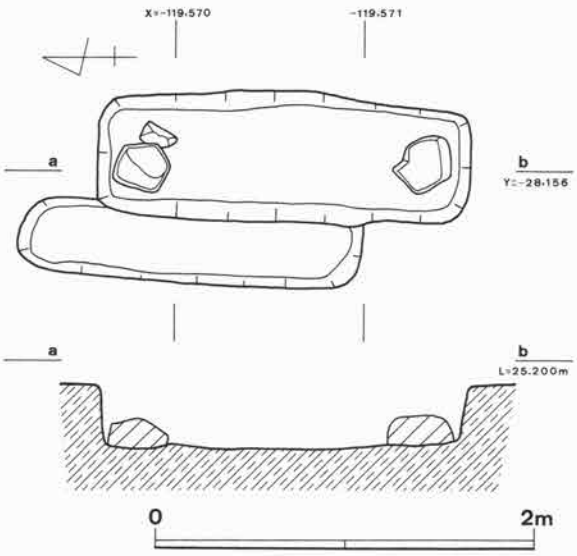
溝跡ＳＤ44008　１トレンチの西側で検出した南北方向の溝である。幅0.7～１ｍ、検出面からの深さ20～30cmを測る。埋土から土師器片、瓦器片が出土した。２トレンチのＳＤ44020に続くものであろう。

土坑ＳＫ44010　１トレンチの東端で検出した土坑である。東壁に断面が確認できるので、東西1.8m以上・南北1.5m以上で、深さ10cm前後を測る。埋土から瓦器細片などが出土した。

２トレンチでは、溝跡や土坑以外に円形、隅丸方形の柱穴を検出したが、建物跡に復原できるものは確認していない。柱穴には、底に河原石を置くものが数か所確認された。これらの柱穴の半数以上で、土師器片や瓦器片が出土しているので、柱穴のほとんどが中世のものであろう。

ｄ．時期不明の遺構

土坑ＳＫ44005　３トレンチの西端で検出した長円形の土坑である。東西1.2m以上・南北約70cm、検出面からの深さ約30cmを測る。遺物包含層である褐色土と暗灰粘質土が埋土である。遺物は出土していないが、包含層との関係から中世以降のものと判断される。



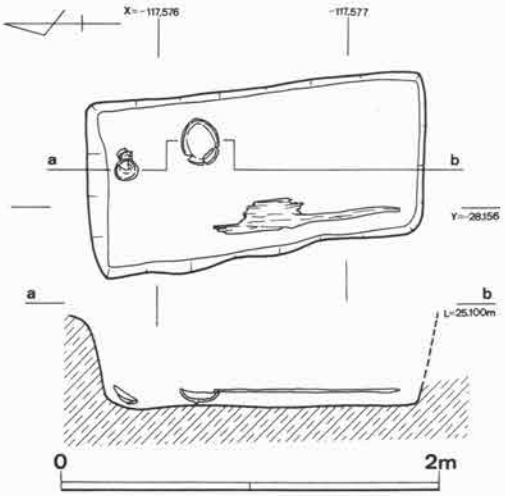
第67図　土坑ＳＫ44012a・b実測図

土坑ＳＫ44006　３トレンチの北端で検出した不定形土坑である。東西約3.7m・南北1.7m以上で、東西方向に一段下がる部分があり、東西約3.6m・幅30～50cm、検出面からの深さ約15cmを測る。この土坑の東にも浅い円形の土坑があるが、遺物はほとんど出土していない。

土坑ＳＫ44009　１トレンチで

検出した東西１ｍ・南北0.8ｍの円形土坑である。検出面からの深さ約30cmを測る。黄灰色土や淡青灰色土の埋土であったが、遺物は出土しなかった。

土坑ＳＫ44011　２トレンチの北部で検出した一辺約80cmの隅丸方形の土坑である。検出面からの深さ約20cmを測る。砂礫混じり褐色土の埋土からは土師器細片がわずかに出土しただけである。



第68図　中世墓ＳＫ44022実測図

(2)**出土遺物**(第69～74図　図版第46～48)

ａ．弥生時代の遺物(第73図)

溝跡ＳＤ44001の砂礫層から中世土器とともに石鏃(１)、剝片(２)が出土した。

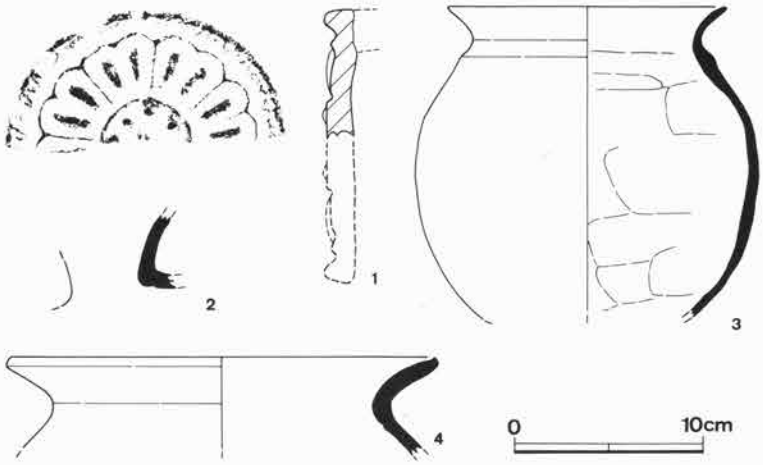
１は、サヌカイトを石材とする大形の凸基式の石鏃である。両面加工であり、先端部を欠損するが、長さ4.9cm・幅２cm・厚さ5.5mm・重さ4.85ｇを測る。

２は、サヌカイト製の剝片である。長さ９cm・幅4.8cm・厚さ1.1cm・重さ39.5ｇを測る。石器以外に時期がわかる遺物は伴っていないが、上流からの流入品で弥生時代の所産と判断できるものである。

ｂ．奈良時代前期の遺物(第69図)

井戸跡ＳＥ44002出土遺物　この井戸跡から軒丸瓦(１)、須恵器提瓶(２)、土師器甕(３)などが出土した。

１は、約２分の１が残存する複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房が大きくやや高い凸形で、蓮子を１＋８に配するものと推定できる。蓮弁は、弁端を切り込み屈曲させた弁中央の凸線によって弁面を二等分し、それぞれに大きく丸みをもった肉薄の子葉を配し、間弁を欠く一重花を連続させる。外区との境界に浅い溝をめぐらし、外縁は内に傾斜する面に凸線鋸歯文を飾る三角縁となる。胎土に赤褐色粒子を含み、一辺５mmの石片が１点みとめられるが、砂粒はほとんどなく密である。焼成はやや甘く軟質で、全体に明茶褐色を呈する。丸瓦との接合方法は、瓦当外周をやや凹ませて丸瓦を接合するが、接合部裏側にはほとんど粘土を充填しない。この軒丸瓦は、川原寺型式の系譜を引くもので、７世紀末頃の所産であろう。



第69図　井戸跡ＳＥ44002・土坑ＳＫ44003出土遺物実測図・拓影
1.軒丸瓦　2.須恵器平瓶　3・4.土師器甕
1～3.ＳＥ44002出土　4.ＳＫ44003出土

乙訓地域では、乙訓寺出土の軒丸瓦ＯＭ－５Ａ(注5)(中房に１＋２＋８の蓮子を配し、外縁内面に凸線鋸歯文を飾る)、同ＯＨ－５Ｂ(中房に１＋８の蓮子を配し、外縁には鋸歯文を飾らない)に酷似するが、どちらでもなく、両者の要素を合わせ持ったものである(中房に１＋８の蓮子を配し、外縁内面に凸線鋸歯文を飾る)。

２は、注口部と把手接合痕をとどめる須恵器堤瓶である。体部を欠くため全体は不明であるが、７世紀末頃の所産であろう。胎土は少量の石英などの石粒を含むが、全体に良好であり、焼成もよく淡青灰色を呈する。

３は、外面が摩滅して不明な点があるが、内部内面にはヘラ削り痕が認められる。口縁部はゆるく「く」の字に折り曲げ、口縁端部は丸くおさめる。胎土には赤褐色粒子や黒色粒子を多く含み、石英などの砂粒も混入する。焼成はやや甘く軟質で、内外面とも明赤褐色～淡褐色を呈する。復原口径14.6cm・残存高16.5cmを測る。形態の特徴からみて、７世紀末頃の所産であろう。

土坑ＳＫ44003出土遺物(第69図)　ここからは少量の土師器、須恵器片が出土した。形態のわかるものは土師器甕(４)のみである。４は、摩滅が著しく調整などは不明である。口縁部は「く」の字に折り曲げ、口縁端部はわずかにつまみ上げる。復原口径は22.6cmを測る。胎土には赤褐色粒子、黒色粒子を含み、石英などの砂粒も混入する。焼成は、やや甘く軟質で赤褐色～淡褐色を呈する。ＳＥ44002出土の甕とほぼ同時期のものであろう。

ｃ．長岡京期の遺物(第74図)

３トレンチの遺物包含層から古墳時代～中世の遺物とともに出土した。器種のわかるも

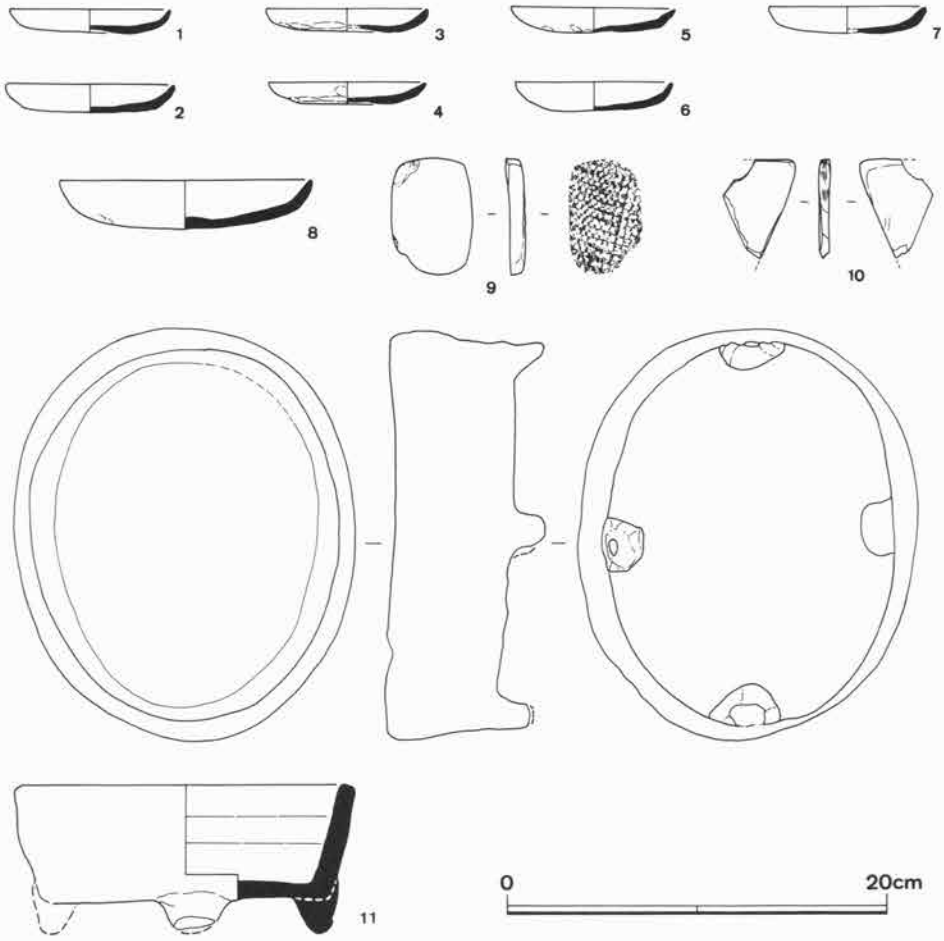
のに須恵器蓋(1・2)、同壺Mがある。1は、復原口径18.8cmとなる。胎土に石英などの砂粒を少量含み、焼成は良好で色調が暗灰色を呈する。3は、底径4.45cmを測る。

d．平安時代の遺物(第74図)

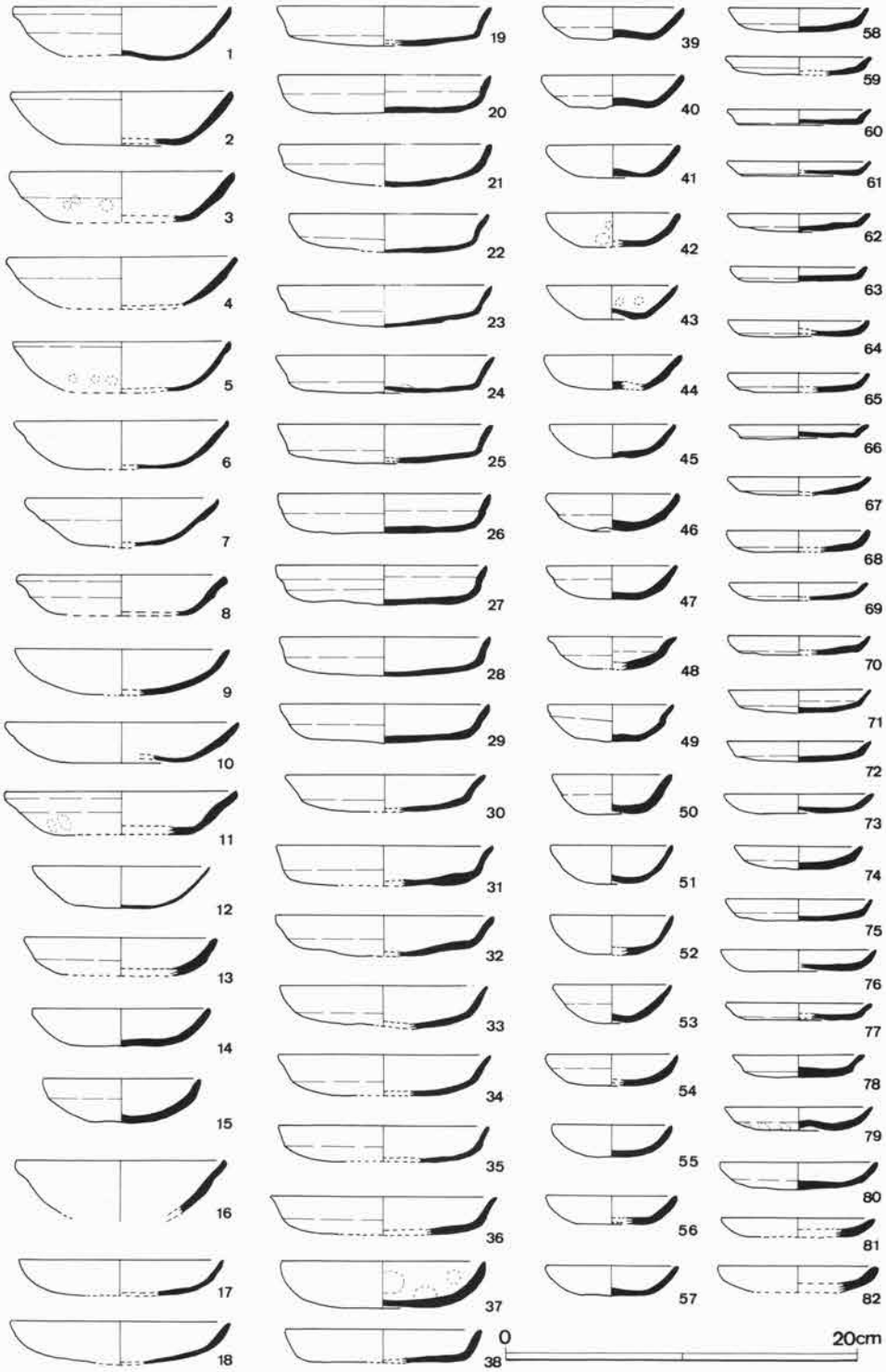
この時期の遺物には、3トレンチ遺物包含層から出土した緑釉陶器素地(4)、溝跡SD44021から出土した黒色土器椀(7)がある。4は、底径7.5cmを測る。胎土は精良で、焼成がよく、色調は暗青灰色を呈し、洛西窯の製品と推定されるものである。7は、磨耗して不明な点が多いが、復原口径14.2cm・器高5cm・底径5.5cmを測る。胎土に少量の砂粒を含むが精良である。焼成はよく、色調は淡黒色を呈する。

e．中世の遺物(第70～72図)

中世墓SK44022出土遺物(第70図)　ここからは土師器小皿(1～7)、同中皿(8)、転



第70図　中世墓SK44022出土遺物実測図
1～8.土師器皿　9.須恵器転用硯　10.砥石　11.土師器四足盤

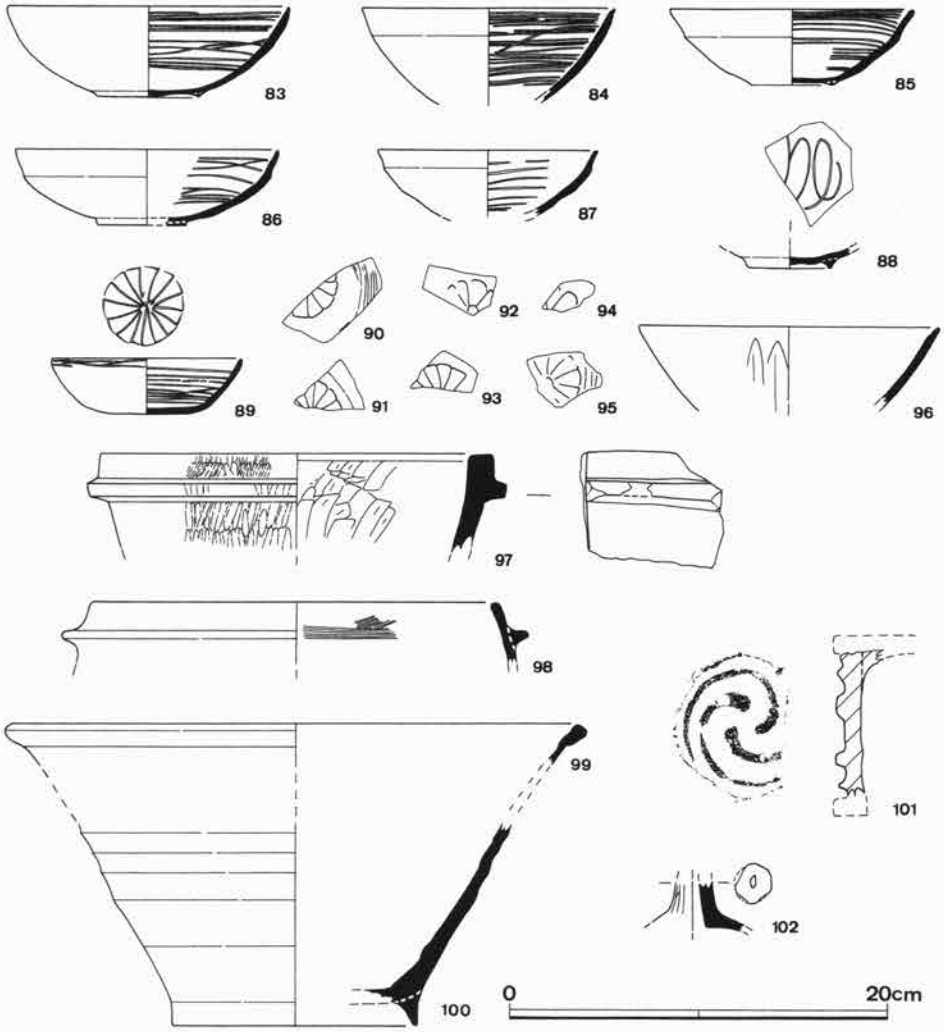


第71図　流路跡ＳＤ44001出土遺物実測図(1)　　1～82.土師器皿

用硯(9)、砥石(10)、土師器皿四足盤(11)などが出土している。

1～7は、内面はヨコナデ、口縁部外面に一段ナデを施すもので、底部外面には指オサエ痕が残るものがある。また、3・4の口縁端部に煤が付着するので燈明皿として使用されたことがわかる。これらは、口径8.3～8.8cm・器高1.2～1.5cmを測る。胎土に赤褐色粒子や黒色粒子、少量の砂粒を含み、焼成は良好で淡灰褐色～淡茶褐色を呈する。

8も内面ヨコナデ、口縁部外面に一段ナデを施し、底部外面に指オサエ痕がみられる。復原口径13.3cm・器高2.6cmを測る。胎土に赤褐色粒子や直径5mm程度の石粒を含み、焼成は良好で表面が淡茶褐色～橙褐色、断面が灰色を呈する。これらの土師器皿類は、平安



第72図　流路跡ＳＤ44001出土遺物実測図・拓影(2)

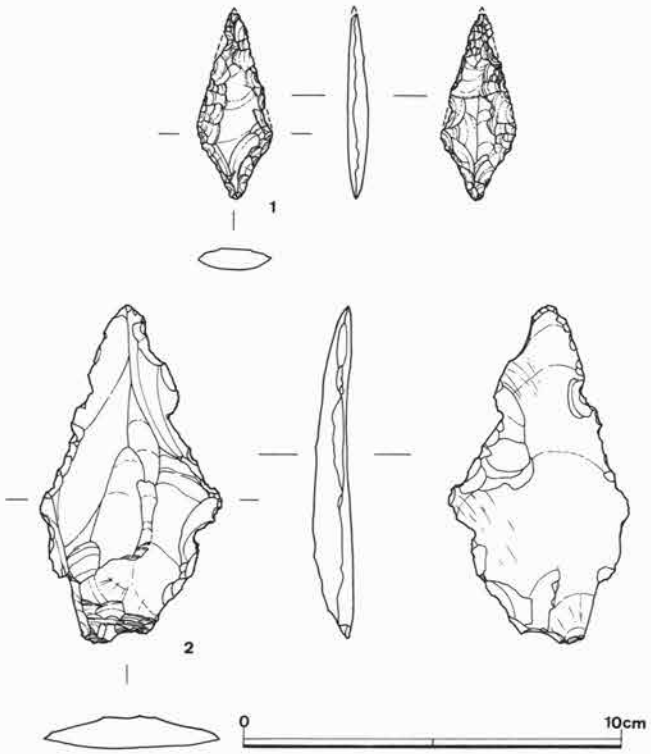
83～95.瓦器椀　96.青磁椀　97.滑石製石鍋　98.瓦質羽釜　99・100.須恵器鉢
101.軒丸瓦　102.土師器高杯脚

京出土資料[注6]と比較すれば13世紀前半頃の所産と考えられる。

9は、須恵器の体部片を隅丸長方形に加工した転用硯である。側面はていねいに研磨されているが、背面にはタタキ目を残す。表面はよく使用され滑らかである。表面及び側面には墨が残っている。縦5.25cm・横幅4.25cm・厚さ8.5mmを測る。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で堅緻であり、裏面は淡灰褐色を呈する。

10は、明るい淡灰色を呈した珪質粘板岩質の石材を使用した砥石である。2側面に加工痕をとどめるのみで元の形は不明である。表裏両面が磨滅している。現存長5.2cm・厚さ3.8～5.1mmを測る。

11は、近世の火桶に似た形態のほぼ完形品の土師器四足盤である。楕円形の容器の四隅に脚を貼り付けている(1脚は欠損している)。長径20.9cm・短径16.7cm・器高7.9cmを測り、小判形容器の器壁は厚く10mm前後ある。器壁には粘土紐を積み重ねた痕がみとめられ、ハケ目が残る。胎土は粗く2～5mmの石粒を多量に含み、表面は荒れている。焼成は普通で、全体の色調が茶褐色～灰褐色を呈するが、底部外面には黒色～暗灰色の焼けむら(黒斑)がみられる。中世墓などの出土遺物によくみられる土師器三足盤[注7]が変化したものと考えられる。京都府内では同類の出土例は知られていない。



第73図　流路跡ＳＤ44001出土石器実測図
1.石鏃　2.剝片

溝跡ＳＤ44001出土遺物(第71～73図)　この遺構から土師器皿類(1～82)、瓦器椀(83～95)、滑石製石鍋(97)、瓦質羽釜(98)、須恵器鉢(99・100)、軒丸瓦(101)、石鏃など多量の遺物が出土した。

土師器皿は、口径12～13cm・器高2.5～3cmを測る杯形でやや深いもの(1～6)、口径12～13cm・器高2～2.5cmのもの(8～9)、椀形のも

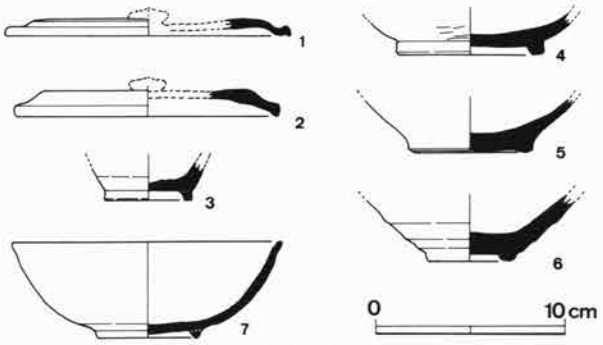
の(7・12)、それらより若干小さいもの(13～15)などが少量混じるが、平安京出土土師器皿の分類(伊野分類[注8])によればAタイプの中形のもの(17・18)、同小形のもの(58～80)、底部が内に凹むGタイプ(39～57)が大半を占める。Aタイプは、両面及び口縁部外面をヨコナデするもので、底部及び口縁部下半に指オサエ痕をとどめる。ヨコナデの強弱により口縁部が外反するもの、直線的なものがある。Gタイプは、内面及び口縁部外面にヨコナデを行い、底部が内に凹むものとやや浅く平担なもの(54～57)がある。色調はほとんどが褐色系で淡褐色・淡黄褐色・淡赤褐色があり、赤褐色粒子・黒褐色粒子を含む(1～80)。81と82は、色調が淡黄褐色でやや砂質の胎土である。

これらの土師器皿類は、右京第411次調査で検出した井戸跡SE41110出土の皿類と比較すれば、いわゆる白色系の土器をほとんど含まないという差違がある。平安京出土資料からみて、13世紀後半～14世紀前半の所産であろう。

瓦器椀には、高台の付くもの(83～88)、無高台のもの(89)がある。高台の付くタイプは内面に粗い暗文を施すが、外面は口縁部上半をヨコナデ、下半は指オサエ痕が残り、未調整である。底に断面三角形の高台を貼り付ける。89は、底が平担で底部内面に菊華文様の暗文を施す。口縁部内面には、下から上方に平行する2条のヘラケズリを5か所に行い、その後に粗い暗文を施す。外面にヘラで掻いたと思われる痕跡がある。口径10.2cm・器高3.1cmを測り、胎土に黒粒子を含み、焼成は良好で一部に灰白色の部分があるが、色調は黒灰色を呈する。焼け歪みがほとんどなく、全体に滑らかであることから型づくりされたものであろう。これと同様なものが平安京や京大構内遺跡[注9]などで出土している。また、淀川・木津川河床の採集資料[注10]にも同様なものがある。13世紀後半～14世紀前半のものであろう。90～95も89と同タイプの瓦器椀片である。

96は、口縁部外面に蓮弁を陰刻した青磁椀である。胎土は精良で濃青緑色に発色した釉がかかる。

97は、滑石製石鍋である。口縁部直下に断面が台形を呈する張り出しの小さい鍔を削り出すもので、木戸雅寿氏の分類[注11]に従えば、Ⅲ－a－2類に相当する。内外面にノミ痕が明瞭に残る。復原口径は20.8cmとなる。破損した石鍋片の口縁部上端から直角に擦



第74図　包含層出土遺物実測図
1・2.須恵器蓋　3.須恵器壺　4.緑釉陶器素地
5.白磁椀　6.陶器椀　7.黒色土器椀
1～6.3トレンチ包含層出土　7.2トレンチSD44021出土

り切り、幅約７cm×６cmの方形に加工したもので、温石として利用したのであろう。

98は、瓦質土器の羽釜片である。胎土は精良、焼成も良好で外面は淡黒色を呈する。復原口径は21.4cmとなる。

99・100は、同一個体と推定される須恵器鉢である。体部はロクロ挽きによる凹凸が明瞭で、口縁端部は外側に肥厚させる。底部に断面三角形の高い高台が付く。胎土に石英などの砂粒が多く含まれ、焼成がやや甘く軟質で気泡がみられ、色調は淡灰褐色を呈する。復原口径31cm・同底径13cmとなる。

101は、巴文軒丸瓦片である。巴は、左巻きで頭から尾にかけて幅の変化は小さい。外縁を欠損するが、基底部がわずかに残ることから、珠文はないものと判断される。胎土に石英などの砂粒を多く含み、焼成はやや甘く軟質で、色調は淡青灰色を呈する。

102は、土師器高杯の脚部と推定されるものである。

そして、３トレンチ遺物包含層から白磁椀(第74図５)、陶器椀(第74図６)などが出土している。陶器椀は、16世紀のものであろう。

３．まとめ

今回の調査地はほぼ平坦地で、畑地などの旧地表面は北が高く、南が低くなっている。南方の３トレンチは、中世以降に大きく削平されたことが判明した。２トレンチでは柱穴群が検出されたが、３トレンチでは削平のため消滅したものと考えられる。長岡京期の遺構は見つからなかったが、いくつかの新しい資料を得ることができた。以下に、簡単に調査成果を列挙する。

①３トレンチでは、地中に深く掘り込まれた遺構がわずかに残存するだけであった。このうち、７世紀末頃に埋められた井戸跡ＳＥ44001からは、乙訓寺出土の軒丸瓦に酷似した瓦が出土して注目された。乙訓地域の長岡京以前の寺院である乙訓寺と鞆岡廃寺は、第60図にみられるように、南北方向の一直線上に並びその距離は約2.2kmある。そして、両者とも西山沿いの段丘上に位置するという共通点をもつ。その中間点となる当調査地から７世紀末頃の軒丸瓦が発見された意義は大きい。一つは、寺院に関連する施設の所在が考えられること。もう一つは、両寺院を結んで古山陰道を相定する考え方があり、定点となる遺構が追加されたことであろう。

②右京第411次調査で検出された西三坊坊間小路東側溝の可能性がある溝跡ＳＤ41108の中心座標(Ｙ＝－28,163.000)にあたる場所では、長岡京期の遺構は検出されなかった。２トレンチで検出された南北溝跡ＳＤ44020からは中世土器が出土した。長岡京期の遺構は、削平され消滅したものと判断される。３トレンチでは、長岡京期の遺物が出土しているの

で、かつては遺構が存在していたことがうかがえる。

③2トレンチの土坑ＳＫ44023・24やその周辺で溶融塊・溶壁片が出土し、同一町内になる右京第109次調査[注12]では、溶壁片やフイゴ羽口などが出土している。そして東方の右京第441次・447次調査[注13]では長岡京期の鋳造工房跡が発見され、10基以上の炉跡、２基の炭焼き窯跡があり、多量の炉壁・鉄滓などが出土している。これらから右京六条三坊二町(新条坊では五条三坊四町)を中心として、六条三坊二・七町(五条三坊四・五町)にまたがる長岡京期の大規模な官営鋳造工房が想定されるようになった。

④2トレンチで検出された中世墓ＳＫ44022は、建物跡に復原できるものはなかったが、周辺に多数の柱穴群が存在するので、いわゆる屋敷墓にあたるものである。ここから出土した土師器皿類は、小皿が合計７枚、中皿１枚で皿類だけとってみれば、右京第23次調査[注14]で発見された平安時代後期の土壙墓ＳＸ2306から出土した土師器小皿７枚、中皿１枚と同量であり、当時の埋葬方法の傾向を示すものとして重要である。ＳＸ2306では皿類のほかに鉄製紡錘車が、ＳＫ44022では転用硯・砥石・三足盤があり、これらは埋葬者の性格を考えるうえで貴重な資料となろう。

⑤3トレンチで検出された北西方向から南東方向の溝ＳＤ44001は、多量の遺物を包含するとともに、砂礫層などの堆積状況から数回の流れが推定されるものである。溝の方向(西側)には八条ヶ池、長岡天満宮の裏側の丘陵に、開析谷を利用したため池があり、ＳＤ44001はこの開析谷に連続する流路跡と考えられる。八条ヶ池が造られた江戸時代前期にはすでに埋没して、池からの放水路及び用水路は別の位置に造ったのであろう。また、Ｃトレンチがほかより30cm以上削られ低くなっているのも、八条ヶ池の造営と無関係でないのかもしれない。ちなみに、溝跡ＳＤ44001の南側に現在の水路がある。

(石尾政信)

注１　山口　博ほか「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第９冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984

注２　石尾政信「長岡京跡右京第411次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

注３　山中　章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第４号)　1992

注４　調査に参加・協力していただいた方々に記して謝意を表する(敬称略・順不同)
飛田浩一、小牧　勲、宮本純二、木戸久美子、小谷加奈子、水谷美智代、山本弥生、倉辻万里子、明日礼子、長尾美恵子、内藤チエ、西村敏子

注５　中尾秀正「乙訓寺の瓦」(『長岡京古瓦聚成・向日市埋蔵文化財調査報告書』第20集　向日市教育委員会)　1987

注６　伊野近富「かわらけ考」（『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注７　小池　寛・荒川　史「京滋バイパス関係遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第７冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987、第４章

注８　注６と同じ。

注９　五十川伸矢「京都大学本部構内ＡＸ28Ｅの発掘調査」（『京都大学構内遺跡調査年報　昭和56年度』　京都大学埋蔵文化財センター）　1988　ほか

注10　近江俊秀・森　　隆「淀川・木津川河床の採集資料～６．楠葉型瓦器椀・小皿～」（『中近世土器の基礎研究』Ⅸ　日本中世土器研究会）　1993

注11　木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」（『中近世土器の基礎研究』Ⅸ　日本中世土器研究会）　1993

注12　小田桐　淳「長岡京跡右京第109次（７ＡＮＫＮＺ地区）調査概報」（『長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度』　(財)長岡京市埋蔵文化財センター）　1983

注13　「長岡京跡右京第447次発掘調査現地説明会資料」　長岡京市教育委員会　1993

注14　「塚本火葬墓・開田遺跡」（『長岡京市史　資料編(一)』　長岡京市）　1991、573～574頁

5．山城国府跡第30次発掘調査概要

YAMA SHIRO KOKU FU ATO

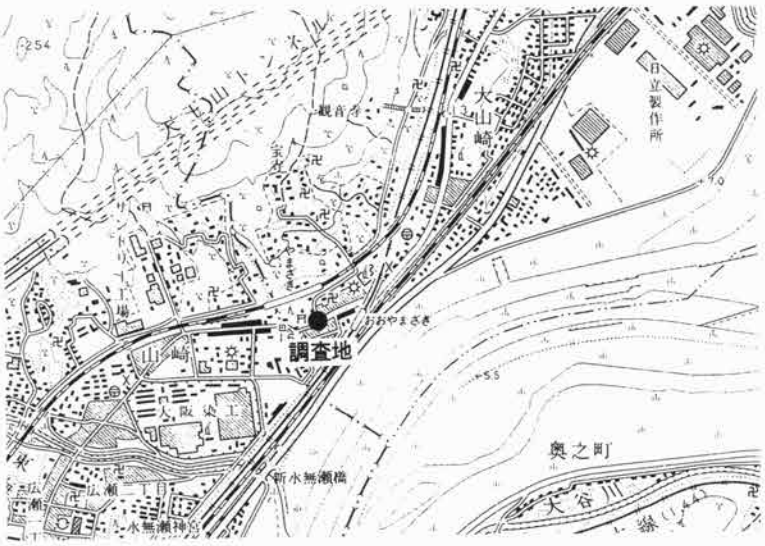
(7XYS'NT-4地区)

1．はじめに

この調査は、府道樫原高槻線の道路改良工事に伴うもので、乙訓郡大山崎町大山崎西谷21-3において、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。調査場所は、ＪＲ大山崎駅南約80ｍの離宮八幡宮境内の南東隅で、府道樫原高槻線(通称西国街道)がクランク状に折れるところである。

調査対象地は、西国街道(古山陽道)に接し、平安時代の第４次山城国府跡のほか、河陽離宮・相応寺・山崎院や山崎駅など、平安時代にこの地に造られた重要施設の推定地にあたる。『行基年譜』にみられる山崎橋もこの付近に造られたと考えられている。今回の調査は、これらの遺跡に関連する遺構・遺物の検出を目的とした。

現地調査は、調査第２課課長補佐兼調査第４係長平良泰久、主任調査員戸原和人、調査員石尾政信が担当し、平成５年10月20日に開始し、12月３日に終了した。調査面積は、約60㎡である。調査にあたって、大山崎町教育委員会、大山崎町歴史資料館などの関係諸機関、離宮八幡宮、学生諸氏(注1)などの協力を得た。記して感謝する。なお、調査に係る経費は、京都府乙訓土木事務所が負担した。

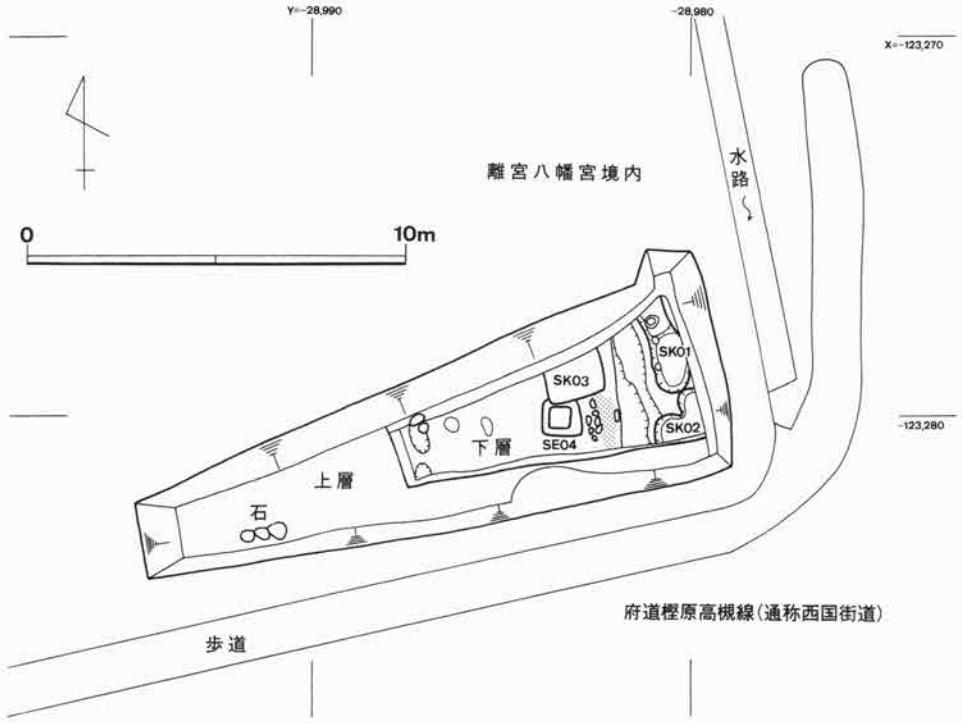


第75図　調査地位置図(1/25,000)

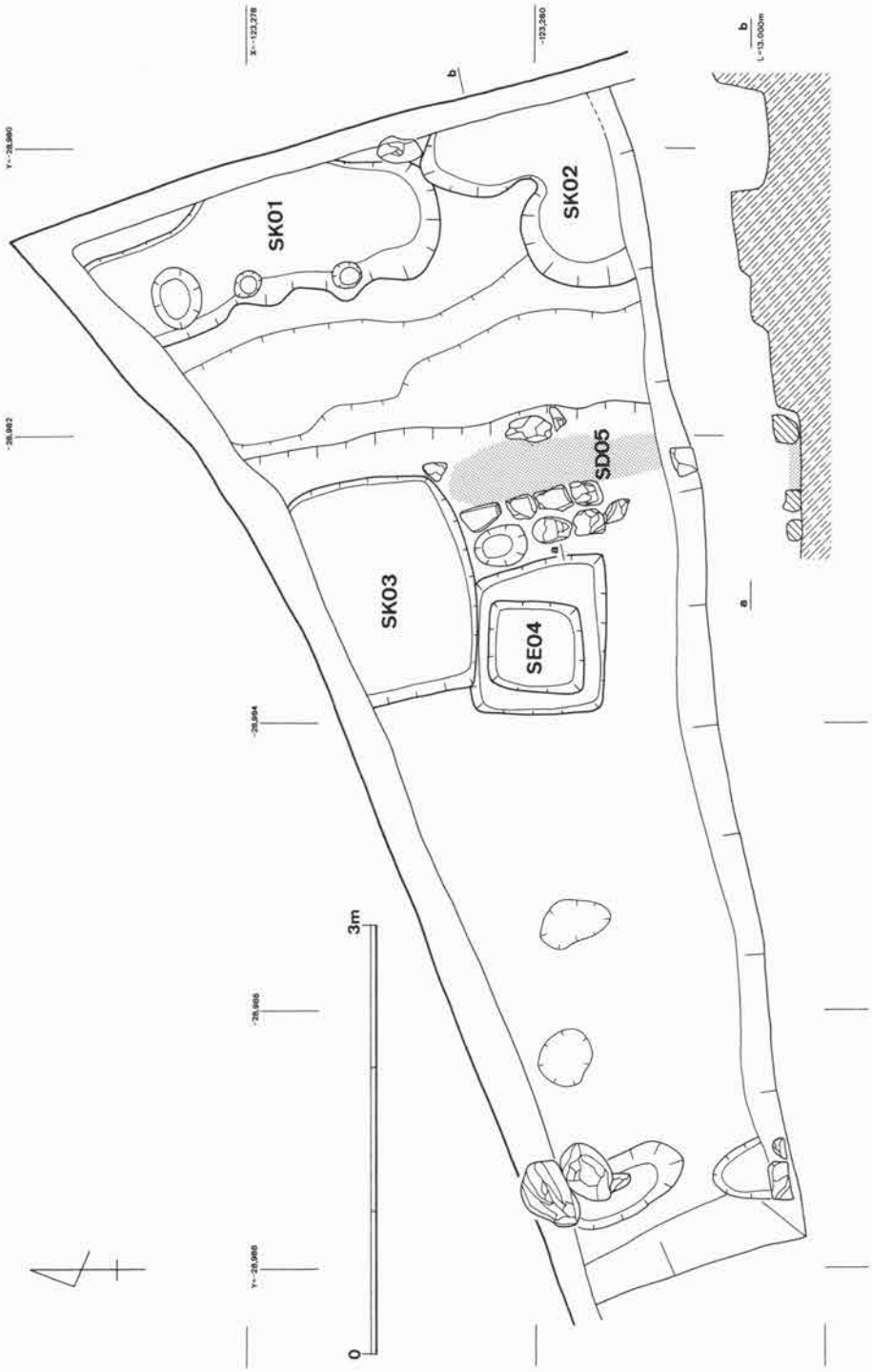
2．調査の概要

乙訓地域を南下した西国街道は、阪急大山崎駅付近から天王山麓に沿って西に折れ曲がり、山城国から摂津国へはいる。現在の大阪府と京都府の境界に離宮八幡宮があり、南側境内を迂回する西国街道の最も低い地点が標高13m前後あるが、そこ以外は14～15mの等高線に沿っている。調査地周辺は、離宮八幡宮を除くと北から南へと傾斜する地形となる。境内の現標高は、14.5m前後を測る。

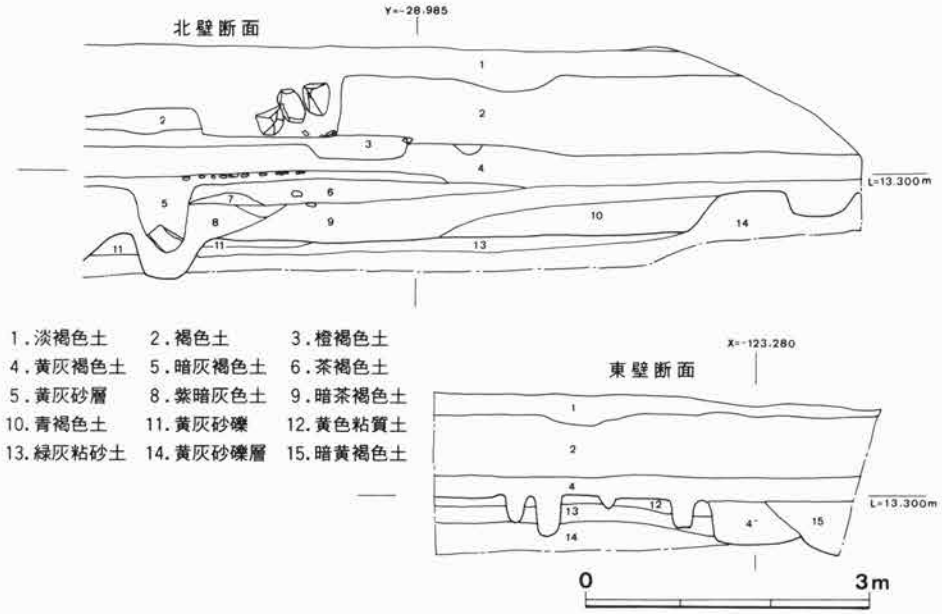
離宮八幡宮山門から東側が道路拡幅場所であるが、道路に沿った埋設水路があることや、山門付近の拡幅が狭いため、境内東南隅の拡幅の大きい場所にトレンチを設定した。表土や褐色土を重機で掘削した後、その下の近世～中世土器包含層を人力で掘り進んだ。現地表下約1.1～1.4mの黄灰褐色土層は、近世土器を中心に中世土器も混入する。この層を除去した段階で、西部において長径40cm前後の石が発見された。東方では、黄灰褐色土の下に暗灰褐色土、茶褐色土、紫暗灰色土などがあり、暗灰褐色土と紫暗灰色土は土坑状に上から掘り込まれ、石が落とし込まれたような状態で検出された。このため、これらは、整地を行うときに投棄されたと推測される。そこからは、江戸時代前期の土師器皿などが出土した。それより下層に暗茶褐色土、青褐色土が堆積し、中世土器が出土した。「地山」



第76図　調査地平面図

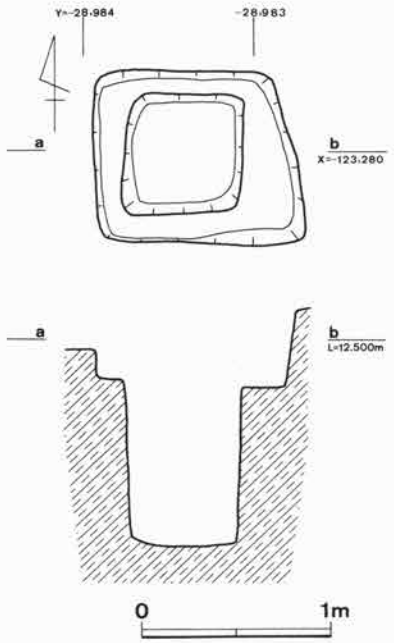


第77図　下層遺構実測図



第78図　土層断面図

と考えられる粘砂土、礫層に掘り込まれた土坑、井戸跡、溝状石敷きなどを検出した。湧き水があり、西側はトレンチ幅が狭いため、壁面崩落のおそれがあるので、下層の掘削は断念した。以下に主要な遺構を記述する。



第79図　井戸跡ＳＥ04実測図

ａ．検出遺構（第77・79図、図版第49～51）

土坑ＳＫ01　北東端で検出した中央が東に膨らむ南北方向の土坑である。長さ2.5m以上・幅0.7～1.0m、検出面からの深さ20～30cmを測る。底面に柱穴痕がみられるが、土坑との関係は不明である。ここからコンテナ整理箱に６箱以上の土師器皿、瓦器椀などが出土した。土器類は、６個前後が重なり、廃棄された状況がうかがえる資料である。

土坑ＳＫ02　南東端で検出した不定形土坑である。検出面からの深さ約30cmを測る。ここから少量の土師器片、瓦器片が出土した。

土坑ＳＫ03　東西方向の長方形土坑である。北辺が壁面に検出されないので、南北1.2m前後・東西約1.5m、検出面から最大の深さ約

20cmを測る。少量の土師器片・瓦器片が出土した。土師器片は、青褐色土出土のものと同時期で、14世紀のものである。

井戸跡ＳＥ04　北辺が土坑ＳＫ03に切られ、東辺がやや斜めになるが、ほぼ方形で二段に掘られた井戸跡である。上段は、北辺約0.9m・南辺1.1m・西辺0.9m、検出面からの深さ15～40cmを測る。下段は、約65cmの方形で、下段の深さ約85cmを測り、全体で最大125cmの深さがある。木枠・曲物などの内部構造物は残っていなかった。下層から、土師器皿、瓦器椀などが少量出土した。出土遺物は、11世紀末～12世紀中頃のものである。

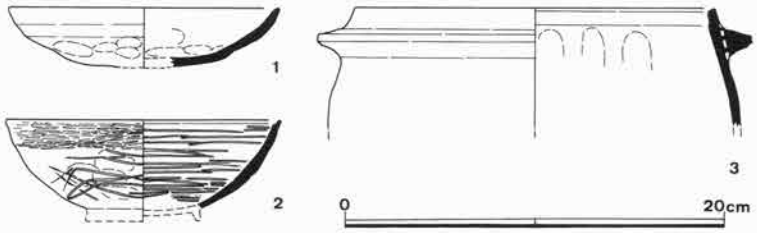
石敷き溝跡ＳＤ05　北が土坑ＳＫ03で壊された南北方向の溝跡である。溝は、西側に人頭大の平石を２列に並べているが、破壊が著しく、東列４石、西列２石が現位置をとどめている。西列の北方では、柱穴と推定される一辺30～40cm・深さ約35cmの穴が検出された。東側には、２石が残存しており、わずかに現位置をとどめていると推定できる。両側の石は紫赤色に焼け、石の間には焼けた壁土などが埋まっていた。壁土に混じって、わずかに平瓦片、土師器細片が出土した。平瓦片には「離れ砂」が付着しており、12世紀中頃の所産と考えられる。西側石列の幅38cm前後、溝の内法35cm前後・東側石列20cm以上を測る。西側石列上面と溝底とは約10cmの深さがある。

石敷き溝西側上面とトレンチ東端の「地山」上面は、30cm以上の段差があり、これはその差を利用した基壇状の高まりと考えられる。溝内から出土した焼壁片や平瓦片との関係から、そこに築地や建物があった可能性が高いといえる。

ｂ．出土遺物（第80～83図、図版第52）

遺物包含層や土坑などから、平安時代～近世の遺物が多量に出土した。以下に、遺構出土の遺物を中心に記述する。

井戸跡ＳＥ04出土遺物（第80図）　すべて下層から出土した。器形のわかるものに、土師器皿(1)、瓦器椀(2)、土師器羽釜(3)がある。１は、口縁部下端から底部は不調整で、指オサエ痕跡が残るが、他はヨコナデを施す。２は、底部を欠損するもので、口縁端部の内面に段が付き、内外面ともに暗文を施す。１は、口縁部外面に２段ナデを行うタイプで、

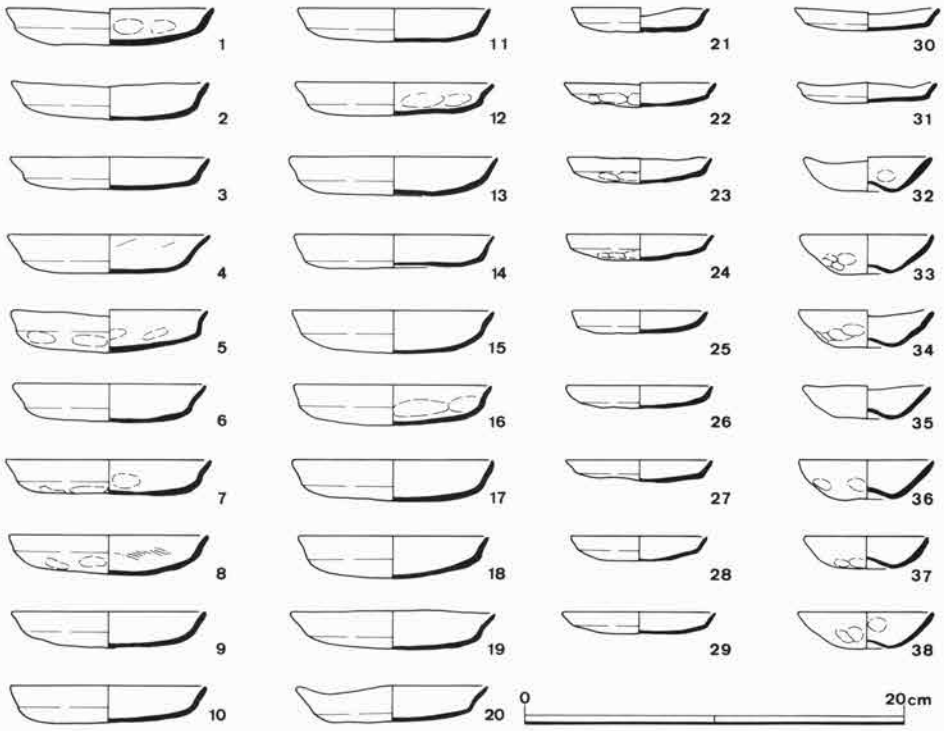


第80図　井戸跡ＳＥ04出土遺物実測図
1.土師器皿　2.瓦器椀　3.土師器羽釜

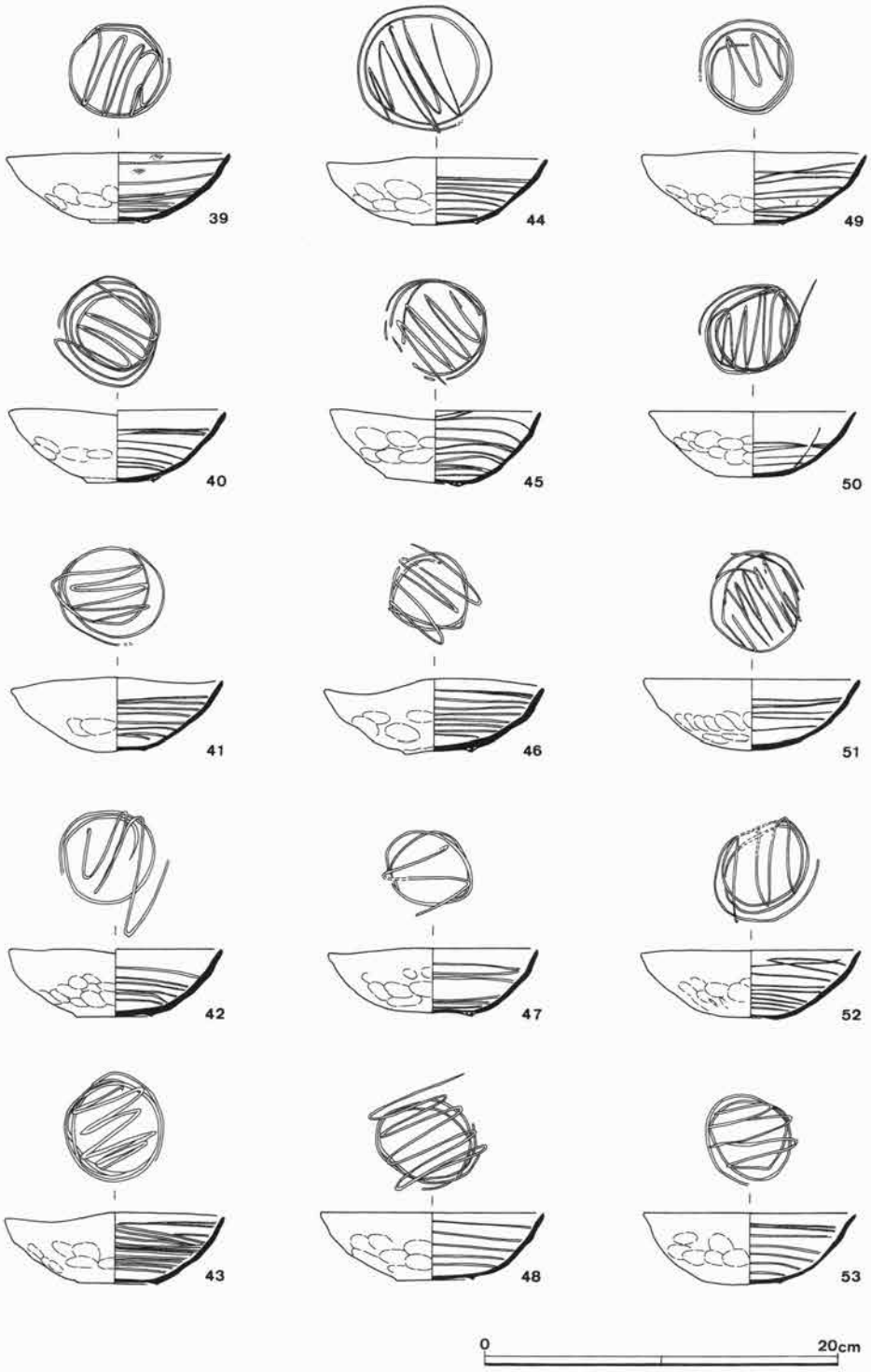
11世紀末頃の所産と推定でき、2は、口縁部内外面に暗文を施し、橋本編[注2]年のⅡ型式2段階に相当し、12世紀中頃のものであろう。

土坑ＳＫ01出土遺物(第81・82図)　多量の土器が折り重なり出土した。土師器と瓦器の比率は、約3対1である。土師器には、口径11cm前後の中皿(1～20)、口径8cm前後の小皿(21～31)、底が内にへこむヘソ皿(32～38)がある。これらは、一部に指オサエ痕を留めるものがあるが、口縁部外面に一段ナデを行うタイプである。瓦器椀(39～53)は、口径12～13cm・器高4cm前後を測り、底に退化した断面三角形の高台を貼り付けるが、接着が悪く剝がれたものもある。内面及び口縁端部にヨコナデを施すが、口縁部下半は不調整で、指オサエ痕を明瞭に残す。内面に荒い暗文を施す。土師器皿類は、平安京跡出土資[注3]料から判断して、14世紀中頃の所産であろう。瓦器椀は、橋本編年のⅣ型式に相当するものである。

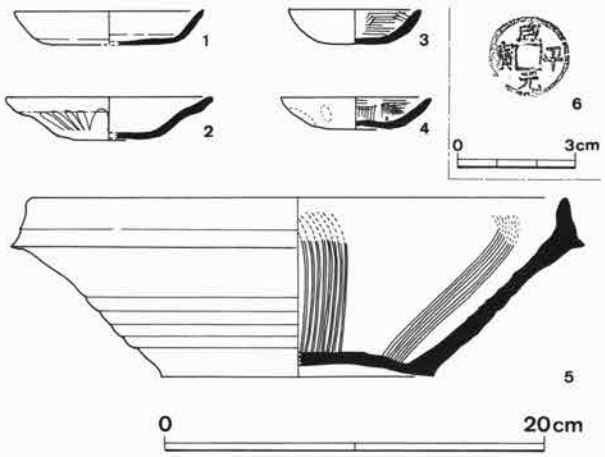
包含層出土遺物(第83図)　黄灰色土から紫暗灰色土に中世から近世の遺物、暗茶褐色土、青褐色土に中世の遺物を包含する。出土遺物には、土師器皿類(1～4)、陶器類(5)や磁器、瓦類、渡来銭(6)などがある。土師器皿は、14世紀(1)から17世紀(2)まで含む。3・4には、内面にハケ目が残る。5は、備前焼の擂り鉢で、形態の特徴から、16世紀の所産であろう。6は、北宋銭の咸平元寳(初鋳は咸平元(998)年)である。



第81図　土坑ＳＫ01出土遺物実測図(1)
1～38.土師器皿



第82図　土坑ＳＫ01出土遺物実測図(2)
39～53.瓦器椀



第83図　包含層出土遺物実測図・拓影
1～4.土師器皿　5.備前擂り鉢　6.北宋銭(咸平元寶)

3.　ま と め

調査地の東約50mの山城国府第1次調査(注4)で、建物基壇と推定される遺構、西国街道(古山陽道)の道路面と推定される突き固めた路面が検出されているが、離宮八幡宮周辺では平安時代までさかのぼる遺構は検出されていない。今回の調査は、狭い面積であったが、いくつかの新資料を得ることができた。

①遺物包含層の堆積状況から、14世紀以降に広い範囲で整地作業を行っていることがわかった。

②下層は、東端が高く西に向かって下がる地形であり、これを利用して基壇状の高まりとしている。平行する石敷き溝ＳＤ05との関係から、築地及び建物の存在が想定できる。これらの遺構は、この地に営まれたと推定されている第４次山城国府などの施設に伴う可能性が考えられる。

③井戸跡ＳＥ04とＳＤ05は、直接の切り合い関係は見られないが、井戸跡の掘形東辺が石敷きに沿って傾斜するので、井戸跡が若干新しいといえよう。

④石敷き溝の方位は、北で西に約13°前後振れ、離宮八幡宮本殿の方位とほぼ一致する。そのため、離宮八幡宮前身施設などとの関連も注意を要する。

⑤土坑ＳＫ01から折り重なって出土した土器類は、一度に投棄された状況を示しており、一般的な集落の様相ではなく、官衙施設や豪族または長者などの所在をうかがわせる。

(石尾政信)

注１　調査参加者
飛田浩一・小牧　勲・木戸久美子・小谷加奈子・倉辻万里子・長谷川マチ子・明日礼子

注２　橋本久和「中世土器研究予察」(『上牧遺跡発掘調査報告書－高槻市文化財調査報告書第13集－』　高槻市教育委員会)　1980

注３　伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

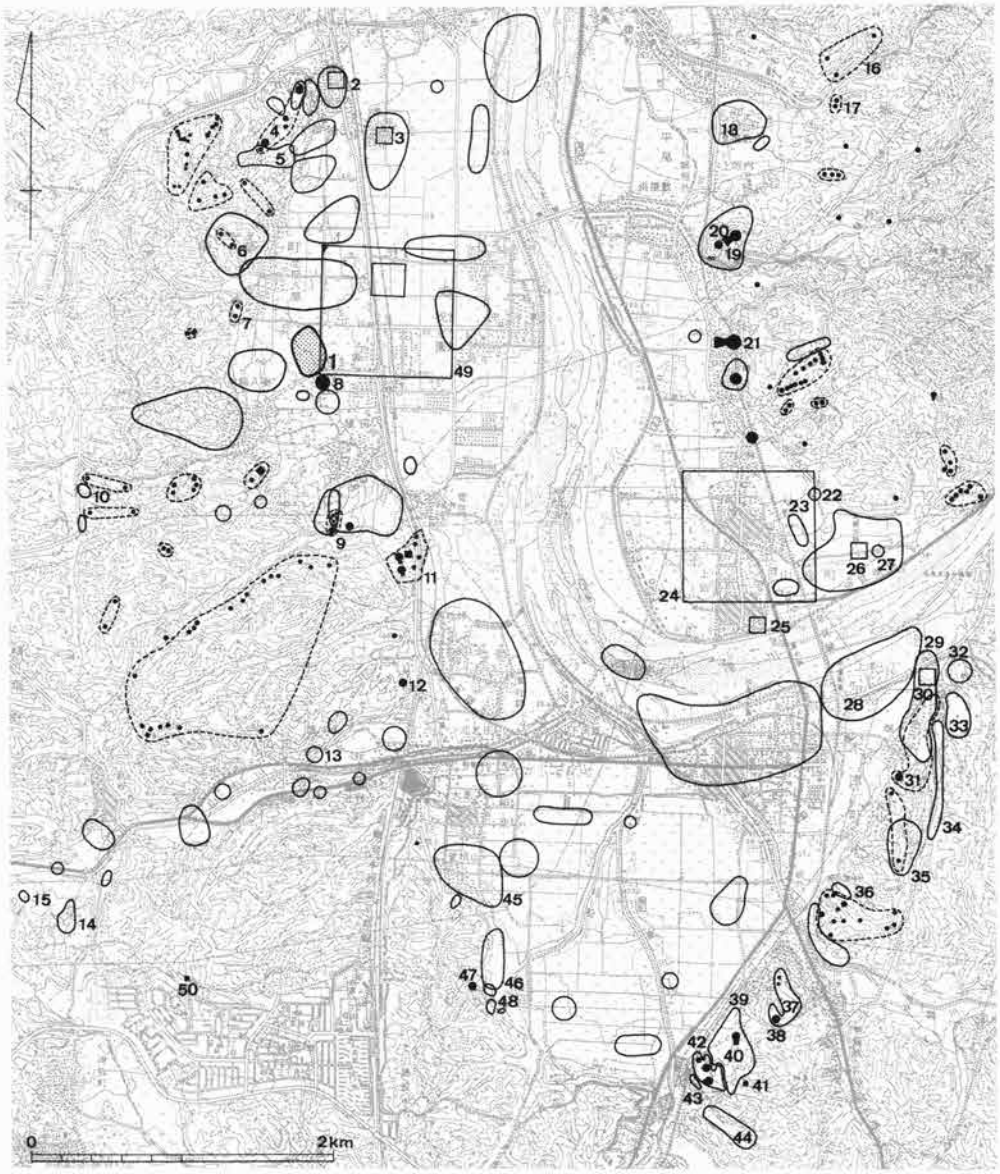
注４　林　　亨ほか「山城国府跡第１次(7XYS'RK地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第１集　大山崎町教育委員会)　1981

6．北尻遺跡発掘調査概要

1．はじめに

北尻遺跡は、京都府相楽郡精華町南稲八妻北尻・丸山に所在する。この遺跡は、ＪＲ西日本学研都市線「祝園」駅の西方約500mの、標高33～37mの低台地に位置し、現在はその大半が水田として利用されている。当地は、木津川河谷盆地の沖積低地の西縁にあたり、周辺域に大阪層群(洪積層)の堆積が広範にみられる丘陵地帯(木津川左岸丘陵)にも約400mの距離で接している。北の煤谷川と南の山田川河谷により区画されたこの地区の大阪層群の丘陵下縁は、遺跡地付近をほぼその中間地点としてゆるやかな弓なり状に西側に後退して平地部を西側に拡大している。その縁辺には幾筋もの小河川が丘陵部を開析しており、谷口付近に小規模な扇状地形を形成し、それらが複合してゆるやかな東向きの勾配地形を形成している。また、遺跡に南接する植田地区以南では洪積層の縁辺東側に段丘地形が発達し、その影響を受けて遺跡地は、南ほどわずかに標高が高く、その北限との比高差は約４mを測る。このような微傾斜地にあって、遺跡内の土地区画(水田の畦畔など)は乱雑な形状を示し、遺跡地の東方や北方にひろがる整美な条里地割り(方眼地割り)とは対称的な地勢を示す。

当遺跡の調査・研究については、1982年に奥田裕之氏が、遺跡の南東に位置する丸山古墳を考察するなかで、その北西部の水田地帯に墳丘の全長約110mの盾形周濠を有する大規模な前方後円墳の存在を、現在の畦畔や水路の示すラインあるいは地籍図から復原推定され、地名をとって「南稲八妻北尻古墳」と仮称された。さらに、この古墳推定地の西隣りの字名が「塚本」であること、当地が文献に記された「荒陵里」に含まれる可能性があることを指摘し、この推定を補強された[注1]。これを受けて1985年に刊行された『京都府遺跡地図』〔第２版〕では、奥田氏の推定された古墳を擁する東西200m・南北220mの広がりをもつ遺跡として認定され、土師器などの散布地としての性格を付与された。その後、1990年には区画整備事業の事前調査として、精華町教育委員会によって試掘調査が実施された(１次調査)。調査は、遺跡の実態とその範囲確認に主眼をおいて、今回の調査区の東側一帯に計15か所の試掘グリッドが設定され、その結果、主として遺跡地の南半部において石貼り溝をはじめとする数条の溝状遺構などが検出され、古墳時代を中心とする遺物が出土するという成果が得られた。



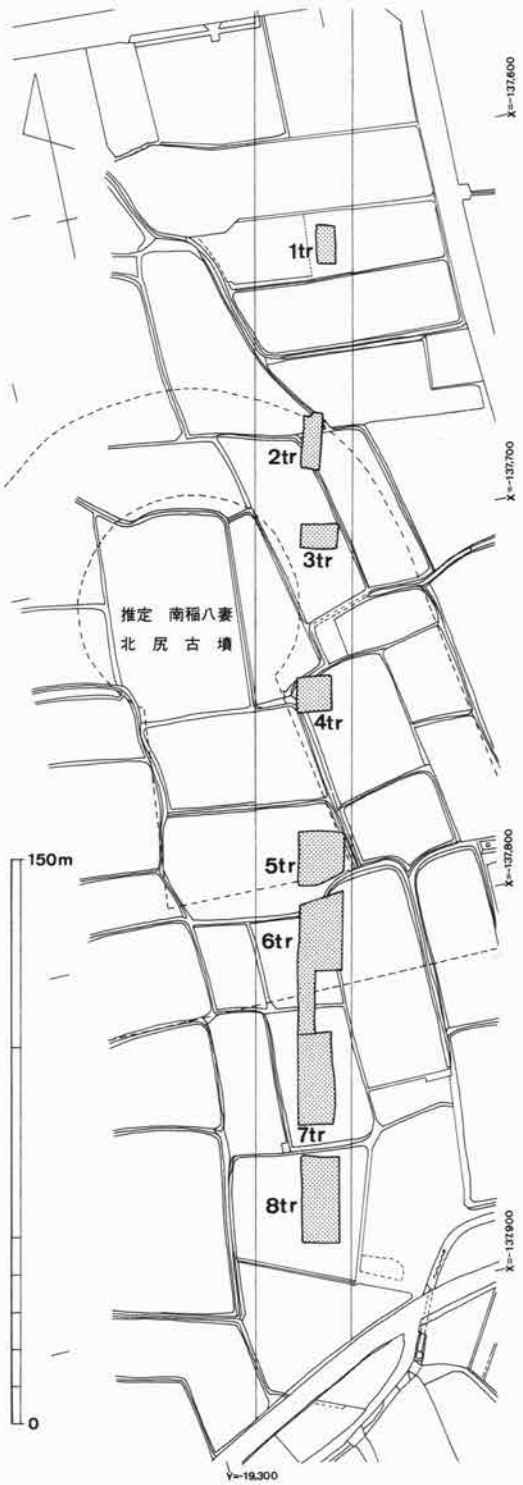
第84図　調査地位置図

1.北尻遺跡	2.下狛廃寺	3.里廃寺	4.鞍岡山古墳群	5.大福寺遺跡
6.城山古墳群	7.国名平古墳群	8.丸山古墳	9.畑ノ前遺跡・畑ノ前古墳群	
10.煤谷川窯跡	11.吐師七ツ塚古墳群	12.白山古墳	13.樋ノ口遺跡	14.乾谷瓦窯跡群
15.得所瓦窯跡	16.不動古墳群	17.笛吹古墳群	18.湧出宮遺跡	19.平尾城山古墳
20.稲荷山古墳	21.椿井大塚山古墳	22.高井手窯跡	23.野田芝遺跡	
24.山城国府推定地(木下良案)		25.泉橋寺	26.高麗寺跡	27.高麗寺瓦窯跡
28.上津遺跡	29.燈籠寺遺跡	30.燈籠寺廃寺	31.内田山古墳群	32.白口遺跡
33.赤ヶ平遺跡	34.釜ヶ谷遺跡	35.木津城跡	36.大谷窯跡	37.西山遺跡
38.西山塚古墳	39.瓦谷遺跡	40.瓦谷古墳	41.幣羅坂古墳	42.上人ヶ平遺跡
43.市坂瓦窯跡群	44.瀬後谷遺跡	45.曽根山遺跡	46.大畠遺跡	47.音乗谷古墳
48.音如ヶ谷瓦窯跡群		49.山城国府推定地(奥田裕之案)		50.カザハヒ古墳

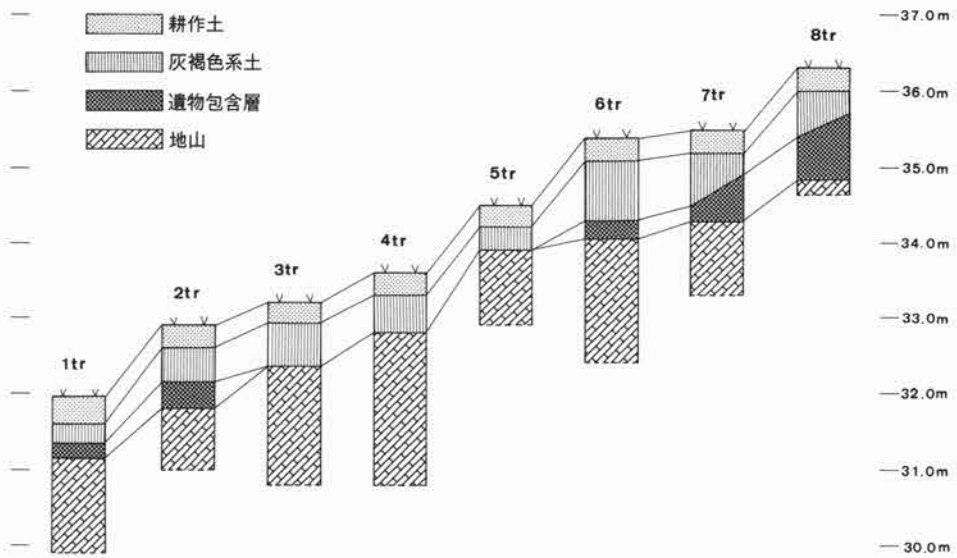
こうした北尻遺跡に関する過去の調査研究の経緯があるなかで、このたびこの遺跡を南北に縦貫するかたちで、府道山手幹線道路の建設計画が京都府土木建築部によりなされた。このためこれを受けて、同建築部の依頼を受けて該当部分の発掘調査を実施することとなった。現地調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となり、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人・同調査員伊賀高弘が担当した。調査期間は、平成5年7月7日から同年11月12日までで、調査に係る経費は全額京都府土木建築部が負担した。なお、京都府土木建築部、精華町教育委員会、京都府立山城郷土資料館などの関係諸機関からご協力・ご教示をいただいた。また、現地作業には作業員・整理員・学生諸氏の協力があった。感謝の意を表したい。(注2)

2. 調査の概要

調査は、遺跡地内の道路敷設用地のうち、西側車線寄りの擁壁工事部分及びそれに係る工事用仮設道を除外した対象面積9,400㎡のうち、排土処理などを考慮にいれて、まず総面積約800㎡相当の試掘調査区を合計8か所設けて実施した。この際、調査区の設定に当たっては、上記の「南稲八妻北尻古墳」の有無の確認を優先し、合わせて対象地の全容をある程度認識できるよ



第85図 トレンチ配置図



第86図　土層柱状模式図

う配慮した。調査に際しては、土木重機を用いて表土(耕作土)及び遺物をほとんど包含しない灰褐色系粘質土を除去した後、遺物包含層と遺構を人力で掘削した。試掘調査の結果、対象地の南半部に設けた調査区(5～8トレンチ)で、ややまとまって遺構・遺物がみられたため、この部分の調査区を道路路線幅方向(東西方向)に適宜拡張して調査を進めた(拡張後の調査面積は1,200m²を測る)。なお、遺構の存在が希薄であった北半部の調査区(1～4トレンチ)に関しては、拡張の際の排土処理場として埋め戻した。以下、各調査区について調査成果を概説する。

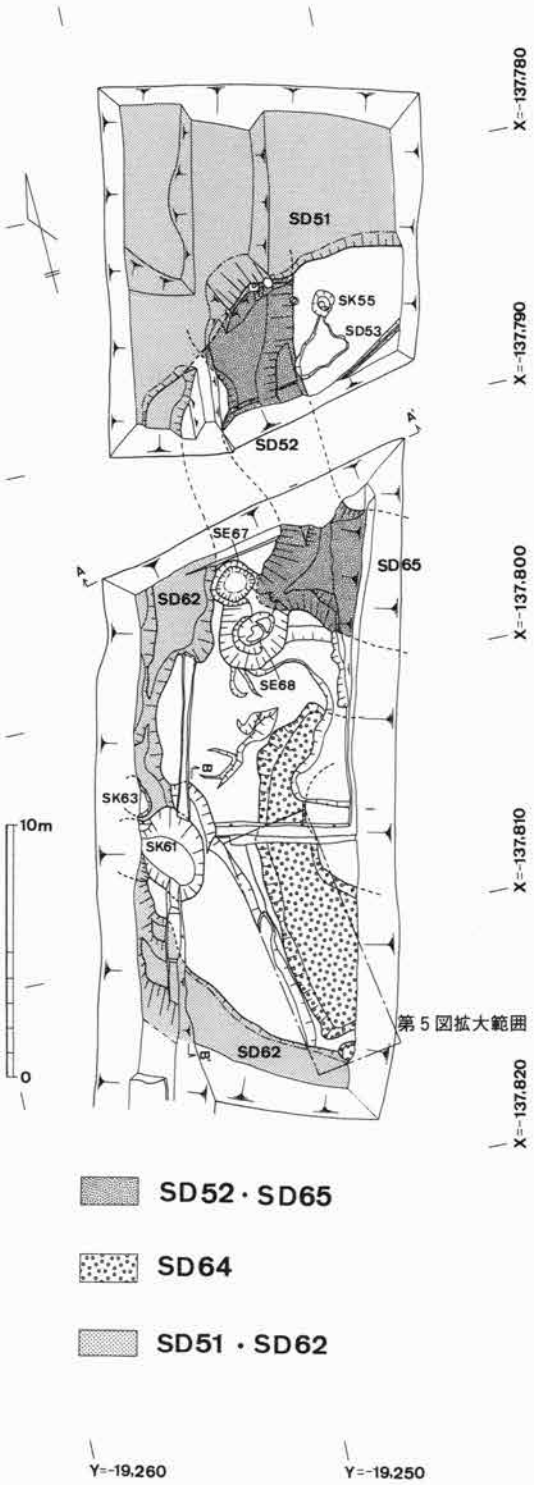
1トレンチ　耕作土・床土とそれに続く無遺物の褐灰色系の砂質土を除去すると、地表下0.5mで2層に分離できる遺物包含層(層厚0.35m)となり、以下粘土系の無遺物層(地山)に至る。上下の包含層に特に時期差はなく、奈良期の遺物(土器類・布目瓦)を上限として中世までの遺物(瓦器椀など)が少量出土した。黄褐灰色粘土の地山面で若干の遺構を検出した。その内容は、小規模な素掘り溝3条及び柱穴状土坑3基であるが、柱穴は建物としてまとまらない。遺構に伴う遺物は皆無であった。

2トレンチ　推定北尻古墳の周濠外縁線に相当する地点に設けた調査区である。基本層序は、上位より耕土・床土(層厚0.3m)、無遺物の灰褐色系粘質土(同0.4m)、遺物包含層(奈良～中世)である灰色粘土(同0.2m)、以下青灰色砂と黒色粘土の互層からなる無遺物層(地山)となり、各層とも水平堆積を基本とする。暗灰色砂質土の地山面で、主軸を東西にとる3条の小規模な溝状遺構と、南北方向のやや規模の大きな溝あるいは陥没地形を検

出した。いずれも非常に浅く、出土遺物も極めて少ない。周濠外縁を示す遺構は認められなかった。

3・4トレンチ　推定北尻古墳の後円部周濠部に相当する位置に設けたトレンチである。基本層序は、両者とも上位から耕土・床土(層厚0.3m)、褐灰色系粘質土と砂質土の互層(同0.5m)と続き、以下掘削深3.0mまで黒色系粘土と青灰色系砂の互層(地山)となる。各層とも4トレンチ西方でやや流路状に乱れるものの、水平堆積を基本とする。4トレンチの第2層(褐灰色砂層)から布目瓦片が数点出土した以外、顕著な包含層や遺構は検出されなかった。また、トレンチ断面にみえる土層の堆積状況は、古墳の周濠内のそれを示すものではない。

5・6トレンチ　5トレンチは推定北尻古墳の前方部墳丘、6トレンチはそれに南面する周濠部に相当する地点に設定した調査区であるが、この古墳の存在を積極的に示す遺構・遺物は全く認められず、かわって遺物を多量に包含する大小の自然河道状遺構及び土坑・溝などが検出された。両地区の基本層序は、上位より耕土・床土(層厚0.3～0.4m)、中世の遺物を少量含む褐灰色系粘質土(同0.3～0.9m)、遺物包含層である暗灰～青灰色系粘質土となり、以

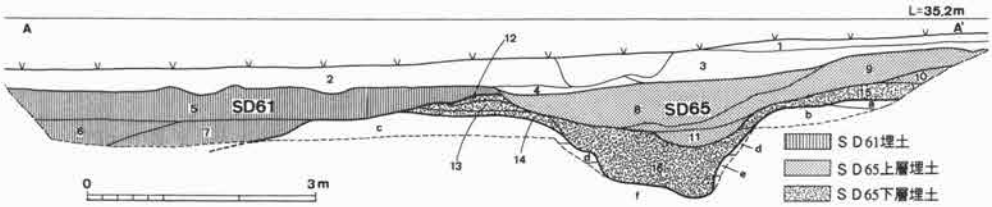


第87図　5・6トレンチ遺構平面図

第88図　ＳＤ64礫敷実測図

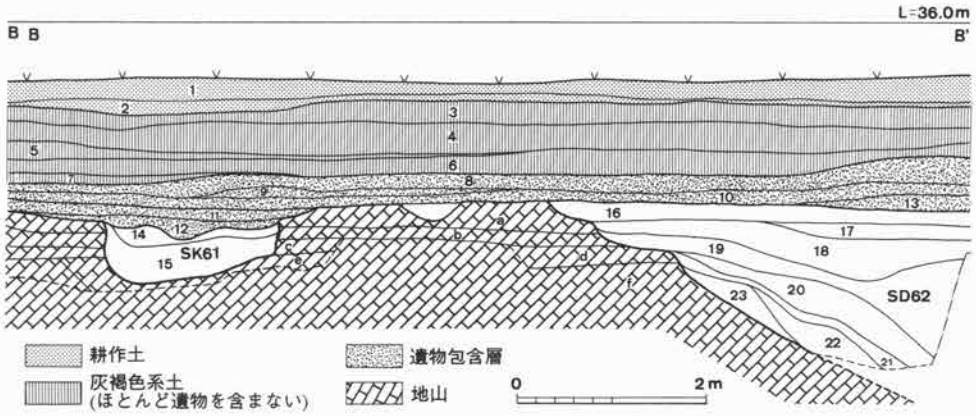
下黒色粘土と青灰色砂の互層の地山となる。このうち第２層は、両トレンチ間で層厚に差があり、約1.0mの段差をつけて１段高く造成されていた６トレンチ部分で厚く堆積していることから、耕地開発の際の造成に係る盛り土とみられる。また、６世紀から中世にかけての遺物を包含する第３層は、５トレンチでは削平を受けて極めて薄い(0.05m前後)のに対し、６トレンチでは0.2～0.3mの層厚をもつ。図示した遺構は、すべて地山面で検出された。ＳＤ52・ＳＤ65は、５・６両トレンチにまたがるかたちで検出された自然河道である。検出面における上縁幅は2.5～5.0m、検出面からの深さは0.9～1.7mを測り、川底のレヴェルは検出範囲内で南端が北端に対して0.7m低い。河道の横断面形は、斜面上半が外上方に大きく広がる２段の「U」字形を基本とするが、部分的にこれがくずれて変形するか所もある。流路の平面形は、調査区内ではほぼ南北走し、北端は後出するＳＤ51に切られ、また南側は東方に曲がる。河道内の埋土は、堆積と開析を繰り返して複雑な様相を呈するが、基本的にはレンズ状に堆積した黒色の腐植系シルトの中軸寄りに灰色系の粗砂礫が大きく貫入する堆積状況を上下に複数重ねた形態をとる(第89図参照)。内部から布留式土器が良好な保存状態で多量に出土した。Ｓ

D64は、6トレンチのＳＤ65の南側で検出された、礫敷きの施設をもつ南北方向の浅い溝状遺構である。調査区内では、東方に中心を置いてゆるく円弧を描く平面形を呈するようで(西辺長約10.0m)、ＳＤ65に接する北端部は途切れるかあるいは東に折れる。検出面に



第89図　6トレンチＡ－Ａ'(北壁)断面実測図

1：暗灰色土(黄褐灰色土)［盛り土］　2：黒灰色砂質土［表土］　3：淡褐灰色(砂質)土
4：灰色砂質土　5：黄褐灰色土　6：淡褐灰色粘砂(褐灰色砂質土混)
7：暗灰褐色(粘質)土　8：淡灰色粗砂・(暗)灰色粘砂土・淡灰色シルト質微砂
9：黒褐色粘砂質土　10：茶褐色粗砂　11：暗灰色粘砂質土
12：淡灰色粘土　13：黒灰色粘質土(黄茶色酸化斑混)　14：灰色粘土
15：淡褐灰色粘砂土　16：淡灰色細砂・茶灰色腐植系シルト・灰色粗砂の互層
a：淡褐灰色シルト質砂　b：(青)灰色砂質シルト　c：暗青灰色粘砂質土
d：黒灰色硬質粘土　e：淡青灰色粗砂質土
f：暗青灰色粘砂土(暗灰色粘砂・灰色粗砂混)

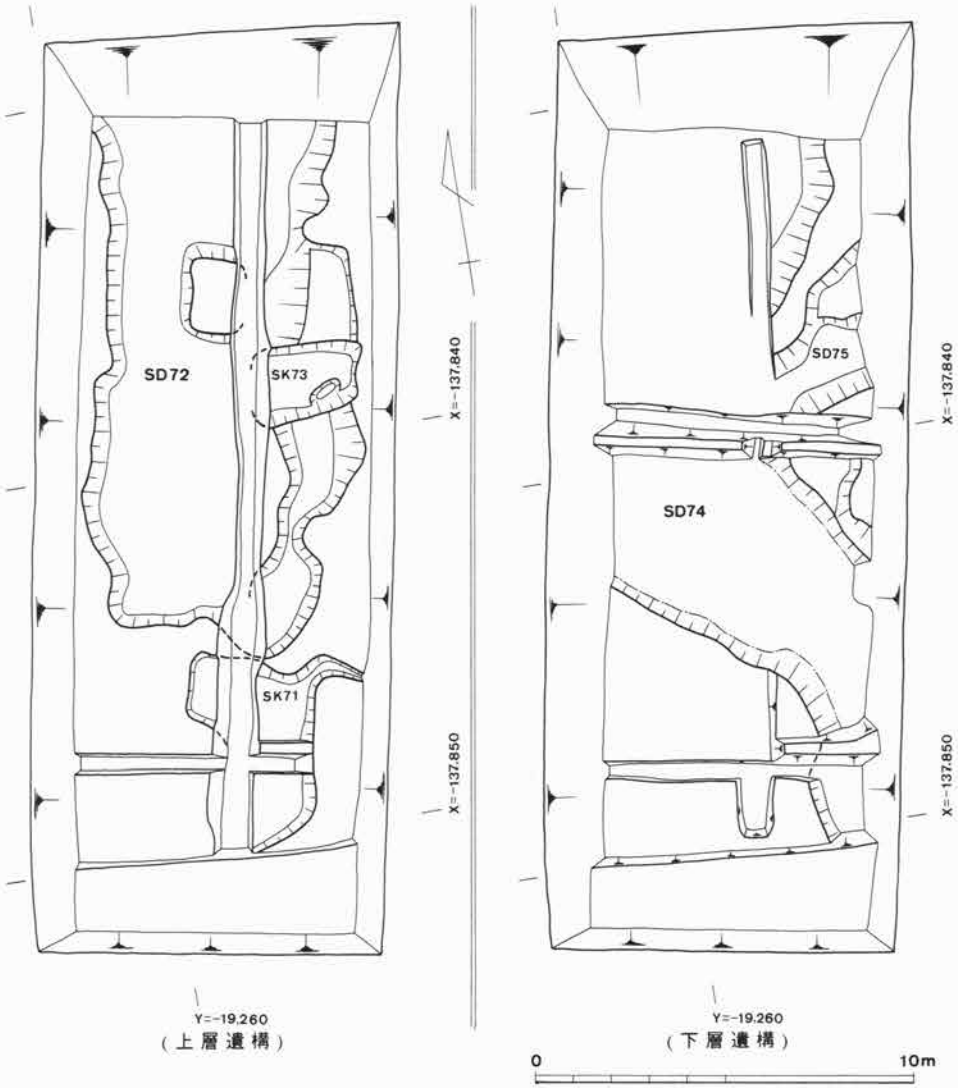


第90図　6トレンチＢ－Ｂ'断面実測図

1：黒灰色砂質土［表土］　2：黄褐色粘質土［床土］　3：淡黄褐灰色粘質土
4：灰褐黄色粘質土　5：(淡)灰褐色粘質土　6：灰褐茶色粘質土
7：茶灰色砂質土　8：灰色砂質土　9：(暗)灰色粘質砂土
10：淡褐灰色砂質土　11：(淡)灰色(硬質)細砂　12：(暗)灰色(粘)砂
13：暗灰色粘質砂土　14：黒灰色シルト(青灰色シルト質砂混)
15：(青)灰色砂(灰色シルト質砂混)　16：(暗)灰色(粘質)粗砂土　17：暗灰色粘質粗砂土
18：青灰色砂　19：青灰色シルト質細砂　20：青灰色粗砂土
21：淡青灰色粘質シルト(暗灰色シルト混)　22：(青)灰色(粘質)粗砂　23：暗灰色粘質砂土
a：暗灰色粘土　b：暗灰色硬質砂土　c：黒灰色(砂質)粘土
d：灰色砂　e：(青)灰色硬質粘砂　f：黒灰色粘土

おける規模は、上縁幅2.0～4.0m・深さ約0.3m前後を測る。溝内埋土は、上位より黒褐色粘質土、暗灰色粘質土、灰色シルト質砂土の層順でそれぞれ薄くレンズ状に堆積し、第1層中に多量の礫が混入している。礫は、径5～30cmの規模を有する河原石(扁平な円礫)で、上下に重層することなく、礫の平坦面を上にするように隙間なく面的に敷設している。この礫敷面あるいはその裏込め土である黒褐色粘質土中から、布留式土器がややまとまって出土したが、それらは小片資料が多い。ＳＤ52・ＳＤ62は両調査区の西寄りに、中心を東側にとって円弧を描くように流れる自然河道である。検出したのはその東縁部のみで、対岸(西岸)はいずれも調査区外にはずれる規模の大きなものである(上縁幅は5トレンチで9.0m以上を測る)。河道内は調査の都合上、完掘していないが、検出面からの深さは少なくとも1.5m以上を測る。内部の埋土は、主として青灰色～灰色系のシルトと砂の互層がレンズ状に堆積し、急流に伴う礫層の貫入はみられない。溝内遺物はそれほど多くないが、5世紀(須恵器杯)から中世(瓦器椀など)の長期間にわたって埋積したものと思われる。ＳＫ63・ＳＫ61は6トレンチの西辺中ほどで南北に近接して検出された土坑状遺構である。ともに自然河道ＳＤ62に重複し、その斜面上縁付近に掘り込まれたもので、重複部分でみるとＳＤ61より古い。やや長円形プランを呈するようで、内部から奈良期の遺物(土師器甕＝第96図64・杯身＝第96図68)が出土した。

7トレンチ　6トレンチに南接する調査区で、当初幅5mで調査を進めたが、後に10mに拡幅した。基本層序は、上位から耕土・床土(層厚0.3m)、褐灰色系粘質土(同0.6m)、青灰色粘質土(同0.2m)、暗褐灰色粘質土(同0.1m)と続き、以下青灰色の砂と粘土の無遺物層(地山)となる。第3・4層が遺物包含層にあたり、それぞれの層位の下面で遺構検出を試みた。上層の検出面では、主として南北に主軸をもつ幅の広い溝状遺構(ＳＤ72)と不整形土坑を検出した(第91図－左)。ＳＫ71は、暗青灰色シルト質砂を埋土とし、内部から中世の遺物(瓦器椀など)が少量出土した。ＳＤ72は、中軸寄りの部分がやや浅く掘り残された南北方向の浅い溝状遺構(土坑？)で、検出面での幅は約7.0mを測る。遺構内には暗褐灰色土と暗灰褐色粘質砂土が交互に堆積する。それほど多くない出土遺物の内容をみると、6世紀の須恵器(杯身)を上限として奈良～中世にわたる。古手の遺物は混入品とみられる。ＳＫ73は、ＳＤ72と重複してより新しい土坑で、短軸2.0m・長軸3.0m前後の東西に主軸を持つ長円形プランを呈する。中世の瓦器類に混じって半截した隆平永寶1点が出土した。一方、下層の地山面では、南東～北西に流路をとる自然河道と、それに流入する小規模な溝状遺構を数条確認した(第91図－右)。自然河道ＳＤ74は、上縁幅4.5～7.0m以上を測り、内部には茶灰色腐植系シルトと灰色粗砂礫が交互に堆積する。出土遺物(布留式併行期～中世)や堆積土の類似から6トレンチのＳＤ62の延長部の可能性が高い。



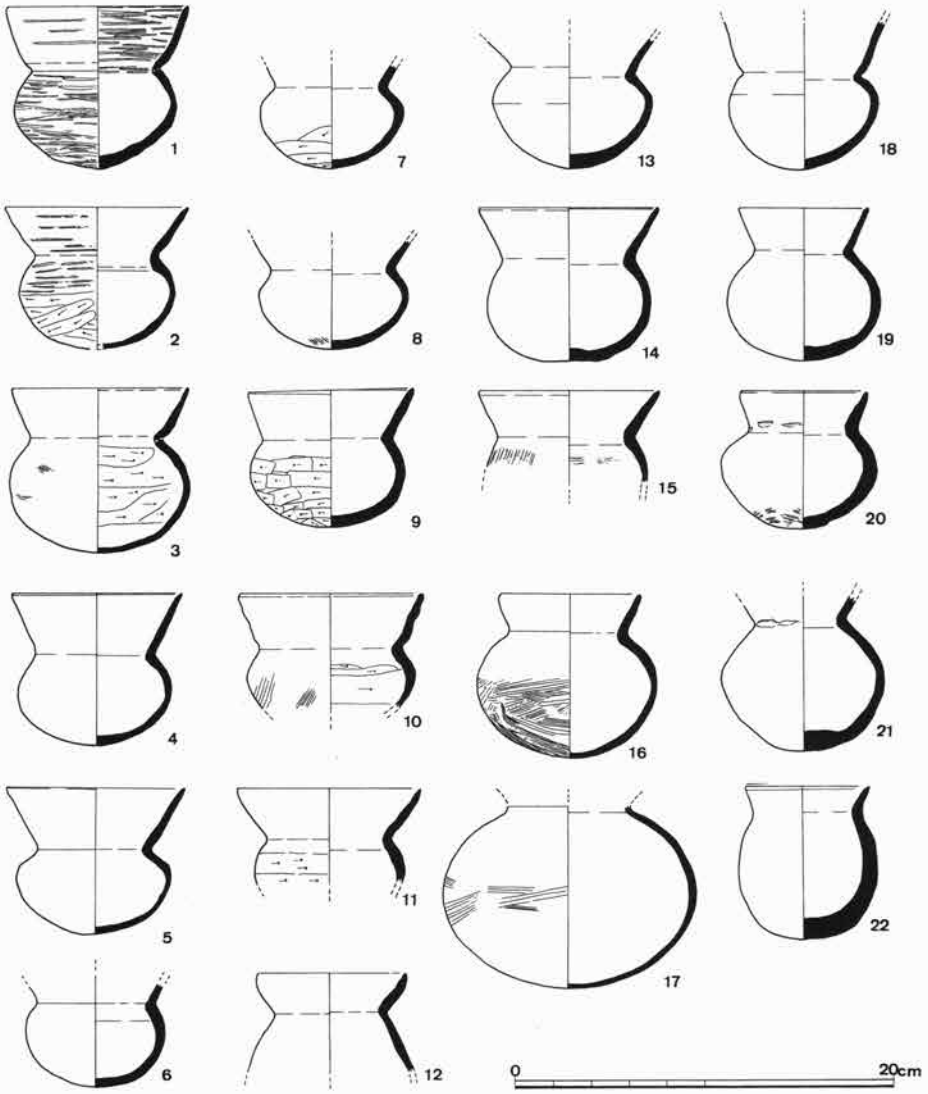
第91図　7トレンチ遺構平面図

8トレンチ　調査対象地の最も南端に設定した調査区で、現地表の標高は調査区内で最も高く(36.4m)、北端の1トレンチとの比高差は約4.0mを測る。調査区内の基本層序は、上位より耕土・床土(層厚0.3m)、褐灰色系粘質土(同0.3～0.6m)、青灰色粘質砂土(同0.1～0.5m)、暗灰色粘質砂土(同0.15～0.2m)の順で堆積し、以下、現地表下0.9～1.4m(北ほど深い)で青灰色～灰色系砂の無遺物層(地山)となる。なお、調査区の北半部には、中世の遺物(瓦器椀など)を包含する暗灰色粘質砂土が地山直上に間層として薄く入り、この土層上面において、小規模な柱穴あるいは溝状の遺構を検出した。柱穴は、ほぼ同規模

の３基が柱間寸法2.0mで南北に並ぶが、調査区内では一筋の柱列であり、建物としてはまとまらない。この柱穴の掘形は、一辺0.6～0.7mの規模を有する隅丸方形あるいは隅丸長方形プランを呈し、径15cm前後の柱痕跡をとどめる。

3．出土遺物

調査によって出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦器などの土器類と瓦・銭貨である。出土量の大半を占める土器類は、古墳時代とそれ以降に大別できるが、前者がより多く、



第92図　出土遺物実測図(1)－古墳時代土師器
2･4～6･11･15･17･18. ＳＤ52　　8･13. ＳＤ64　　1･3･7･9･10･12･14･16･19～22. ＳＤ65

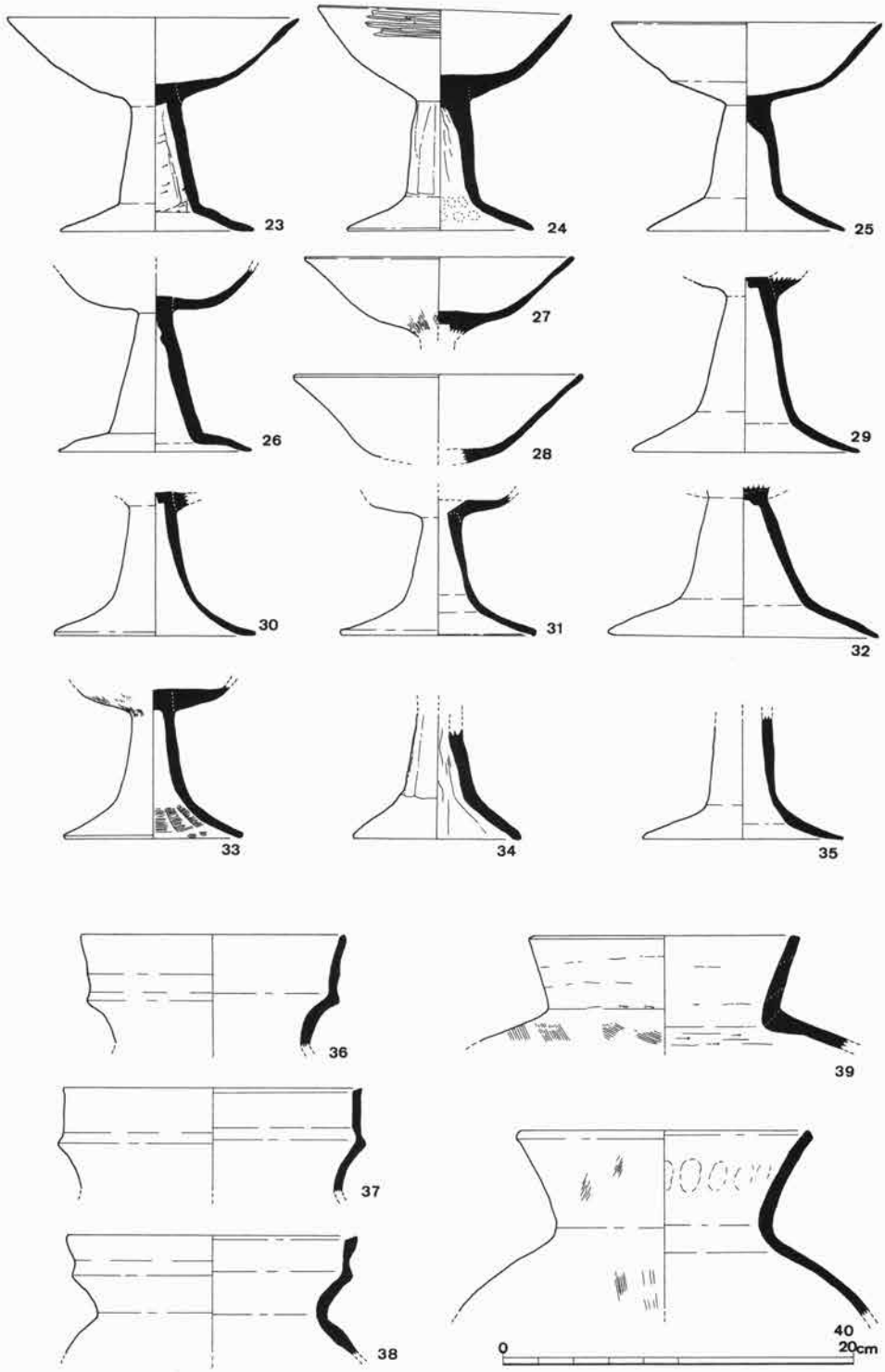
中でも布留式土器の占める割合が大きい。

布留式土器(第92～94図、図版第57・58)　小形丸底土器・高杯・甕・壺などの器種が確認できる。

小形丸底土器は、出土量が最も多く、それぞれの個体の残存率も他の器種に比べて高い。形態は、基本的には最大腹径を体部のやや上半に位置させる扁球形の体部に、やや内湾ぎみに外上方に立ち上がる口縁部を備えるものである。ただ、器高に対する口径あるいは最大腹径の割合(扁球率)、または器高(体部高)に対する口縁高の比率の差から、いくつかの形態に細分できる。一つは、扁球率(口径あるいは最大腹径÷器高×100)が120以上とかなり扁平で、器高の1／3以上の高さの口縁高をもつもの(2・5・10)。第2は、扁球率が100～120で、口縁高が器高の1／3から1／4に納まるもの(1・3・4・9・14)。第3は、扁球率が100以下で、口縁高が器高の1／4未満と短いもの(16・19・20)。そして1点であるが、卵形に近い腰高の体部に器高の20%とごく短い口縁部が外上方に捻り出されるもの(扁球率80%、21)。各個体の器面調整についても、いくつかの手法を抽出することができる。体部外面調整については、1次調整としてハケを多用し(底部からみて斜放射状に施し、体部中位以上で横位に移行する)、体部上半に指頭あるいは布を介したヨコナデを加えるもの(3・8・10・16・17)。1次調整に横位のヘラケズリを用い、最大腹径以上をヨコナデするもの(6・7・10・13・18)。さらに、上記のいずれかの工程に横位のヘラミガキを加えて器面を化粧するもの(1・2)。1次調整のハケメ(タテハケ)のみでおわるもの(15)。全面をていねいなナデで仕上げるもの(20・21)などがある。体部内面は、基本的にはヘラケズリで器壁の厚さを減じた後、ていねいな指頭ナデで器面を平滑に仕上げるのを通例とするが、ナデを省略する個体(10・16)もある。口縁部は、指頭あるいは布を介したヨコナデで内外を調整するのが一般であるが、体部をミガキ仕上げする個体に限り、口縁部にも横位のヘラミガキが加えられる(1は内外とも、2は外面のみ)。

17は、口縁部を欠くが体部は完存している。最大復径(13.4cm)を体部中位に位置させる整美な扁球形を呈する。法量から小型の直口壺とみられる。器表の保存状態はよくないが、外面調整は、底部からみて斜め放射状のハケを施した後、体部中位付近に断続的なヨコハケを加える。体部上半はハケメが残らず、何らかの擂り櫛技法(ナデの可能性が高い)を加えて先行するハケメを消しているようである。内面は、ヘラケズリで器厚を減じ(3～4mm)、これにていねいな指ナデを加えて平滑に仕上げる。

高杯は、杯部を残す個体をみると、いずれも体部と口縁部の境界がゆるやかに屈曲するが、その接合稜線は不明瞭な側面形態を呈するものである。脚部は、柱状部と裾部の境界が屈折するもの(23～26・29・31・32・34・35)とゆるやかに広がる円錐状に近いもの

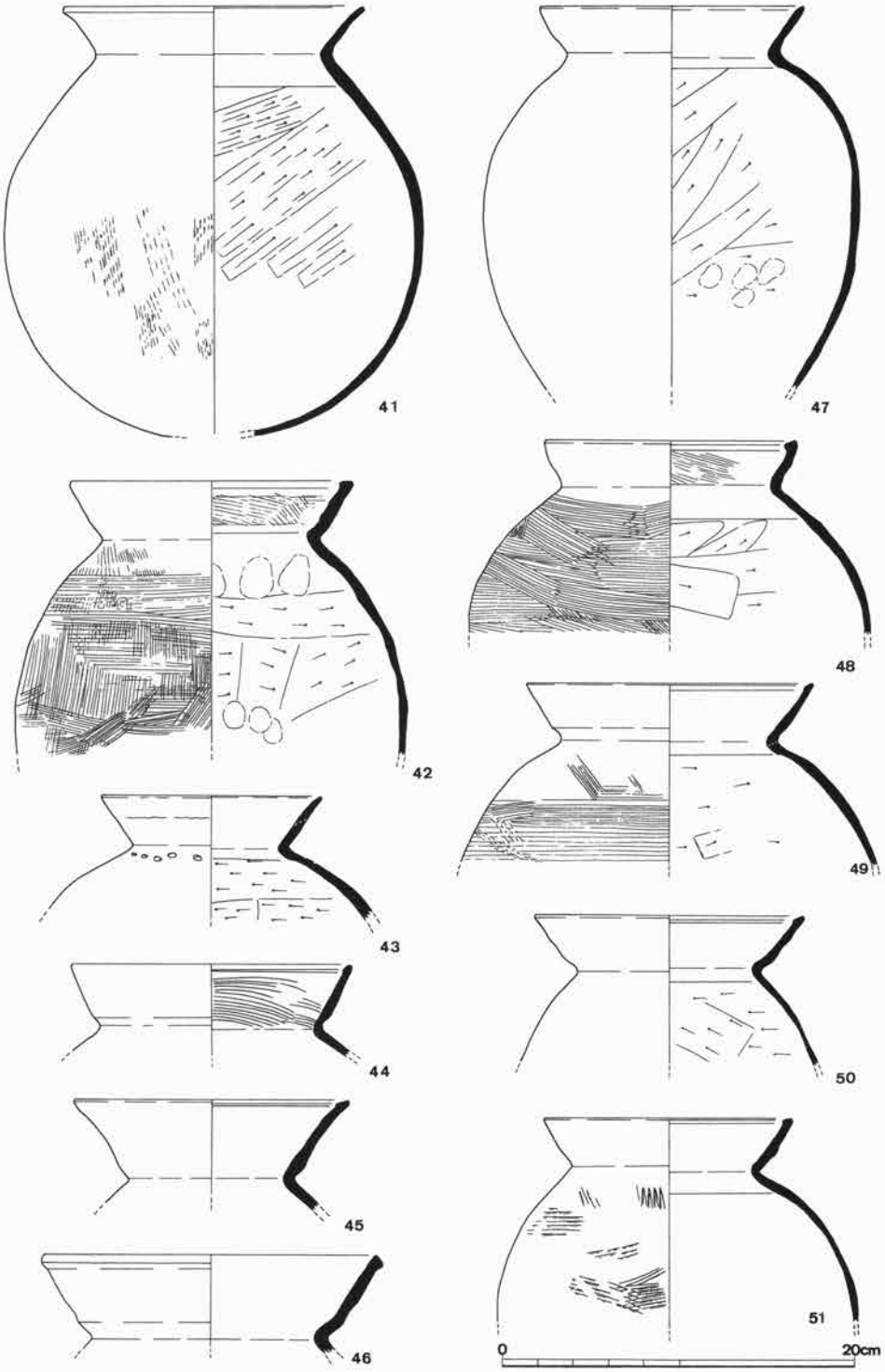


第93図　出土遺物実測図(2)－古墳時代土師器
23～26・29・31. S D51　　27・28・30・32～37・39・40. S D65　　38. S D64

(31・33)があり、前者は柱状部が下方に向かって余り広がらない円柱状に近いものと、大きく直線的に広がるものに二分できる。器面調整については、器表が磨耗・剝落したものが多く、その詳細を知り得る個体は少ないが、杯部は、外面には下方からみて斜放射状のハケ(その開始点が脚部柱状部上端に位置する個体がある)を施した後、口縁部内外をヨコナデ調整する手法(体部内面は一定方向あるいは不整方向のナデ調整)が一般的で(27・28・33)、なかには口縁部外面に横位の粗いヘラミガキを加えるもの(24)もある。脚部は、柱状部外面を縦方向にヘラ状工具でなでるため、わずかな稜をもつ面を残すものが散見される(23・24・33・34)。柱状部内面は、しぼり目を残すもの(24・25・33・34)と、横方向の回転ケズリ(あるいはナデ)によってこれを消すもの(23・29～32・35)がある。裾部は、内面の柱状部寄りに放射状ハケ(24)、静止痕を残す連続的なヨコハケ(蜘蛛巣状ハケ、33)を残すものもあるが、最終的には内外をていねいにナデ仕上げするのを一般とする。杯部は、完成して一定時間を経た脚部の柱状部上側面に付加するように粘土帯を継ぎ足して成形する(いわゆる挿入付加法)。

甕は、全体形を知り得る個体は少ないが、比較的残存状態のよい資料をみると、41のように最大径が体部中位よりやや下方にあって下膨れぎみの球形を呈するものや、47のように体部中半を最大径とする肩のあまり張らない長胴球形の形態を呈する。口縁部は、一般に頸部接合部を強くなでるため内方にくびれて全体として内湾した形状を呈するが、43のように鋭く屈曲するものもある。口縁端部の断面形は、口唇部を内方に内傾面をもつように肥厚させたものが多いが、端部が肥厚せず尖りぎみに丸くおわるもの(43・47)や、口唇部が肥厚せず外傾する面をもつもの(41・46)もある。器面調整は、体部全体→肩部外面→口縁部の順に施される。体部外面は、全面にわたり縦基調(左傾するものが多い)のハケメ(部分的に断続的なヨコ・ナナメハケをこれに加える個体もある)を施した後、肩部付近に顕著なヨコハケを加えるのを一般とするが、50は肩部ヨコハケを省略する。内面には、頸部屈曲線直下あるいは数cm下位より横位あるいは斜位のヘラケズリが多用される。口縁部調整は、布を介したヨコナデを用いて最終調整するが、その施行範囲は外面では体部上半部にまで及ぶものがある(41)。また、口縁部内面にヨコナデに先行する断続的なヨコハケを施すものがある(42・44・48)。

壺は、口縁部の形状から二重口縁を示すものと、直口口縁のものがある。二重口縁壺(36～38)は、口径15.0～17.2cmを測る中型の規模を有するもので、太めの頸部は、直立することなく外上方に円弧を描くように外反し、その先端が水平に至るまでに上方に屈曲して口縁部(二次口縁)に移行する。口縁部は垂直あるいはわずかに外傾ぎみに直立し、口唇部上端は水平あるいはやや内傾する面をなす。口頸部界の外面には矮小化した頸部突帯が



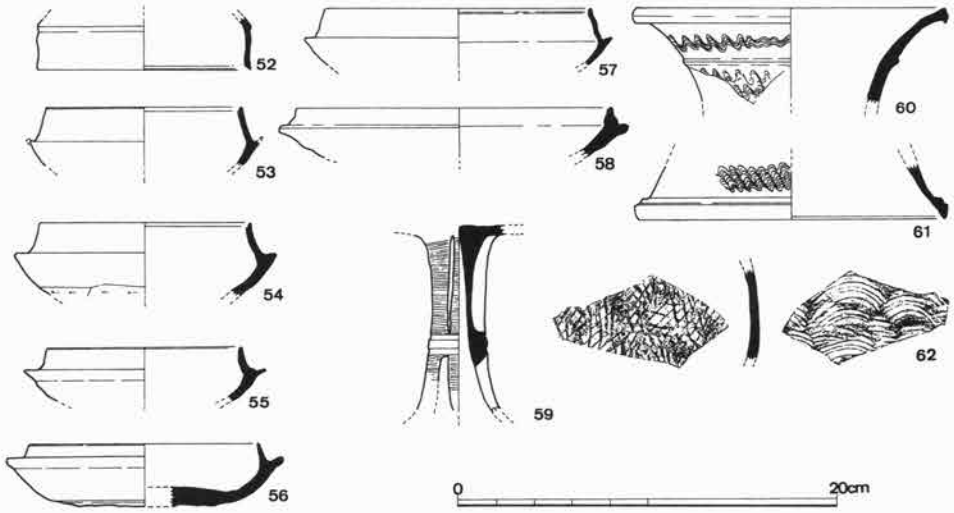
第94図　出土遺物実測図(3)－古墳時代土師器
41～45・47～51. S D65　　46. S D64

めぐるが、その断面は丸みをもつ三角形で突出度も極めて低い。直口口縁を呈するもの(39・40)は、復原口径がそれぞれ14.8cm・16.4cmを測る中型の短頸直口壺というべきもので、口頸部は直線的(39)、あるいはゆるく外反する形状(40)を示す。口唇端部はともに面取加工を施しており、その端面は外傾する。器面調整は、頸胴部界直下(39)、またはそれより2cm以下(40)において横位のヘラケズリを施して器厚を減じている。口頸部は、内外とも布を介したヨコナデで仕上げるが、39の口頸部内面にはこれに先行するヨコハケの痕跡が認められる。

古墳時代の須恵器(第95図)　蓋杯・高杯・甕がある。

杯蓋(52)は、復原口径10.0cmを測り、口縁部は直下に下る。天井部下縁の稜は丸味を帯びた三角形断面を呈し、その突出度は低い。口唇端部は内傾する明瞭な段を有する。

杯身(53～58)は、立ち上がりの高さやその形状などから、概ね3類に分類できる。一つは、立ち上がりの高さが1.7～1.9cmと高く、内傾ぎみに直線的にのびるものである(53・54・57)。口唇部は内傾する明瞭な段を残し、受け部は上外方に短くのびており、端部は尖りぎみに丸くおさめる。第2は、立ち上がりの高さが1.2～1.3cmと前者に比べやや低く、その中位で「く」字形に屈曲(55)するか、または内傾ぎみに直線的にのびる(56)。口唇端部は段状にはつくらず丸く仕上げる。体部を残す56でみると、体部外面はその2／3前後に回転ナデ調整が及ぶが、底部は回転ヘラ切り未調整のままである。第3は、立ち上がりが短く直立し、その断面形は厚みをもつ不整三角形状を呈する。受け部は厚みがあるが、短く側方に突出し、端部を丸く仕上げる。



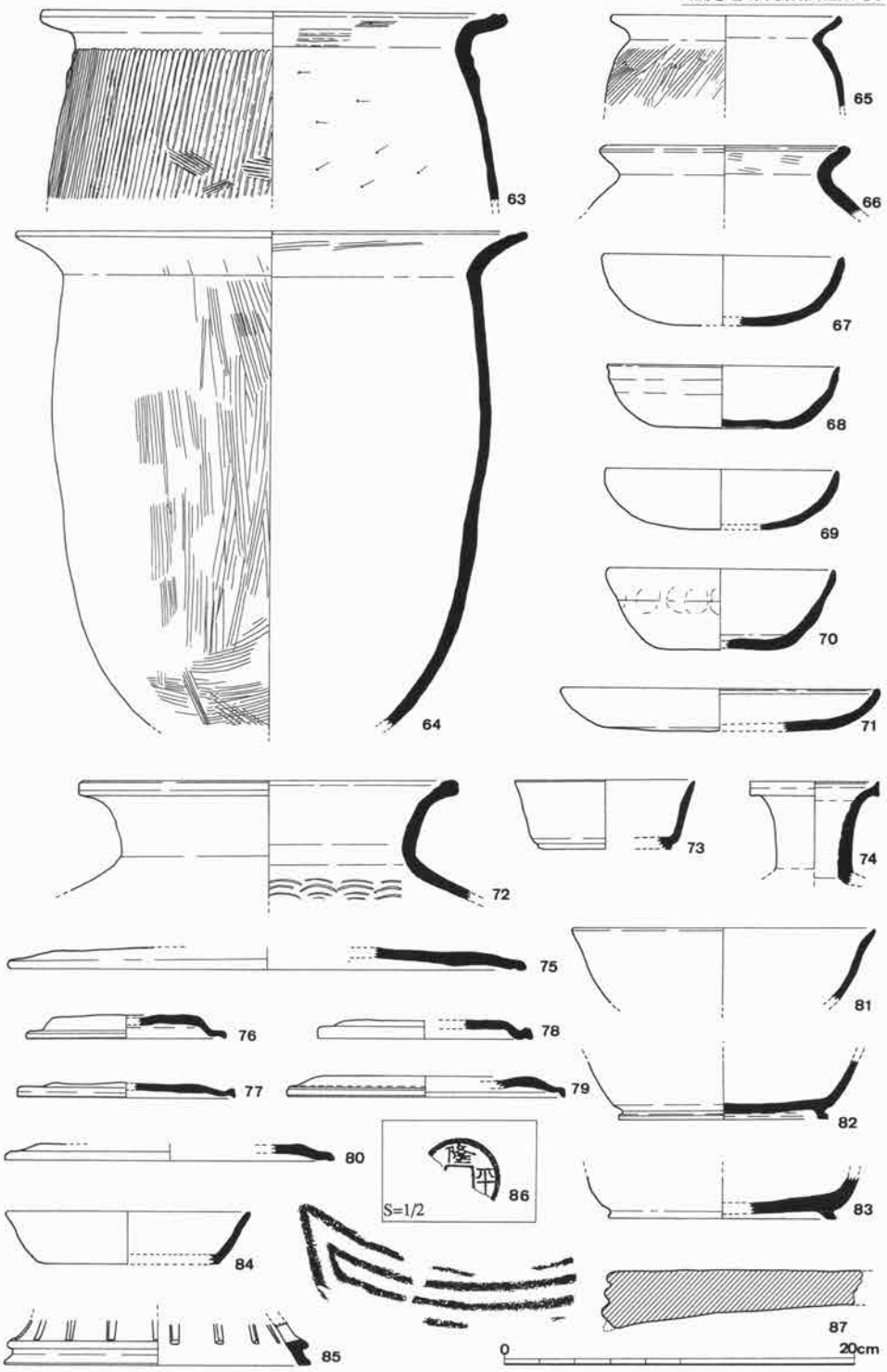
第95図　出土遺物実測図(4)－古墳時代須恵器
52～56. SD51　57. 8トレンチ包含層　58·59·61. SD61　60. SD52　62. 7トレンチ包含層

高杯(59)は、長脚高杯の細身を呈する脚部片である。柱状部中位に平行する２条の浅い凹線を横位にめぐらせて外面を上下に二分し、その各面にヘラ状工具による縦位のキザミを３方向に均等に入れる。このうち、上段のキザミは工具の幅相当しかなく、中空の柱状部内には至らないのに対し、下段のそれは幅の狭い長方形の透孔となる。柱状部外面はていねいな回転カキ目調整によって仕上げる。

甕(60)は、中型の甕の口頸部の断片である。口頸部はゆるやかに外反し、口唇部は側・下方にやや肥厚し、その下面は若干垂下する。口頸部中位に断面が鈍い三角形を呈する低い突線を１条めぐらせ、その上下に櫛描き波状文からなる文様帯を配する。波状文は各施文面の中心寄りに１回の施行で施す。62は、器厚５㎜程度の体部の小片であるが、外面に斜格子叩き、内面に細かい条痕の円弧状叩きを有し、断面は紫灰色を呈する。

奈良時代の遺物(第96図)　土師器甕・椀・皿、須恵器甕・杯・蓋・円面硯、瓦、銭貨などがある。

土師器甕は、口径26.0㎝前後を測る大型品(63・64)と、口径がおよそ13㎝の小型品(65・66)がある。63は、体部中位から頸部くびれにかけて径を縮小させ、口縁部は短くカーブを描くように外反する。口唇部は内方にやや肥厚し、上面に内窪みぎみの面をもつ。器面調整は、体部外面と口縁部に条痕の粗いハケメを施し(体部は全面に縦位ハケの後、部分的にナナメハケを加える。口縁部はヨコハケ)、体部内面はヨコヘラケズリの後、指頭によるヨコナデを施す。口縁部は、内面屈曲部から外面の頸胴部界まで指頭によるヨコナデで最終的に仕上げる。64は、長胴球形の体部に直線的に外反するやや長くのびる口縁を備える。口径が体部最大径を凌駕し、体部はその最大径を上端近くに位置させて砲弾形を呈する(甕Ｃ)。口唇部は、方頭状に成形され、その端面は外傾する面をなす。また、その内面には弱い沈線を１条めぐらせて内端面を相対的に肥厚させている。器面調整に関しては、体部の場合、外面全面(一部口縁部外面まで)くまなく縦基調のハケメを施し、底部付近はこれに断続的でランダムなハケを加える。内面は、頸胴部界直下より横位のヘラケズリを施して器厚を減じている。口縁部は、内面に断続するヨコハケの後、内外両くびれ部間を指頭ヨコナデで仕上げる。65は、球形の体部に「く」字状に外上方に屈曲する短い口縁部を備えた小型の甕である。口唇部は内側に丸く肥厚する。体部外面は右傾するナナメハケをくまなく施し、内面はくびれ部直下から下位にていねいな指頭圧を加える。口縁部調整は、布を介したヨコナデを用いるが、その外面施行範囲は頸胴部界より1.0㎝下位に及び、とくにくびれ部付近を強くナデつけるためこの部分が内方にくぼむ。66は、短く外傾する口縁部をもつ小型甕で、器厚が約８㎜を測り厚手の造りである。口唇部は、内端部に沈線を入れることによって相対的に内方に丸く肥厚させている。口縁部内面にヨコハ



第96図　出土遺物実測図(5)－奈良時代遺物

63・71・72・77・79・87. ＳＤ51　　64・67・68・73～75・81・82. ＳＤ61　　84. ＳＤ62
76・85. ＳＤ72　　66. ＳＤ75　　86. ＳＫ73　　80・83. 2トレンチ包含層　　65・69・70. 7トレンチ包含層

ケを施した後、口縁部内外を指頭ヨコナデで調整するが、その範囲は内外ともに体部の残存する全面に及ぶ。

土師器椀は、丸底に近い小さな平底から口縁にかけて内湾する弧を描くもの(67・69)と、平坦な底部と外上方にゆるく内湾する口縁部との屈曲がやや明瞭なもの(70)、そして口縁部の上半部が屈曲して立ち上がり、端部近くで小さく外反するもの(68)に形態上分類できる。器表が磨耗したものが多く、調整の細部を知り得ないが、67は口縁部内外をヨコナデ、底部内面は一定方向のナデ、底部外面は不整方向のナデで仕上げる(a₀手法)。68は、口縁部内外面にヨコナデを施した後、底部外面にヘラケズリを加える(b₀手法)。69・70は、ケズリの痕跡は認められず、ヨコナデ法により仕上げる。

土師器皿(71)は、平坦な底部からゆるく内湾ぎみに立ち上がる口縁部をもつもので、口唇部はわずかに内側に丸く巻き込む。器面の内外をヨコナデした後、底部外面に一定方向のケズリを加える(b₀手法)。

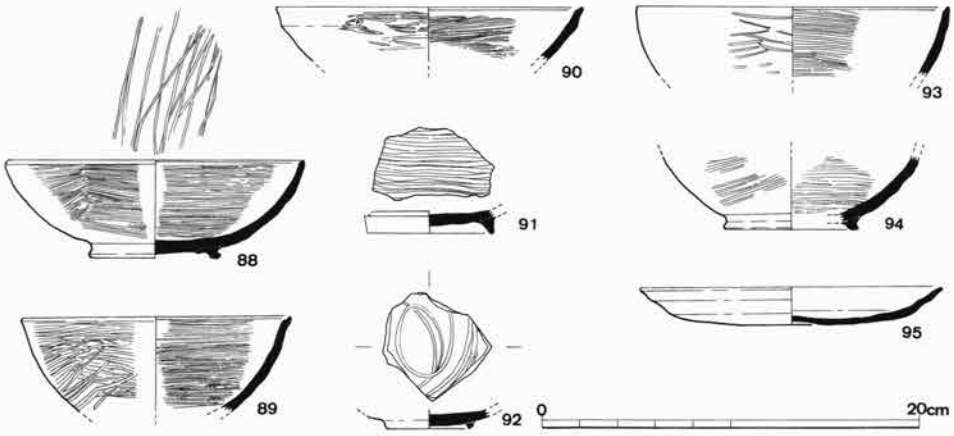
須恵器甕(72)は、大きく外反する口縁端部が丸味をもつ方頭状に肥厚し、その端面は側方に面する。内外面に自然釉がかぶり、調整の詳細を観察できない。

須恵器壺(壺L、74)は、細く締まった頸胴部界から頸部が直立ぎみに立ち上がり、口縁部は大きく屈曲するように外反して、口唇部は上下に肥厚するとともに、その端面は幅広の凹帯をなす。内外ともヨコナデ(ロクロナデ)で仕上げる。

須恵器杯身(73・81～84)は、口径の大小が認められる。口縁部は、直線的に外上方に立ち上がるもの(73・84)と、ゆるく「S」字状にカーブを描いてのびるもの(81)がある。高台は、直立する低平な逆台形断面を呈するもの(73)や、「ハ」字形に開いて断面が平行四辺形を呈するもの(82・83)などの形態差があり、その接合位置はいずれも底部外縁に近い。器面調整は、内外とも回転ナデ(ロクロナデ)を施すが、底部内面はこれに不整方向のナデを加える。底部外面は、83では回転ヘラ切り未調整のままであるが、82はこれに不整方向のナデを加える。

須恵器蓋は、口径の違いから大・中・小の3類に区別できる。大型(75)・中型(80)は、頂部上面を回転ヘラケズリの後、ロクロナデで仕上げる。口縁部の屈曲は弱く、内端面に1条の沈線をめぐらせて受け部とする。小型のものは、口縁部の屈曲が大きいもの(76・78)と、屈曲が弱く低平な感を与えるもの(77・79)がある。いずれも内外をロクロナデで仕上げる。つまみが残存する個体はなく、その形状は不明である。

円面硯(85)は、復原底径17.4cmを測る圏足円面硯の小破片である。硯部を欠損するが、圏足部(脚部)に長方形の縦長の透しを配し、その下縁に断面が丸味を帯びた1条の突帯がめぐる。



第97図　出土遺物実測図(6)－中世土器
88～91・94. 7トレンチ包含層　92. 8トレンチ包含層　93. 6トレンチ包含層　95. SD75

隆平永寶(86)は、半截しているが、銭型は直径2.3cmを測る小型で、字形のつくりは、「隆」は偏平で」、「平」の2・3画は1画のヨコボウに接する特徴をもつ。

重郭文軒平瓦(87)は、瓦当面の上外縁・上弧・下弧・下外縁の心々間の長さがほぼ等しく、弧線の断面は外縁とともにかなり丸味を帯びている。直線顎で、平瓦部凹面は残存部をすべてヨコヘラケズリ、凸面を瓦当下縁から横位の指頭ナデで調整する。

中世の土器(第97図)

瓦器椀(88～94)は、体部の形式あるいは高台の形状から、半球形状の体部からそのまま内湾する口縁部にいたる、いわゆる深い椀状の形状を呈し、外開きぎみに高くしっかりした逆台形状の高台を備えたもの(88・91・93・94)と、体部の丸味をやや欠き、口縁部で屈曲してやや外反ぎみに開く側面形状を示し(89・90)、低く直立する小ぶりの逆台形あるいは三角形断面を呈する高台を付すもの(92)に分類できる。口唇部の形態は、丸くまとめるもの(88)と、内傾する段を有するもの(89・90・93)があり、前者(88)の器壁は体部中位において6㎜前後と他と比較して厚い。器面の調整は、ミガキを内外とも広範にていねいに施すもの(88・89・94)と、外面のヨコヘラミガキが口縁部に限られ、内面のミガキもやや粗雑化したもの(90・93)がある。前者の外面のミガキは、緻密に円弧状のヨコミガキを3～5分割で全周させるもので、その下端は高台の接合部直上にまで至る。見込み部の暗文は、高い高台を有する個体(88・91)は、平行線状の暗文(とくに91は緻密)であるのに対し、低高台の92では内側面のミガキと連続する1～2回の連結輪状(螺旋状)暗文を施す。いずれも大和型瓦器椀の特徴を備えたものである。

土師器皿(95)は、平坦な底部から体部がゆるやかに外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反し、口唇端部は丸く終わる。口縁部内外はヨコナデ、底部内面は一定方向のナデで最

終調整し、底部外面はナデ調整が及ばず、先行する指頭圧痕が顕著に残る。

4．小　結

今回の調査成果をまとめると、以下の諸点に要約できる。

現存地割りや地籍図の示す地境線、あるいは地名や文献に残された里名などから、盾形周濠を有する前方後円墳として復原されていた仮称「南稲八妻北尻古墳」に関しては、墳丘部が削平を受けているものと仮定し、地表下に埋没していることになる周濠の想定輪郭線に沿って各所に調査区を配してその存在の有無を検証した。その結果、いずれの調査区でも周濠の存在を示す成果を得ることはできず、また埴輪や葺石といった外部施設の存在も全く認められないことなどから、古墳そのものの存在が否定的となった。古墳の復原の根拠となった現況地形やそれに規制された地境などは、調査でも確認されたように、大小の自然河道が度重なる流路の変動を伴って検出されたことに起因すると思われる地形の乱れによるもの、あるいは緩傾斜地における水田耕作などの土地利用によるものとみた方が適切であり、それが偶然古墳の形状(前方後円形)を示していたものと考えられる。

しかし、今回の調査では、全く遺構・遺物が検出されなかったわけではなく、対象地の広い範囲にわたって古墳時代から中世に至る遺物がややまとまって出土した。ところが、これらは、多くが包含層資料であり、遺構に伴うものも主として大小の自然河道あるいは不整形の溝・土坑から出土したもので、建物跡などのような人為的遺構に伴うものは少ない。おそらく、調査地の周辺域、特に流路の上流に相当する西方あるいは南に接する地区に当該期の集落などの生活の痕跡、あるいは寺院・官衙などの施設が存在するものと推量しても大きな過ちではなかろう。

ところで、調査区のほぼ中央にあたる５・６トレンチで検出された遺構のうち、特に古墳時代前半期(布留式併行期)の遺構については、やや注意すべき内容を有するため、あらためて考察を加える。ここで対象となる遺構は、蛇行する自然河道(ＳＤ52・65)と礫敷の施設をもつ溝状遺構(ＳＤ64)である。そのいずれの遺構からも比較的多くの土器資料が出土している。土器が出土するということは、一般に生活の場が近在することを暗示するわけであるが、この遺跡の場合、出土土器総数の中でいわゆる小形精製土器の占める割合が一般集落遺構のそれに比べて高いこと、さらにそれらの土器の中に完形品が目立って多いことが指摘でき、これらの点から集落が周辺域に存在すると簡単に結論づけられない側面がある。むしろ、小形精製土器の内在する祭祀性を重視すると、これらの一連の遺構の性格に祭祀性を付与することも可能であろう。その祭祀の具体相については、遺構の一方が自然河道であるということを重視すれば、いわゆる農耕儀礼に本質的に繋がる「水辺の祭

祀」(水霊信仰)に関連する遺構とみるのがふさわしい。ところで、祭祀遺構として著名な奈良県天理市所在の布留遺跡の布留地区において、布留川の川辺に沿うかたちで幅0.4～0.7m・長さ7.0m以上の礫敷遺構が検出され、特種に装飾化された埴輪や滑石製玉類などのいわゆる祭祀遺物のほか、土師器高杯や小形丸底壺などが多量に出土している。多くの研究者は、この遺構を一過性の高い「水霊信仰」の場とみなし、礫敷遺構を祭場(祭壇)＝神を迎えるための神座にみたて、その周囲に埴輪を樹立させて一定の祭祀空間を囲画したものと考えている[注3]。そこで、再び北尻遺跡をみると、ＳＤ64の礫敷に上述の布留遺跡例と共通する内容が認められる。もっとも北尻遺跡の場合、布留遺跡のように玉類の出土や埴輪の囲繞痕跡は認められない。しかし、一般に５世紀後半以前の祭祀には滑石製模造品や手捏ね土器などのいわゆる祭祀遺物が共伴しないのが通例であることから、布留式併行期に年代設定できる北尻遺跡の一連の遺構に祭祀遺物が伴わないのはある意味で当然といえる。要するに、北尻遺跡の布留式併行期の遺構について、それが布留遺跡に共通する内容をそなえる点を加味して、大胆な評価を加えるなら、礫敷面を設けるＳＤ64を祭壇ともいうべき祭祀空間として、そこで土器などを用いた、たとえば共同飲食を伴うような一連の祭祀行為が執行され、その後、祭祀具である土器類などを北側に隣接する自然河道に一括投棄、あるいは祭祀の一連の過程として川中に鎮めた。そのような「水辺の祭祀」に係わる遺構と捉えることもできるかもしれない[注4]。

最後に、包含層資料あるいは自然河道内出土の奈良～平安前期の資料の中に、墨書土器や円面硯といった識字層の存在を示す遺物が含まれ、また、重郭文軒平瓦をはじめとした布目瓦などの瓦磚類や隆平永寶といった皇朝銭も少量であるが出土している。この地は、たとえば調査対象地のすぐ東側に奈良期の官道である山陰・山陽併用道が通じているという交通上の要衝であり、また、現存地名や条里地割りなどから、この官道の東に接して方８町の国府域を想定する見解が提唱されている[注5]。今回は、それらに係わる具体的な遺構こそ検出されなかったが、遺物の内容は、当該期における一般集落のそれを示すものではなく、むしろ何らかの官衙的施設あるいは寺院が周辺域に存在する可能性も否定できないものである。今後の周辺での調査が期待されるところである。

(伊賀高弘)

注１　奥田裕之「京都府相楽郡精華町南稲八妻丸山古墳について」(『桃山歴史・地理』第19号　京都教育大学史学会)　1982

注２　調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。

石井伸卓　鹿島昌也　佐々木達也　中野行真　仁科圭子　松岡邦裕　宮本裕行　奥平廣子　栃

木道代　林　恵子　菱田直美　平井眞由美　福田玲子　福永美智代　森田千代子　吉永清美
与十田節子

注3　置田雅昭「川の神まつり」(『古墳時代の研究』3　生活と祭祀　雄山閣)　1991

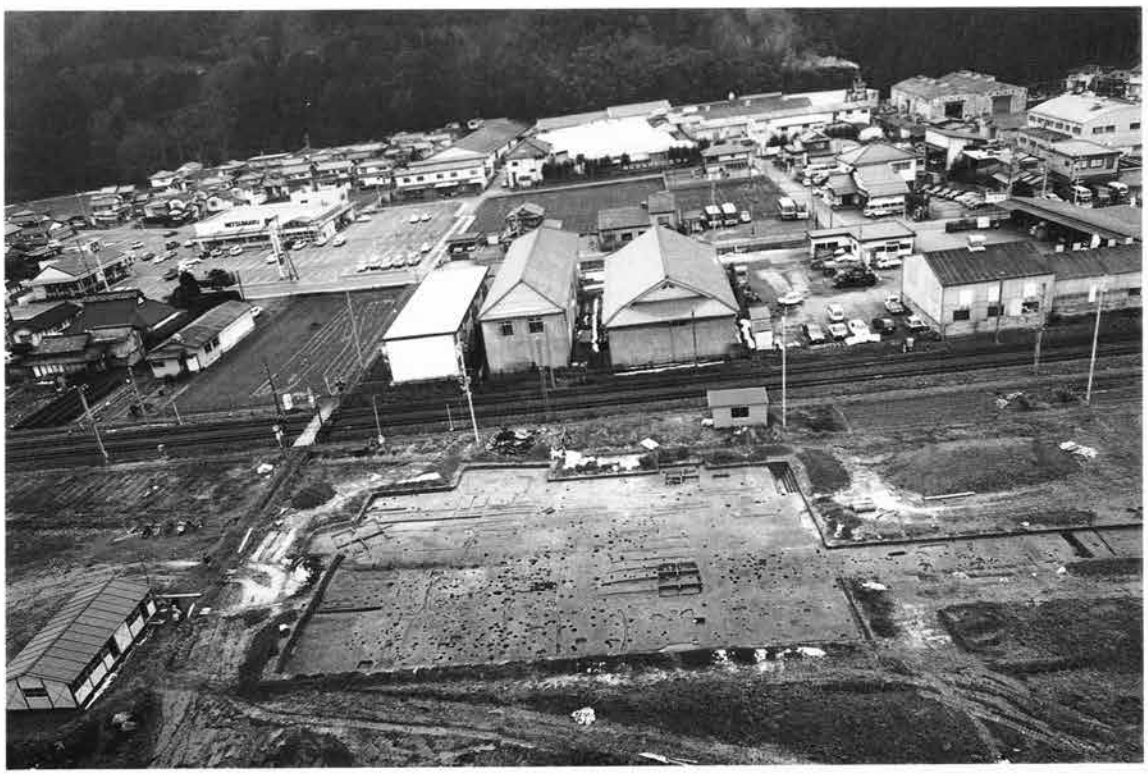
注4　この点に関して、出原恵三氏は古墳時代の「水辺の祭祀」についてその分類と時期的変遷を考察し、その祭祀形態が5世紀後半期を境に大きく変化することを説いている。それによると5世紀後半以前の祭祀は、祭場としての空間が設けられず、川そのものを強く意識した祭祀と規定するのに対し、それ以降は、一定の祭祀空間を設定し、祭祀遺物あるいは日常汁器を多用する祭祀と捉えられる(出原恵三「祭祀発展の諸形態－古墳時代における水辺の祭祀－」『考古学研究』第36巻第4号　考古学研究会　1990)。同氏の立場からみると、北尻遺跡が属する布留式併行期は、祭場(神座)が未設定である段階であり、本遺跡のあり方とは矛盾することとなる。

注5　奥田裕之「奈良時代の南山城－相楽郡を中心に－」(『波布理曽能』第7号)　1990

図　　版

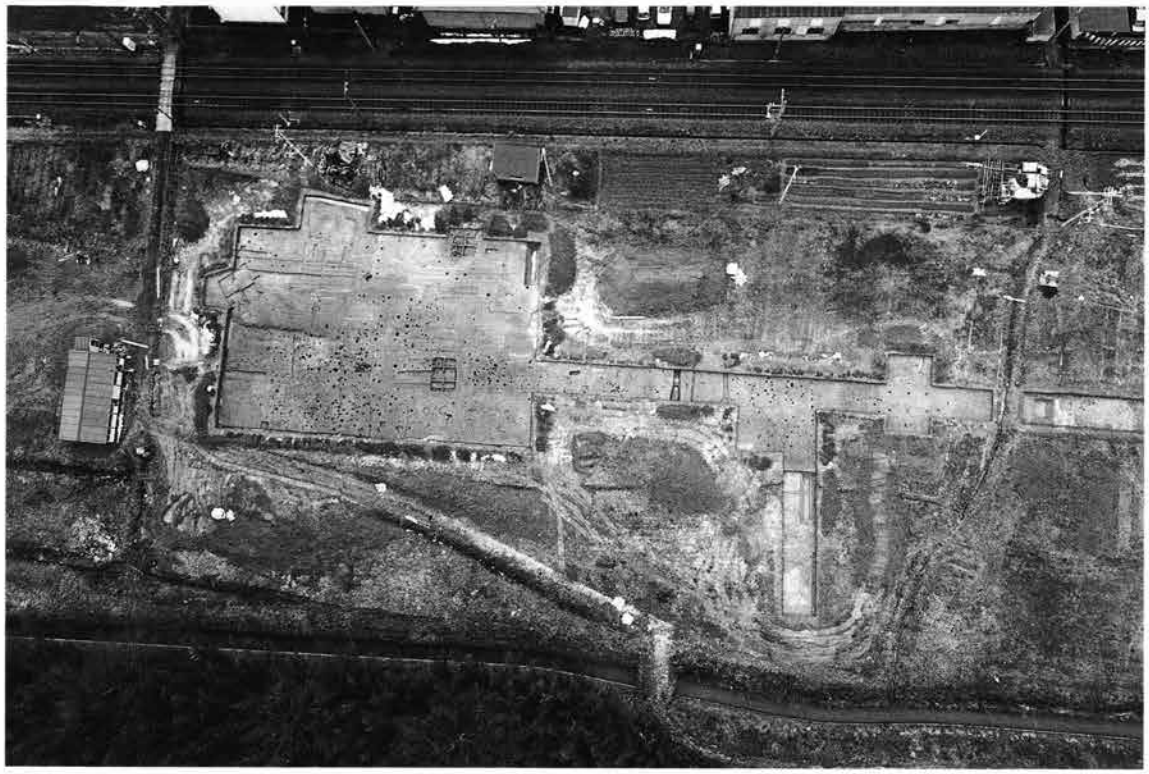
図版第1　大島東遺跡

(1)　トレンチ全景（東から）

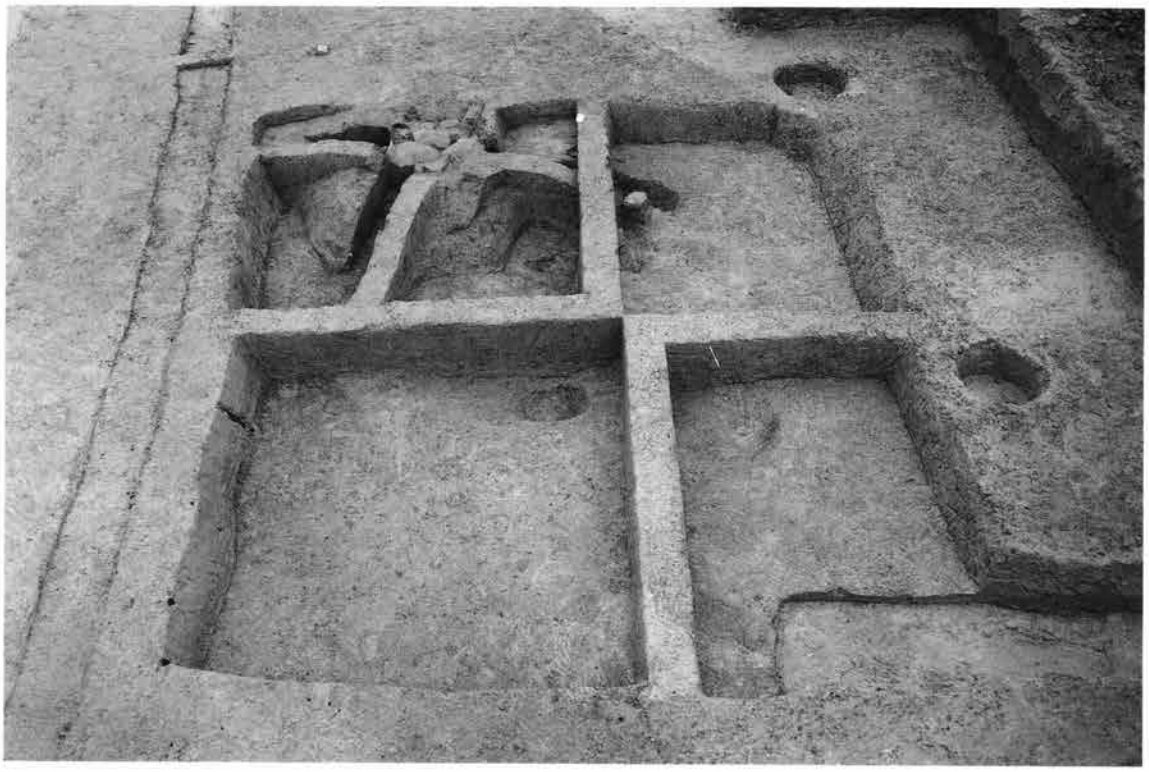


(2)　3トレンチ拡張区全景（北から）

図版第2　大島東遺跡



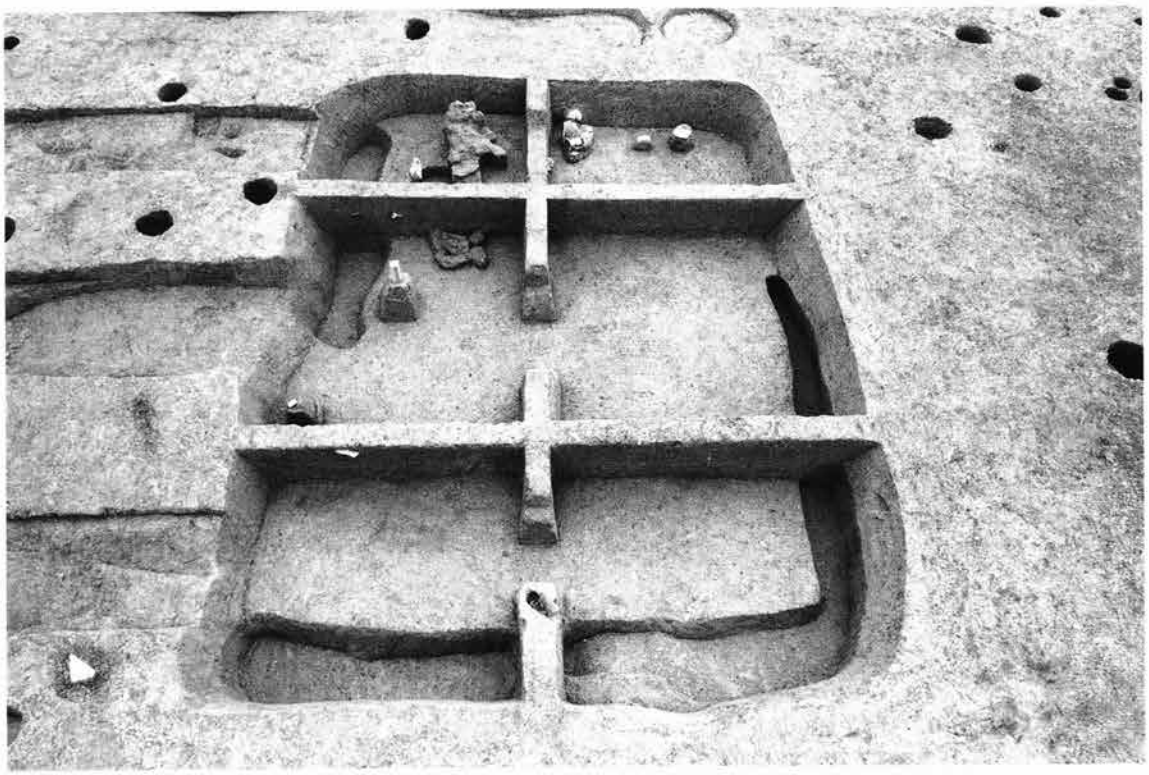
(1)　3トレンチ全景（北から）



(2)　竪穴式住居跡SH01（西から）

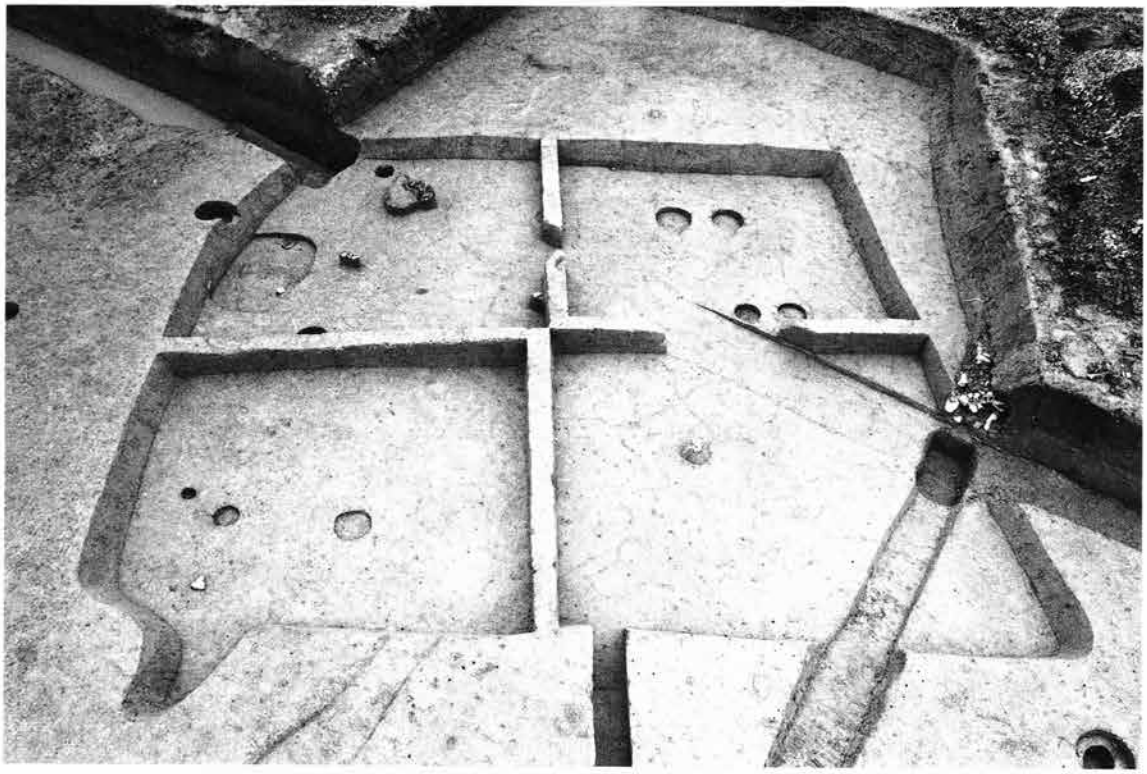
図版第3　大島東遺跡

(1)　竪穴式住居跡SH01竈検出状況（西から）



(2)　竪穴式住居跡SH02（北から）

図版第4　大島東遺跡



(1)　竪穴式住居跡SH03（南西から）

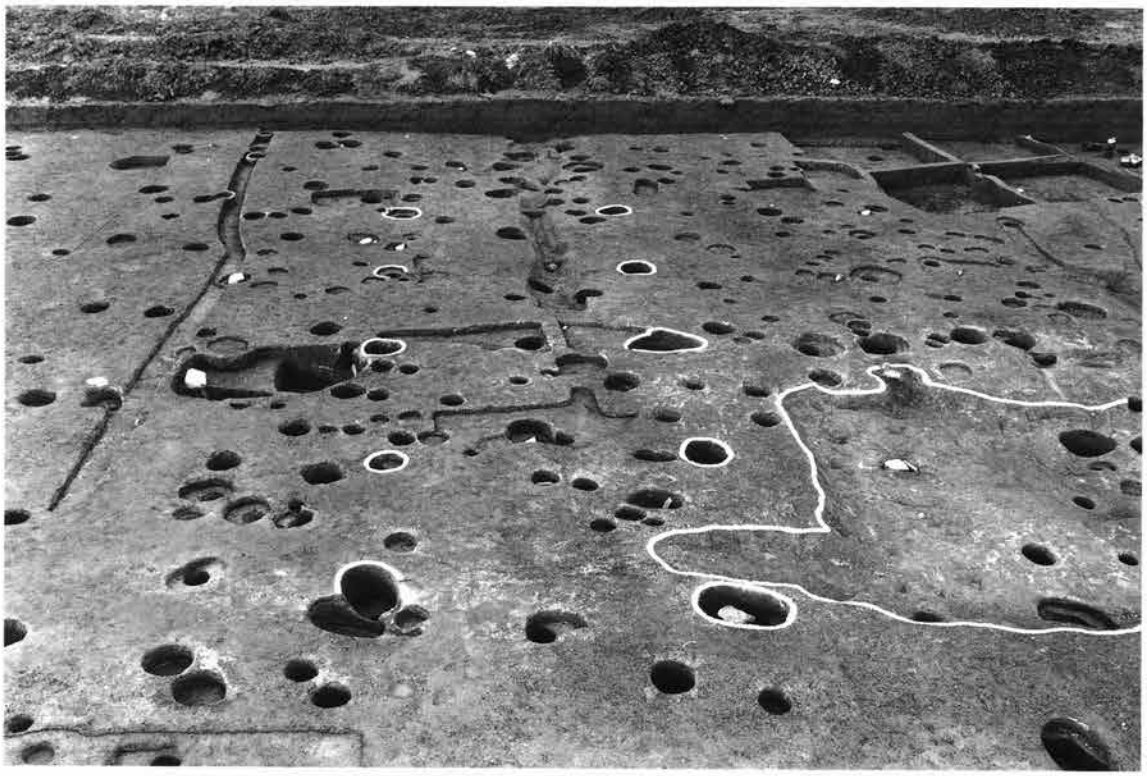
(2)　竪穴式住居跡SH04（西から）

図版第5　大島東遺跡

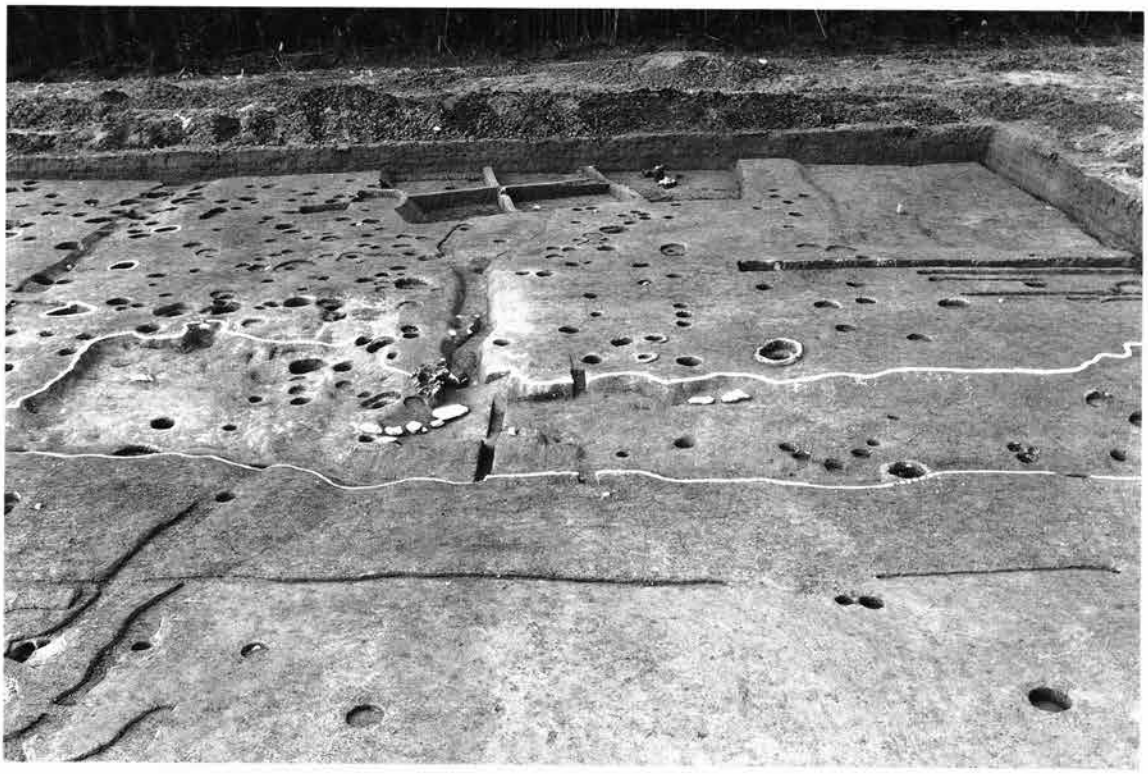
(1)　竪穴式住居跡SH04床面遺物出土状況（南西から）

(2)　掘立柱建物跡SB01（西から）

図版第6　大島東遺跡



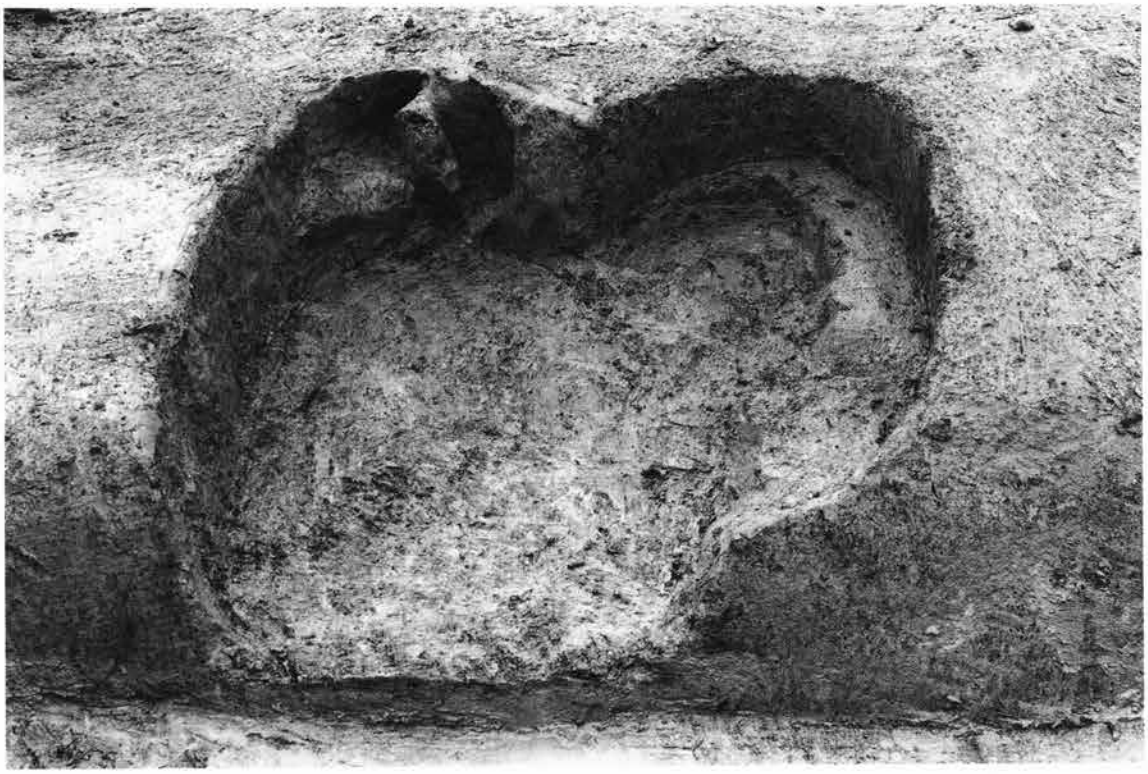
(1)　掘立柱建物跡SB02（南から）



(2)　溝状遺構SD04（南から）

図版第7　大島東遺跡

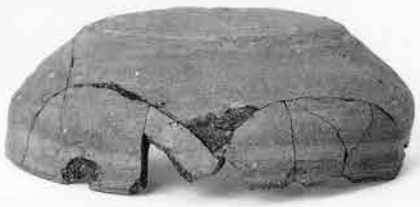
(1)　土坑SK08上面（南から）



(2)　焼土坑SK13（北から）

図版第8　大島東遺跡

27



13

31

14

33

18

22

5

11

38

44

45

出土遺物

図版第９　池尻遺跡第２次

(1)　調査地遠景（南から）（後方は坊主塚古墳）

(2)　調査地遠景（南東から）

図版第10　池尻遺跡第２次

(1)　調査区垂直写真

(2)　第１調査区垂直写真

(3)　第２調査区垂直写真

(4)　第３調査区垂直写真

図版第11　池尻遺跡第２次

(1)　第１調査区SD203遺物出土状況（南から）

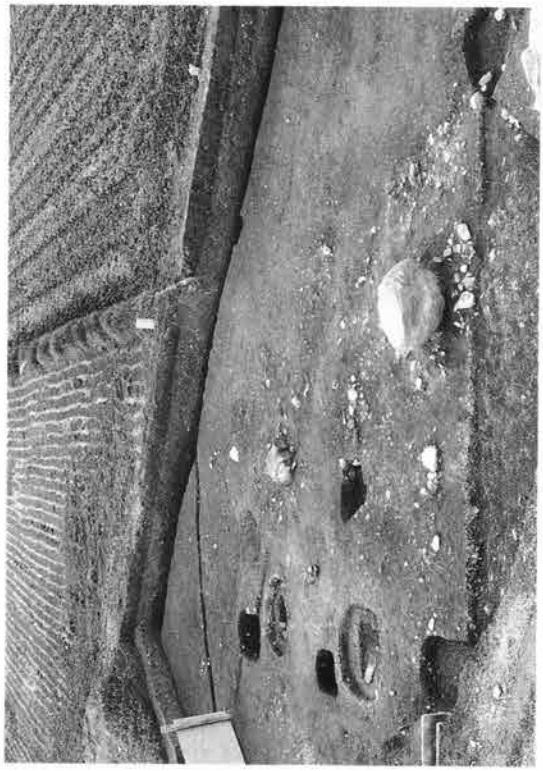
(2)　同　SD203完掘状況（南西から）

(3)　同　SA204（北西から）

(4)　第２調査区SB302（南から）

図版第12　池尻遺跡第２次

(1)　第２調査区SB303（南から）



(2)　同　近景（南から）

(3)　同　SB303礎石検出状況（南から）

(4)　同　断割状況（南東から）

図版第13　池尻遺跡第２次

(1)　第２調査区SX304（南西から）

(2)　第３調査区SB401（東から）

(3)　同　SD402遺物出土状況（西から）

(4)　同　SD402完掘状況（北から）

図版第14　池尻遺跡第２次

1

3

4

6

5

15

13

10

14

11

21

24

25

出土遺物 (1)　土器
（番号は実測図番号と対応する。）

図版第15　池尻遺跡第２次

32

30

29

40

35

36

37

37-a

41

38

48

出土遺物 (2)　土器

図版第16　池尻遺跡第２次

出土遺物 (3)　土器

94

95

97

96

98

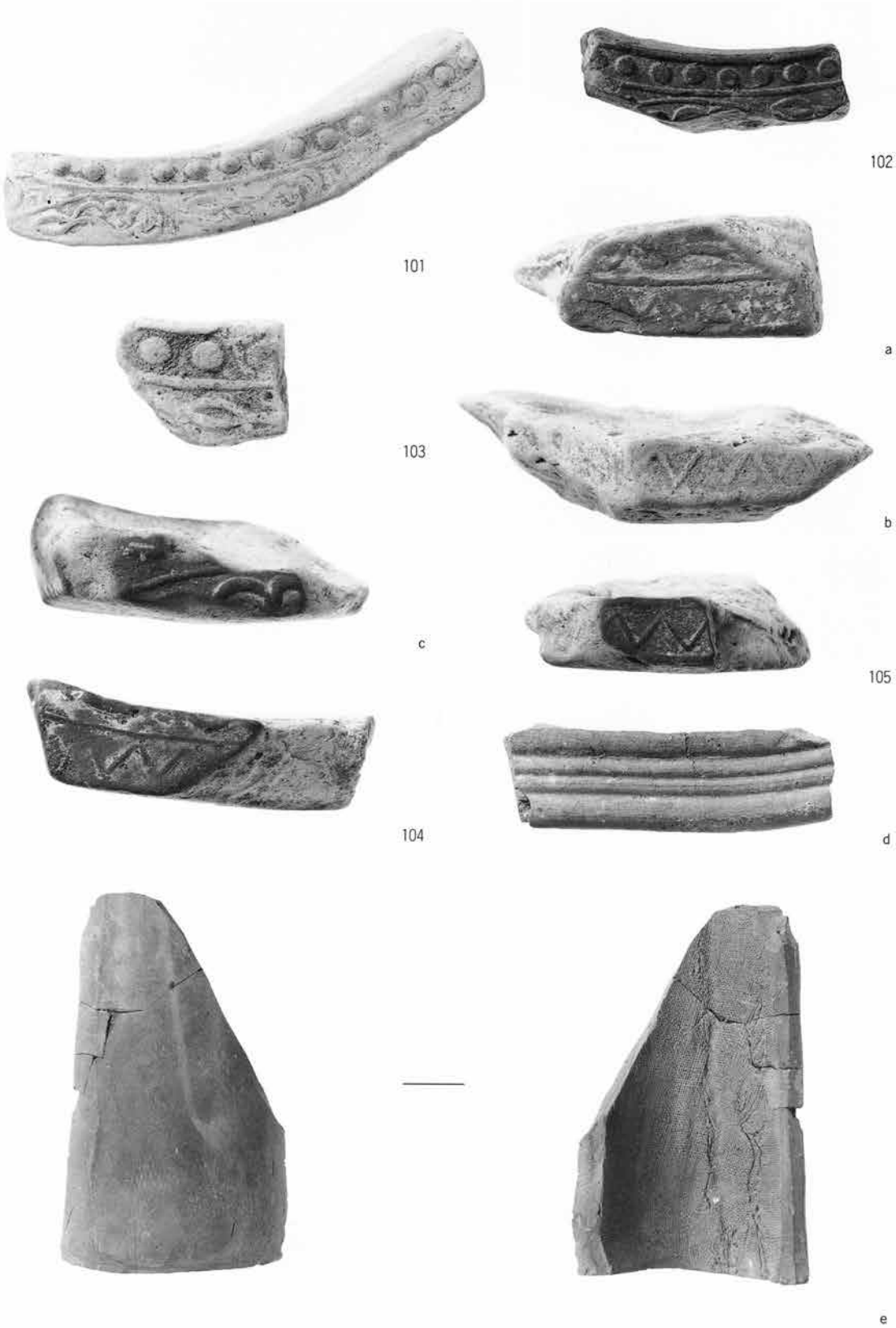
114

99

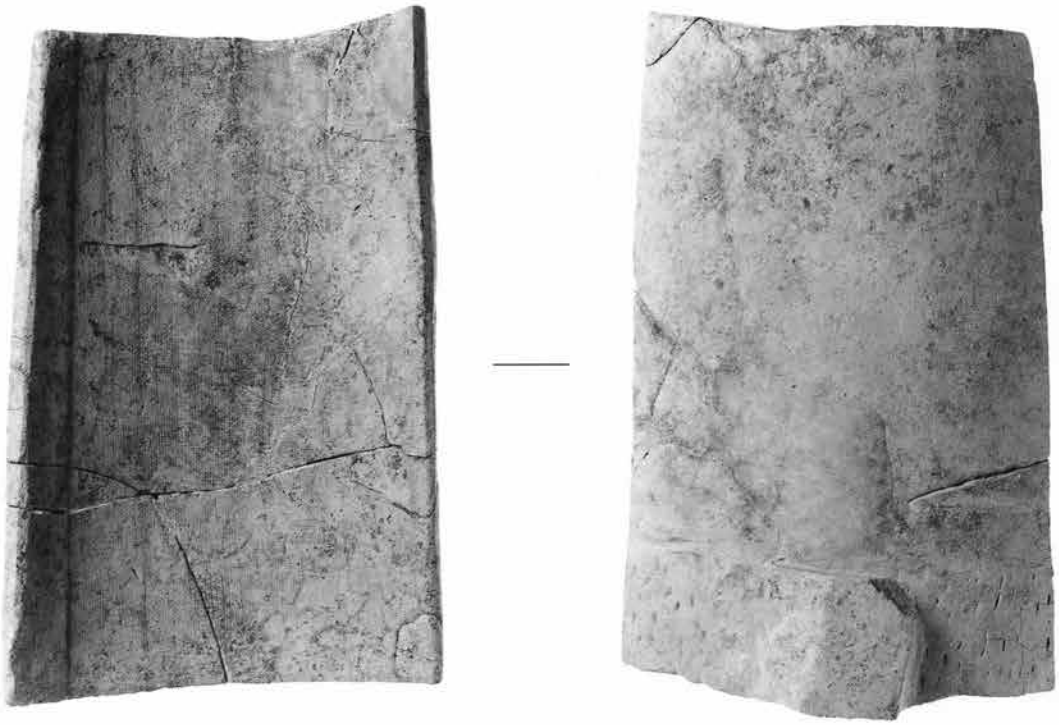
100

出土遺物 (4)　瓦

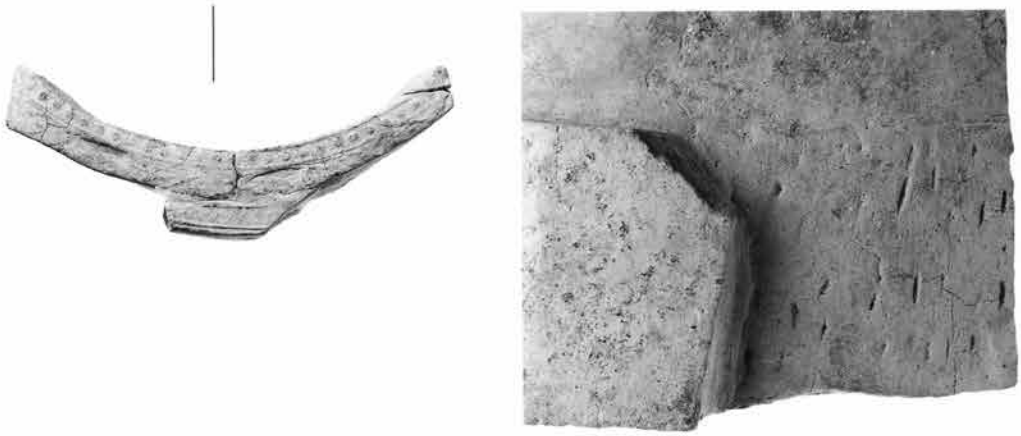
図版第18　池尻遺跡第２次



出土遺物 (5)　瓦
（ｄは平成３年度出土）



106



106-a

106-b

出土遺物 (6)　瓦

図版第20　池尻遺跡第２次

107

109

出土遺物 (7)　瓦

113

f

g-1

g-2

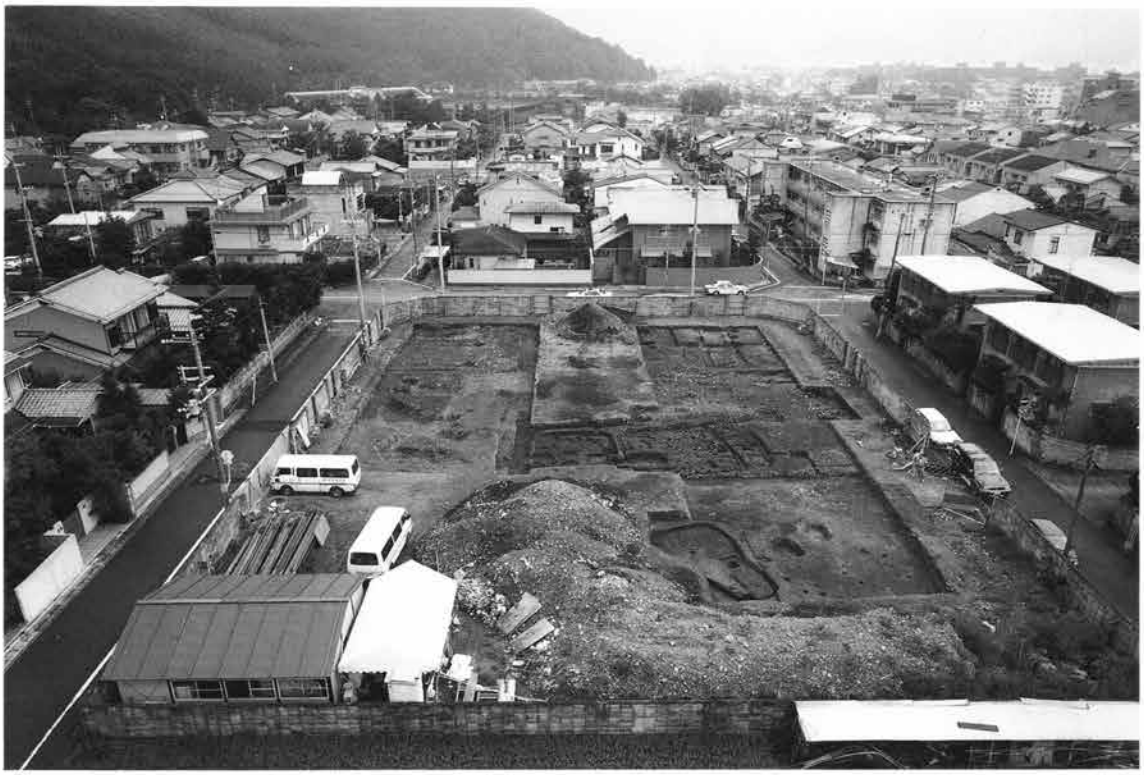
出土遺物 (8)　瓦

（ｆ、ｇ-1、ｇ-2はＳＤ203出土の瓦窯の存在を示す資料）

図版第22　池尻遺跡第２次

出土遺物 (9)　（上：土器、下：瓦）

図版第23　植物園北遺跡第13次



(1)　調査地遠景（西から）

(2)　調査地遠景（真上から）

図版第24　植物園北遺跡第13次

(1)　Sトレンチ遠景（西から）

(2)　掘立柱建物跡１（南から）

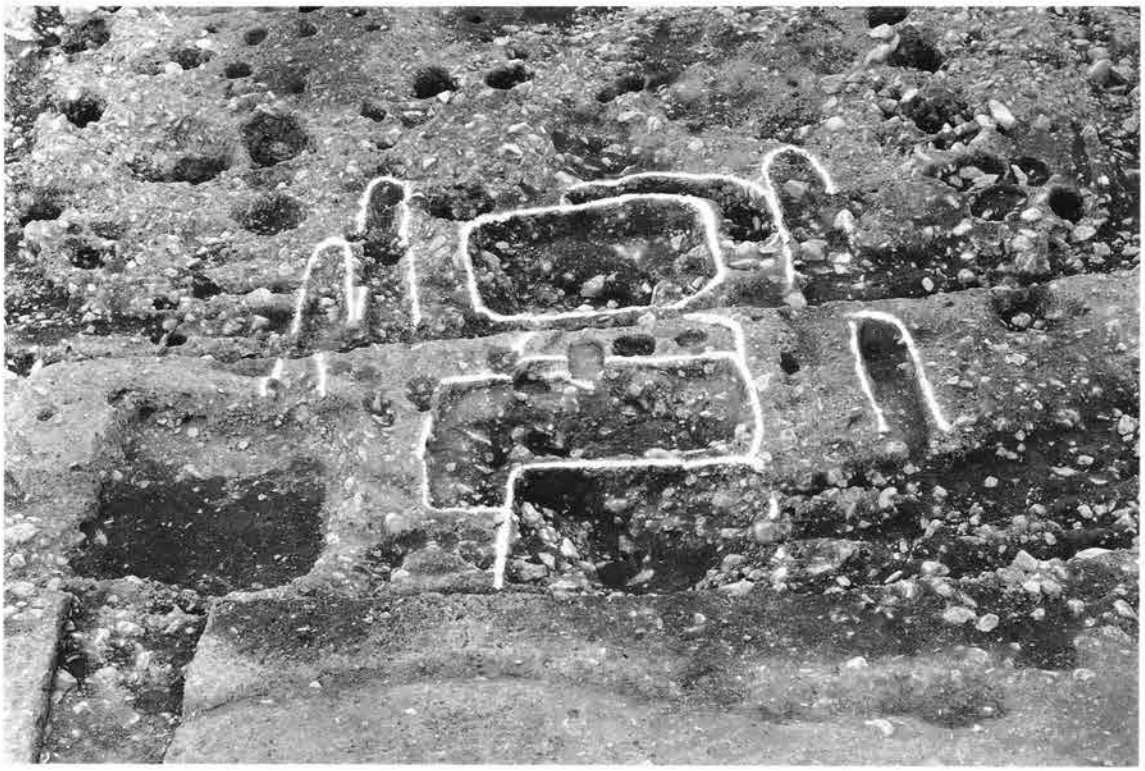
図版第25　植物園北遺跡第13次

(1) 竪穴式住居跡１（北から）

(2) 竪穴式住居跡１遺物出土状況（南から）

図版第26　植物園北遺跡第13次

(1) 竪穴式住居跡２・３（真上から）



(2) 竪穴式住居跡２・３南辺の土坑及び溝（南から）

図版第27　植物園北遺跡第13次

(1) 竪穴式住居跡３（南から）

(2) 竪穴式住居跡３特殊ピット遺物出土状況（南から）

図版第28　植物園北遺跡第13次

(1)　集石状遺構（東から）

(2)　集石状遺構堆積状況（北から）

図版第29　植物園北遺跡第13次

(1)　集石状遺構土器出土状況（南から）

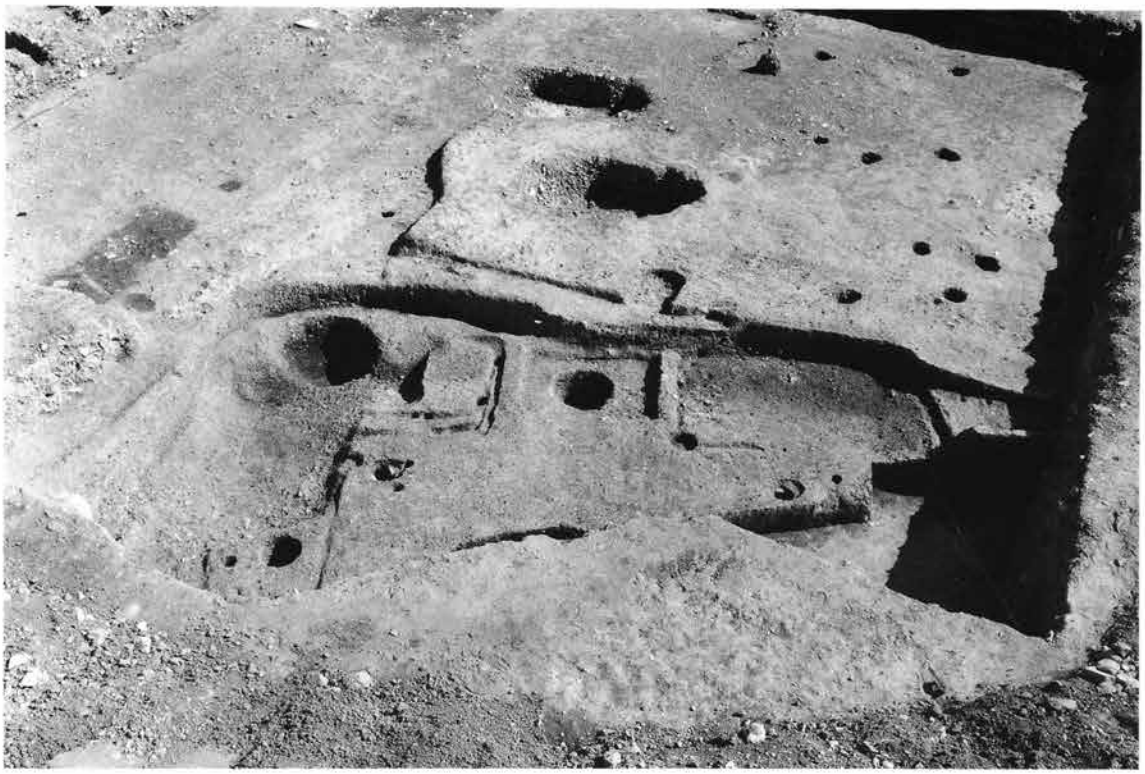
(2)　集石状遺構土器出土状況（北から）

図版第30　植物園北遺跡第13次

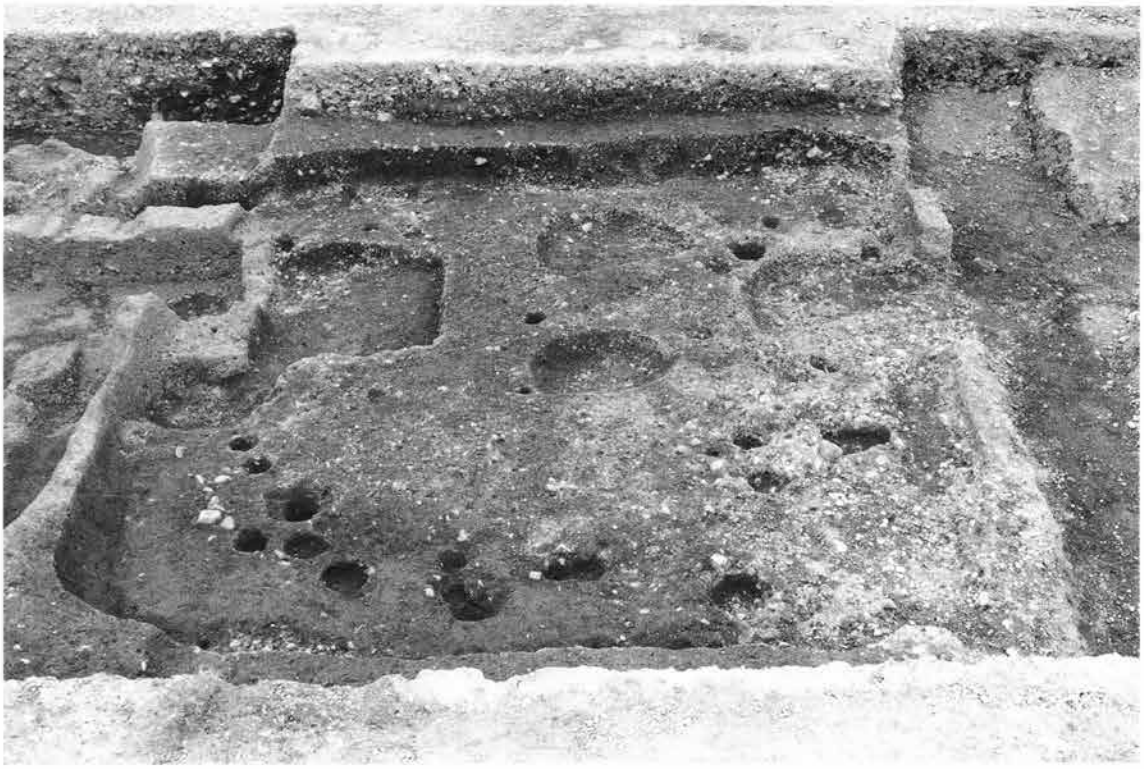
(1)　竪穴式住居跡４上の床面（真上から）

(2)　竪穴式住居跡４特殊ピット（北から）

図版第31　植物園北遺跡第13次

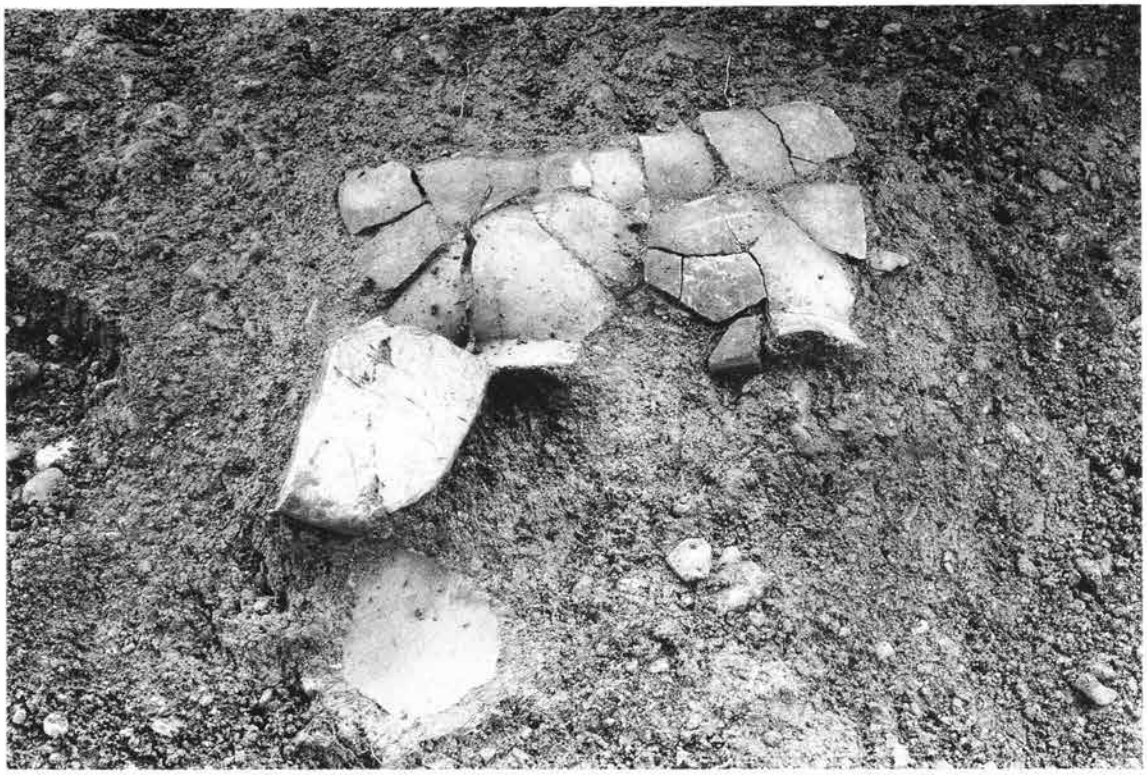


(1) 竪穴式住居跡４下の床面（北から）



(2) 竪穴式住居跡５（東から）

図版第32　植物園北遺跡第13次



(1) 竪穴式住居跡５床面遺物出土状況（北から）

(2) 竪穴式住居跡５・土坑５遺物出土状況（北から）

図版第33　植物園北遺跡第13次

(1)　土坑１（北から）

(2)　土坑１遺物出土状況（南から）

図版第34　植物園北遺跡第13次

(1)　土坑２（南西から）

(2)　土坑３（南西から）

図版第35　植物園北遺跡第13次

1

28

29

31

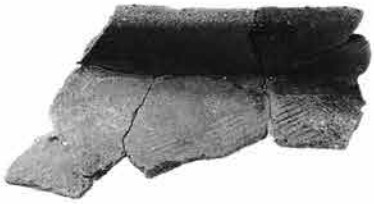
25

26

19

30

2


23

9

出土土器 (1)

図版第36　植物園北遺跡第13次

47

40

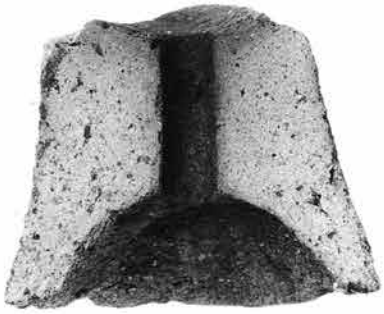
48

27

52

D_2類

B類



D_1類

A類

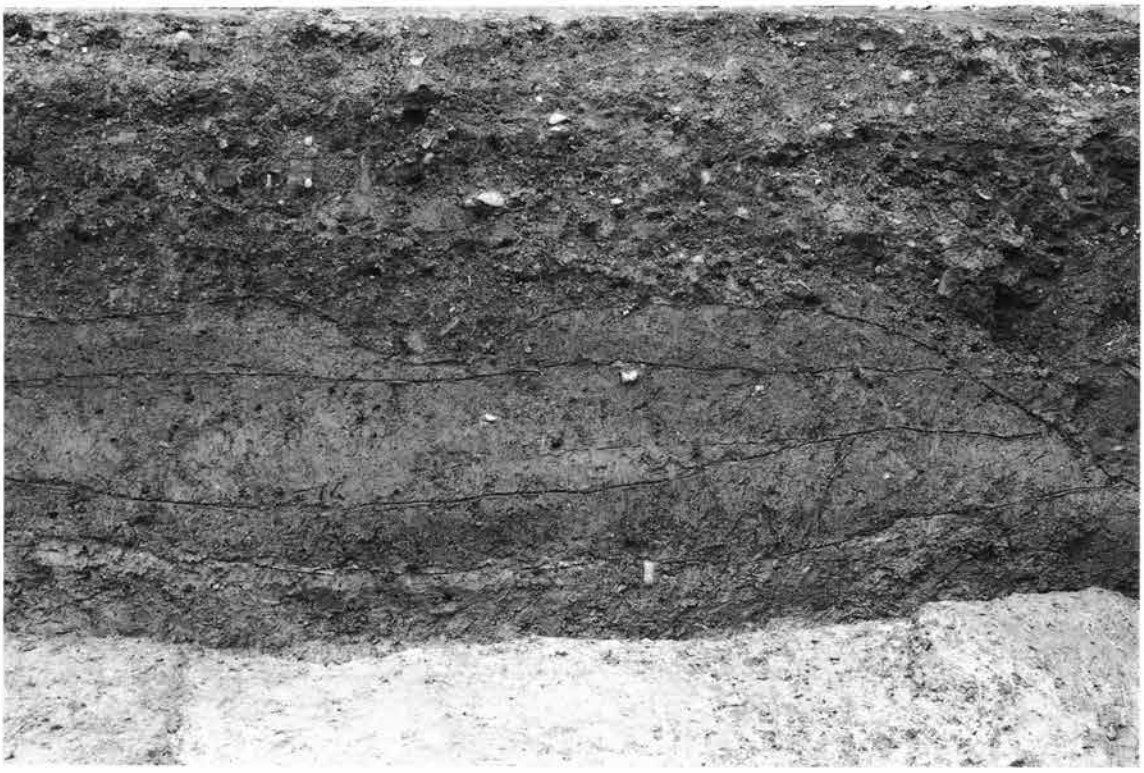
出土土器 (2)

図版第37　長岡京跡右京第440次

(1)　1トレンチ検出遺構（東から）

(2)　1トレンチ溝SD44008（南から）

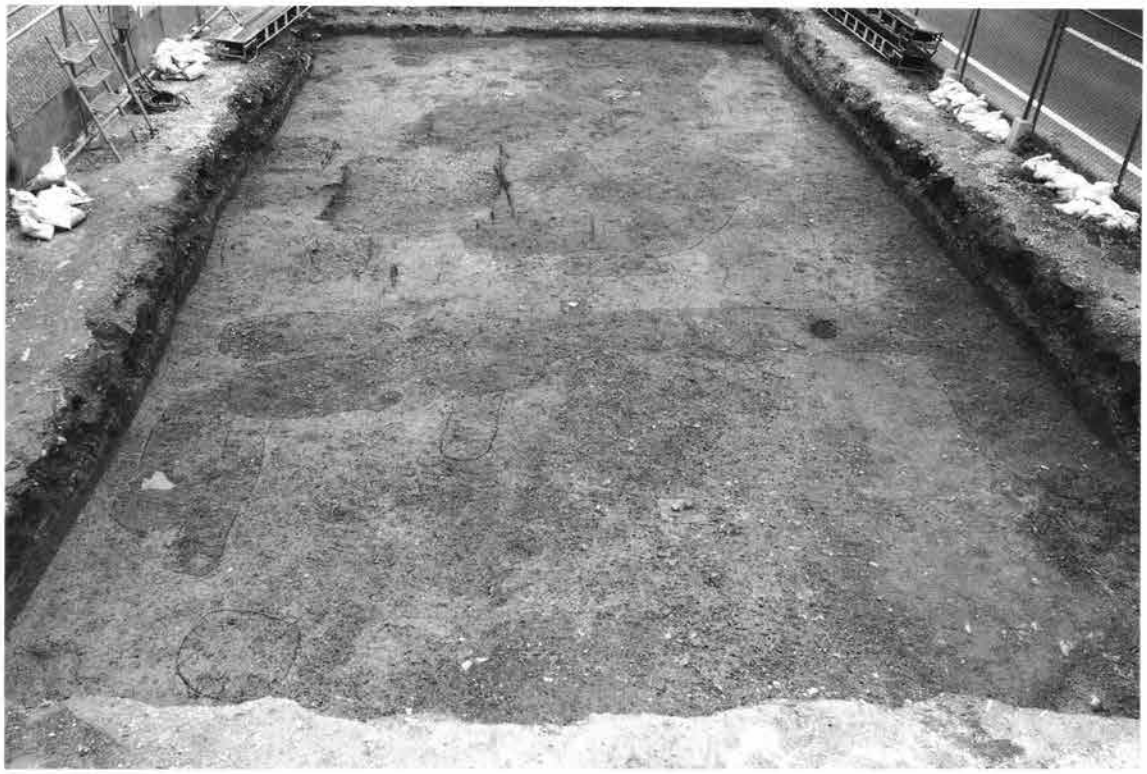
図版第38　長岡京跡右京第440次



(1)　1トレンチ東壁断面

(2)　1トレンチ北壁断面

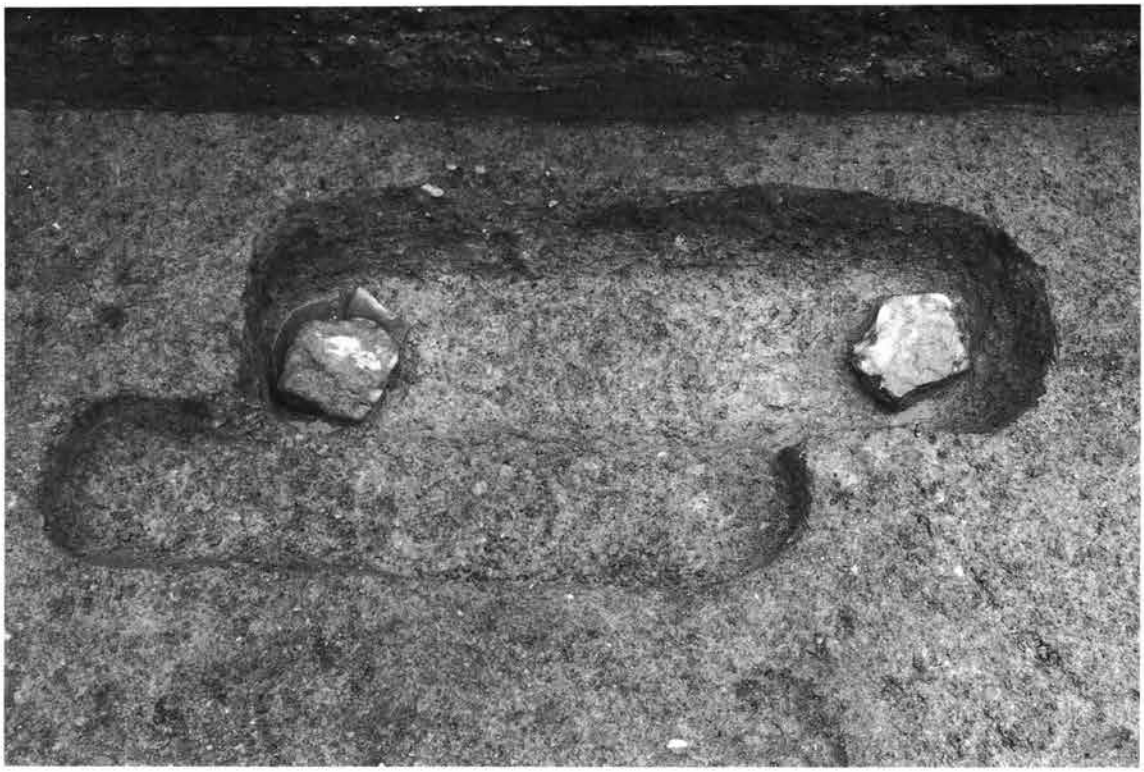
図版第39　長岡京跡右京第440次



(1)　2トレンチ遺構検出状況（北から）

(2)　2トレンチ検出遺構（北から）

図版第40　長岡京跡右京第440次



(1)　2トレンチ土坑SK44012a・b（西から）

(2)　2トレンチ中世墓SK44022（西から）

図版第41　長岡京跡右京第440次

(1)　2トレンチ溝跡SD44020断面（南から）

(2)　2トレンチ溝跡SD44021断面（南から）

図版第42　長岡京跡右京第440次

(1)　3トレンチ遺構検出状況（北から）

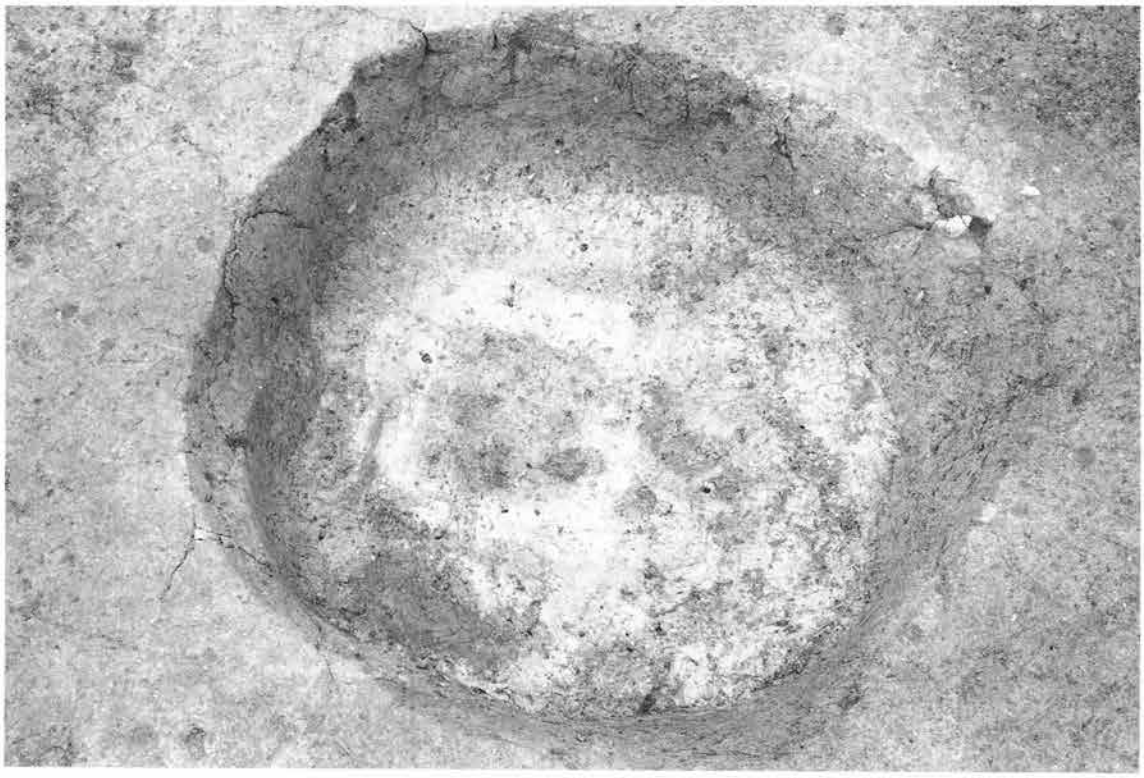
(2)　3トレンチ検出遺構（北から）

図版第43　長岡京跡右京第440次

(1)　3トレンチ溝跡　SD44001断面（北から）

(2)　3トレンチ土坑SK44003断面（北から）

図版第44　長岡京跡右京第440次



(1)　3トレンチ井戸跡SE44002（南から）

(2)　3トレンチ土坑SK44004（北から）

図版第45　長岡京跡右京第440次

(1)　2トレンチ中世墓SK44022遺物出土状況（北から）

(2)　3トレンチ井戸跡SE44002遺物出土状況（南から）

図版第46　長岡京跡右京第440次

(1)　作業風景

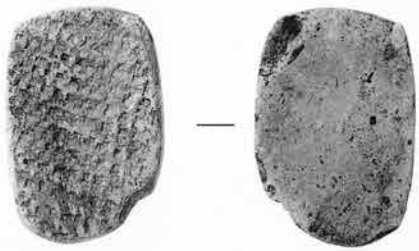
(2)　中世墓SK44022出土遺物

図版第47　長岡京跡右京第440次

第69図-1

第74図-7

第69図-3



第70図-9

第70図-8

第70図-1

第70図-2

第70図-3

第70図-4

第70図-5

第70図-6

第70図-11

出土遺物 (1)

図版第48　長岡京跡右京第440次

第72図-101

第73図-1

第72図-89

第72図-97

第72図-85

第72図-83

第71図-27

第71図-1

第71図-24

第71図-2

第71図-39

第71図-41

第71図-47

第71図-58

第71図-72

第71図-79

出土遺物 (2)

図版第49　山城国府跡第30次

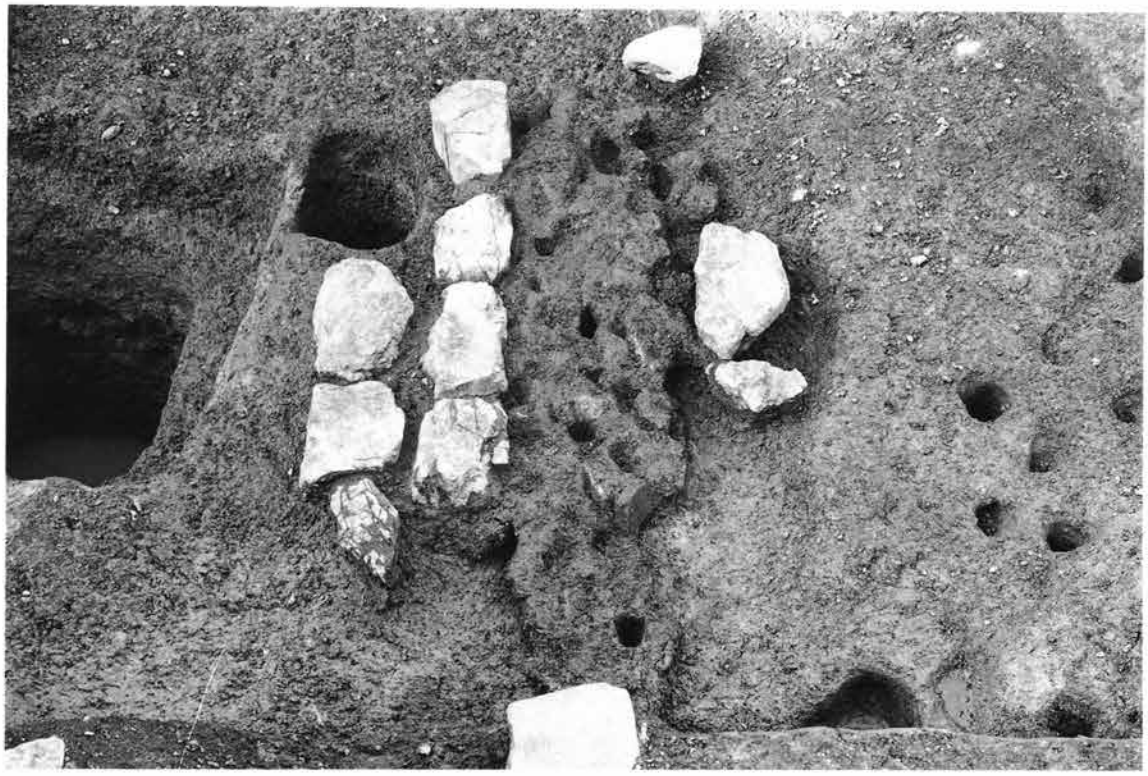
(1)　調査前風景（西から）

(2)　調査地全景（西から）

図版第50　山城国府跡第30次

(1)　土坑SK01・井戸跡SE04ほか（北から）

(2)　溝SD05と基壇状高まり（西から）



(1)　溝SD05焼壁出土状況（南から）

(2)　溝SD05完掘後（西から）

図版第52　山城国府跡第30次

第80図-1

第82図-39

第80図-2

第82図-44

第82図-40

第82図-49

第82図-42

第81図-1

第81図-4

第81図-2

第81図-22

第81図-23

第81図-26

第81図-32

第81図-33

第81図-34

第81図-35

第81図-36

第81図-37

出土遺物

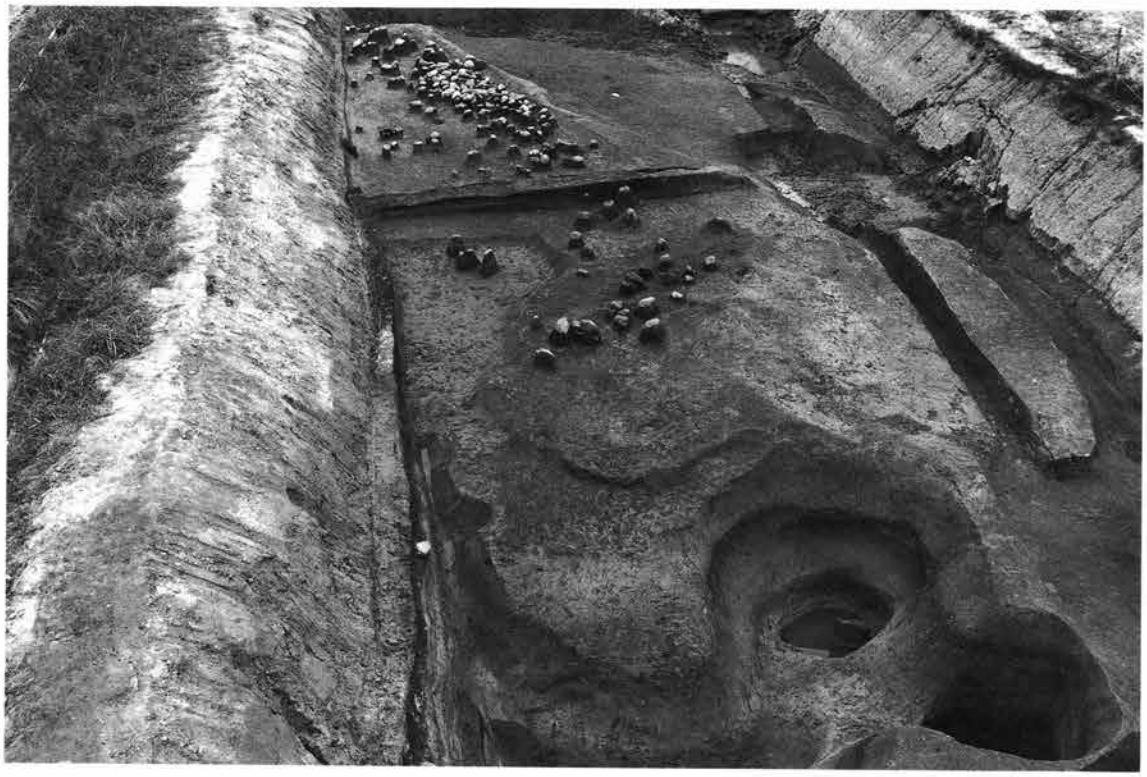
図版第53　北 尻 遺 跡

(1)　1トレンチ遺構検出状況（北から）

(2)　4トレンチ全景（北から）

図版第54　北 尻 遺 跡

(1)　5トレンチ全景（北から）



(2)　6トレンチ検出状況（北から）

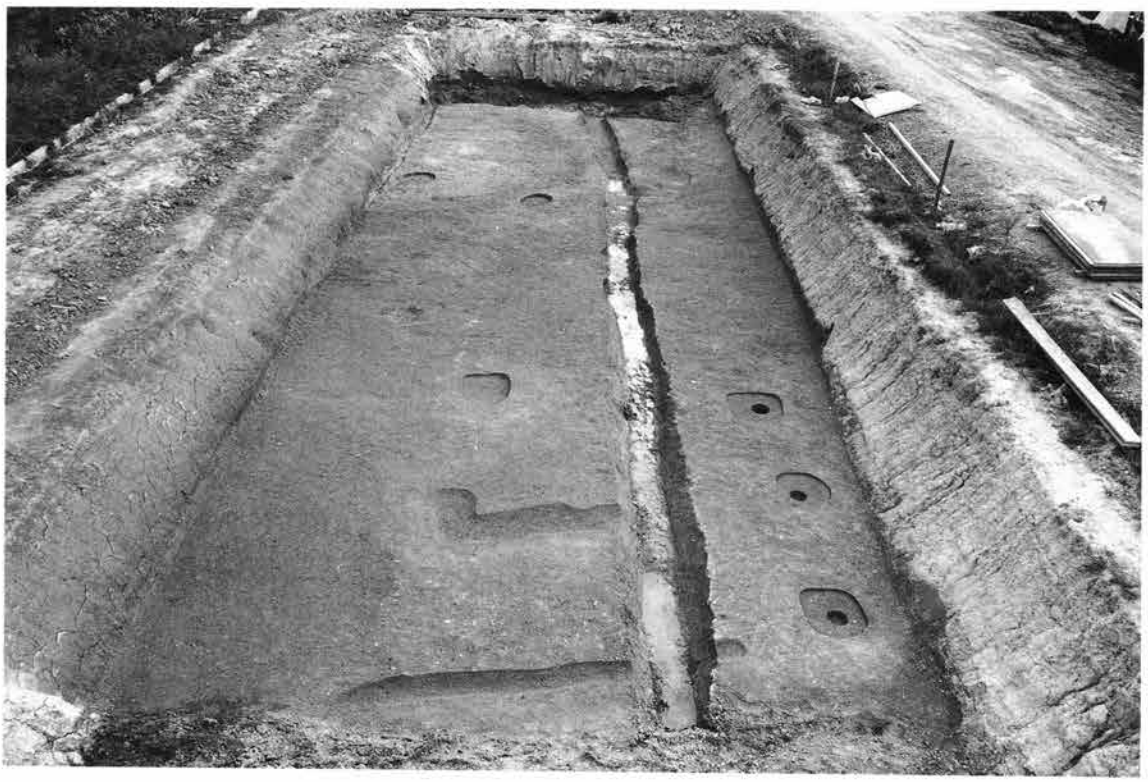
図版第55　北 尻 遺 跡

(1)　6トレンチ検出状況（南から）

(2)　6トレンチSD64礫敷検出状況（南から）

図版第56　北尻遺跡

(1)　7トレンチ上層遺構検出状況（北から）



(2)　8トレンチ全景（北から）

図版第57　北 尻 遺 跡

5

19

2

3

1

16

9

17

出土遺物 (1)

小形丸底土器

23

25

24

49

48

41

86

出土遺物 (2)

高杯、甕、隆平永宝

京都府遺跡調査概報 第58冊

平成6年3月25日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷　中西印刷株式会社
〒602　京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)